



第
414
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第414集

野
尻
(3)
遺
跡
II

野尻(3)遺跡II

—国道7号浪岡バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

二
〇
〇
六
・
三

青
森
県
教
育
委
員
会

2006年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第414集

野尻(3)遺跡Ⅱ

—国道7号浪岡バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2006年3月

青森県教育委員会



野尻(3)遺跡調査区全景(上方が西)



野尻(3)遺跡壕跡と掘立柱建物跡(上方が西)



(実物大)

銅製刀装具（柄頭）－第3号円形周溝出土－

序

国道7号浪岡バイパス建設事業の実施に先立って、平成15年度に当センターが発掘調査を行なった青森市(旧浪岡町)野尻(3)遺跡は、保存措置が講じられた国史跡高屋敷館遺跡の迂回ルートとして、北西側に新たに設定されたルート上に所在する遺跡です。

今回の調査の結果、平安時代の竪穴住居跡・壕跡・土坑・井戸跡・墓跡と見られる環状溝などの遺構が多数発見されました。

また、遺跡からは平安時代に用いられた土師器や須恵器とともに、土製の鈴や玉類、砥石・碁石などの石製品、刀子や鎌・紡錘車等の鉄製品、刀装具の一つである合金製の柄頭も発見されました。土師器には文字や絵が墨書きされたもの、須恵器にはヘラ書きが施されたものも見られました。これらは、いずれも津軽地方の歴史を理解するうえで欠かせない貴重な資料です。

この報告書は、これらの調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の調査・研究、文化財の活用等に役立ていただければ幸いです。

調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、種々ご指導・ご協力いただいた関係各位に対して、厚くお礼を申しあげる次第です。

平成18年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 白鳥隆昭

例 言

- 1 本報告書は、平成15年度に当センターが実施した野尻(3)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 野尻(3)遺跡は、青森県遺跡地図に遺跡番号29062として登録されている。
- 3 本報告書の執筆者は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。

- 4 試料の分析、鑑定等については、次の方々に依頼した(順不同、敬称略)。

石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山 力
出土須恵器の蛍光X線分析	大谷女子大学教授	三辻 利一
出土火山灰の分析	弘前大学教授	柴 正敏
出土した骨片の鑑定	聖マリアンナ医科大学	澤田 純明
金属製品の成分分析	独立行政法人奈良文化財研究所	村上 隆
放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所	

- 5 本書に掲載した地形図(遺跡の位置・周辺の主な遺跡)は、国土地理院発行の5万分の1地形図「青森西部」を複製したものである。

- 6 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。

- 7 遺構・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。

- (1) 主な検出遺構については次の略号を使用し、発見順に番号を付した。

S V=溝状土坑 S I=竪穴住居跡 S D=溝跡 S K=土坑 S E=井戸跡 E N=円形周溝

- (2) 遺構内外堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山、竹原;2001)を用いた。

- (3) 層位名は基本層位を「I・II・III…」などのローマ数字、遺構内堆積土層位を「1・2・3…」などの算用数字で表記し、細分層についてはその後にアルファベットの小文字を付けている。

- (4) 遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は土器類はcm、石器類はmm、重量はgである。

- (5) 遺構・遺物実測図で使用したスクリーントーンの表示は次のとおりである。



遺構堆土 遺物付着物



遺物黒色処理

(6) 遺構内の遺物分布図の記号は、図中に付してある。

(7) 白頭山- 苫小牧火山灰の呼称は、白頭山火山灰とB-Tmを併用している。また、火山灰の降下年代については938~948年とやや幅を持たせ、10世紀前半を想定している。

8 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

9 発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の諸氏・機関から御協力・御助言を得た（順不同、敬称略）。記して感謝の意を表します。

市川金丸、藤沼邦彦、北林八洲晴、木村鐵次郎、工藤清泰、宮内勝巳、宇部則保、斉藤 淳、佐野忠史、藤原弘明、飯島伸一、林田利之、山形博康、太田原慶子、小林雅人、岩井浩人、村川菜々実、弘前大学人文学部日本考古学ゼミナール

目 次

序

例言

目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査要項	2
第3節 調査経過	3
第4節 調査方法	4

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡周辺の地形・環境及び遺跡の概要	6
第2節 基本層序	7

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と出土遺物	9
1 溝状土坑	9
2 竪穴住居跡	12
3 円形周溝	93
4 壕跡	112
5 掘立柱建物跡	120
6 柵列	125
7 土坑	127
8 井戸跡	134
9 溝跡	145
10 土器埋設遺構	169
11 風倒木痕	170
12 焼土遺構	170

第4章 自然科学的分析

第1節 野尻(3)遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	198
第2節 野尻(3)遺跡出土の火山灰について	204
第3節 野尻(3)遺跡出土の骨片について	206
第4節 野尻(3)遺跡出土の刀装具(柄頭)の材質と製作技術	211
第5節 放射性炭素年代測定	213

第5章 調査の成果	
第1節 検出された遺構の変遷について	218
第2節 壕・柵列によって区画された空間	221
第3節 出土遺物について	225
第6章 まとめ	272

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

図1 遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 5	図35 第13号竪穴住居跡(1) …… 59
図2 遺構配置図 …… 8	図36 第13号竪穴住居跡(2) …… 60
図3 溝状土坑 …… 11	図37 第13号竪穴住居跡(3) …… 61
図4 第1号竪穴住居跡(1) …… 27	図38 第13号竪穴住居跡遺物(1) …… 62
図5 第1号竪穴住居跡(2) …… 28	図39 第13号竪穴住居跡遺物(2) …… 63
図6 第1号竪穴住居跡遺物 …… 29	図40 第13号竪穴住居跡遺物(3) …… 64
図7 第2号竪穴住居跡 …… 30	図41 第14号竪穴住居跡 …… 65
図8 第2号竪穴住居跡遺物 …… 31	図42 第15・16号竪穴住居跡 …… 66
図9 第3号竪穴住居跡・第21号溝跡(1) …………… 32	図43 第17号竪穴住居跡 …… 67
図10 第3号竪穴住居跡・第21号溝跡(2) …………… 33	図44 第18号竪穴住居跡 …… 68
図11 第3号竪穴住居跡(3) …… 35	図45 第14・16・17号竪穴住居跡遺物 …… 69
図12 第3号竪穴住居跡遺物(1) …… 36	図46 第17・18号竪穴住居跡遺物 …… 70
図13 第3号竪穴住居跡遺物(2) …… 37	図47 第19号竪穴住居跡(1) …… 71
図14 第3号竪穴住居跡遺物(3) …… 38	図48 第19号竪穴住居跡(2) …… 72
図15 第3号竪穴住居跡遺物(4) …… 39	図49 第19号竪穴住居跡遺物 …… 73
図16 第3号竪穴住居跡遺物(5) …… 40	図50 第20号竪穴住居跡 …… 74
図17 第3号竪穴住居跡遺物(6) …… 41	図51 第21号竪穴住居跡 …… 75
図18 第4号竪穴住居跡 …… 42	図52 第20・21号竪穴住居跡遺物 …… 76
図19 第5号竪穴住居跡 …… 43	図53 第22号竪穴住居跡(1) …… 77
図20 第4号竪穴住居跡遺物 …… 44	図54 第22号竪穴住居跡(2) …… 78
図21 第4・5号竪穴住居跡遺物(1) …… 45	図55 第22号竪穴住居跡遺物(1) …… 79
図22 第4・5号竪穴住居跡遺物(2) …… 46	図56 第22号竪穴住居跡遺物(2) …… 80
図23 第5号竪穴住居跡遺物 …… 47	図57 第22号竪穴住居跡遺物(3) …… 81
図24 第6号竪穴住居跡・第17号溝跡(1) …………… 48	図58 第22号竪穴住居跡遺物(4) …… 82
図25 第6号竪穴住居跡・第17号溝跡(2) …………… 49	図59 第28号竪穴住居跡 …… 83
図26 第6号竪穴住居跡遺物 …… 50	図60 第23号竪穴住居跡 …… 84
図27 第7号竪穴住居跡 …… 51	図61 第24号竪穴住居跡(1) …… 85
図28 第9号竪穴住居跡 …… 52	図62 第24号竪穴住居跡(2) …… 86
図29 第10号竪穴住居跡 …… 53	図63 第24号竪穴住居跡遺物(1) …… 87
図30 第10号竪穴住居跡遺物 …… 54	図64 第24号竪穴住居跡遺物(2) …… 88
図31 第11号竪穴住居跡 …… 55	図65 第25号竪穴住居跡 …… 89
図32 第11号竪穴住居跡遺物 …… 56	図66 第25号竪穴住居跡遺物 …… 90
図33 第12号竪穴住居跡 …… 57	図67 第26・27号竪穴住居跡 …… 91
図34 第12号竪穴住居跡遺物 …… 58	図68 第26・27号竪穴住居跡遺物 …… 92
	図69 第1号円形周溝 …… 99
	図70 第2・6号円形周溝 …… 100
	図71 第3号円形周溝(1) …… 101
	図72 第3号円形周溝(2) …… 102

図73	第4号円形周溝	103	図114	溝跡出土遺物(3)	166
図74	第5号円形周溝	104	図115	溝跡出土遺物(4)	167
図75	第7・8号円形周溝(1)	105	図116	溝跡出土遺物(5)	168
図76	第7・8号円形周溝(2)	106	図117	第1号土器埋設遺構・第1号風倒木	172
図77	第9号円形周溝・第16号溝跡	107	図118	第1号土器埋設遺構遺物	173
図78	第10・11号円形周溝	108	図119	第1号風倒木遺物	174
図79	円形周溝出土遺物(1)	109	図120	焼土遺構	175
図80	円形周溝出土遺物(2)	110	図121	焼土遺構遺物	176
図81	円形周溝出土遺物(3)	111	図122	遺構外出土遺物(1)	177
図82	第1・3号塚跡(1)	115	図123	遺構外出土遺物(2)	178
図83	第1・3号塚跡(2)	116	図124	遺構外出土遺物(3)	179
図84	第2号塚跡	117	図125	遺構外出土遺物(4)	180
図85	塚跡出土遺物(1)	118	図126	遺構外出土遺物(5)	181
図86	塚跡出土遺物(2)	119	図127	須恵器胎土分析試料(1)	202
図87	第1号掘立柱建物跡	122	図128	須恵器胎土分析試料(2)	203
図88	第5号掘立柱建物跡	123	図129	第1・3号塚跡骨片出土位置	210
図89	第3号掘立柱建物跡	124	図130	区画と掘立柱建物跡	224
図91	第1号柵列	126	図131	土師器一括遺物(1)	231
図92	土坑(1)	135	図132	土師器一括遺物(2)	232
図93	土坑(2)	136	図133	土師器一括遺物(3)	233
図94	土坑(3)	137	図134	土師器一括遺物(4)	234
図95	土坑(4)	138	図135	土師器一括遺物(5)	235
図96	土坑(5)	139	図136	土師器 その他(1)	236
図97	土坑(6)	140	図137	土師器 その他(2)	237
図98	土坑遺物(1)	142	図140	墨書土器集成	245
図99	土坑遺物(2)	143	図141	墨書他集成	246
図100	第1号井戸跡	144	図142	ヘラ書土器集成(1)	247
図101	第1号溝跡	153	図143	ヘラ書土器集成(2)	248
図102	第2号溝跡	154	図144	県内出土の鉄製三銘鏡・鈴・銅杖・柄香炉とその類例	251
図103	第3・5・6・8・9号溝跡(1)	155	図145	東北地方における主な城柵・寺院の造営と仏像・仏具の分布	258
図104	第3・5・6・8・9号溝跡(2)	156		—平安期・中期—	
図105	第14・15号溝跡	157	図146	本遺跡出土柄頭金具とその類例	265
図106	第18・20号溝跡	158	図147	周辺の遺跡遺構配置図	275~276
図107	第23・24号溝跡	159			
図108	第25・26号溝跡	160			
図109	第27・28号溝跡	161			
図110	第29・30・31号溝跡	162			
図111	第32・33号溝跡	163			
図112	溝跡出土遺物(1)	164			
図113	溝跡出土遺物(2)	165			

第1章 調査の概要

第1節 調査に至るまでの経過

野尻(3)遺跡は、国道7号浪岡バイパス建設事業の実施に先立ち、平成6年7～11月に、当センターが発掘調査を行なっている。この後、遺跡南側に隣接する高屋敷館遺跡の保存をめぐって協議が継続され、西側にルートを変更して保存を図ることとなり、青森県教育庁文化課（現・文化財保護課）は平成11年6月28日～7月9日に、新ルート内の埋蔵文化財確認調査を行なった。この結果、高屋敷館遺跡の西側では平安時代の堅穴住居跡3軒と少量の遺物が発見された（注3）が、この遺構は本県では一般的なもので、記録保存措置で対応が可能と判断し、新ルートが決定した。高屋敷館はこの後、平成13年1月29日に国史跡に指定されたが、この館跡を含む旧ルートと新ルートの土地交換等の点で、国土交通省と浪岡町による協議・手続きが行なわれた。そして、平成13年度から、新ルートの調査実施に向けて打合せがもたれ、平成13年10月25日には、文化財保護課・当センター職員が新ルート上の高屋敷館・山元(1)遺跡、野尻(2)・(3)遺跡を踏査した。そして、翌平成14年1月22日には、国土交通省青森工事事務所（現・同青森河川国道事務所）・文化財保護課・当センターの三者で、来年度以降の調査実施に向けて打合せを行ない、うわもの撤去・伐採等の問題で解決のメドがついた地区から暫時、調査を始め、すべての調査を2年間で終えることとなった。野尻(3)遺跡の調査は、7,000㎡（高屋敷館遺跡を含む）を4月15日から10月24日までの予定で調査することになった。

（注1）青森県埋蔵文化財調査センター 1997『高屋敷館遺跡発掘調査概報』県埋蔵文化財調査報告書第206集

（注2）青森県埋蔵文化財調査センター 1998『高屋敷館遺跡』県埋蔵文化財調査報告書第243集

（注3）青森県教育委員会 2000『青森県遺跡詳細分布調査報告書XⅡ』県埋蔵文化財調査報告書第284集

（福田 友之）

第2節 調査要項

1 調査目的

国道7号浪岡バイパス建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する野尻(3)の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成15年4月15日から同年11月14日まで

3 遺跡名及び所在地 野尻(3)遺跡(青森県遺跡番号29062)
青森市浪岡大字高屋敷野尻37-1他

4 調査面積 7,000㎡(高屋敷館遺跡を含む)

5 調査委託者 国土交通省青森河川国道事務所

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 村越 潔 青森大学社会学部教授(考古学)

調査員 山口 義伸 青森県立浪岡高等学校教諭(地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤 良治(現・県立図書館長)

次長(調査第一課長兼務) 福田 友之(現・県立郷土館副館長)

総務課長 工藤 和夫(現・県商工労働部資源エネルギー課副参事)

文化財保護総括主査 笹森 一朗(現・文化財保護主幹)

文化財保護主事 山田 雄正

調査補助員 後藤 千春・成田 英規・青山 里香

棟方 沙織・敦賀 優子・土岐 真以

研修職員 樋口 徹典(尾上町教育委員会主事補)

(福田)

第3節 調査経過

平成15年4月15日 調査器材を搬入すると共に、高屋敷館遺跡A区及びB区の調査を開始する。野尻(3)遺跡は雑木の処理・撤去がまだ終了していなかった。関係機関に連絡をとり、終了が確認されしだい調査を開始することとした。

6月上旬 野尻(3)遺跡の雑木撤去の終了を受けて、調査を開始した。調査区内にグリッドを設定し、全域にトレンチを入れて遺構確認を行うこととした。高屋敷館遺跡A区及びB区では遺構精査を引き続き行った。

6月中旬 野尻(3)遺跡は植林が施されており、太めの切り株が多く、また、黒色土中での遺構確認部分が多かった。高屋敷館遺跡は両区で遺構精査を引き続き行った。

6月下旬 検出された遺構の精査を中心に作業を行った。

7月中旬 引き続き遺構精査を行った。遺構は調査区のほぼ全域から検出されている。

7月下旬 天候にも恵まれ、引き続き遺構精査を行った。

8月上旬 引き続き遺構精査を行った。

9月7日 隣接する山元(1)遺跡と合同の現地見学会を開催した。

9月中旬 引き続き遺構精査を行った。野尻(3)遺跡は調査区北側で遺構の重複部分が多く、精査は遅れ気味となった。

9月下旬 両遺跡の遺構精査に、まだかなりの時間を要するため、原因者を交えた協議の結果、調査期間を11月14日まで延長することとした。

10月上旬 引き続き遺構精査を行った。降雨により調査区・遺構に水が溜まることが多く、排水ポンプを使いながらの調査が続いた。

10月下旬 引き続き遺構精査を行った。野尻(3)遺跡の精査も順調に進んだ。

11月14日 両遺跡の調査を終了すると共に、調査器材・出土遺物の積み込みを行い、現地調査の全日程を終了した。

(世森 一朗)

第4節 調査方法

1 調査区域の設定

今回調査した野尻(3)遺跡は、大釈迦川右岸の河岸段丘上に位置している。調査区域のグリッドは、測量会社に杭打ち委託をし、国家座標(旧日本測地系)を基に調査区内に20mのメッシュを組み、それらの杭を基準にして南側に隣接する高屋敷館遺跡や山元(1)遺跡を含めて設定をしている。南北軸が算用数字(南から北へ1・2・3…)、東西軸がアルファベットの組み合わせ(東から西へA~Y・AA~AY等)とし、グリッドの呼称は南東隅としている。また、調査で使用した標高原点は、道路建設用地内にある工用測量原点(KBM, 1 H=41.371)からレベル移動を行い、調査区域内に適宜設置した。

2 発掘調査

- 1) グリッド及びトレンチ単位で発掘区を拡張する方法を採った。
- 2) 粗掘りは、層的に進め、遺物・遺構を確認してから、下層の掘り下げについて判断した。また、一部重機による表土除去を行った。

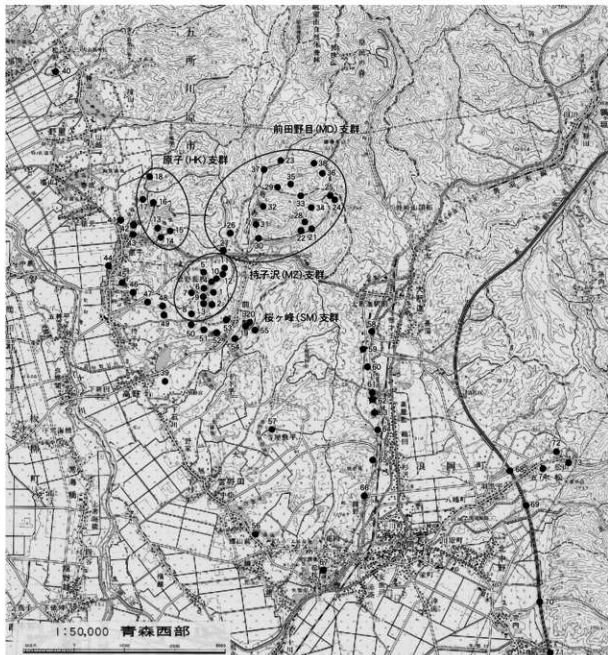
3 実測図の作成

- 1) 遺構については、大きさによって4分法、或いは2分法によって土層観察用のベルトを設定し精査した。
- 2) 遺構の実測は簡易遺り方測量、光波トランシットで得られたデータを遺構実測支援システム[アイシン精機(株)]を用いて作図した。遺構の実測図(平面図・断面図)の縮尺は20分の1を原則として作成した。
- 3) カマド縮尺10分の1、その他、遺構内出土遺物については、必要に応じて同縮尺の微細図或いは分布図を作成した。
- 4) 遺構外出土遺物については、グリッド単位で層位、種類別に取り上げた。

4 写真撮影

- 1) 遺構については、確認状況・土層断面・遺物出土状況・発掘状況等を中心に適宜撮影した。
- 2) その他必要に応じて、遺跡の状況・調査状況についても記録した。
- 3) 使用カメラは35ミリカメラ及びデジタルカメラで、フィルムはモノクロームとカラーリバーサル(スライド)の2種類のフィルムを使用した。

(笹森)



番号	遺跡名	支群名	遺跡番号	番号	遺跡名	支群名	遺跡番号	番号	遺跡名	支群名	遺跡番号
1	MZ 1号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50221	26	MD7号塚(橋ノ原遺跡)	五所川原市	50017	51	瓶川13	五所川原市	50044
2	MZ 2号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50222	27	MD7号塚(不老塚)	五所川原市	50015	52	瓶川15	五所川原市	50063
3	MZ 3号塚(椅子沢C遺跡)	五所川原市	50223	28	MD7号塚(柳原B遺跡)	五所川原市	50013	53	瓶川12	五所川原市	50042
4	MZ 4号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50224	29	MD10号塚(柳原B遺跡)	五所川原市	50015	54	谷口遺跡	五所川原市	50048
5	MZ 5号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50225	30	MD10号塚(柳原F遺跡)	五所川原市	50009	55	瓶ヶ峰12	五所川原市	50059
6	MZ 6号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50226	31	MD11号塚(柳原B遺跡)	五所川原市	50044	56	上野	青森市	39011
7	MZ 7号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50227	32	MD12号塚(柳原B11遺跡)	五所川原市	50050	57	平塚南平	青森市	39059
8	MZ 8号塚(椅子沢C10遺跡)	五所川原市	50228	33	MD13号塚(柳原B12遺跡)	五所川原市	50056	58	石巻	青森市	39040
9	MZ 9号塚(椅子沢C遺跡)	五所川原市	50229	34	MD14号塚(柳原B12遺跡)	五所川原市	50056	59	野尻113	青森市	39046
10	MZ 10号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50234	35	MD15号塚(柳原B12遺跡)	五所川原市	50057	60	野尻140	青森市	39065
11	MZ 11号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50234	36	MD16号塚(柳原B14遺跡)	五所川原市	50058	61	野尻123	青森市	39061
12	MZ 11号塚(椅子沢B遺跡)	五所川原市	50234	37	MD17号塚(柳原C遺跡)	五所川原市	50013	62	野尻130	青森市	39062
13	HK 1号塚(山原遺跡)	五所川原市	50110	38	MD18号塚(柳原B15遺跡)	五所川原市	50059	63	高層塚	青森市	39003
14	HK 2号塚(山原遺跡)	五所川原市	50110	39	KY 1号塚(山原遺跡)	五所川原市	5101	64	山本113	青森市	39054
15	HK 3号塚(山原遺跡)	五所川原市	50110	40	鶴田	五所川原市	50022	65	山本120	青森市	39055
16	HK 4号塚(山原遺跡)	五所川原市	50039	41	瓶子遺跡(5)	五所川原市	50080	66	山本130	青森市	39056
17	HK 5号塚(山原遺跡)	五所川原市	50112	42	瓶子遺跡(6)	五所川原市	50066	67	五所川原	青森市	29014
18	HK 6号塚(山原遺跡)	五所川原市	51000	43	瓶子遺跡(13)	五所川原市	50005	68	野尻111	青森市	39017
19	SM 1号塚(瓶ヶ峰11遺跡)	五所川原市	50009	44	鶴田	五所川原市	50056	69	瓶塚平	青森市	39027
20	SM 2号塚(瓶ヶ峰11遺跡)	五所川原市	50009	45	鶴田(2)	五所川原市	50274	70	柱ノ沢	青森市	39038
21	MD 1号塚(柳原B11号塚)	五所川原市	50111	46	鶴田(3)	五所川原市	50276	71	松元	青森市	39044
22	MD 2号塚(柳原B2号塚)	五所川原市	50112	47	鶴田(11)	五所川原市	50273	72	半野	青森市	39057
23	MD 3号塚(柳原C号塚)	五所川原市	50113	48	鶴田(10)	五所川原市	50278	73	駒山	青森市	39026
24	MD 4号塚(柳原B11号塚)	五所川原市	50114	49	瓶川11	五所川原市	50071	74	柳塚113	青森市	39019
25	MD 5号塚(柳原B2号塚)	五所川原市	50114	50	瓶川12	五所川原市	5172				

●5-7-4の青森県は平成17年4月1日に青森市と合併した影響で変更

図1 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡周辺の地形・環境及び遺跡の概要

野尻(3)遺跡が立地する大釈迦川右岸の丘陵地帯には数多くの遺跡の所在が確認されている。また、遺跡の北西方約3km付近の五所川原市東部を南流する前田野目川流域沿岸や周辺には、古代の五所川原須恵器窯群を始めとして多数の平安時代の遺跡が確認されている。本遺跡を含む前田野目台地周辺地域は人々が生活を営む上で適した環境にあったものと思われる。

国道7号浪岡バイパス建設事業に関連しては、これまでに北側から山本・野尻(1)・野尻(4)・野尻(2)・野尻(3)・国史跡高屋敷館・山元(2)・(3)遺跡の発掘調査が行われている。平成6・7年度に調査が行われた高屋敷館跡の保存をめぐる協議が継続され、西側にルートを変更して保存を図ることとなり、平成14・15年度に迂回部分の高屋敷館遺跡、平成15年度に迂回部分の野尻(3)遺跡、また、平成14・15年度に行われた旧バイパスルート及び迂回部分の山元(1)遺跡の調査終了を受けて、国道7号浪岡バイパス建設事業に関連した遺跡の発掘調査が終了している。

野尻(3)遺跡は環壕と土塁に囲まれた国指定史跡高屋敷館遺跡の北及び北西側に位置している。高屋敷館遺跡とは間に沢を挟んで接している状況にある。現地地形での標高は43～41メートルで、西側から東側に緩やかに傾斜して大釈迦川に続き、北端は沢を挟んで野尻(2)遺跡に接している。現在、遺跡から大釈迦川を挟んだ東側の対岸には水田が開け、丘陵部にはリング畑が広がっている。その遠方に秀峰八甲田山の峰々をのぞみ、北側には梵珠山を仰ぎみる環境にある。現在、立木等が障害となり目視することはできないが、南東方には阿闍羅山、南西方には霊峰岩木山が位置している。

本遺跡は前述したように平成6年度に当初計画ルート上の発掘調査が完了している。前回の調査では竪穴住居跡や円形周溝・土坑・溝跡などの遺構が検出されている。今回の調査でも前回の調査同様、竪穴住居跡を中心とした遺構が検出され、土師器・須恵器等の遺物も多数出土している。その他、円形周溝と呼ばれる円弧状を呈する溝跡も多く検出されている。今回の調査により本遺跡の北側に隣接する野尻(2)遺跡でも多数検出されている円形周溝の広がりや占地を理解する上でも貴重な資料を得ることができた。また、竪穴を取り囲むような溝とカマドが設置された壁の外側に掘立柱建物が付随する建物跡も検出されており、同様な建物跡から構成されていたであろう同時期の集落の広がりを考えるうえでも貴重な資料を得ることができた。

今回検出された第3号円形周溝からは刀装具の一つである柄頭が出土しており、被葬者を考えるうえでも興味深い副葬品と考えられる。円形周溝を壊して造られた壕跡からは、埋め戻しの際に混入したと思われる骨片が出土している。埋め戻しには位置的に円形周溝の内側の土が使われていた可能性が高く、そこに葬られていた人物の骨の可能性が高いものと考えられる。

本遺跡の北方約1kmに位置する野尻(1)遺跡や青森市合子沢松森(2)遺跡等、県内でも数例しか検出されていない2個体の甕の口を合わせて埋設している遺構が検出されていることも興味深く、お墓の形態や道路に関連した地鎮行為を研究するうえでも貴重な類型になるものと思われる。

(笹森)

第2節 基本層序

野尻(3)遺跡の層序は、平成6年度の調査区と同一丘陵に位置することもあり、基本的な層序は踏襲した。概要は『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡』青埋文報第186集より抜粋して転載する。

- I 層 黒褐色土 10YR2/2 (厚さ約20cm) 耕作土である。粘性・湿性が多少あって、かたく締まる。乾くと格子状の割れが目立つ。粘土の粒子及びブロックの混入が多い。谷地形内では粘性・湿性の低いソフトな感じである。
- II 層 黒色土 10YR1.7/1 (厚さ約10~20cm) 腐植質で粘性・湿性がある。乾くと細かな格子状の割れが目立ち脆い感じがする。粘土粒の混入が少ない。上位の耕作土とはシャープな面で接しほとんど削平されている。谷地形内のP-55~57ライン、I-108~110ラインでは色調及び混入物により4~5層に細分できる。全体に下部ほど粘土質になり、砂及び粘土粒の混入が多い。厚さは40~100cm程である。
- III 層 暗褐色土 10YR3/4 (厚さ約10cm) 漸移層である。軽石粒及び径10~50mm大の粘土ブロックが多量に混入して締まりなく脆い。谷地形内では2~6層に細分する。黒褐色(10YR3/1)~暗褐色(10YR3/4)と色調が変化し、粒径の大きい粘土ブロックや細粒砂~粗粒砂の混入物が目立ち酸化の染みもみられる。全体として下部ほど砂及び粘土粒の混入が目立つ。厚さは40~60cm程である。
- IV 層 黄灰色軽石混じりの細粒砂質粘土(厚さ60~80cm)層相から5層に細分される。上部のIV a層は軽石混じりの細粒~中粒砂質粘土で厚さ20cmと平均的に堆積する。IV b層は軽石質粘土で薄いレンズ状の堆積を示す。IV c層~IV e層は中粒砂(IV d層)を挟む軽石混じりの細粒砂質粘土で縞模様を成す。野尻(4)遺跡の基本層序第III層ほど粘土化していないが、水成堆積の特徴をもつ。羽黒平(1)遺跡の第IV層及び第V層に対比される。上北地方の千曳浮石(東北地方第四世紀研究グループ、1969)、大鱈及び碓ヶ関付近の碓ヶ関浮石(山口、1993)に相当し、およそ11,000~12,000年前に降下した火砕物と推定される。遺構の確認調査では地山確認の指標となる。
- V a 層 黒褐色酸化帯 10YR2/3 (厚さ約2~5cm) クラックの発達した暗色帯で、IV層との境界面が凹凸をなす。
- V b 層 暗灰黄色粘土 10YR5/2 (厚さ30cm以上) 灰色粘土で、酸化した表面は黄褐色~暗灰黄色に変色する。

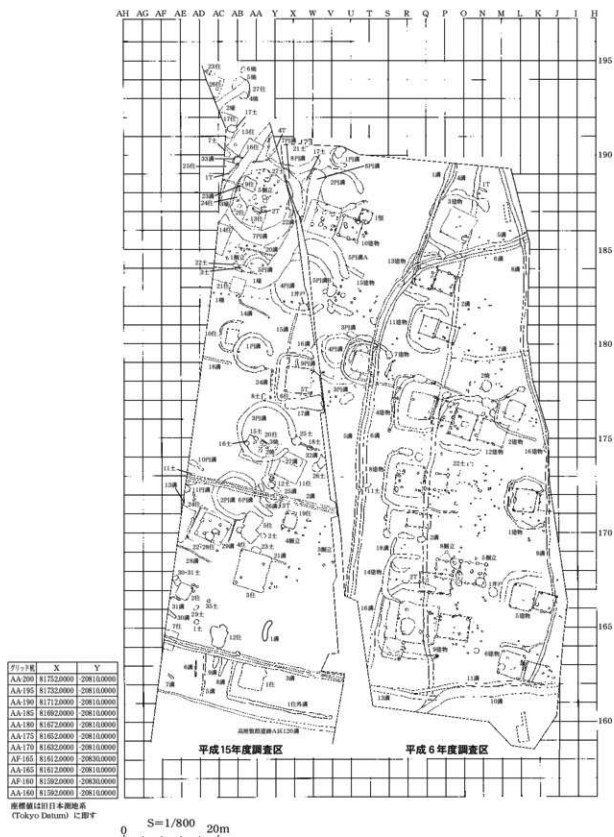


図2 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と出土遺物

今回の調査で野尻(3)遺跡から検出された遺構は、溝状土坑5基、竪穴住居跡27軒、円形周溝11基、壕跡3条、掘立柱建物跡4棟、柵列1条、土坑33基、井戸跡1基、溝跡26条、土器埋設遺構1基、風倒木痕1基、焼土遺構5基である。以下、各遺構毎に概要を記述する。また、本遺跡は平成6年度にバイパス建設に係る当初のルート上の発掘調査が行われており、前回調査時と同一の遺構も認められるが、遺構番号については検出順に付記しており、前回の遺構番号や概要については報文中で触れることとする。その他、住居跡が重複している場合や、関連する遺構については、遺構番号の順位にかかわらず続けて記載しているので、一部順不同となっている。

1 溝状土坑(SV)

第1号溝状土坑(SV-01) (図3)

【位置】調査区の北側、AB-189グリッドに位置している。

【重複】第25号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【形態・規模】平面形は両端が膨らむ溝状である。確認面における規模は長軸3m26cm、短軸10～30cmである。底部における規模は長軸3m92cm、短軸20～30cmである。確認面からの深さは22cmを測る。短軸の壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱状である。長軸端の壁は袋状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であるが、中央部で最も深くなるように窪んでいる。

【堆積土】4層に区分できた。下部に崩落土と思われる黄褐色土の混入が見られる。堆積土は全般に軟らかである。

【出土遺物】なし。

第2号溝状土坑(SV-02) (図3)

【位置】調査区の北側、Y・AA-186・187グリッドに位置している。

【重複】第13号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【形態・規模】平面形は溝状である。確認面における規模は長軸1m96cm、短軸26～52cm、底面における規模は長軸1m80cm、短軸10～22cmである。深さは20cmを測る。短軸の壁は垂直に立ち上がり、断面V字状である。長軸の壁はやや急に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】分層できなかった。

【出土遺物】流れ込みと思われる土師器片が1点出土している。第13号竪穴住居跡に由来する遺物の可能性が高い。

第3号溝状土坑(SV-03) (図3)

【位置】X-170・171グリッドに位置している。

【重複】第2号溝跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【形態・規模】平面形は細長い溝状である。確認面における規模は長軸2m40cm、短軸24cm、底面

における規模は長軸2m42cm、短軸8～14cmである。確認面からの深さは94cmを測る。短軸の壁は垂直に立ち上がり、断面V字状である。長軸北端の壁は袋状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】8層に区分できた。底面に黄褐色土の堆積が薄く見られたが、大半は黒色土と黒褐色土である。堆積土は全般に軟らかい。

【出土遺物】なし。

第4号溝状土坑（SV-04）（図3）

【位置】調査区の北側、X・Y-189・190グリッドに位置している。

【重複】なし。

【形態・規模】北東側が調査区域外に延びるため全容は不明である。平面形は溝状を呈するものと思われる。確認面における規模は長軸2m40cm、短軸40～50cm、底面における規模は長軸2m50cm、短軸16～30cmである。確認面からの深さは46cmを測る。短軸の壁は垂直に立ち上がり、断面はV字状である。確認できる長軸端の壁は袋状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】6層に区分できた。底面に明黄褐色土の混入が見られるが大半は黒色土である。

【出土遺物】なし。

第5号溝状土坑（SV-05）（図3）

【位置】W-177グリッドに位置している。

【重複】第6号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【形態・規模】平面形は溝状である。確認面における規模は長軸2m48cm、短軸38cm、底面における規模は長軸2m74cm、短軸6～18cmである。確認面からの深さは87cmを測る。短軸の壁は垂直に立ち上がり、断面V字状である。長軸端の壁は袋状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】10層に区分できた。底面に明黄褐色土の堆積が見られるが、大半は黒～黒褐色土で覆われている。

【出土遺物】なし。

(笹森)

溝状土坑一覧表

遺構番号	位置(グリッド)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	軸方位
SV-01	AB-189	3.26	0.10～0.30	0.22	N-45° - E
SV-02	Y・AA-186・187	1.96	0.26～0.52	0.20	N-35° - W
SV-03	X-170・171	2.42	0.24	0.94	N-18° - E
SV-04	X・Y-189・190	(2.40)	0.40～0.50	0.45	N-43° - E
SV-05	W-177	2.48	0.38	0.87	N-84° - E

() は残存値

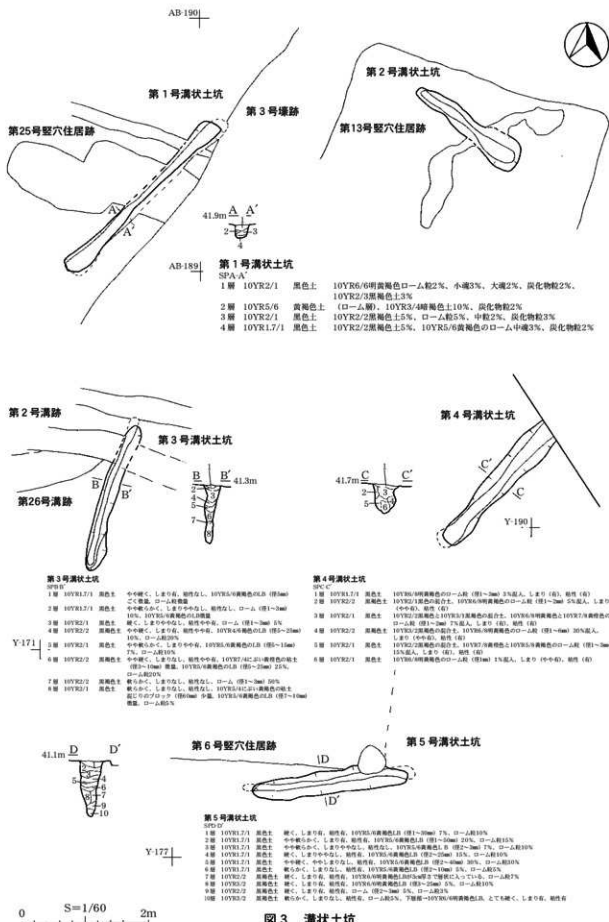


図3 溝状土坑

2 竪穴住居跡(S1)

第1号竪穴住居跡(S1-01) (図4~6)

【位置】AA-162グリッド他に位置している。

【重複】北壁が第3号溝跡bと重複している。堆積土の観察から本遺構が古いことが確認できる。

【平面形・規模】方形を呈するものと思われる。長軸5m08cm、短軸4m86cm、深さは最大34cmを測る。主軸方位はN-110°-Eである。西及び南側に外周溝が付随する竪穴住居跡である。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は多少凹凸が見られるが、ほぼ平坦である。

【カマド】東壁北寄りに1基検出された。後世の擾乱を受けており遺存状態はそれほど良くない。袖と火床面の一部が残存するのみである。擾乱により煙道部を検出することはできなかった。形状から壁外へはそれ程突出していなかったものと思われる。

【壁溝】ほぼ全周するものと思われる。幅16~20cm、床面からの深さ10~32cmを測る。

【ピット】柱穴と考えられるピットは検出されなかった。南東コーナー部に2基連なったピットが検出されたにとどまる。

【その他の施設】カマド北側の床面に貯蔵穴と思われる長方形の施設が検出された。長軸1m00cm、短軸46cm、床面からの深さは26cmを測る。また、床面北西部から不整な土坑が1基検出されている。その他、床面中央やや西寄りから南壁に向かって溝跡が検出されている。

【堆積土】壁周溝を含めると38層に分層された。一部人為堆積の様相を呈している。堆積土中から火山灰は検出されていない。

【出土遺物】図示できた遺物は7点。土師器甕2点、土師器小型甕1点、ミニチュア1点、須恵器蓋1点、須恵器鉢1点、砥石1点である。床面及び堆積土中から出土している。

外周溝

【形態・規模】西壁西側及び南壁南側に「L」字状に検出されている。西側は第3号溝跡Bから南側に延び、AA-160グリッド付近で「L」字状に屈曲して東側に向かって延びている。西側外周溝は長さ7m30cm、幅90~46cm、深さ18~26cmで、断面形状は箱状を呈する。南側外周溝は長さ23m00cm、幅46~92cm、深さ22~36cmを測り、断面形状は逆台形状を呈している。

【堆積土】2~4層に分層できた。ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できる様な遺物は出土していない。

【小結】出土遺物から、10世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

第2号竪穴住居跡(S1-02) (図7・8)

【位置】AD・AE-166・167グリッドに位置している。

【重複】北西コーナー一部が第31号土坑と重複している。明確な新旧関係は不明である。

【平面形・規模】長方形を呈し、長軸3m20cm、短軸2m80cm、深さは最大24cmを測る。主軸方位はN-62°-Wである。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は多少凹凸が見られる他はほぼ平坦で、貼り床が施されている。

【カマド】西壁北よりに1基検出された。遺存状態は比較的良好で、袖及び煙道は粘土で造られている。煙道部の壁外への突出は認められない。

【壁溝】巡らない。

【ビット】東壁際、コーナーを含み3基、南壁のほぼ中央に1基の計4基ビットを検出した。

【その他の施設】認められない。

【堆積土】掘り方を含めると43層に分層された。掘り方以外は、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】堆積土中及び床面やカマドから出土している。図示した遺物は12点。土師器甕8点、土師器小型鉢1点、須恵器杯2点、鉄製品1点である。鉄製品は鎌で、形状から左利き用と思われる。カマド脇の北壁際床面から出土している。

【小結】今回の調査区唯一西向きにカマドが検出された竪穴住居跡である。出土遺物から、火山灰降下以前、9世紀後半から10世紀初頭の竪穴住居跡と考えられる。

第3号竪穴住居跡（S I-03）（図9～17）

【位置】Y-166グリッド他に位置している。

【重複】第23号土坑及び第21号溝跡と重複している。第23号土坑より新しい可能性が高い。また、第21号溝跡は壁際から延びる外延溝の可能性も考えられるが判然としない。

【平面形・規模】南北に長い長方形を呈し、長軸7m72cm、短軸6m70cm、深さは36cmを測る。主軸方位はN-107° - Eである。カマド方向東壁東側の空閑地に掘立柱建物跡が付随する竪穴住居跡である。

【壁・床面】南壁及び東壁の一部を除き、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面には凹凸が顕著に見られ壁際から中央に向かってやや傾斜もしている。

【カマド】東壁のやや南寄りに1基検出された。遺存状態は不良であった。煙道部は半地下式と思われるが、壁からの突出はほとんど見られない。

【壁溝】カマド部分を除きほぼ全周するものと思われる。幅8～38cm、深さ15～30cmを測る。東壁やや北寄り幅20cm程のブリッジが認められる。

【ビット】支柱穴と思われるビットは壁より内側に4基認められる。その他、壁際や溝溝内部に計15基、コーナーやや内側に4基検出されている。また、床面からランダムに4基のビットが検出されている。

【その他の施設】床面から比較的大きめの土坑が3基検出されている。その内住居内1号土坑の底面から刀子が1点出土している。

【堆積土】掘り方を含めると31層に分層された。掘り方を含め、一部人為堆積の様相を呈し、堆積土中からは多量の遺物が出土している。

【出土遺物】堆積土中及び床面から出土している。図示した遺物は78点。土師器皿3点、土師器杯12点、土師器甕23点、土師器壺1点、土師器小型壺2点、土師器小型甕2点、土師器小型鉢1点、ミニチュア1点、土師器埴2点、須恵器皿6点、金属製の縄が1点出土している。縄は鈴部のみで、軸棒部分は存在せず、欠損後に廃棄されたものと考えられる。密教法具の一つと考えられており、この地で行われていた信仰の一端がかいま見られる。

掘立柱建物跡

【形態・規模】付随すると思われる掘立柱建物跡の柱穴を全て検出したわけではない。黒色土或いは風倒木痕が多い地点のため、後世に欠失してしまった柱穴も多いものと思われる。付随すると思われる柱穴は計7基検出されている。竪穴住居跡壁際の2基も含めると、東西3間、南北2間の掘立柱建物跡の存在が考えられる。平面図からは掘立柱建物跡全体がやや北に偏る傾向が見て取れる。掘立柱建物跡の掘り方等から遺物は出土していない。

【堆積土】2～6層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】出土遺物から10世紀中葉以降の竪穴住居跡と考えられる。第21号溝跡は竪穴住居跡から延びる外延溝の可能性も考えられる。本調査区は西側から東側に向かって傾斜している。溝の傾斜方向は理にかなっている。

第4号竪穴住居跡（S I-04）（図18・20～22）

【位置】AA・AB-169・170グリッドに位置している。

【重複】第5号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構の方が新しい。

【平面形・規模】長方形を呈し、長軸3m56cm、短軸2m80cm、深さは最大34cmを測る。主軸方位はN-40°-Eである。

【壁・床面】壁の遺存状態はそれ程良くない。床面は多少凹凸が見られる他はほぼ平坦で、貼り床が施されている。

【カマド】北東壁やや西寄りに1基検出されている。両袖の一部と火床面が残存する。煙道部は半地下式と思われるが、壁から70cm程突出している。煙道部は第5号竪穴住居跡の南東壁の一部を壊している。

【壁溝】巡らない。

【ピット】柱穴と思われるピットは南西壁の両コーナーに検出されているが、対応するようなピットは見つからなかった。

【その他の施設】カマド右袖の壁際からピットが1基検出されている。形状からロクロピットの可能性も考えられる。その他床面中央やや北西寄りに円形の土坑が1基、南西壁際南東寄りに床下土坑が1基検出された。

【堆積土】14層に分層された。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示した遺物は17点。床面及びカマド周辺からの出土である。土玉4点、基石が1点出土している。

【小結】出土遺物から火山灰降下以前、9世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。第5号竪穴住居跡より新しい。

第5号竪穴住居跡（S I-05）（図19・21～23）

【位置】Y・AA-170グリッドに位置している。

【重複】第4号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【平面形・規模】ほぼ正方形を呈し、長軸3m50cm、短軸3m30cm、深さは最大18cmを測る。主軸方位はN-127° - Eである。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面には多少凹凸が見られる他はほぼ平坦で、地床である。

【カマド】南東壁や南寄りに1基検出されている。右袖及び煙道部の大半が第4号竪穴住居跡のカマド煙道部によって壊されている。カマド両袖の端部には芯材として土師器甕が使われている。火床面のやや奥には支脚として使われていたと思われる土師器坏が倒位で置かれていた。

【壁溝】巡らない。

【ビット】検出されなかった。

【その他の施設】床面中央やや南寄りに土坑が1基検出されている。

【堆積土】3層に分層された。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示した遺物は5点。カマド及びカマド周辺からの遺物がほとんどを占める。

【小結】出土遺物から火山灰降以前、9世紀中葉以降の竪穴住居跡と考えられる。第4号竪穴住居跡より古い。

第6号竪穴住居跡（S I -06）（図24～26）

【位置】W-176グリッド他に位置している。

【重複】第5号溝状土坑、第9号円形周溝、第15・16号溝跡と重複している。第5号溝跡、第9号円形周溝、第16号溝跡より新しい。第15号溝跡との新旧は明確には分らない。

【平面形・規模】外周溝及び掘立柱建物跡が付随する竪穴住居跡である。竪穴はほぼ正方形を呈し、長軸5m38cm、短軸5m32cm、深さは20cmを測る。主軸方位はN-98° - Eである。

【壁・床面】壁は東壁の一部を除き床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面には多少凹凸が見られる。一部に貼り床が見られるが、ほとんどは地床である。

【カマド】東壁際に1基検出された。袖はほとんど残存せず、火床面のみの検出である。煙道部の形態も不明である。

【壁溝】東壁の南側を除き、ほぼ全周するものと思われる。幅20～30cm、深さ18～26cmを測る。

【ビット】各コーナー及び北壁を除く壁中央部に柱穴が計7基検出された。

【その他の施設】北壁際東寄りにビットが3基検出されている。

【堆積土】掘り方を含めると16層に分層された。掘り方以外は、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示した遺物は9点。土師器坏2点、土師器甕1点、土師器小型甕1点、ミニチュア1点、砥石3点、粘土焼成塊1点である。

外周溝

【形態・規模】外周溝は竪穴部分を取り囲むように「コ」の字状に検出された。北壁を囲む溝は第9号円形周溝と切り合っている。南壁を囲む溝は規模を大きくしながら調査区ラインぎりぎりまで終結する。北及び西壁を囲む溝は、幅12～60cm、深さ34～60cmを測る。南壁を囲む溝は、第17号溝跡と重複して。新旧関係は不明であるが、拡張して外周溝を形成した可能性も考えられる。

【堆積土】北及び西壁を囲む溝は7～9層に分層され、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 図示した遺物は5点。土師器坏4点、土師器甕1点である。

掘立柱建物跡

【形態・規模】 カマド方向東壁東側の空閑地に掘立柱建物跡が付随する。掘立柱建物跡を構成する柱穴は計4基検出されている。その他は平成6年度の調査区に存在するが、第9号円形周溝に近接しており、未検出に終わっている。南北2間、東西方向は不明である。

【堆積土】 1～4層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 出土遺物から、火山灰降下以後、10世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

第7号竪穴住居跡（S I-07）（図27）

【位置】 AE-162・163グリッドに位置している。

【重複】 第3号溝跡と重複している。堆積土の観察からは本遺構が古いことが確認できる。

【平面形・規模】 西側が調査区域外に延びているため全容は不明である。確認できる1辺は4m10cm、深さは最大24cmを測る。

【壁・床面】 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は多少凹凸が見られる。

【カマド】 確認できた壁からは検出されていない。調査区域外に存在したものと思われる。

【壁溝】 巡らない。

【ビット】 検出されなかった。

【その他の施設】 検出されなかった。

【堆積土】 2層に分層された。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 堆積土中及び床面から出土している。図示した遺物は4点。土師器坏が4点で、内1点は内面黒色処理が施されている。

【小結】 カマドが存在しないため判然としないが、出土遺物から、9世紀後半から10世紀初頭の竪穴住居跡と考えられる。

第8号竪穴住居跡 欠番とした。

第9号竪穴住居跡（S I-09）（図28）

【位置】 Y・AA-188グリッドにかけて位置している。

【重複】 第23号溝跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【平面形・規模】 1辺が不整な方形を呈している。長軸2m50cm、短軸2m30cm、深さは最大43cmを測る。

【壁・床面】 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面には貼り床がなされ、ほぼ平らに造られている。

【カマド】 検出されなかった。

【壁溝】 巡らない。

【ビット】 床面中央やや南寄りに並んで3基検出されている。

【その他の施設】 検出されなかった。

【堆積土】 掘り方を含めると37層に分層された。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 堆積土中や床面から出土している。図示した遺物は2点。ミニチュア2点を図示した。堆積土中や床面からの出土である。

【小結】 カマドが存在しないため、竪穴遺構として捉える方が妥当であろうか。年代は出土遺物から、9世紀代が想定される。第7号円形周溝より古い可能性が高い。

第10号竪穴住居跡（S I - 10）（図29・30）

【位置】 AA・AB-179グリッド他に位置している。

【重複】 第1号円形周溝と一部重複している。新旧関係は本遺構が新しい。

【平面形・規模】 外周溝が付随する竪穴住居跡である。平面形は長軸3m20cm、短軸2m50cmの南北に長い長方形を呈している。深さは最大で10cmを測る。

【壁・床面】 壁は床面からやや急に立ち上がっている。床面はほぼ平らに造られている。地床である。

【カマド】 東壁のやや南側に1基検出している。左袖の一部と火床面が残存するのみである。支脚に使われたと思われる遺物が出土している。

【壁溝】 還らない。

【ピット】 北壁際東寄りに1基確認した。

【その他の施設】 検出されなかった。

【堆積土】 20層に分層された。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 図示した遺物は9点。土師器皿1点、土師器杯1点、土師器甕が7点である。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部を「コ」の字状にとり囲むように掘り込まれている。溝の幅は30～32cm、深さ18～24cmを測る。断面の形状は、逆台形及び「U」字状を呈している。

【堆積土】 6～7層に分層された。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 図示できた遺物は2点。土玉が2点出土している。穿孔が施される円筒状を呈し、全面にミガキ調整が施されている。形状からは比較的新しい要素が窺われる。

【小結】 遺構の重複関係や出土遺物から、火山灰降下後、10世紀中葉以降の比較的小さい外周溝を伴う竪穴住居跡と考えられる。東壁側の空閑地に柱穴等を確認することはできなかった。

第11号竪穴住居跡（S I - 11）（図31・32）

【位置】 AA・AB-137・138グリッドに位置している。

【重複】 第3号円形周溝及び第27号溝跡と重複している。第3号円形周溝より新しく、第27号溝跡より古い。

【平面形・規模】 平面形は方形を呈する。長軸5m58cm、短軸5m30cm、深さは最大30cmを測る。

【壁・床面】 壁は床面からやや急に立ち上がっている。床面はほぼ平らに造られている。

【カマド】 検出されなかった。

【壁溝】 還らない。

【ビット】検出されなかった。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】15層に分層された。ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は9点。灯明具に転用された土師器杯が2点出土している。ミニチュアも2点出土している。

【小結】カマドが検出されなかったため、竪穴遺構として捉える方が妥当であろうか。出土遺物から、火山灰降下後、10世紀後半の遺構と考えられる。後述する第27号溝跡が本遺構の外周溝であった可能性も考えられる。

第12号竪穴住居跡（S I-12）（図33・34）

【位置】AC・AD-163・164グリッドに位置している。

【重複】認められないが、西側の一部を擾乱により欠失する。

【平面形・規模】平面形は方形を呈するものと思われる。推定長軸3m50cm、推定短軸3m10cm、深さは18cmを測る。主軸方位はN-20°-Eである。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は貼り床によりほぼ平らに造られている。

【カマド】北壁東寄りに1基検出されている。かなり削平を受けており依存状態は良くない。煙道部は壁から突出していない。両袖の一部、及び火床面が残存する。

【壁溝】巡らない。

【ビット】検出されなかった。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】掘り方を含めると27層に分層された。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は5点。土師器杯2点、土師器甕2点、須恵器壺1点である。床面及びカマドからの出土である。

【小結】本遺跡で唯一の北カマドを有する竪穴住居跡である。出土遺物から、火山灰降以前、9世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

第13号竪穴住居跡（S I-13）（図35～40）

【位置】Y・AA-186・187グリッドに位置している。

【重複】第2号溝状土坑と重複している。新旧関係は本遺構が新しいことが確認されている。また、本遺構は第7号円形周溝の周溝内側に位置している。直接的な重複は認められないが、出土遺物等から、本遺構が古い可能性が高い。

【平面形・規模】平面形は方形を呈する。長軸4m20cm、短軸4m00cm、深さは最大40cmを測る。主軸方位はN-110°-Eである。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直立ち上がっている。床面は貼り床で、ほぼ平らに造られている。部分的に硬化面が見られる。

【カマド】東壁ほぼ中央に1基検出されている。煙道部は半地下式で、25cmほど壁より突出している。

両袖及び火床面の依存状態は良好で、遺物も多量に出土している。

【壁溝】ほぼ全周するものと思われる。幅10～16cm、深さ10～20cmを測る。

【ピット】床面から大小9基のピットを検出した。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

【その他の施設】カマド左袖の東壁際に貯蔵穴と考えられる土坑が1基検出されている。その他、北壁際のピット6から続く溝跡が検出されている。

【堆積土】掘り方を含めると48層に分層された。掘り方以外は、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は18点。土師器坏7点、土師器甕5点、須恵器坏1点、須恵器壺2点、須恵器甕2点である。土師器坏の内5点は底部にヘラケズリ再調整が施されている。甕の口縁内側にヘラ書きが施されるものが1点出土している。須恵器は胎土分析の結果から、数値は全て五所川原窯以外で生産された可能性を示している。胎土中に糊が混入していた痕跡が見られるものも1点確認できた。床面・カマド・貯蔵穴等から出土している。

【小結】遺構の重複関係や出土遺物から、火山灰降下以前、9世紀前～中葉の竪穴住居跡と考えられる。本遺跡北側に隣接する野尻(2)遺跡から検出された、円形周溝構築前の竪穴住居跡と同時期の可能性が高い。カマド火床面から出土した炭化材は、放射性炭素年代測定を行っており、BP 1,220±30の年代が得られている。詳細な分析結果は第4章第5節に掲載している。

第14号竪穴住居跡 (S I - 14) (図41・45)

【位置】AB・AC-184～186グリッドに位置している。

【重複】調査区域内では認められないが、西側調査区域外で第3号壕跡と重複するものと思われる。

【平面形・規模】東壁及び北・南壁の一部のみの検出である。東壁の長さは5m40cmを測る。確認面からの深さは最大32cmを測る。主軸方位はN-102°-Eである。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は貼り床で、ほぼ平らに造られている。

【カマド】東壁南寄りに1基検出されている。煙道部は半地下式で30cm程壁より突出している。両袖及び火床面の依存状態は比較的良好である。

【壁溝】検出された壁際から検出されている。幅8～14cm、深さ14～32cmを測る。

【ピット】残存するコーナーの内北東に1基、柱穴と思われるピットを検出した。

【その他の施設】床下から土坑が1基検出されている。

【堆積土】掘り方を含めると22層に分層された。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は4点。土師器坏3点、土師器壺1点である。

【小結】出土遺物から、9世紀中～後葉の竪穴住居跡と考えられる。第3号壕跡より古い時期の遺構と考えられる。

第15号竪穴住居跡 (S I - 15) (図42)

【位置】AA・AB-189～191グリッドに位置している。

【重複】第16号竪穴住居跡・第3号壕跡と重複している。新旧関係は第16号竪穴住居跡・第3号壕跡より古い。また、現道により削平を受けているため、全容を窺うことはできない。

【平面形・規模】推定長軸6m80cm、深さは最大26cmを測り、平面形は方形を呈するものと思われる。

主軸方位は不明である。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は、ほぼ平らに造られている。貼り床は認められない。

【カマド】残存部からは検出されなかった。

【壁溝】残存部全てから検出している。ほぼ全周していたものと思われる。幅14～18cm、深さは10～20cmを測る。

【ビット】壁の内側に2基検出した。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】18層に分層できた。ほぼ自然堆積の様相を呈している。堆積土第8層に白頭山火山灰がレンズ状に堆積している。

【出土遺物】図示できる遺物は出土していない。

【小結】遺構の重複関係から、火山灰降下以前、9世紀中葉の竪穴住居跡と考えられる。

第16号竪穴住居跡（S I - 16）（図42・45）

【位置】Y・AA-189・190グリッドに位置している。

【重複】第15号竪穴住居跡及び第3号塚跡と重複している。堆積土の状況から、全ての遺構より新しいことが確認できた。

【平面形・規模】長軸4m40cm、短軸3m60cm、深さは最大50cmを測り、やや南北に長い方形を呈する。主軸方位は不明である。

【壁・床面】壁は床面から緩やかに立ち上がっている。床面は貼り床で、ほぼ平らに造られている。

【カマド】上部がかなり削平を受けており、残存部から検出することはできなかった。

【壁溝】南壁を除き検出されている。幅10～22cm、深さは8～12cmを測る。

【ビット】東壁の両隅から1基ずつ、計2基検出された。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】15層に分層できた。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】図示できた遺物は2点。土師器環が2点である

【小結】カマドは未検出であるが、遺構の重複関係や出土遺物から、10世紀中葉以降の比較的規模の小さい竪穴住居跡と考えられる。

第17号竪穴住居跡（S I - 17）（図43・45・46）

【位置】AA・AB-190～192グリッドに位置している。

【重複】第17号土坑と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【平面形・規模】西側が調査区域外に延びているため全容を窺うことはできない。全体が確認できるのは東壁のみで、1辺の長さは4m50cmを測る。深さは40cmで、平面形は方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平らに造られている。

【カマド】東壁南寄りから1基検出されているが、左袖の一部を第17号土坑により壊されている。

煙道部は半地下式で、煙道は40cm程壁外に突出する。

【壁溝】北東コーナーを除き検出されている。幅10～26cm、深さは10～22cmを測る。

【ビット】南壁際から1基、床面北側から1基検出された。主柱穴とは考えられない。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】堀方を含めると37層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は11点。土師器坏1点、土師器甕7点、須恵器坏1点、ミニチュア2点である。土師器坏は底部にヘラケズリ再調整及び内面に黒色処理が施されている。

【小結】出土遺物から、9世紀前半の竪穴住居跡と考えられる。

第18号竪穴住居跡（S I - 18）（図44・46）

【位置】Y-172グリッドに位置している。

【重複】第25・26号溝跡及び第12号土坑と重複している。新旧関係は本遺構が全ての遺構より古いことが確認できた。カマドのみの検出である。

【平面形・規模】不明である。

【壁・床面】不明である。

【カマド】袖及び火床面の一部が残存する。

【壁溝】検出できなかった。

【ビット】検出できなかった。

【その他の施設】検出できなかった。

【堆積土】確認できなかった。

【出土遺物】3点図示した。全て土師器坏である。カマド火床面から出土している。支脚として転用されたものと思われる。

【小結】出土遺物から、火山灰降下以前、9世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

第19号竪穴住居跡（S I - 19）（図47～49）

【位置】W・X-170・171グリッドに位置する。

【重複】第2号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【平面形・規模】一部後世の攪乱により破壊を受けているが、平面形は方形を呈するものと思われる。長軸2m80cm、短軸2m60cm、深さは最大32cmを測る。主軸方位はN-110°-Eである。

【壁・床面】壁は床面からやや急に立ち上がっている。床面は、一部に貼り床が施される他は地床で、ほぼ平坦に造られている。

【カマド】東壁南寄りに1基検出された。両袖・煙道部・火床面の依存状態は比較的良好である。煙道部は半地下式で煙道は壁から45cm程突出する。火床面に土師器坏が倒位に置かれた状態で検出されている。

【壁溝】巡らない。

【ビット】検出されなかった。

【その他の施設】床面中央やや西よりに土坑が1基検出されている。

【堆積土】掘り方を含めると12層に分層できた。掘り方以外は、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は9点。土師器杯3点、土師器甕2点、須恵器杯4点である。土師器杯は底面及び体部に墨書きが施されている。遺物はカマド及び堆積土中から出土している。

【小結】出土遺物から、火山灰降下以前、9世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

第20号竪穴住居跡 (S I-20) (図50・52)

【位置】Y・AA-173~175グリッドに位置している。

【重複】第3号円形周溝、第15・16号土坑、第3号焼土遺構と重複している。新旧関係は本遺構が全ての遺構より古いことが堆積土の観察により判明している。

【平面形・規模】長軸5m20cm、短軸5m00cm、深さは最大16cmを測り、平面形は方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は貼り床が施され、ほぼ平坦に造られている。

【カマド】検出されなかった。第3号円形周溝と重複している部分にあった可能性が高い。

【壁溝】東壁の一部で検出された。幅8~16cm、深さは10cmを測る。

【ビット】床面北寄り東壁際及び西寄りの地点に1基ずつ、計2基検出された。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】掘り方を含めると27層に分層できた。掘り方以外は、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は14点。土師器杯11点、土師器甕1点、須恵器杯2点である。

【小結】重複関係や出土遺物から、火山灰降下以前、9世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

第21号竪穴住居跡 (S I-21) (図51・52)

【位置】AA・AB-182・183グリッドに位置している。

【重複】第1号壕跡、及び第14号溝跡と重複している。堆積土の状況から、全ての遺構より新しいことが確認できる。

【平面形・規模】平面形は方形を呈する。長軸2m20cm、短軸2m10cm、深さは最大30cmを測る。主軸方位はN-110°-Eである。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は一部に貼り床が施され、ほぼ平らに造られている。

【カマド】東壁中央に1基検出されている。煙道部は壁から突出していない。両袖部及び火床面が残存する。

【壁溝】巡らない。

【ビット】南壁寄りの床面から2基のビットが検出されたが、柱穴の可能性は低い。

【その他の施設】カマド北側袖付近から貯蔵穴と考えられる土坑が検出されている。

【堆積土】掘り方を含めると15層に分層された。掘り方以外は、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は2点。酸化焰焼成の須恵器杯が2点である。

【小結】重複する遺構の新旧関係や出土遺物から、火山灰降下後、10世紀後葉の竪穴住居跡と考え

られる。床面から出土した炭化材は放射性炭素年代測定を行っており、B P 1,060±30の年代が得られている。詳細な分析結果は第4章第5節に掲載している。

第22号竪穴住居跡（S I-22）（図53～58）

【位置】AB・AC-169～171グリッドに位置している。

【重複】第28号竪穴住居跡、第9・21号土坑と重複している。新旧関係は堆積土の状況より第28号竪穴住居跡・第21号土坑より新しく、その他の遺構より古い。

【平面形・規模】南東隅を削平により欠失するが、平面形はほぼ方形を呈する。長軸6m00cm、短軸5m40cm、深さは最大30cmを測る。主軸方位はN-110°-Eである。

【壁・床面】壁は床面から緩やかに立ち上がっている。床は地床でほぼ平坦に造られている。一部硬化面が認められる。

【カマド】東壁南寄りに1基検出された。袖の一部及び火床面の一部が残存するのみである。煙道部の形状も不明であるが、半地下式と考えられる。

【壁溝】欠失部分を除きほぼ全周する。幅20～30cm、深さ10～16cmを測る。

【ピット】床面及び壁際から計10基のピットを検出した。主柱穴と考えられるのはピット1・4・7である。壁内側の床面から検出されている。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】20層に分層できた。ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は55点。土師器環19点、土師器甕16点、須恵器環7点、須恵器壺2点、ミニチュア2点、土玉2点、碁石3点、砥石1点である。ほとんどが床面から出土している。

【小結】出土遺物から火山灰降下以前、9世紀中葉の竪穴住居跡と考えられる。第28号竪穴住居跡の建て替え後の住居跡と思われる。焼失家屋である。床面から出土した炭化材は放射性炭素年代測定を行っており、B P 1,240±30の年代が得られている。詳細な分析結果は第4章第5節に掲載している。

第28号竪穴住居跡（S I-28）（図59）

【位置】AB～AD-169～171グリッドに位置する。

【重複】第22号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い可能性が高い。第22号竪穴住居跡と建て替えの関係が考えられる。その他、第9・19号土坑と重複しており、新旧関係は本遺構が古い。

【平面形・規模】南北約7m50cm、東西約7m00cmのほぼ正方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-110°-Eと思われる。

【壁・床面】壁高はほとんどなく、床面のみを検出であった。残存する床面は堅緻で特に西側はかなり被熱している状態が確認できた。

【カマド】第22号竪穴住居跡の西壁北側で火床面と思われる焼土を検出した。袖は残存せず、人為的に壊された可能性が高い。北壁のかなり西寄りに設置されていたものと思われる。

【壁溝】西壁部を中心に幅約20cmの溝が検出された。全周するものと思われるが西壁以外の一部が

残存するにとどまる。

【ビット】径約20～30cm、深さ30～40cmのビットが西壁の両側に1基ずつ、計2基検出された。主柱穴と思われる。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】残存部で9層に分層できた。人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】前述したように第22号竪穴住居跡と建て替えの関係にある可能性が高い。第22号竪穴住居跡が一段低い所に床面が造られており、床面が被熱していることから、建て替えは拡張ではなく縮小と考えられる。

第23号竪穴住居跡（S I-23）（図60）

【位置】AC-194グリッドに位置している。

【重複】認められない。

【平面形・規模】かなり削平を受けているため、全容は不明である。検出された部分は南側コーナ一部分の可能性が高い。

【壁・床面】壁は検出されなかった。床は地床と思われ、遺物や炭化物が散漫に広がっていた。

【カマド】検出されなかった。

【壁溝】検出されなかった。

【ビット】検出されなかった。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】分層できなかった。

【出土遺物】図示できた遺物は1点。床面から出土した土師器坏である。

【小結】出土遺物から、9世紀前半の竪穴住居跡と考えられる。

第24号竪穴住居跡（S I-24）（図61～64）

【位置】AD-169～171グリッドに位置している。

【重複】第13号溝跡と重複している。植樹による攪乱のため、新旧関係は不明である。

【平面形・規模】西側の大部分が調査区域外に延びているため、全容は不明である。平面形は方形を呈するものと思われる。確認できた東壁は7m30cm、深さは最大54cmを測る。主軸方位はN-120°-Eである。

【壁・床面】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面は一部に貼り床が施され、全体的に固く締まっている。

【カマド】東壁やや南寄りに1基検出された。両袖の一部及び火床面が残存する。煙道部は半地下式と考えられ、煙道部は約20cm程壁外へ突出する。左袖の端部から芯材に用いられたと思われる土師器甕が倒位で検出されている。

【壁溝】カマド部分を除き、確認された全ての壁際から検出されている。幅18～26cm、深さは12～20cmを測る。

【ビット】柱穴と考えられるビットは検出されなかった。

【その他の施設】カマド左袖脇から土坑が2基検出された。

【堆積土】掘り方を含めると55層に分層できた。掘り方を含め下層は人為堆積、上層は自然堆積の様相を呈している。堆積土上層の第2層には白頭山火山灰がレンズ状に堆積している。

【出土遺物】図示できた遺物は16点。土師器坏5点、土師器甕6点、土師器壺1点、土師器埴1点、ミニチュア1点、須恵器坏1点である。土師器甕はロクロ成形が4点と比較的多い。床面やカマド周辺から出土している。

【小結】出土遺物及び堆積土の状況から火山灰降下以前、9世紀前半の竪穴住居跡と考えられる。

第25号竪穴住居跡（S I-25）（図65・66）

【位置】AA・AB-187~190グリッドにかけて位置している。

【重複】第1号溝状土坑、第3号塚跡、第1・2号土坑、第23号溝跡と重複している。第1号溝状土坑より新しく、他の全ての遺構より古い。

【平面形・規模】西側が調査区域外に延びているため、全容は不明である。平面形は方形を呈するものと思われる。確認できる東壁は7m30cm、深さは最大54cmを測る。主軸方位はN-120°-Eである。

【壁・床面】確認できる壁の高さは54cmを測る。床面は貼り床が施され、全体的に固く締まっている。

【カマド】東壁南寄りに1基検出された。火床面が残存するのみであるため、煙道部の形態も不明である。

【壁溝】カマド部分を除き、確認された全ての壁際から検出されている。幅12~24cm、深さは16~22cmを測る。

【ビット】柱穴と考えられるビットは検出されなかった。

【その他の施設】検出されなかった。

【堆積土】掘り方を含めると38層に分層できた。掘り方以外は自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は13点。土師器坏8点、土師器甕1点、須恵器坏1点、須恵器鉢2点、須恵器壺1点である。床面及び堆積土中から出土している。

【小結】出土遺物及び堆積土の状況から、火山灰降下以前、9世紀前半の竪穴住居跡と考えられる。床面から出土した炭化材は放射性炭素年代測定を行っており、BP1.160±30の年代が得られている。詳細な分析結果は第4章第5節に掲載している。

第26号竪穴住居跡（S I-26）（図67・68）

【位置】AB・AC-193・194グリッドに位置している。

【重複】カマド火床面及びビットのみの検出のため不明である。

【平面形・規模】前述したようにカマド火床面のみの検出のため平面形・規模は不明である。

【壁・床面】不明である。

【カマド】楕円形の火床面が検出されている。東西軸東側から甕の底部が出土している。

【壁溝】不明である。

- 【ビット】カマド火床面の北北東方向に小ビットが2基検出された。主柱穴の可能性は低い。
- 【その他の施設】検出されなかった。
- 【堆積土】不明である。
- 【出土遺物】図示できた遺物は1点。土師器甕で、カマド火床面から出土している。
- 【小結】火山灰降下後の竪穴住居跡の可能性が高い。

第27号竪穴住居跡（S I-27）（図67・68）

- 【位置】AA・AB-193・194グリッドに位置している。
- 【重複】第4・5号焼土遺構と重複している。新旧関係は、本遺構が古い可能性が高い。
- 【平面形・規模】大部分が現道等により削平を受けているため、全体形状は不明である。
- 【壁・床面】残存部で見える限り、壁は床面から緩やかに立ち上がっている。床面は地床で、ほぼ平坦に造られている。
- 【カマド】検出されていない。削平部分に存在していた可能性が高い。
- 【壁溝】巡らない。
- 【ビット】検出されなかった。
- 【その他の施設】検出されなかった。
- 【堆積土】17層に分層できた。人為堆積の様相を呈する。
- 【出土遺物】図示できた遺物は6点。土師器坏2点、土師器甕3点、ミニチュア1点である。
- 【小結】出土遺物から、火山灰降以前、9世紀前半の竪穴住居跡の可能性が高い。

（笹森）

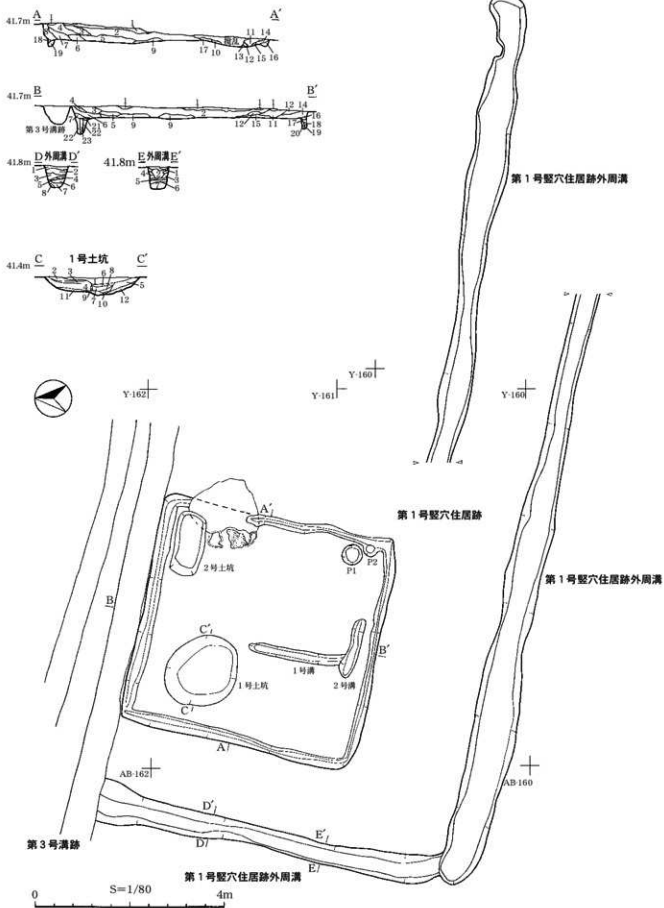
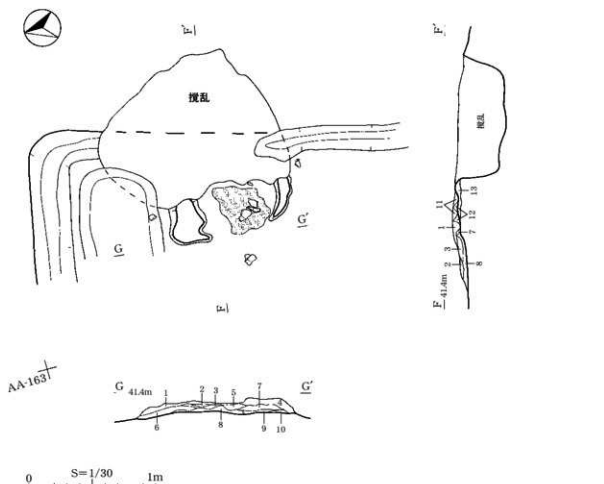


図4 第1号竪穴住居跡(1)



第1号竪穴住居跡

SPA A' B'B'

- | | | | |
|-----|---------|------|--------------|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒子少量 |
| 2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック少量 |
| 3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒子・ブロック少量 |
| 4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒子少量 |
| 5層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒子微量 |
| 6層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| 7層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒子微量 |
| 8層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒子中量 |
| 9層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒子少量 |
| 10層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒子少量 |
| 11層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒子少量 |
| 12層 | 10YR5/6 | 褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 13層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒子少量 |
| 14層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒子微量 |
| 15層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 阿色ローム粒子主体 |
| 16層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒子中量 |
| 17層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 18層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | ロームブロック少量 |
| 19層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ロームブロック微量 |
| 20層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ロームブロック少量 |
| 21層 | 10YR5/6 | 褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 22層 | 10YR5/6 | 褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 23層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物微量 |

第1号竪穴住居跡 1号土坑

SPC C'

- | | | | |
|-----|---------|-------|--------------------|
| 1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化物・焼土粒子微量、ローム粒子中量 |
| 2層 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 3層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 4層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 焼土粒子微量、ローム粒子多量 |
| 5層 | 10YR6/6 | 黄褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 6層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 7層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 8層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 阿色ローム・ブロック主体 |
| 9層 | 10YR4/4 | 褐色土 | ローム粒子中量 |
| 10層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 阿色ローム粒子多量 |
| 11層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 阿色ローム粒子中量 |
| 12層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 阿色ローム主体 |

第1号竪穴住居跡 外周溝

SPD D'

- | | | | |
|----|---------|-----|--------------------|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物・焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物・焼土粒子微量、ローム粒子少量 |
| 3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物、ローム粒子微量 |
| 4層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物微量、ローム粒子少量 |
| 5層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ロームブロック少量 |
| 6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ロームブロック微量 |
| 7層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 阿色ローム主体 |
| 8層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 阿色ロームブロック主体 |

第1号竪穴住居跡 外周溝

SPE E'

- | | | | |
|----|---------|------|---------------|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒子少量 |
| 3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物、ローム粒子微量 |
| 4層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物微量、ローム粒子中量 |
| 5層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物少量、ローム粒子少量 |
| 6層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 炭化物、ローム粒子少量 |
| 7層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 阿色ローム主体 |

第1号竪穴住居跡 カマド

SPF F', SPG G'

- | | | | |
|-----|----------|------|----------------------|
| 1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 2層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子微量、ローム粒子少量 |
| 4層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 炭化物・焼土粒子中量 |
| 5層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 6層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子微量、ローム粒子少量 |
| 7層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物少量、焼土粒子微量、ローム粒子少量 |
| 8層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 阿色ローム粒子主体 |
| 9層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 10層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 焼したローム主体 |
| 11層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子微量、ローム粒子少量 |
| 12層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 13層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子・ローム粒子少量 |

図5 第1号竪穴住居跡(2)

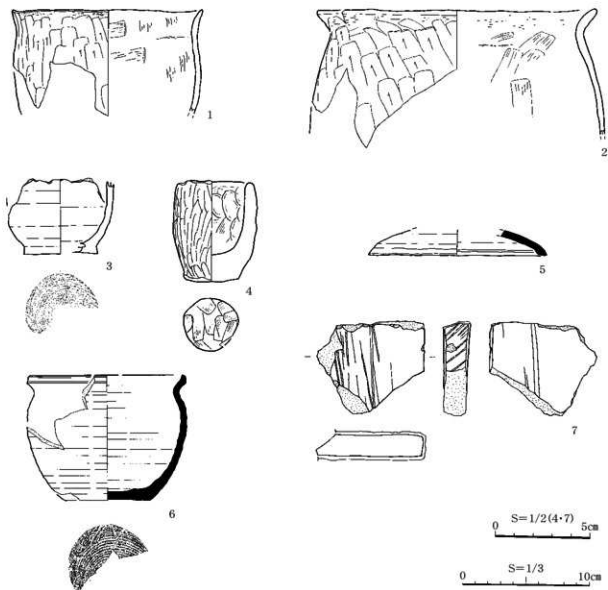


図6 第1号竪穴住居跡遺物

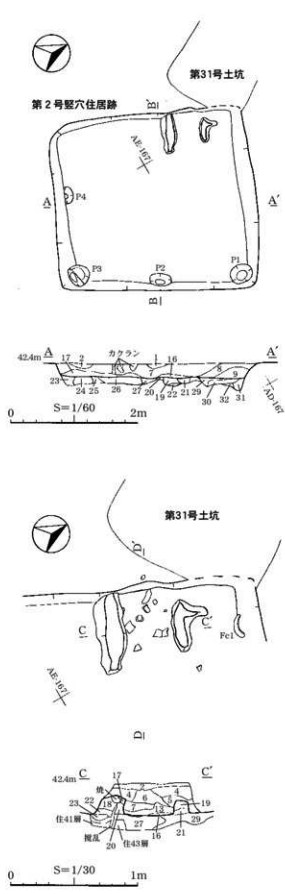


図7 第2号竪穴住居跡

■2号竪穴住居跡

- 122 1979W33 野尻黄土
- 123 1979W32 野尻黄土
- 124 1979W31 野尻黄土
- 125 1979W30 野尻黄土
- 126 1979W29 野尻黄土
- 127 1979W28 野尻黄土
- 128 1979W27 野尻黄土
- 129 1979W26 野尻黄土
- 130 1979W25 野尻黄土
- 131 1979W24 野尻黄土
- 132 1979W23 野尻黄土
- 133 1979W22 野尻黄土
- 134 1979W21 野尻黄土
- 135 1979W20 野尻黄土
- 136 1979W19 野尻黄土
- 137 1979W18 野尻黄土
- 138 1979W17 野尻黄土
- 139 1979W16 野尻黄土
- 140 1979W15 野尻黄土
- 141 1979W14 野尻黄土
- 142 1979W13 野尻黄土
- 143 1979W12 野尻黄土
- 144 1979W11 野尻黄土
- 145 1979W10 野尻黄土
- 146 1979W9 野尻黄土
- 147 1979W8 野尻黄土
- 148 1979W7 野尻黄土
- 149 1979W6 野尻黄土
- 150 1979W5 野尻黄土
- 151 1979W4 野尻黄土
- 152 1979W3 野尻黄土
- 153 1979W2 野尻黄土
- 154 1979W1 野尻黄土
- 155 1979W0 野尻黄土

■2号竪穴住居跡 方P4

- 156 1979W33 野尻黄土
- 157 1979W32 野尻黄土
- 158 1979W31 野尻黄土
- 159 1979W30 野尻黄土
- 160 1979W29 野尻黄土
- 161 1979W28 野尻黄土
- 162 1979W27 野尻黄土
- 163 1979W26 野尻黄土
- 164 1979W25 野尻黄土
- 165 1979W24 野尻黄土
- 166 1979W23 野尻黄土
- 167 1979W22 野尻黄土
- 168 1979W21 野尻黄土
- 169 1979W20 野尻黄土
- 170 1979W19 野尻黄土
- 171 1979W18 野尻黄土
- 172 1979W17 野尻黄土
- 173 1979W16 野尻黄土
- 174 1979W15 野尻黄土
- 175 1979W14 野尻黄土
- 176 1979W13 野尻黄土
- 177 1979W12 野尻黄土
- 178 1979W11 野尻黄土
- 179 1979W10 野尻黄土
- 180 1979W9 野尻黄土
- 181 1979W8 野尻黄土
- 182 1979W7 野尻黄土
- 183 1979W6 野尻黄土
- 184 1979W5 野尻黄土
- 185 1979W4 野尻黄土
- 186 1979W3 野尻黄土
- 187 1979W2 野尻黄土
- 188 1979W1 野尻黄土

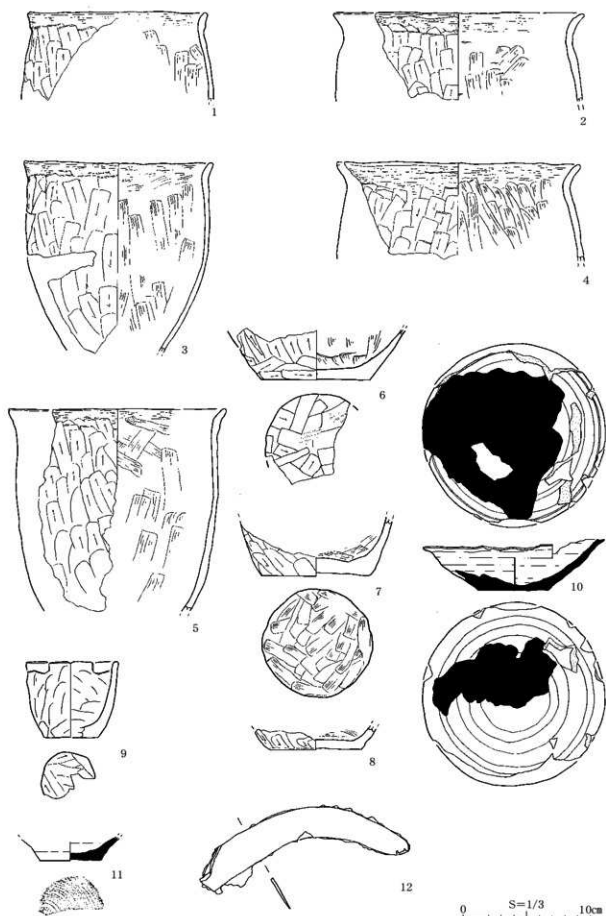


図8 第2号竪穴住居跡遺物

0 S=1/3 10cm

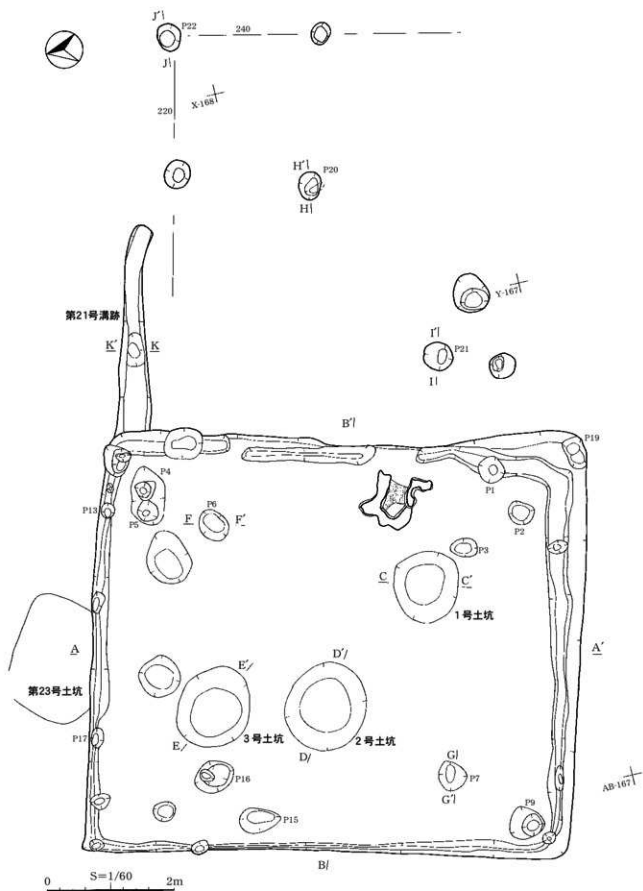


图9 第3号竖穴住居跡・第21号溝跡(1)

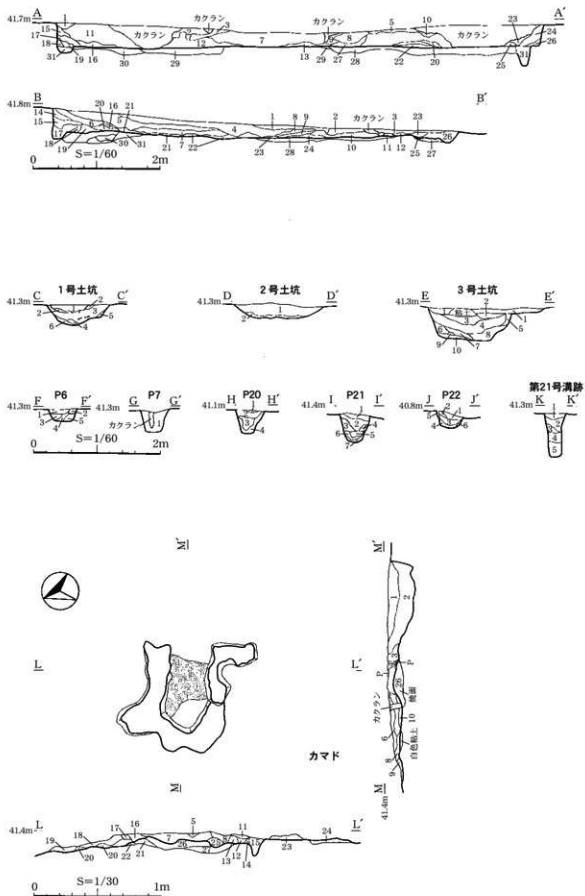


図10 第3号竪穴住居跡・第21号溝跡(2)

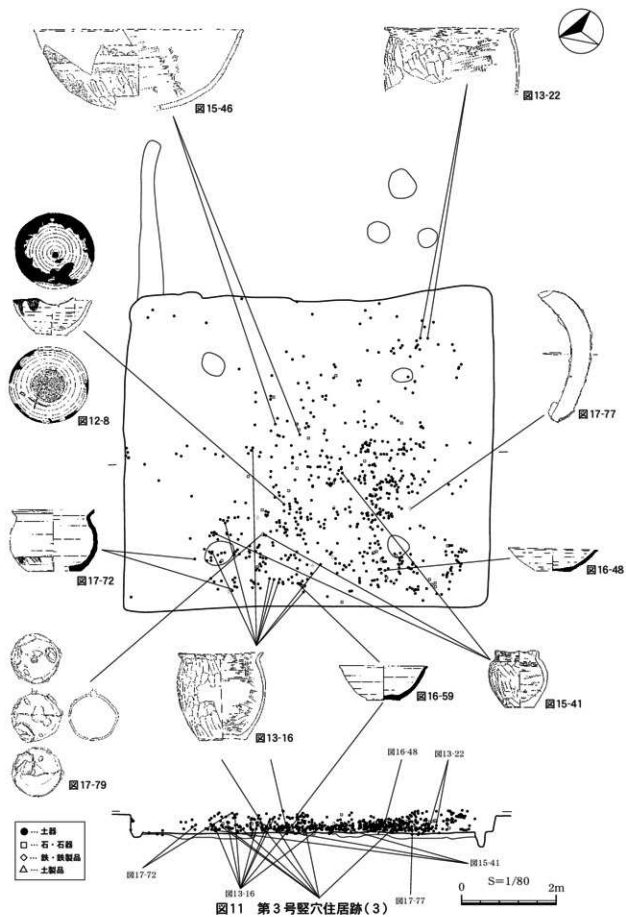


図11 第3号竪穴住居跡(3)

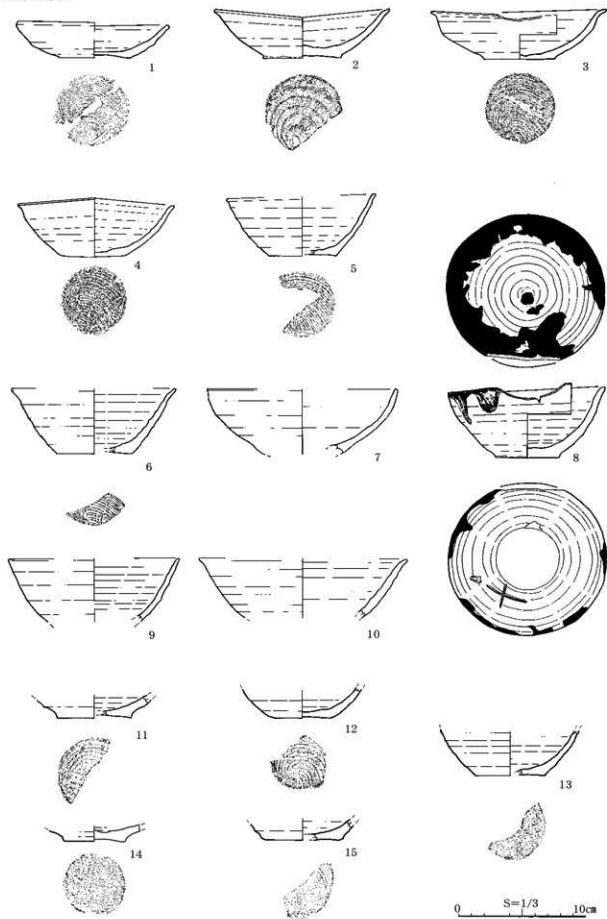


図12 第3号竪穴住居跡遺物(1)

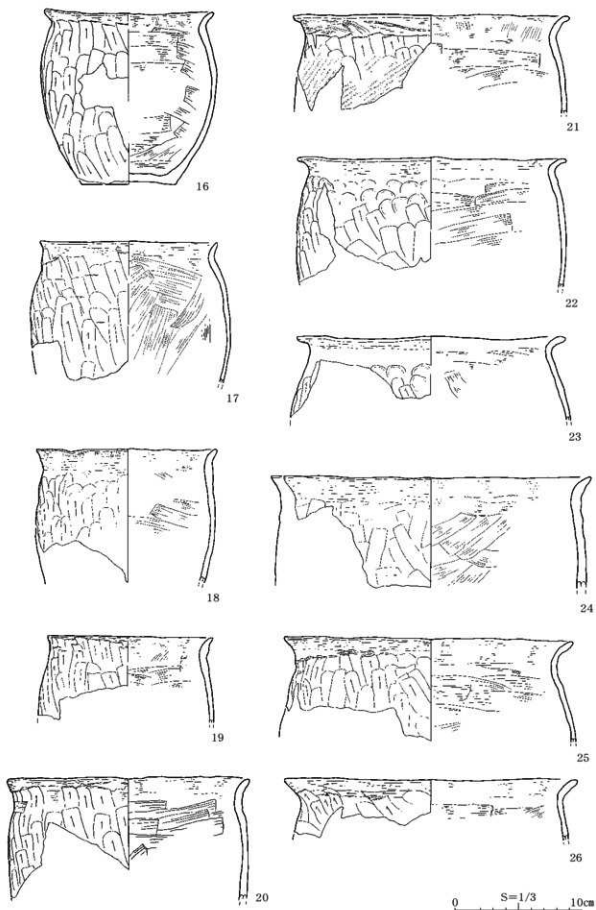


図13 第3号竪穴住居跡遺物(2)

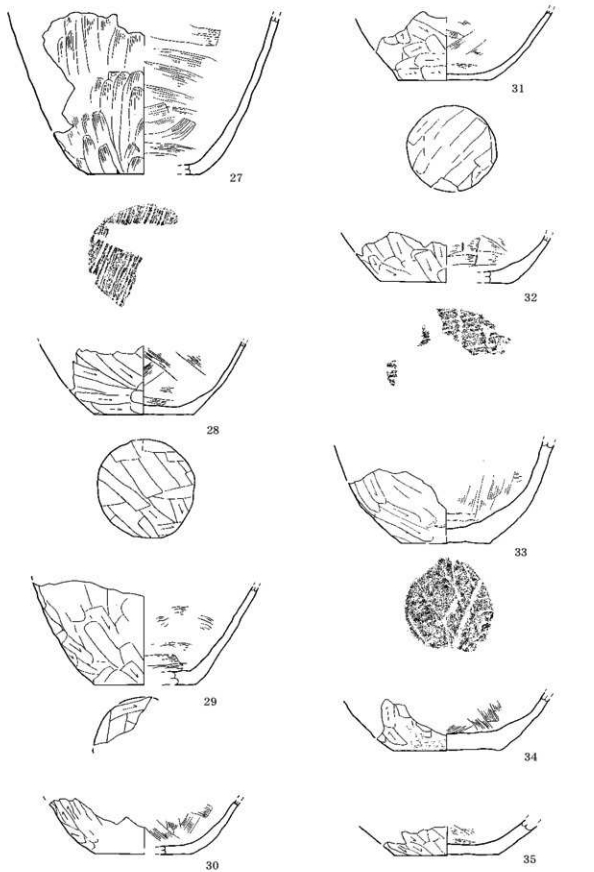


図14 第3号竪穴住居跡遺物(3)

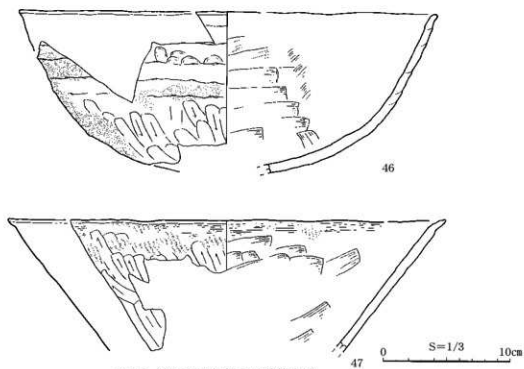
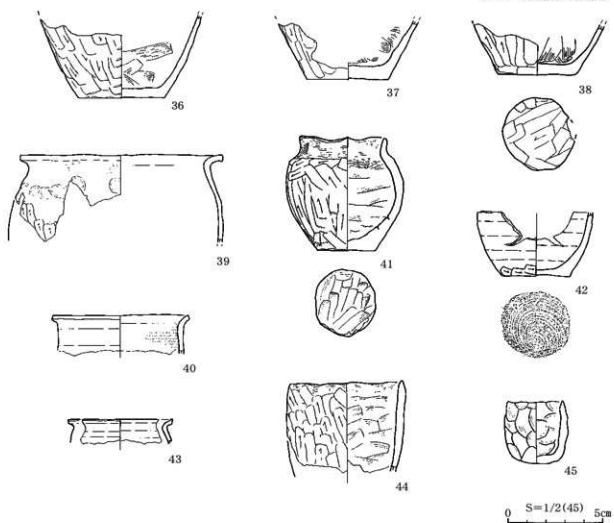


図15 第3号竪穴住居跡遺物(4)

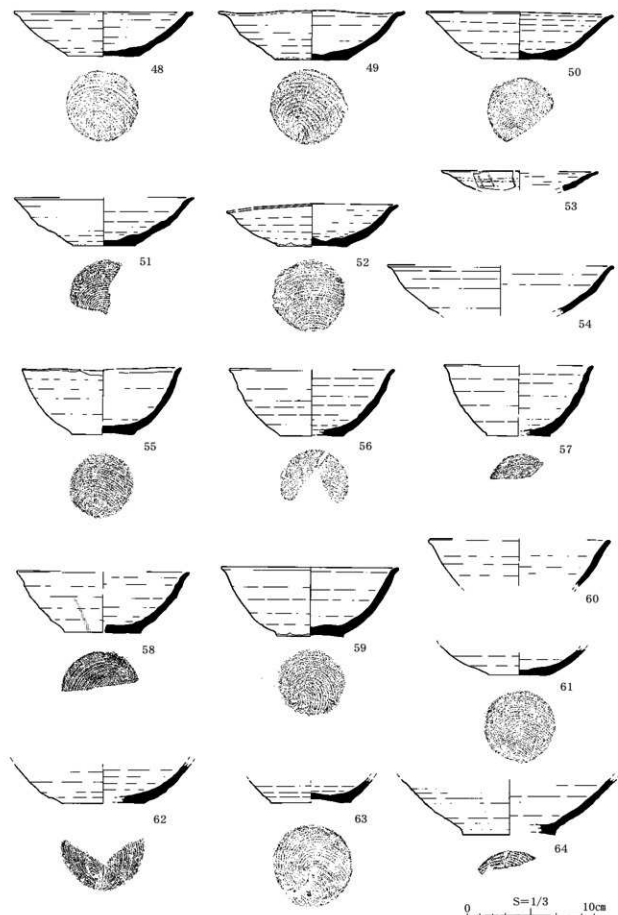


図16 第3号竪穴住居跡遺物(5)

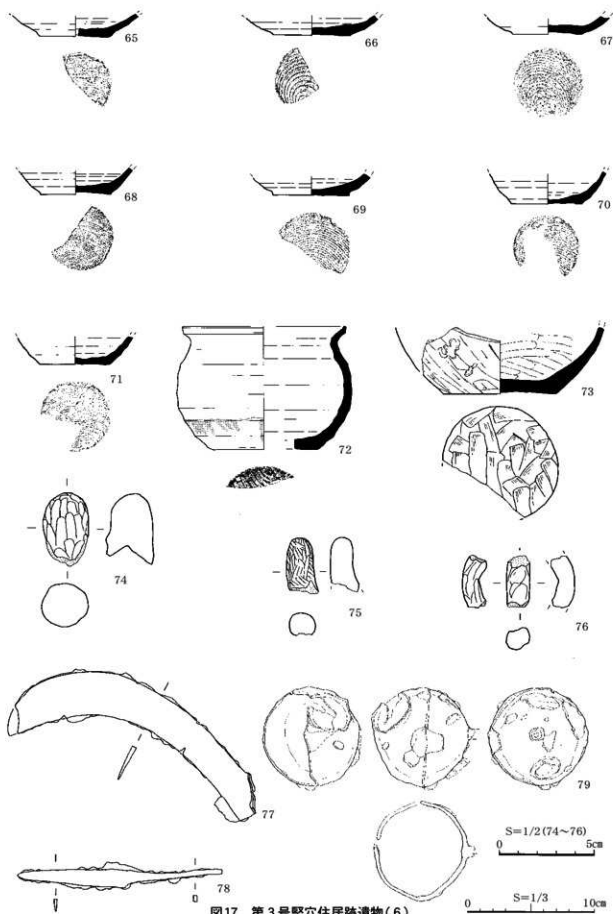


図17 第3号竪穴住居跡遺物(6)

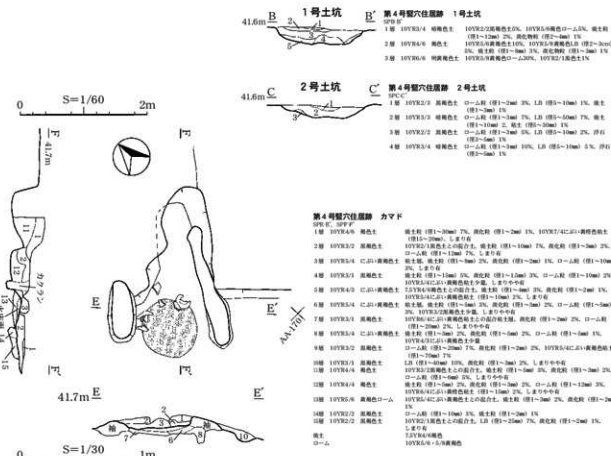
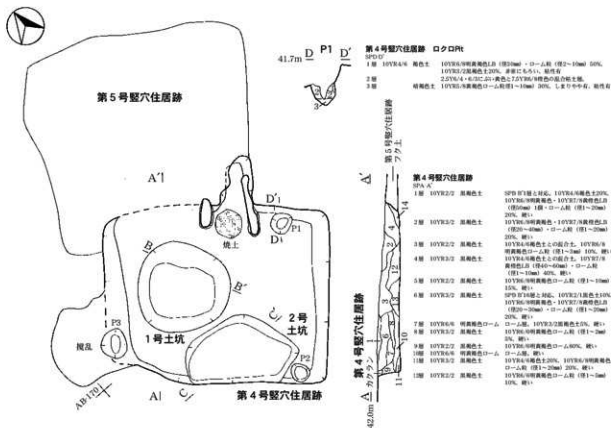


図18 第4号竪穴住居跡

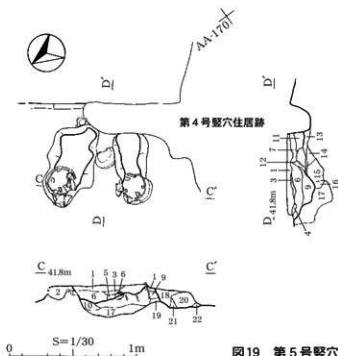
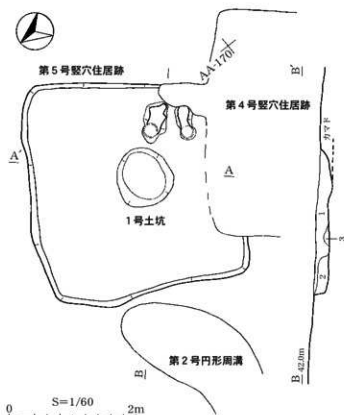
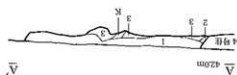


図19 第5号竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡

1974.7. 調査

- 1層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。
1974(4)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm、H=10cm (壁)×100mm 10%、壁1
- 2層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。1974(4)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 3層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。1974(4)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1

第6号竪穴住居跡 片方F

1974.7. 調査

- 1層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 2層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 3層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 4層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 5層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 6層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 7層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 8層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 9層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 10層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 11層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 12層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 13層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 14層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 15層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 16層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 17層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 18層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 19層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 20層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 21層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1
- 22層 1974(2) 灰濁土 1974(3)の灰濁土より露出。径 $\phi=100$ mm 10%、壁1

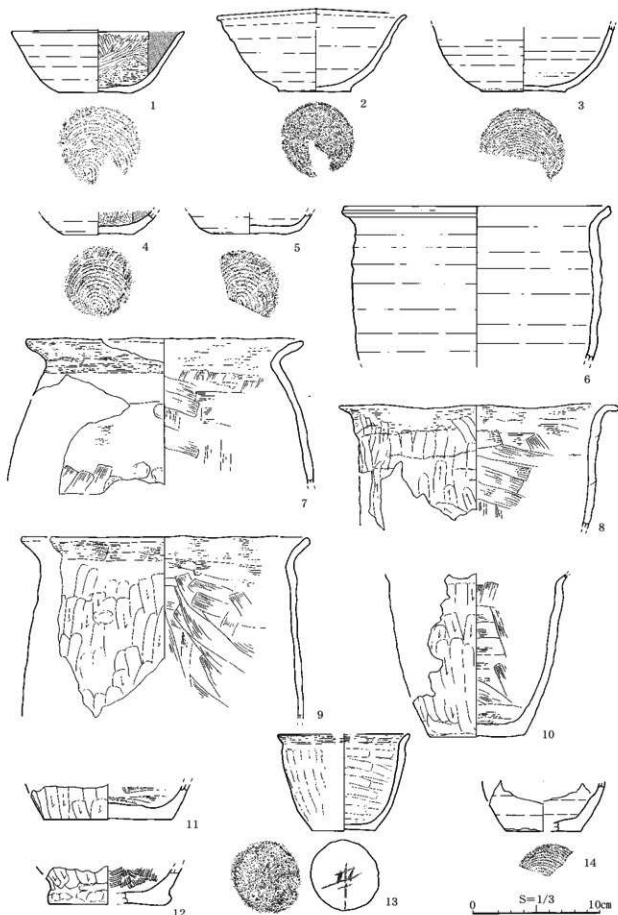
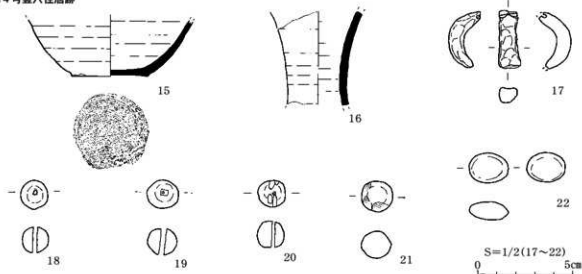


图20 第4号竖穴住居跡遺物

第4号竪穴住居跡



第4・5号竪穴住居跡(1)

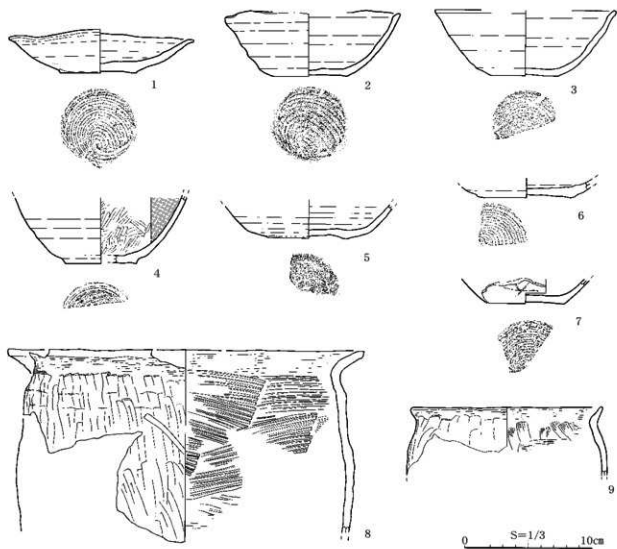


図21 第4・5号竪穴住居跡遺物(1)

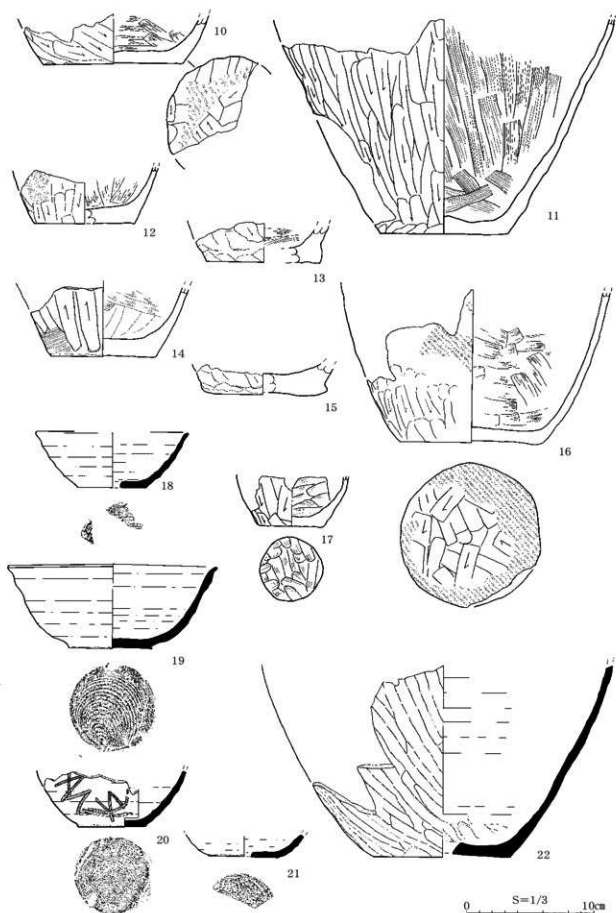


図22 第4・5号竪穴住居跡遺物(2)

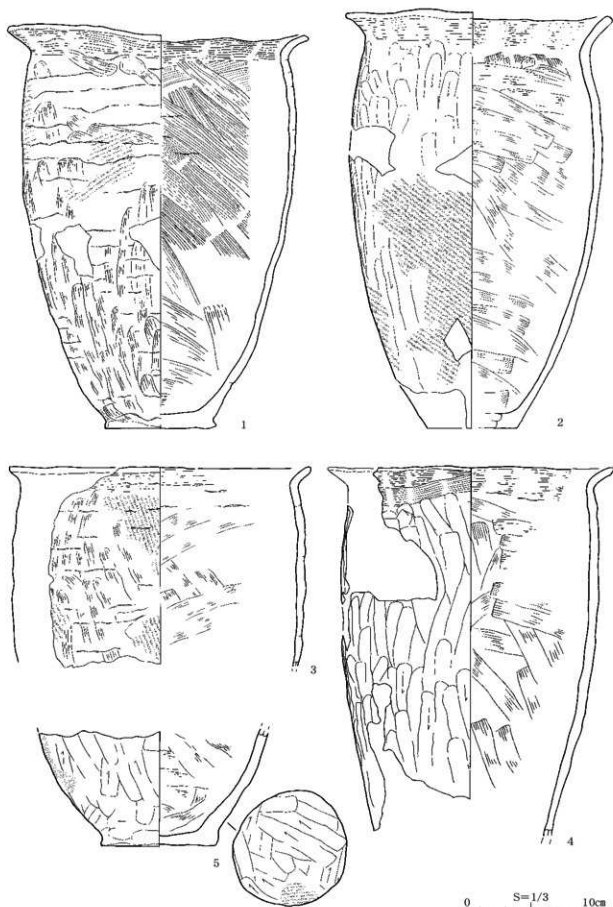


図23 第5号竪穴住居跡遺物

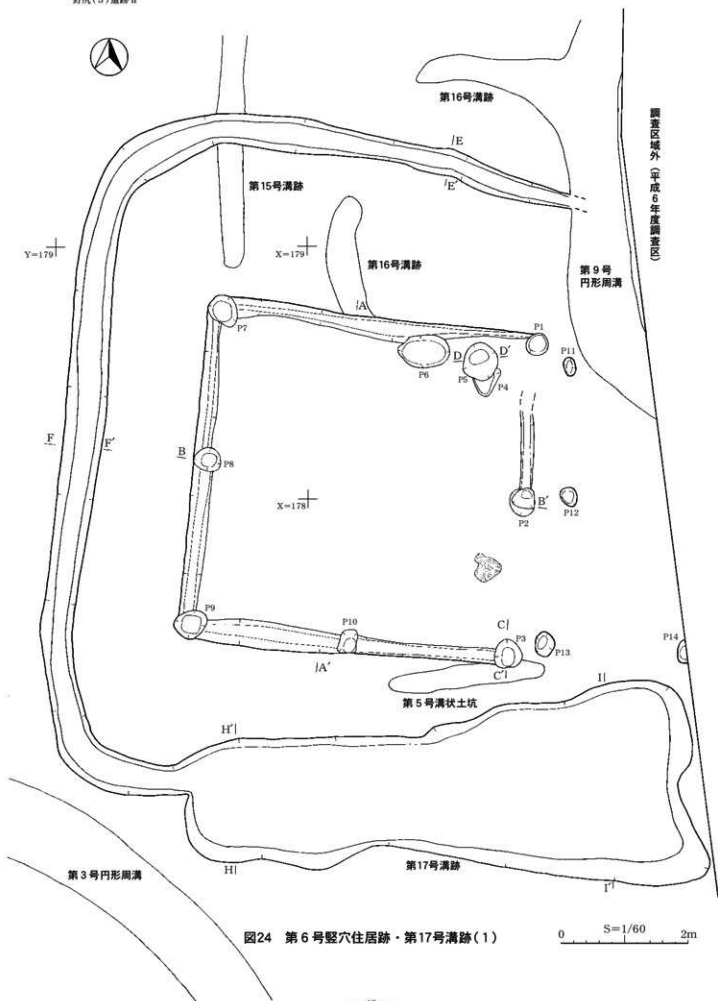


図24 第6号竪穴住居跡・第17号溝跡(1)

第6号竪穴住居跡

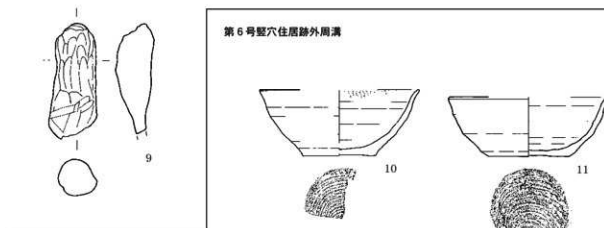
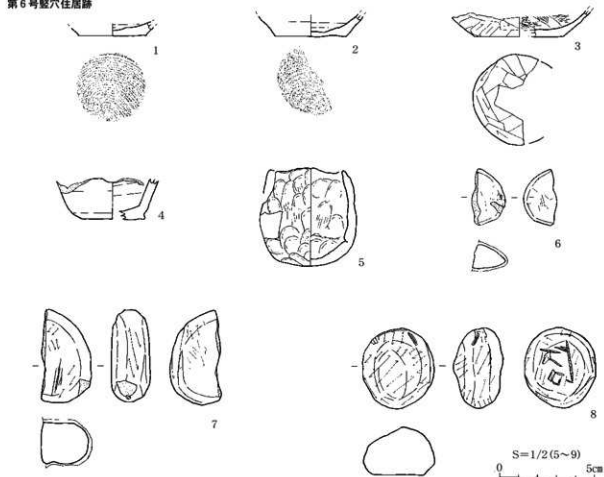


図26 第6号竪穴住居跡遺物

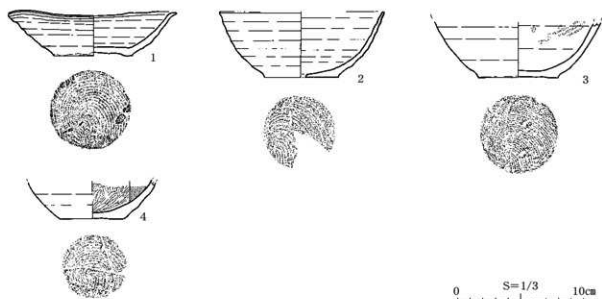
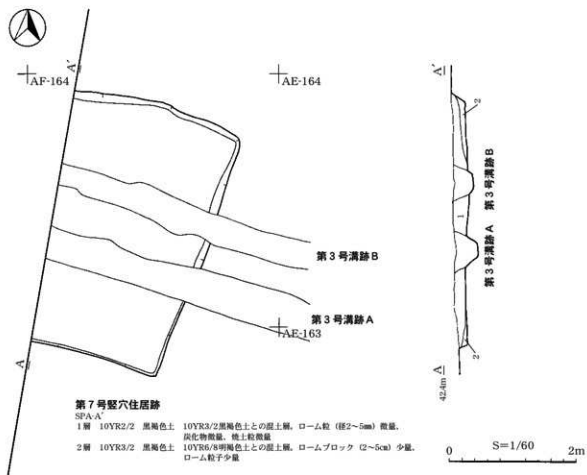
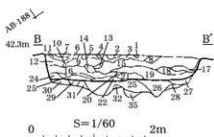
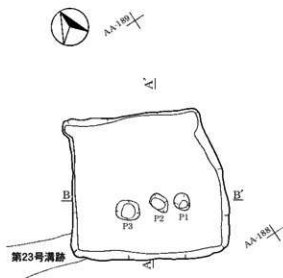


図27 第7号竪穴住居跡



S=1/60 2m



S=1/2 5cm



第9号竪穴式住居跡

SPA-A'

1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒5~7%、炭化物1%
2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒7%
3層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒10%、炭化物2%
4層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒3%
5層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒3%、炭化物1%
6層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒2%、炭化物1%
7層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒1%
8層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒3%、炭化物7%
9層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒7%、炭化物5%
10層	10YR4/4	褐色土	焼土5%
11層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒10%
12層	10YR2/1	黒色土	ローム粒5%
13層	10YR4/2	灰黄褐色土	ローム粒20%
14層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒7%、焼土1%
15層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒10%
16層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒3%
17層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒3%、炭化物1%
18層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒10%

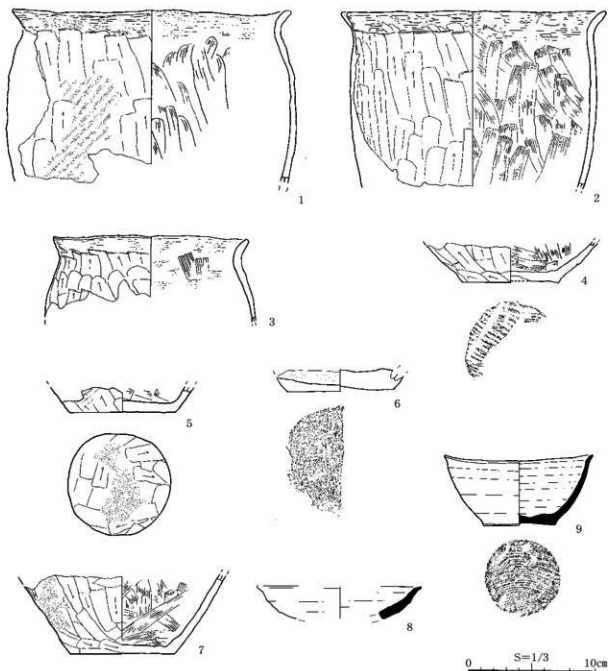
第9号竪穴式住居跡

SPB-B'

1層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒1%
2層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒5%
3層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒7%
4層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒5%、焼土1%、炭化物1%
5層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒7%、炭化物1%
6層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒15%、炭化物1%
7層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒2%
8層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒2%、炭化物3%
9層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒2%、炭化物2%
10層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒5%
11層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒3%、炭化物2%
12層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒1%、炭化物1%
13層	5YR5/8	明赤褐色焼土	ローム粒3%、焼土1%、炭化物
14層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒10%、炭化物2%
15層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒5%
16層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒2%、炭化物1%
17層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒5%、炭化物1%
18層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒5%、焼土1%、炭化物2%
19層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒5%、炭化物5%
20層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒7%、炭化物5%
21層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒7%、炭化物5%
22層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒3%、炭化物2%
23層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒10%
24層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒5%
25層	10YR1.7/1	黒色土	10YR5/6黄褐色ロームブロックの 混合、しまり(無)、粘性(やや有)
26層	10YR1.7/1	黒色土	10YR4/4褐色ロームブロックの 混合、しまり(無)、粘性(無)
27層	10YR1.7/1	黒色土	10YR5/6黄褐色ロームブロックの 混合、しまり(有)、粘性(有)
28層	10YR4/4	褐色土	同色ローム主体、しまり(有)、 同粘性(有)
29層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	同色ローム主体、しまり(有)、 粘性(有)
30層	10YR5/6	黄褐色土	同色ローム主体、しまり(有)、 粘性(有)、塑性に富む
31層	10YR5/6	黄褐色土	同色ローム主体、しまり(有)、 粘性(有)、塑性に富む
32層	10YR6/6	明黄褐色土	同色ローム主体、しまり(有)、 粘性(有)、塑性に富む
33層	10YR4/4	褐色土	同色ロームと10YR2/3黒褐色土の 混合、しまり(有)、粘性(有)
34層	10YR4/6	褐色土	同色ローム主体、しまり(有)、 粘性(有)、塑性に富む
35層	10YR4/6	褐色土	同色ロームと10YR2/1黒色土の 混合、しまり(有)、粘性(有)
36層	10YR5/8	黄褐色土	同色ローム主体、しまり(有)、 粘性(やや有)、塑性に富む
37層	10YR4/6	褐色土	同色ロームと10YR1.7/1黒色土の 混合、しまり(無)、粘性(やや有)

図28 第9号竪穴住居跡

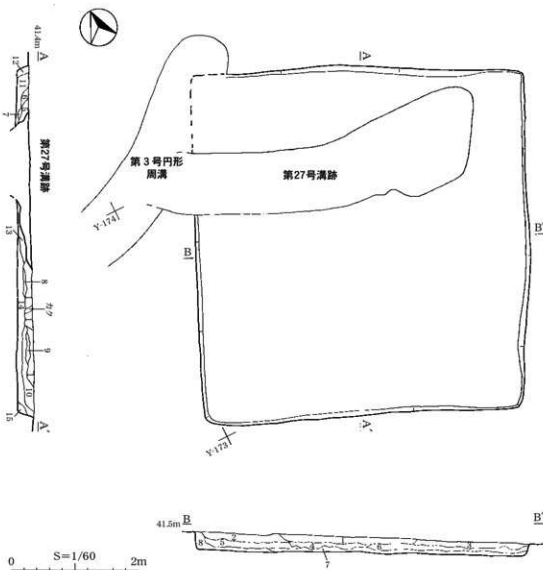
第10号竪穴住居跡



第10号竪穴住居跡外周溝



図30 第10号竪穴住居跡遺物



第11号竖穴住居跡

597.6c 断面

- 1層 597E17 灰褐色土20%、597E16中砂層面計-1.0m (H)~3m(5%、粘土陶片、中中礫)
 2層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計2.0%、597E16中砂層面計-1.0m(5%、粘土陶片、中中礫)
 3層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計1.0%、597E16中砂層面計-1.0m (H)~1.5m(灰濁、粘土陶片、礫)
 4層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計1.0%、597E16中砂層面計-1.0m (H)~1.5m(灰濁、粘土陶片、礫)
 5層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計-1.0m (H)~1.5m(中中礫、礫)
 6層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計20%、597E16中砂層面計-1.0m (H)~1.5m(灰濁、礫)
 7層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計-1.0m (H)~1.5m(中中礫、礫)
 8層 597E17 灰褐色土 砂-土粒子層、中中礫)
 9層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計20%、砂-土粒子層、中中礫)
 10層 597E17 灰褐色土 砂-土粒子層、礫)
 11層 597E17 灰褐色土 砂-土粒子層、礫)
 12層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計20%、597E16中砂層面計-1.0m (H)~1.5m(灰濁、礫)
 13層 597E17 灰褐色土 砂-土粒子層、礫)
 14層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計1.0%、597E16中砂層面計-1.0m (H)~1.5m(灰濁、粘土陶片、礫)
 15層 597E17 灰褐色土 砂-土粒子層、粘土陶片、礫)
 16層 597E17 灰褐色土 597E16中砂層面計-1.0m (H)~1.5m(灰濁、礫)

図31 第11号竖穴住居跡

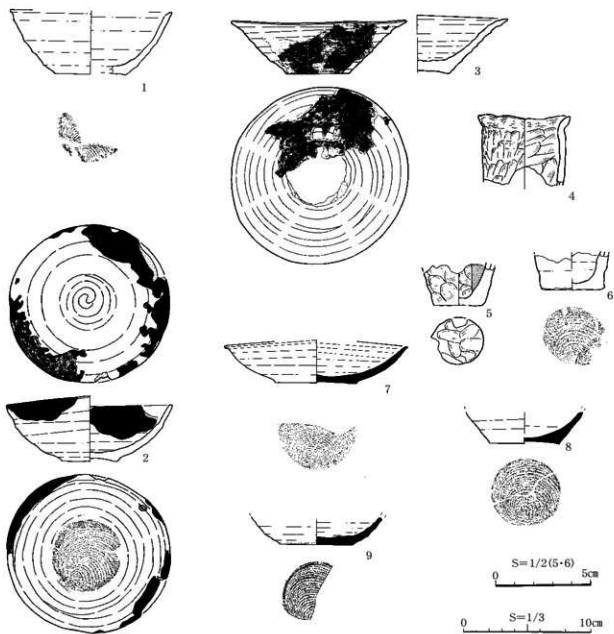


图32 第11号竖穴住居跡遺物

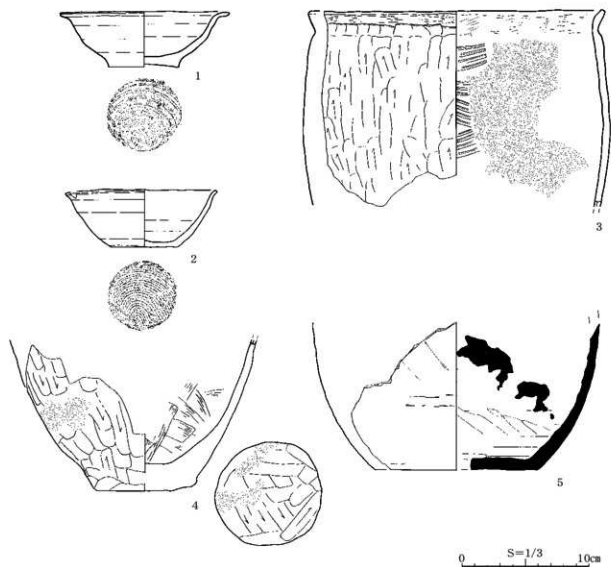
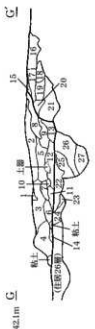
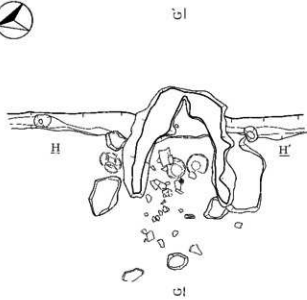


图34 第12号竖穴住居跡遺物



第13号竪穴住居跡 方ヤド

番号	住居跡	説明
1号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
2号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
3号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
4号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
5号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
6号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
7号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
8号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
9号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
10号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
11号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
12号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
13号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
14号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
15号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
16号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
17号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
18号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
19号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%
20号	IVYK3	IVYK3住居跡跡部(土層) 埋→10m 10%、IVYK3C21(1)遺構跡部(土層) 埋→10m 10%

図36 第13号竪穴住居跡(2)

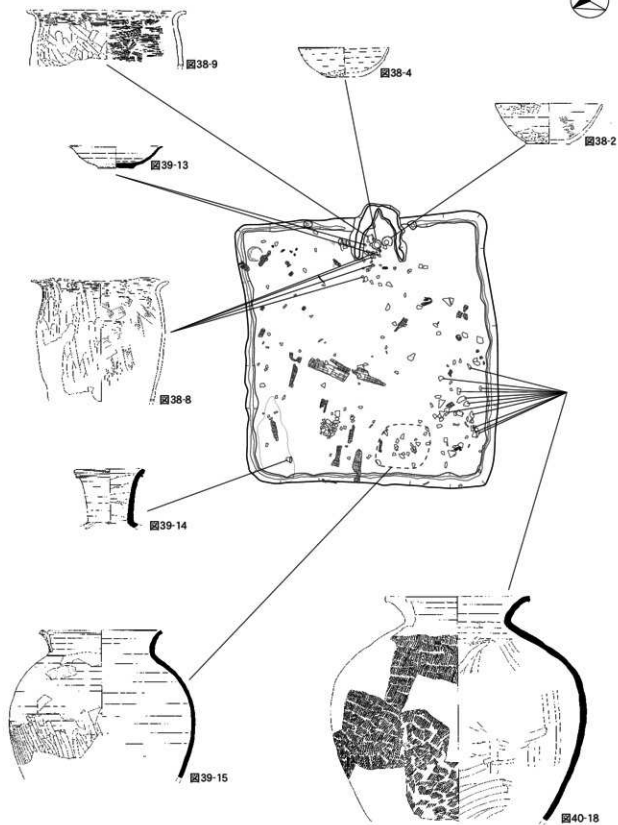


図37 第13号竪穴住居跡(3)

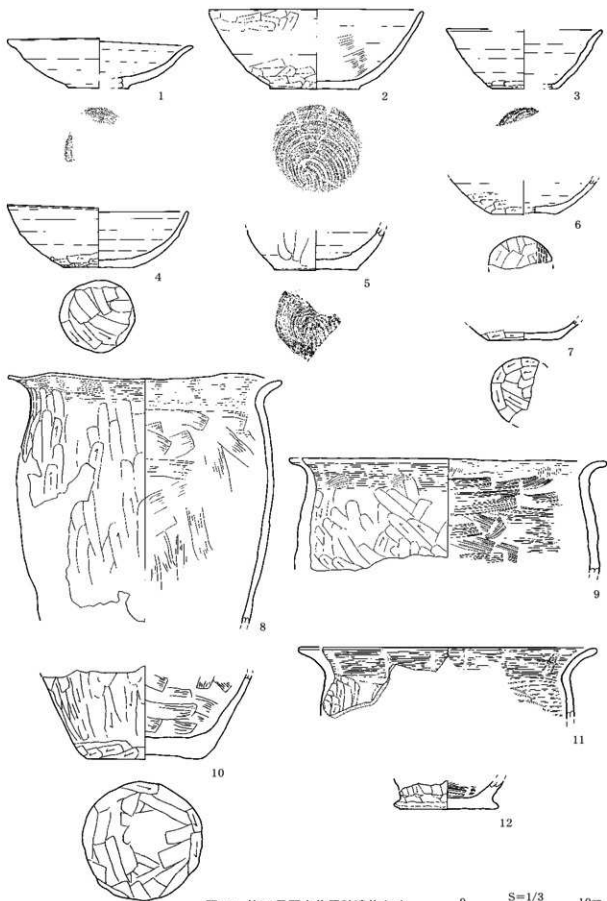


図38 第13号竪穴住居跡遺物(1)

0 S=1/3 10cm

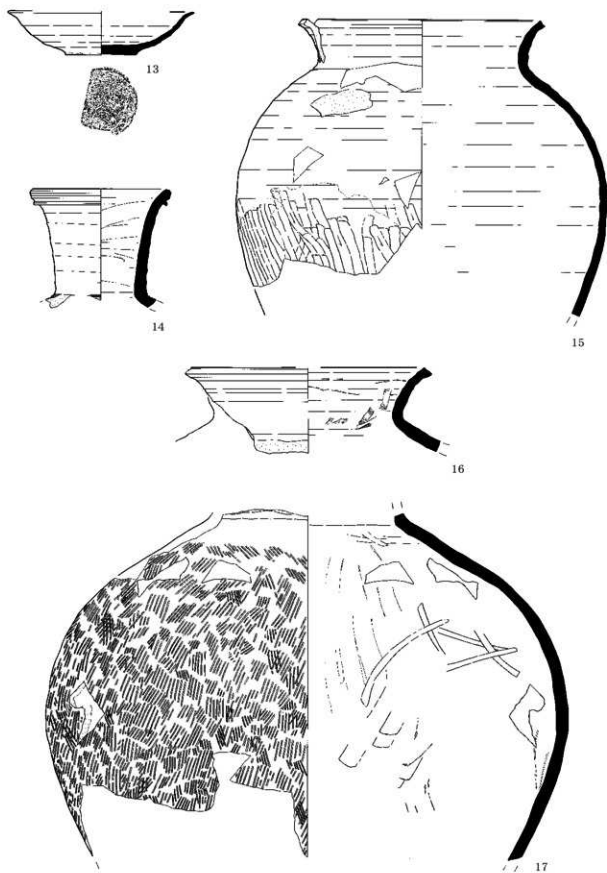


図39 第13号竪穴住居跡遺物(2)

0 S=1/3 10cm

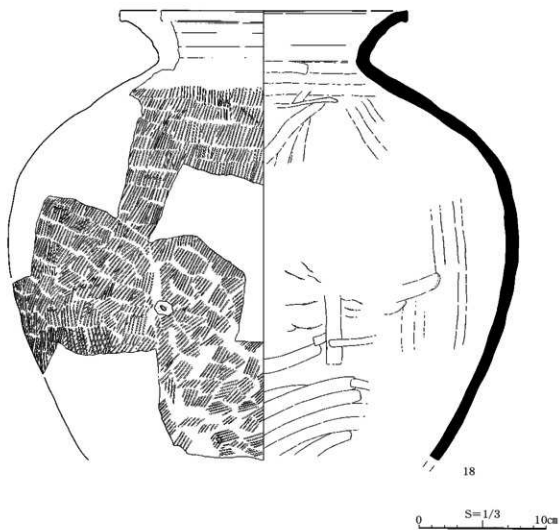


図40 第13号竪穴住居跡遺物(3)

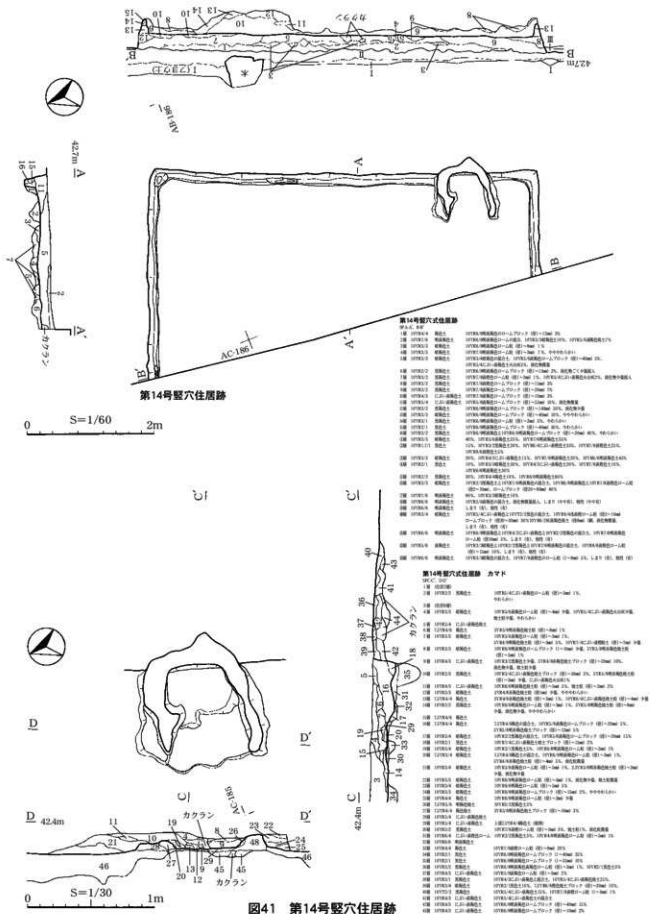
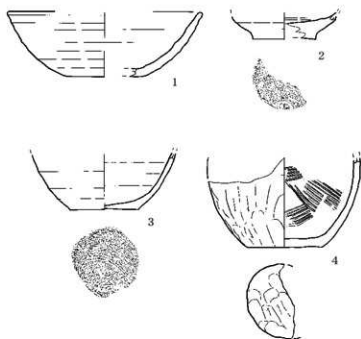
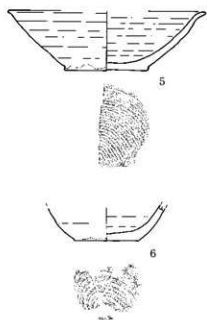


図41 第14号竪穴住居跡

第14号竪穴住居跡



第16号竪穴住居跡



第17号竪穴住居跡(1)

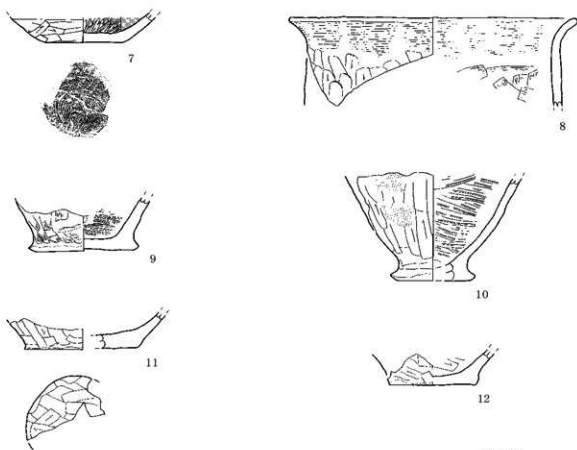
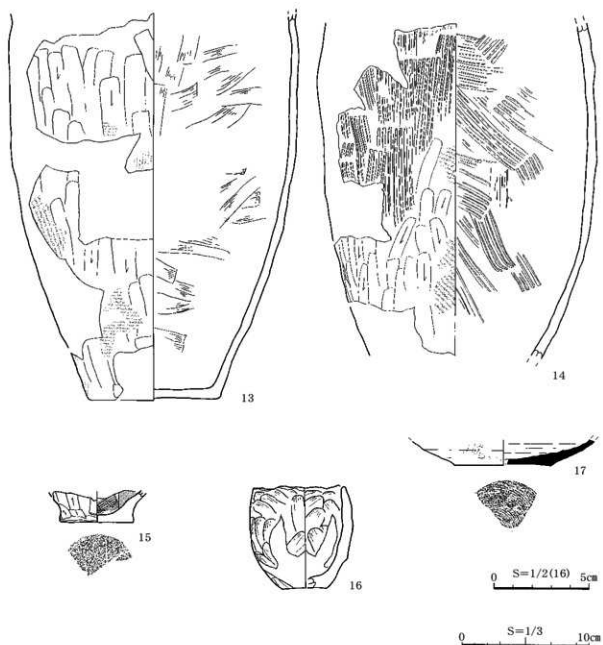


図45 第14・16・17号竪穴住居跡遺物

0 $S=1/3$ 10cm

第17号竪穴住居跡(2)



第18号竪穴住居跡



図46 第17・18号竪穴住居跡遺物

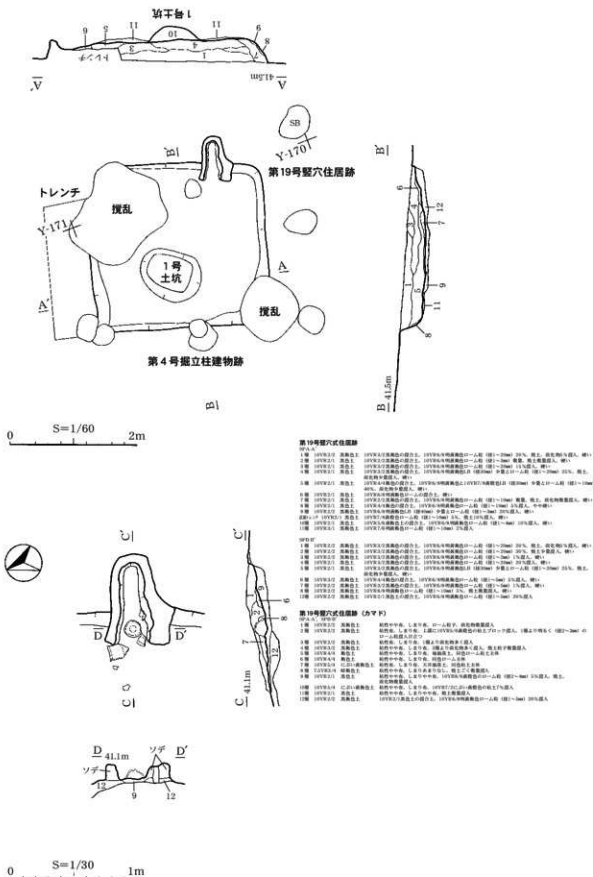


図47 第19号竪穴住居跡(1)

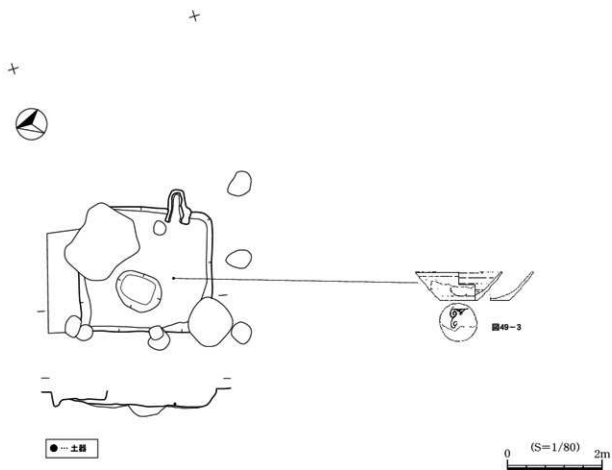


図48 第19号竪穴住居跡(2)

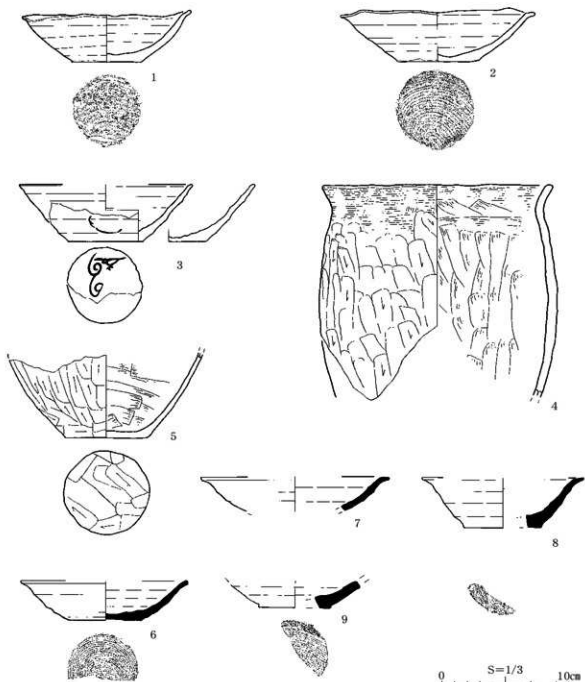
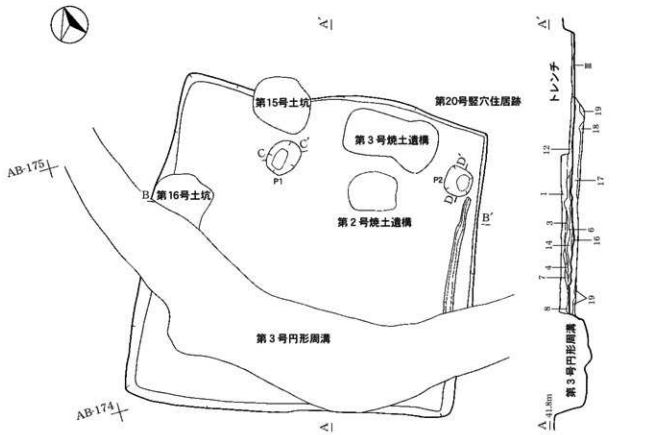
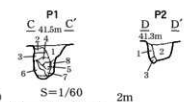


図49 第19号竪穴住居跡遺物



第3号円形周溝
第16号土坑



- 第20号竪穴住居跡 P1**
 1層 1979V121 灰土土
 2層 1979V19 焼土土
 3層 1979V21 灰土土
 4層 1979V21 灰土土
 5層 1979V21 灰土土
 6層 1979V21 灰土土
 7層 1979V21 灰土土
 8層 1979V21 灰土土

- 第20号竪穴住居跡 P2**
 1層 1979V22 灰土土
 2層 1979V22 灰土土
 3層 1979V22 灰土土

第20号竪穴住居跡

- 1層 1979V121 灰土土
 2層 1979V19 灰土土
 3層 1979V21 灰土土
 4層 1979V21 灰土土
 5層 1979V21 灰土土
 6層 1979V21 灰土土
 7層 1979V21 灰土土
 8層 1979V21 灰土土
 9層 1979V21 灰土土
 10層 1979V21 灰土土
 11層 1979V21 灰土土
 12層 1979V21 灰土土
 13層 1979V21 灰土土
 14層 1979V21 灰土土
 15層 1979V21 灰土土
 16層 1979V21 灰土土
 17層 1979V21 灰土土
 18層 1979V21 灰土土
 19層 1979V21 灰土土
 20層 1979V21 灰土土
 21層 1979V21 灰土土
 22層 1979V21 灰土土
 23層 1979V21 灰土土
 24層 1979V21 灰土土
 25層 1979V21 灰土土
 26層 1979V21 灰土土
 27層 1979V21 灰土土

【第3号円形周溝】

- 1層 1979V121 灰土土
 2層 1979V21 灰土土
 3層 1979V21 灰土土
 4層 1979V21 灰土土
 5層 1979V21 灰土土
 6層 1979V21 灰土土
 7層 1979V21 灰土土
 8層 1979V21 灰土土
 9層 1979V21 灰土土
 10層 1979V21 灰土土
 11層 1979V21 灰土土
 12層 1979V21 灰土土
 13層 1979V21 灰土土
 14層 1979V21 灰土土
 15層 1979V21 灰土土
 16層 1979V21 灰土土
 17層 1979V21 灰土土
 18層 1979V21 灰土土
 19層 1979V21 灰土土
 20層 1979V21 灰土土
 21層 1979V21 灰土土
 22層 1979V21 灰土土
 23層 1979V21 灰土土
 24層 1979V21 灰土土
 25層 1979V21 灰土土
 26層 1979V21 灰土土
 27層 1979V21 灰土土

図50 第20号竪穴住居跡

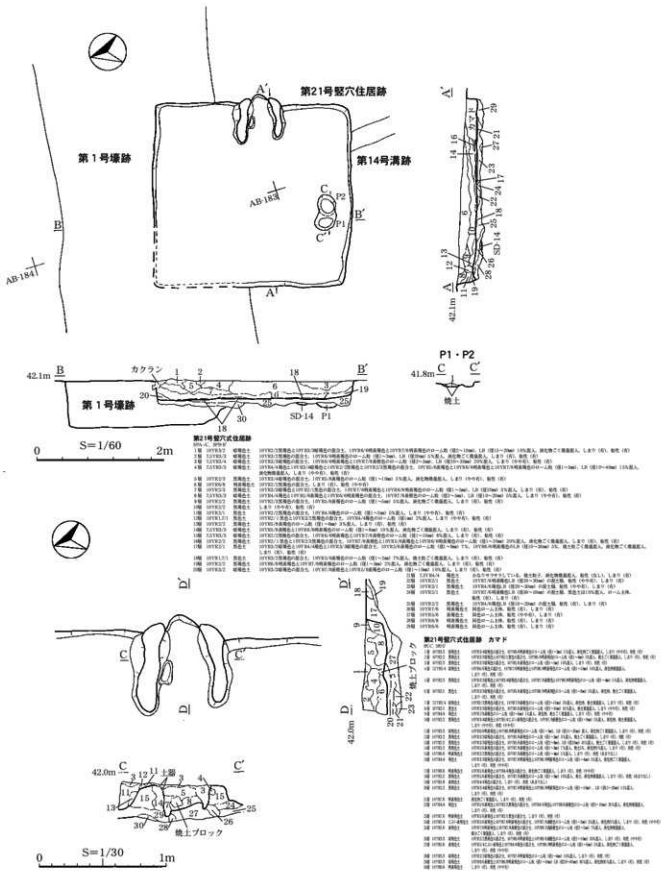


図51 第21号竪穴住居跡

第20号竪穴住居跡

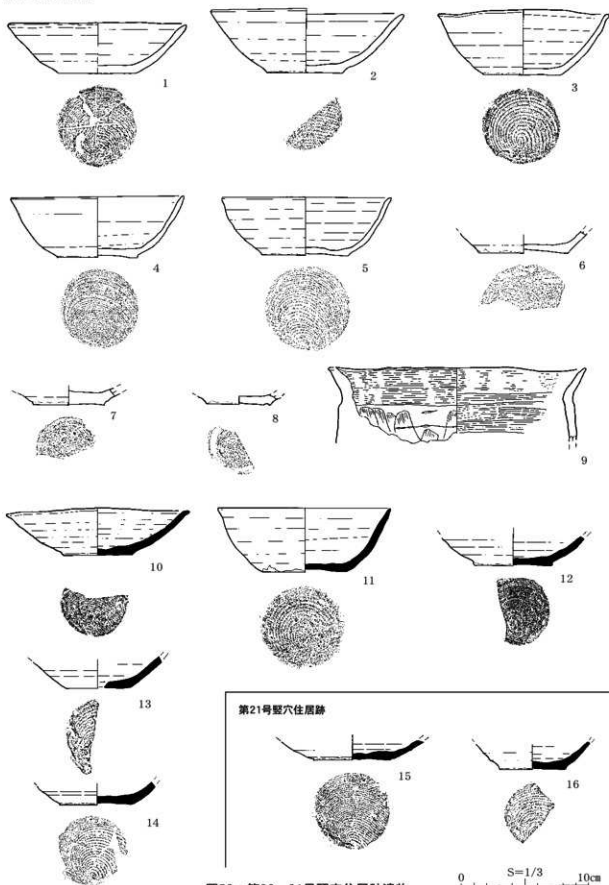
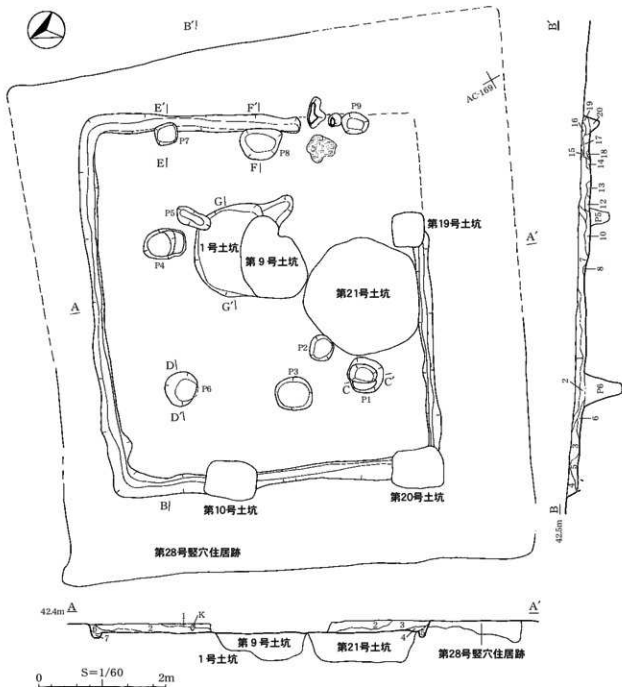


図52 第20・21号竪穴住居跡遺物



第22号竪穴住居跡

- 1層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 2層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 3層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 4層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 5層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 6層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 7層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 8層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 9層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 10層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 11層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 12層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 13層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 14層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 15層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 16層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 17層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 18層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 19層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層
- 20層 10YR5/2 赤褐色土 砂→土層、砂→土層、砂→土層

図53 第22号竪穴住居跡(1)

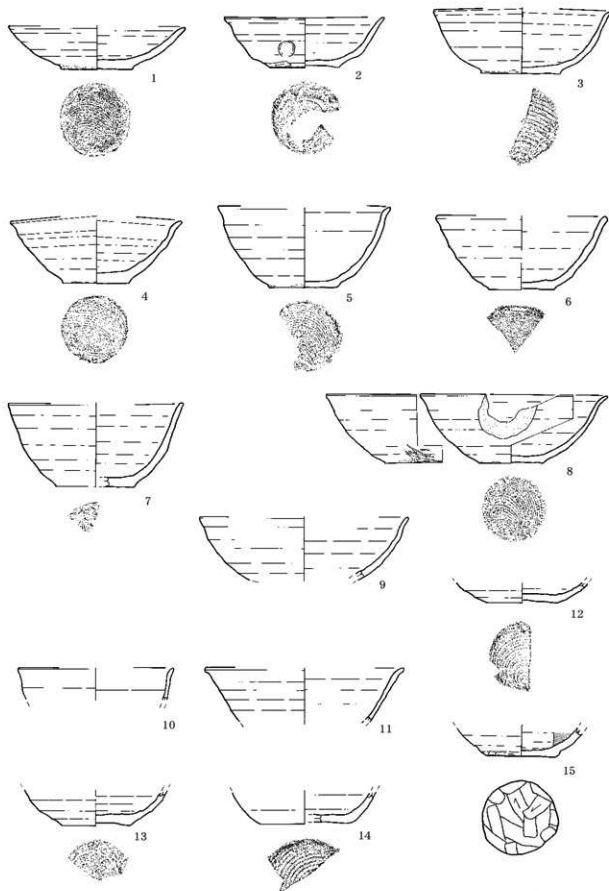


図55 第22号竪穴住居跡遺物(1)

0 S=1/3 10cm

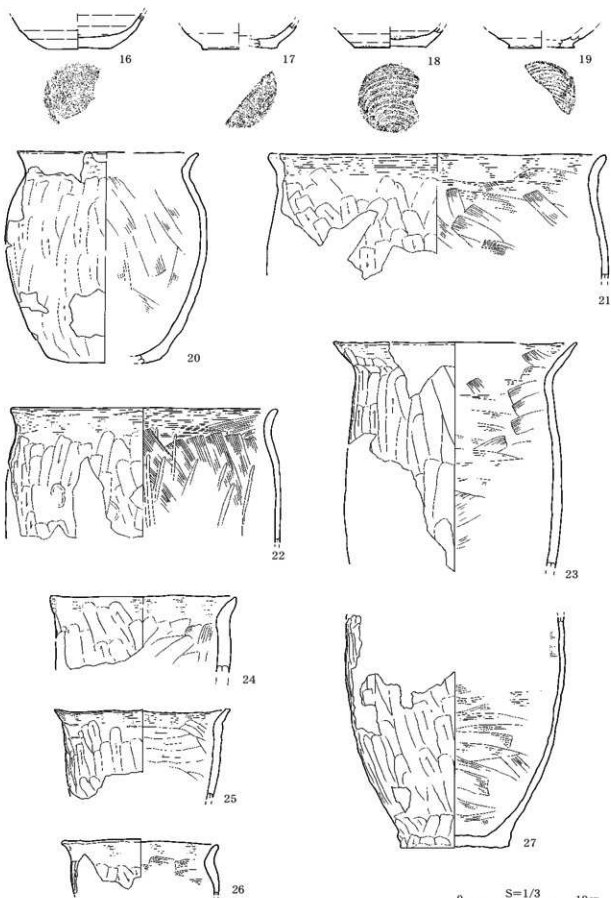


図56 第22号竪穴住居跡遺物(2)

0 S=1/3 10cm

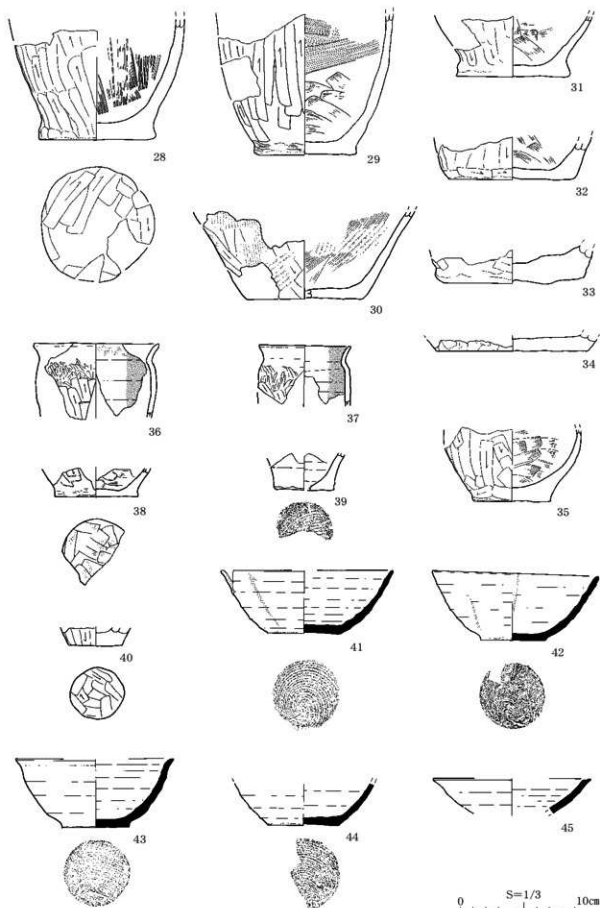


図57 第22号竪穴住居跡遺物(3)

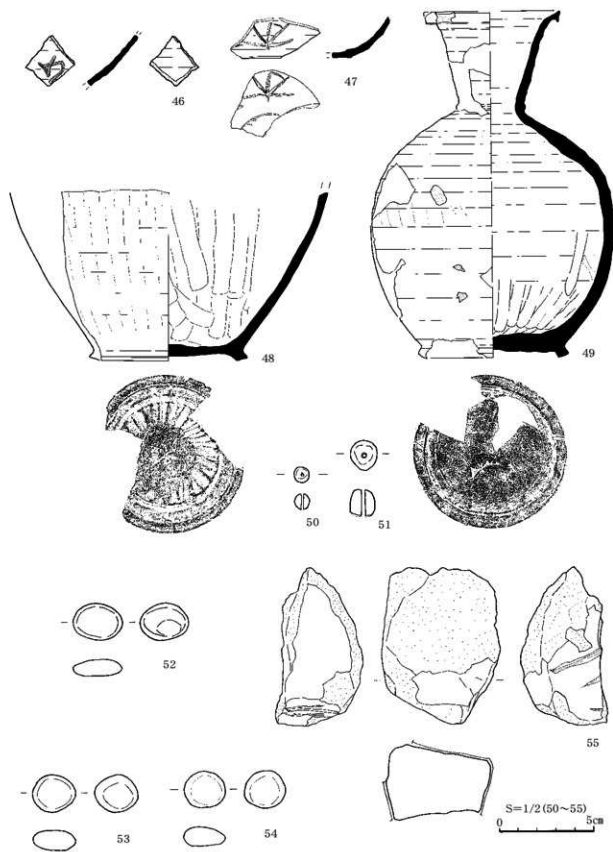


図58 第22号竪穴住居跡遺物(4)

0 S=1/3 10cm

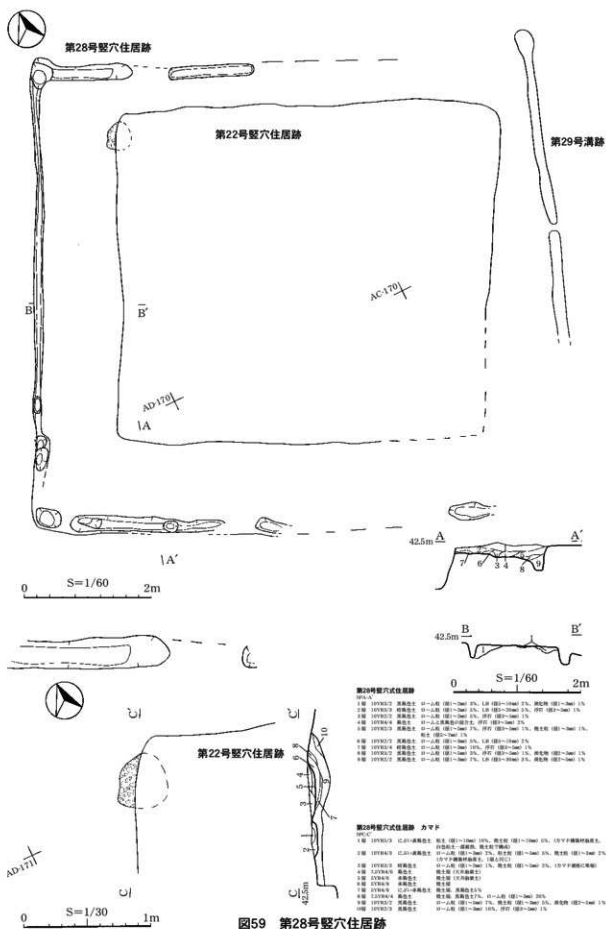
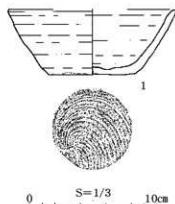
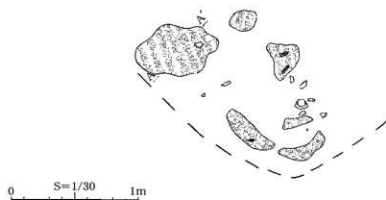


図59 第28号竪穴住居跡



第23号竪穴式住居跡

SPA A'

- 1層 10YR4/6 褐色土 10YR7/4にぶい黄褐色の粘土(10mm)少量混入、しまり(有)、粘性(なし)
 2層 10YR2/3 黒褐色土 10YR3/4暗褐色の混合土、しまり(やや有)、粘性(あまりなし)
 3層 10YR5/6 黄褐色土 10YR4/4褐色の混合土、しまり(有)、粘性(なし)
 4層 10YR3/4 暗褐色土 しまり(有)、粘性(あまりなし)
 5層 10YR3/4 暗褐色土 10YR4/4褐色の混合土、2.5YR/3黄褐色の粘土(径10~20mm)30%混入、しまり(有)、粘性(あまりなし)

図60 第23号竪穴式住居跡

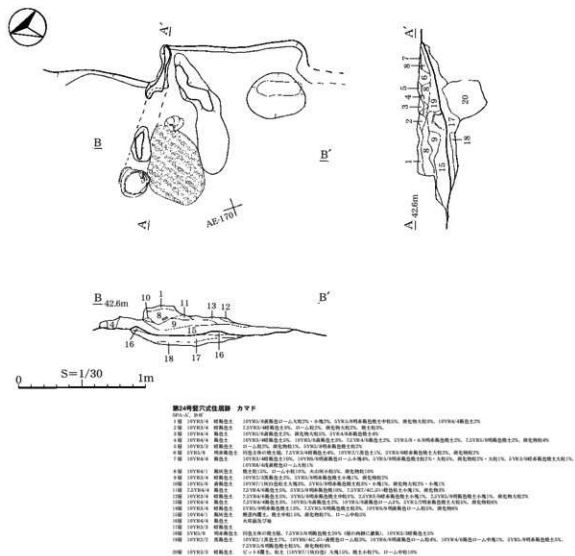


図62 第24号竪穴住居跡(2)

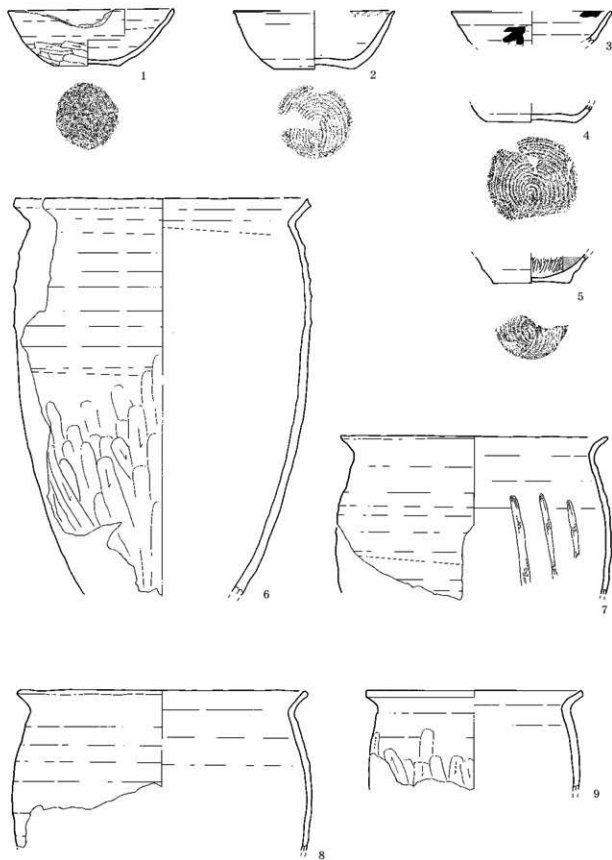


図63 第24号竪穴住居跡遺物(1)

0 S=1/3 10cm

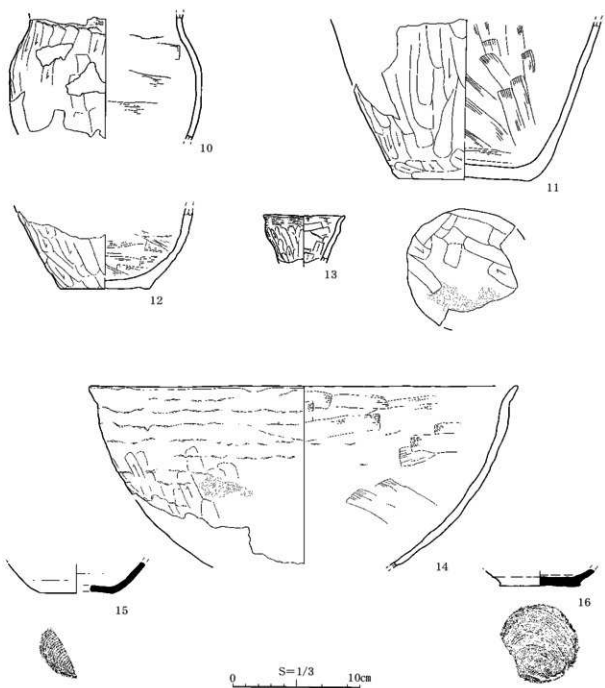


図64 第24号竪穴住居跡遺物(2)

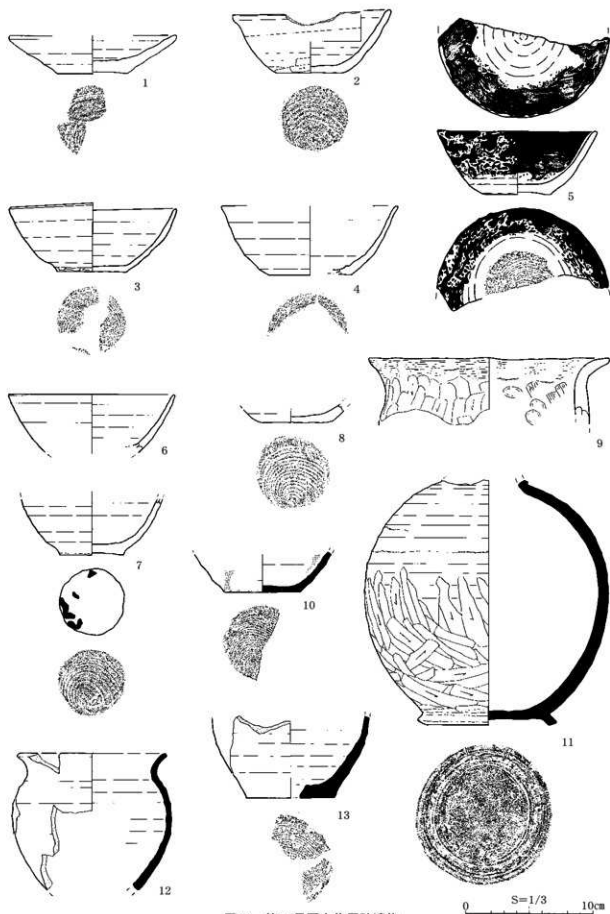


図66 第25号竪穴住居跡遺物

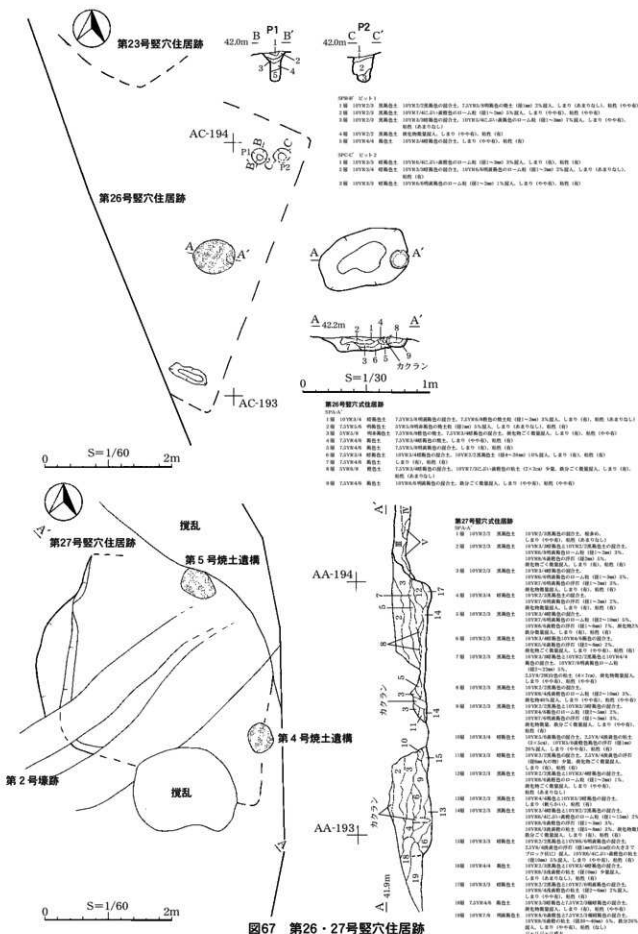
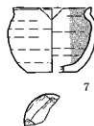
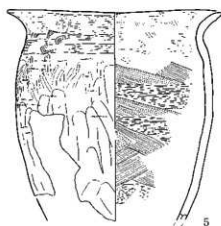
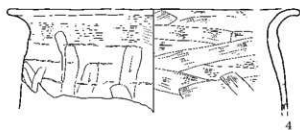
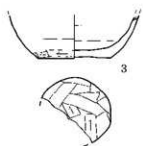
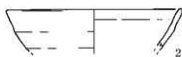


図67 第26・27号竪穴住居跡

第26号竪穴住居跡



第27号竪穴住居跡



0 S=1/3 10cm

図68 第26・27号竪穴住居跡遺物

3 円形周溝（E N）

今回の調査で検出された円形周溝は11基である。その内、平成6年度に検出されたものが4基、新たに検出されたものは7基である。以下遺構番号順に概要を述べる。前述しているように、今回の調査での遺構番号は検出順に付しているので、平成6年度調査時と同じ遺構については概要の中でその都度記述することとする。

第1号円形周溝（E N-01）（図69・79）

【位置】AA-179グリッド他に位置している。

【重複】第10号竪穴住居跡及び第24号溝跡と重複している。新旧関係はいずれの遺構よりも古いことが確認できる。

【平面形・規模】平面形は円形を呈するが全周はしない。外径8m00cm、内径6m30cm、南東部に開口部を持ち、幅2m50cmのブリッジを形成している。開口部の軸はN-115°-Eである。溝の上面幅70~1m20cm、底面幅30~74cm、深さは54~83cmを測る。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。断面形状は逆台形状を呈している。

【施設】溝底面及び周溝内側・外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】4~8層に分層できた。堆積土中へ上層に白頭山火山灰をレンズ状に堆積している箇所も認められる。

【出土遺物】図示できた遺物は3点。土師器杯2点、土師器甕1点である。全て周溝堆積土中から出土している。

【小結】堆積土の状況から、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。

第2号円形周溝（E N-02）（図70・79）

【位置】AB-172グリッド他に位置している。

【重複】第2号溝跡、第6号円形周溝と重複している。新旧関係は第6号円形周溝より新しく、第2号溝跡より古いことが堆積土の状況から確認できる。

【平面形・規模】平面形は円形を呈する。外径7m40cm、内径5m50cm、南東部に開口部を持ち、幅2m00cmのブリッジを形成している。開口部の軸はN-130°-Eである。周溝の上面幅1m18cm~1m32cm、底面幅38~74cm、深さは38~58cmを測る。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で凹凸が見られるがほぼ平坦である。断面形状は逆台形状を呈している。

【施設】溝底面及び周溝内側・外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】10~16層に分層された。底面付近では人為堆積、それより上位では自然堆積の様相を呈し、堆積土中へ上位に白頭山火山灰をレンズ状に堆積している。

【出土遺物】図示できた遺物は9点。土師器杯4点、須恵器杯2点、土師器甕3点である。全て周溝堆積土中からの出土である。

【小結】堆積土中の火山灰より、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。

第3号円形周溝 (E N-03) (図71・72・79・80)

【位置】 Y-175グリッド他に位置している。

【重複】 第20号竪穴住居跡、第16・25号土坑と重複している。第20号竪穴住居跡より新しく、他の遺構より古いことが堆積土の観察から確認できた。

【平面形・規模】 平面形は円形を呈し、外径13m8cm、内径10m36cm、南東部に開口部を持ち、幅2m30cmのブリッジを形成している。開口部の軸はN-150°-Eである。溝の上面幅は70cm~1m25cm、底面幅38~96cm、深さは40~66cmを測る。

【壁・底面】 壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で凹凸が見られるが、ほぼ平坦である。断面形状は逆台形状を呈している。

【施設】 溝底面及び周溝内側・外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】 5~9層に分層された。最下層は人為堆積、その他は自然堆積の様相を呈している。白頭山火山灰がレンズ状に堆積している部分も確認できた。

【出土遺物】 図示できた遺物は6点。土師器皿1点、須恵器坏1点、土師器甕3点、金属製品1点である。金属製品は刀装具の柄頭で、周溝確認面から出土している。

【小結】 堆積土中の火山灰より、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。墨書が施された土師器皿が出土した地点は、外側から周溝開口部に向かって左側の周溝である。野尻(2)遺跡の第101号円形周溝でも、同じく開口部に向かって左側の周溝部分から墨書土器が出土している。場を意識した祭祀行為が行われていた可能性も考えられる。また、刀装具の成分分析の結果は第4章第4節に掲載している。

第4号円形周溝 (E N-04) (図73)

【位置】 X-183グリッド他に位置している。平成6年度調査時の第5号円形周溝と同じ遺構である。

【重複】 第1号壕跡、第15号溝跡、第1号柵列、第1号井戸跡と重複している。第1号壕跡・第15号溝跡より古いことが堆積土の状況から確認できる。第1号柵列・第1号井戸跡との関係は不明であるが、本遺構が古い可能性が極めて高い。

【平面形・規模】 平面形は円形を呈している。前回の調査では南東部に開口部を持ち、幅2m18cmのブリッジを形成していた。開口部の軸はN-140°-Eである。外径は12m80cm、内径は10m50cmを測る。溝の上面幅は90cm~1m50cm、底面幅38~60cm、深さは66~72cmを測る。

【壁・底面】 壁は底面からやや急に立ち上がる。底面は一部で起伏が見られ、平坦な部分と緩やかな傾斜を持つ部分が確認できる。断面形状は逆台形状を呈している。

【施設】 溝底面及び周溝内側・外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】 8層に分層された。最下層は人為、それ以外は自然堆積の様相を呈している。ほぼ全域で白頭山火山灰が中~上位層にレンズ状に堆積している。

【出土遺物】 図示できた遺物は2点。須恵器坏1点、鉄製品1点を図示した。鉄製品は紡錘車で、白頭山火山灰層の直下から出土している。

【小結】 堆積土中の火山灰より、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。第1号壕跡の堆積土中や底面(X-184グリッド)から出土している骨片は、本遺構に由来する可能性が高い。

第5号円形周溝（E N-05）（図74）

【位置】AA-184グリッド他に位置している。

【重複】第1号壕跡、第1号掘立柱建物跡第9・11・14ピット、及び第3号土坑と重複している。重複する全ての遺構より本遺構が古いことが堆積土の観察から確認できた。

【平面形・規模】約半分を第1号壕跡との重複により欠失しているため明確には分からないが、平面形は円形を呈するものと思われる。現存部分から推定すると外径6m20cm、内径4m60cmを測るものと思われる。溝の上面幅は66～80cm、底面幅24～52cm、深さは26～30cmを測る。第1号壕跡と重複している南東方向に開口部を持ち、ブリッジを形成していたものと思われる。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で起伏が見られるがほぼ平坦である。断面形状は逆台形状を呈している。

【施設】現存する溝底面及び周溝内側・外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】10層に分層された。自然堆積の様相を呈している。上層で白頭山火山灰がレンズ状に堆積している部分も確認できた。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】堆積土中の火山灰より、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。

第6号円形周溝（E N-06）（図70）

【位置】Y-171グリッド他に位置している。

【重複】第2号円形周溝及び第2号溝跡と重複している。どの遺構よりも古いことが堆積土の状況から確認できる。

【平面形・規模】開口部を持ちながら円形に巡る形態は取らない。溝が一部弧状に巡るものである。上面幅1m30cm、底面幅80cm、深さは40～54cmを測る。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で凹凸が見られるがほぼ平坦である。断面形状は逆台形状を呈している。

【施設】溝底面及び周溝内・外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】5～8層に分層された。自然堆積の様相を呈している。白頭山火山灰がレンズ状に堆積している部分も確認できた。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】堆積土中の火山灰より、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。

第7号円形周溝（E N-07）（図75・76・81）

【位置】AA-185グリッド他に位置している。平成6年度調査時の第7号円形周溝と同じ遺構である。

【重複】第16号・25号穴住居跡、第22・23号溝跡と重複している。重複する全ての遺構より本遺構が古いことが堆積土の観察から確認できた。直接重複はしていないが周溝内側から検出された第13号号穴住居跡よりは新しい遺構である可能性が高い。第9号号穴住居跡との新旧関係は不明であるが、同遺構の出土遺物から見れば、本遺構が新しい可能性が高い。

【平面形・規模】平面形は円形を呈する。本遺跡最大規模の円形周溝で、外径17m40cm～17m80cm、内径14m20cm～14m60cmを測る。溝の上面幅は80cm～1 m30cm、底面幅42～96cm、深さは40～62cmを測る。第22号溝跡と重複している部分があり明確には判断できないが、南東側に開口部を持ち、ブリッジを形成している。開口部の軸はN-123° - Eである。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で凹凸が見られるがほぼ平坦である。断面形状はやや幅の広い逆台形状を呈している。

【施設】今年度調査区の開口部の溝跡端部から直径50cm、深さ40cm程のピットが1基検出された。門の様な施設の存在を窺わせる。

【堆積土】15～16層に分層された。ほぼ自然堆積の様相を呈している。白頭山火山灰がレンズ状に堆積している部分も確認できた。

【出土遺物】図示できた遺物は14点。土師器坏4点、土師器甕1点、須恵器皿2点、須恵器坏1点、ミニチュア2点を図示した。火山灰層の上層からヘラ書きが施された須恵器坏が1点出土している。

【小結】堆積土中の火山灰より、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。第3号塚跡の堆積土中(AA-189・AB-188グリッド)から出土している骨片や被熱した礫は、本遺構に由来する可能性が高い。拡張されたものを除くと、野尻(2)遺跡で検出されたものを含めても最大級の円形周溝である。

第8号円形周溝(E N-08) (図75・76)

【位置】X-189グリッド他に位置している。平成6年度調査時の第8号円形周溝と同じ遺構である。

【重複】現道によりかなり削平を受けているため、全容を窺うことはできない。

【平面形・規模】平面形は円形を呈するものと思われる。前回調査時の平面図に合わせると、外径6m80cm、内径5m60cmを測るものと思われる。溝の上面幅は80cm～1 m30cm、底面幅42～96cm、深さは26～30cmを測る。南東側に開口部を持ち、ブリッジを形成していたものと思われる。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で凹凸が見られるがほぼ平坦である。断面形状は縦に長い逆台形状を呈している。

【施設】溝底面及び周溝内側・外側からは、付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】4層に分層された。一部自然堆積の様相を呈している。底面は埋め戻され比較的平坦に整えられている。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】平成6年度調査時の第8号円形周溝の延長部分である。形状より9世紀後半頃に構築されたものと思われる。

第9号円形周溝(E N-09) (図77・81)

【位置】W-179グリッド他に位置している。平成6年度調査時の第3号円形周溝と同じ遺構である。

【重複】第16号溝跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【平面形・規模】平面形は円形を呈する。前回調査時の平面図に合わせると、外径11.9m、内径9.3～10.4mを測る。溝の上面幅は80cm～1 m30cm、底面幅42～96cm、深さは26～30cmを測る。南東

側に開口部を持ち、ブリッジを形成している。開口部の軸はN-122° - Eである。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で凹凸が見られるがほぼ平坦である。断面形状は縦長の逆台形状を呈している。

【施設】溝底面及び周溝外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】10層に分層された。自然堆積の様相を呈している。白頭山火山灰がレンズ状に堆積している部分も確認できた。掘り方は人為的に埋め戻し、底面は平坦に整えている。

【出土遺物】図示できた遺物は5点。坏2点、ミニチュア3点を図示した。その他、図示はできなかったが比較的小型の土師器片が多量に出土している。人為的に底部や体部に大きめの穿孔を施す遺物が多いことも特徴的である。穿孔は焼成後に行われたものがほとんどである。

【小結】堆積土中の火山灰より、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。出土遺物から、周溝を使用した祭祀行為（廃棄行為）が行われていたものと思われる。

第10号円形周溝（E N-10）（図78）

【位置】AC-172グリッド他に位置している。

【重複】第2号溝跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【平面形・規模】西側が調査区域外に延びるため明確には分からないが平面形は円形を呈するものと思われる。現存部分での推定外径は5m00cm、内径は3m80cmを測るものと思われる。溝の上面幅は80cm～1m30cm、底面幅42～96cm、深さは26～30cmを測る。南東側に開口部を持ち、やや幅広いのブリッジを形成している。開口部の推定軸はN-120° - Eである。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で凹凸が見られるがほぼ平坦である。断面形状は細長い逆台形状を呈している。

【施設】溝底面及び周溝内側・外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】4層に分層された。自然堆積の様相を呈している。第1層下部に白頭山火山灰がレンズ状に堆積している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】堆積土中の火山灰より、9世紀後半頃に構築されたものと思われる。

第11号円形周溝（E N-11）（図78）

【位置】AC-171グリッド他に位置している。

【重複】なし。

【平面形・規模】断片的にしか溝跡を検出することができなかった。平面形は円形を呈していたものと思われる。現存部分で外径・内径を推測することはできない。溝の上面幅は30～36cm、底面幅16～24cm、深さは30cmを測る。

【壁・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は一部で起伏が見られるがほぼ平坦である。断面形状は逆台形状を呈している。

【施設】溝底面及び周溝内側・外側からは付随するような施設は検出されなかった。

【堆積土】4層に分層された。自然堆積の様相を呈している。確認できた層中に白頭山火山灰は見ら

れない。

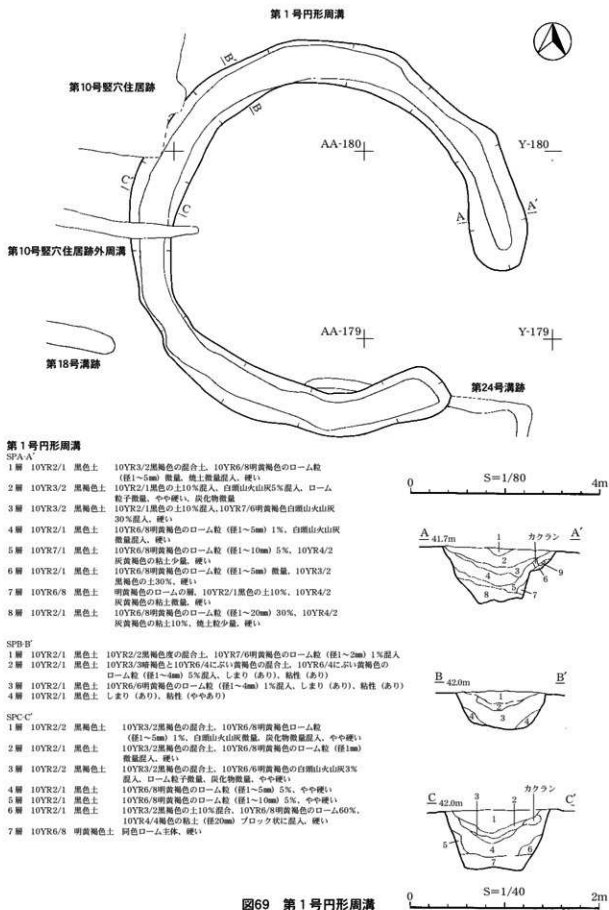
【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 全容をうかがい知ることはできなかったが、9世紀後半頃に構築された円形周溝と考えられる。

(笹森)

円形周溝一覧表

遺構番号	位置 (グリッド)	外径 (m)	内径 (m)	深さ (m)	開口部方位
EN-01	AA-179他	8.00	6.30	0.54~0.83	N-115° -E
EN-02	AB-172他	7.40	5.50	0.38~0.58	N-130° -E
EN-03	Y-175他	13.08	10.36	0.40~0.66	N-150° -E
EN-04	X-183他	12.80	10.50	0.66~0.72	N-140° -E
EN-05	AA-184他	6.20	4.60	0.26~0.30	-
EN-06	Y-175他	-	-	0.40~0.54	-
EN-07	AA-185他	17.40~17.70	14.20~14.60	0.40~0.62	N-123° -E
EN-08	X-189他	6.80	5.60	0.26~0.30	N-122° -E
EN-09	W-179他	11.90	9.30~10.40	0.85	-
EN-10	AC-172他	5.00	3.80	0.26~0.30	N-120° -E
EN-11	AC-171他	-	-	0.30	-



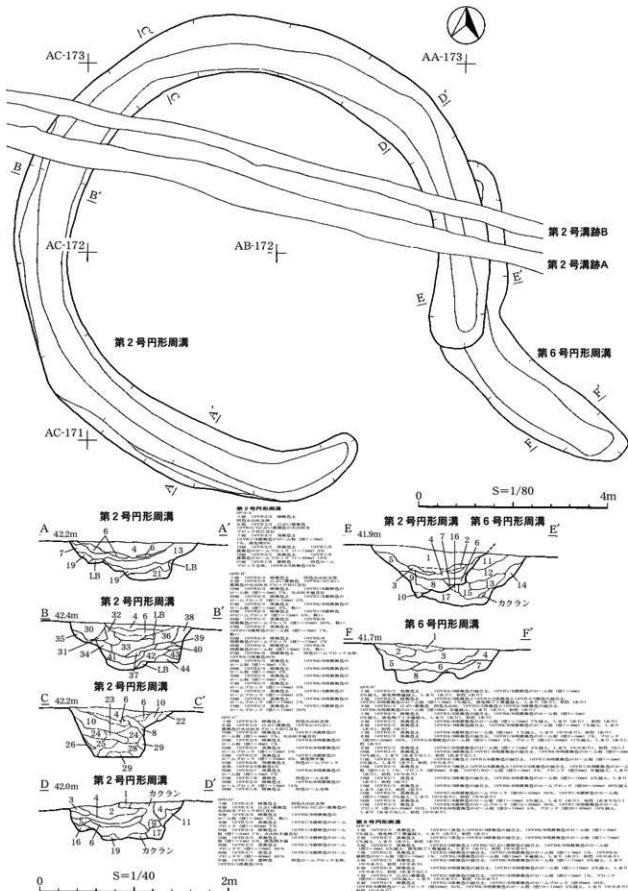


図70 第2・6号円形周溝

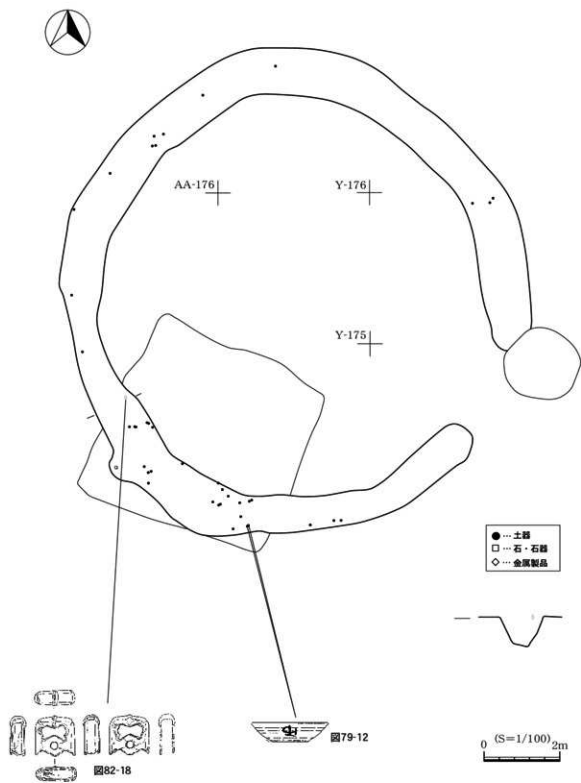
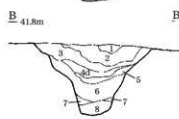
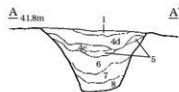
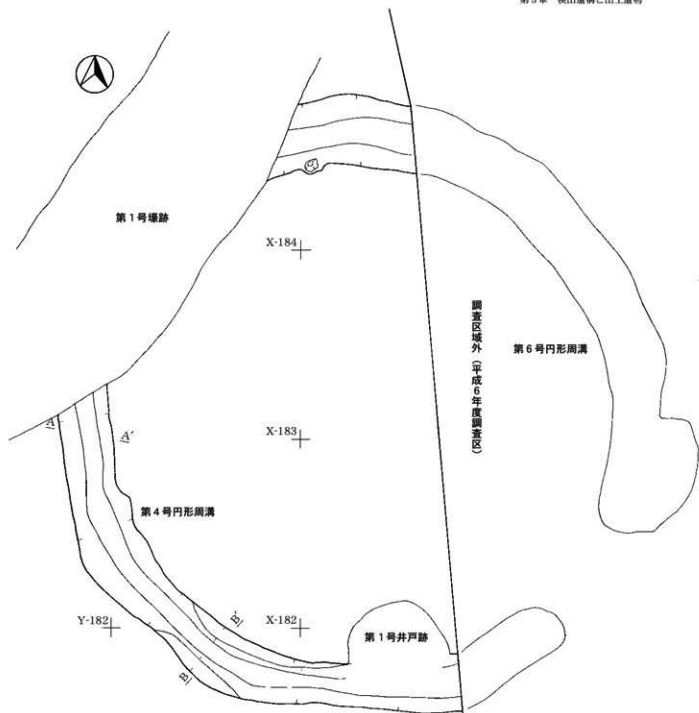


图72 第3号円形周溝(2)



第4号円形周溝

SPA-A'

- | | | | |
|------|-----------|------|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/2黒褐色の混合土、10YR7/8黄褐色のローム粒 (径1~7mm) 3%、硬い |
| 4-d層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 同色火山灰を含む、炭化物1%混入 |
| 4-b層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 同色火山灰を含む (少量) |
| 5層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR7/4に多い黄褐色の火山灰15% |
| 6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR6/6明黄褐色のロームブロック (径1~15mm) 1% |
| 7層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR7/6明黄褐色のロームブロック (径1~35mm) 5% |
| 8層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR7/6明黄褐色のロームブロック (径1~60mm) 50%、粘性あり |

SPB-B'

- | | | | |
|------|-----------|------|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/2黒褐色の混合土、10YR7/8黄褐色のローム粒 (径1~7mm) 3%、硬い |
| 2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR7/6明黄褐色のロームブロック (径1~40mm) 10%、しまりあり |
| 3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR7/6明黄褐色のローム粒 (径1~3mm) 1%、炭化物少量 |
| 4-d層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 同色火山灰を含む、炭化物1%混入 |
| 5層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR7/4に多い黄褐色の火山灰15% |
| 6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR6/6明黄褐色のロームブロック (径1~15mm) 1% |
| 7層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR7/6明黄褐色のロームブロック (径1~35mm) 5% |
| 8層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR7/6明黄褐色のロームブロック (径1~60mm) 50%、粘性あり |

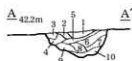
図73 第4号円形周溝



第5号円形周溝

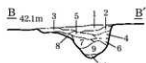
SPA A'

1層	10YR3/3	暗褐色土	10YR6/8明黄褐色のローム粒 (径1~7mm) 2%
2層	10YR3/3	暗褐色土	10YR7/8黄褐色のローム粒 (径1~7mm) 2%
3層	10YR4/3	にぶい黄褐色	10YR7/8黄褐色のロームブロック (径1~12mm) 5%
4層	10YR4/4	褐色土	10YR3/4暗褐色の混合土, 10YR7/8黄褐色のローム粒 (径1~8mm) 2%
5層	10YR3/3	暗褐色土	10YR5/8黄褐色のローム粒 (径1~9mm) 2%
6層	10YR3/3	暗褐色土	10YR6/8明黄褐色のローム粒 (径1~8mm) 1%
7層	10YR2/3	黒褐色土	10YR6/8明黄褐色のローム粒 (径1~3mm) 少量
8層	10YR3/3	暗褐色土	10YR7/8黄褐色のローム粒 (径1~9mm) 2%
9層	10YR2/3	黒褐色土	10YR6/8明黄褐色のロームブロック (径1~25mm) 30%
10層	10YR2/3	黒褐色土	10YR6/8明黄褐色のロームブロック (径1~35mm) 20%



SPD B'

1層	10YR4/4	褐色土	10YR7/8黄褐色のローム粒 (径1mm) 微量, 10YR6/4にぶい黄褐色の火山灰7%
2層	10YR3/3	暗褐色土	10YR7/8黄褐色のローム粒 (径1~2mm) 10%, やわらかい
3層	10YR3/3	暗褐色土	10YR6/8明黄褐色のローム粒 (径1~8mm) 1%, 炭化物少量
4層	10YR3/3	暗褐色土	10YR6/8明黄褐色のローム粒 (径1~6mm) 1%, 炭化物少量
5層	10YR3/3	暗褐色土	10YR5/8黄褐色のローム粒 (径1~5mm) 少量, 炭化粒微量
6層	10YR3/3	暗褐色土	10YR7/8黄褐色のローム粒 (径1~5mm) 1%
7層	10YR3/3	暗褐色土	10YR6/8明黄褐色のロームブロック (径1~30mm) 3%, 炭化粒微量
8層	10YR4/4	褐色土	10YR6/8明黄褐色のロームブロック (径1~20mm) 6%
9層	10YR3/4	暗褐色土	10YR6/8明黄褐色のローム粒 (径1~7mm) 2%
10層	10YR2/3	黒褐色土	10YR5/8黄褐色のローム粒 (径1~4mm) 3%



S=1/40 2m

図74 第5号円形周溝

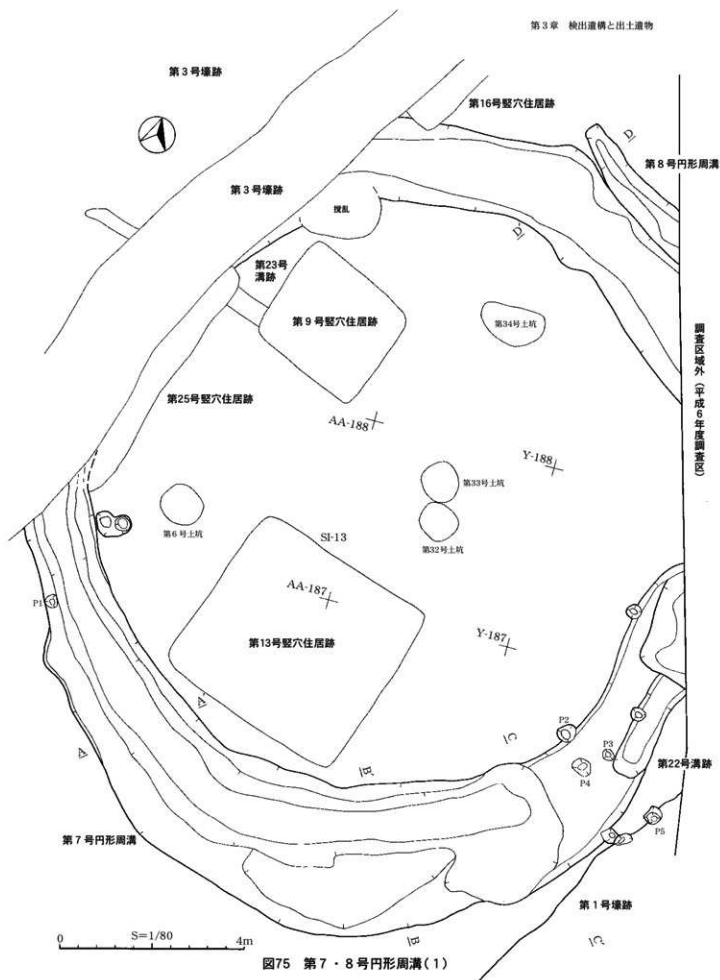


図75 第7・8号円形周溝(1)

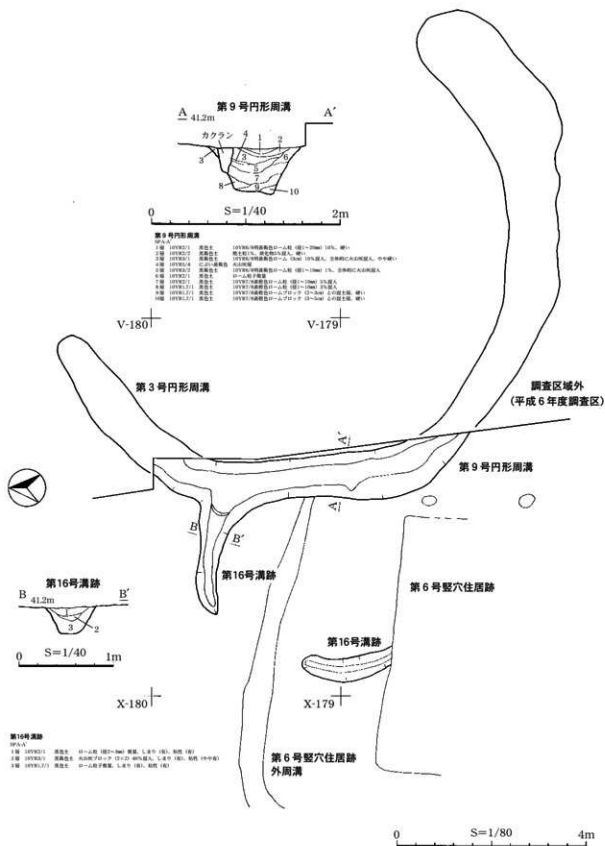


図77 第9号円形周溝・第16号溝跡

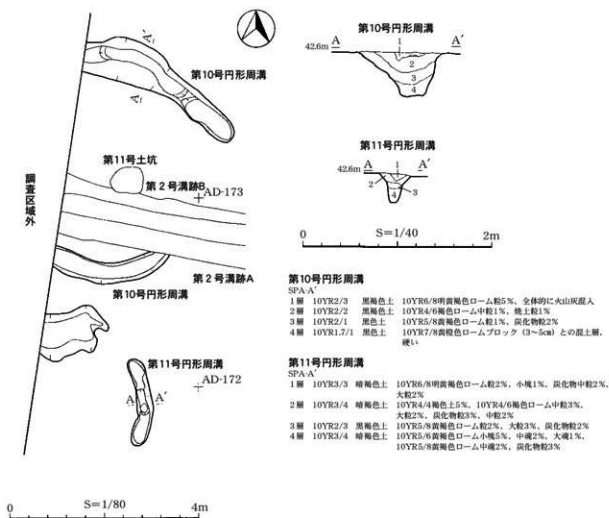
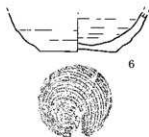
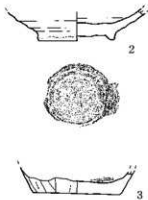
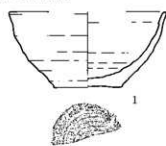
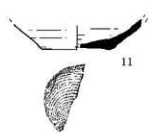
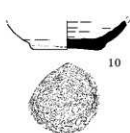
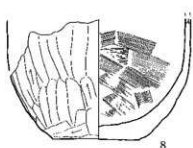
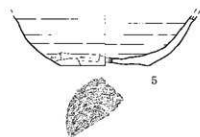
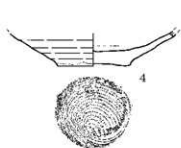


図78 第10・11号円形周溝

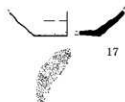
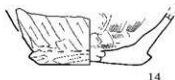
第1号円形周溝



第2号円形周溝



第3号円形周溝(1)



0 S=1/3 10cm

図79 円形周溝出土遺物(1)

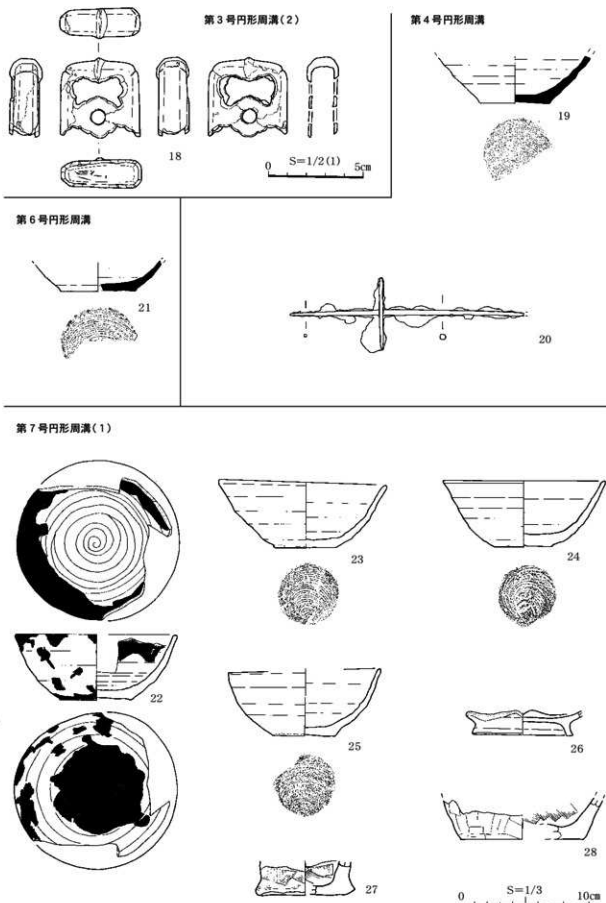
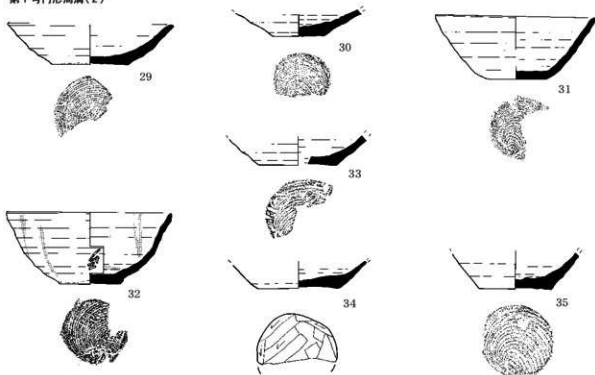
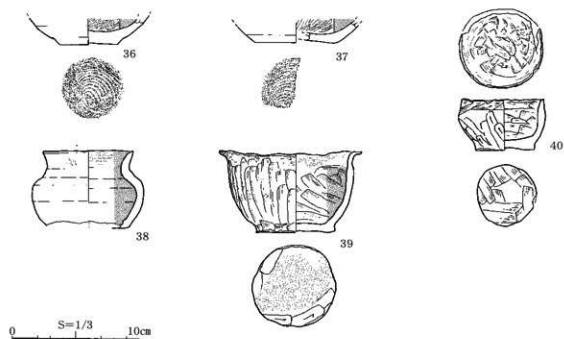


図80 円形周溝出土遺物(2)

第7号円形周溝(2)



第9号円形周溝



0 S=1/3 10cm

図81 円形周溝出土遺物(3)

4 壕跡(HR)

第1号壕跡(HR-01) (図82・85)

【位置】調査区北側のX～AC-183～186グリッドに位置する。平成6年度調査時に第6号円形周溝と呼称した遺構と同一の遺構である。

【重複】第21号竪穴住居跡、第4・5号円形周溝、第20号溝跡と重複している。第21号竪穴住居跡より古く、その他の遺構よりは新しいことが、堆積土の状況により確認できた。西側はAC-183・184グリッドで調査区域外に、東側はW-185・186グリッドで平成6年度調査区に続いている。

【形態・規模】Y-182グリッド付近でやや鈍角に曲がり、北東及び西方向に延びている。幅の広い溝状を呈し、確認面での幅は2m60cm～3m52cm、底面での幅は1m80cm～2m60cm、確認面からの深さは90cm～1m20cmを測る。

【壁・底面】壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。断面形状は箱、或いは、逆台形状を呈している。底面は全体的にほぼ平坦に造られている。

【堆積土】27～30層に分層された。暗褐色・黒褐色土を主体に自然堆積層と人為堆積層が混在する。最下層では砂等の自然堆積が、下～上部層では人為堆積が主体をなす。

【出土遺物】堆積土中及び底面から出土している。図示した遺物は6点。土師器坏3点、ミニチュア土器3点である。

Y-184グリッドの底面及び堆積土中からは骨片が出土している。骨片の鑑定結果は第4章第3節に掲載している。骨片は出土状況から壕構築時に一度壊された第4号円形周溝(平成6年度調査時の第5号円形周溝)に由来する可能性が高く、周辺の堆積土の状況から、埋め戻しの際に埋納(埋置)されていたと思われる部分の土と共に投げ込まれたものと考えられる。また、骨片は熱を受け白色化していることから、もし人骨だと仮定するならば、この地で行われていたであろう火葬儀礼を考えると重要な資料となるものと考えられる。平成6年度調査時の第6号円形周溝(本遺構と同一の遺構)堆積土中からも骨片が出土しているが、それらは平成6年度調査時に同遺構の南東方向で重複関係にあった第2号円形周溝に由来する可能性が極めて高く、前回の分析結果からは人骨の可能性が指摘され、約800℃の温度で焼かれた可能性があるとの結果も得られている。

【小結】遺構の重複関係や出土遺物、及び堆積土の状況から、10世紀後半に構築された後、人為的に埋め戻された壕跡と考えられる。平成6年度調査区O-79グリッド付近(現調査区V-189グリッド付近)で開口部を有しているものと思われるが、対をなしていると考えられるもう一方の端部は検出されていない。本遺跡の北側に隣接する野尻(2)遺跡とは沢を挟んでいるが、そちらにも対応するような遺構は見あたらない。平面図から推察すると、平成6年度調査区の北側調査区域外に存在していた可能性も考えられる。未検出の端部と対をなして土橋を形成していたか、自然地形の沢を利用した入り口を形成していた可能性も考えられる。今回の調査区から平成6年度に調査した遺構の延長部が検出されたことにより、青森県埋文報第186集p. 237で神康夫氏が報告しているが、本遺構は区画する壕跡の性格がより強くなった。

第3号壕跡 (HR-03) (図82・83・85・86)

【位置】調査区北側のX～AC-183～186グリッドに位置する。

【重複】第15・16・25号竪穴住居跡、第7号円形周溝(平成6年度調査時の第7号円形周溝)、第23号溝跡と重複している。第16号竪穴住居跡より古く、その他の遺構より新しいことが堆積土の状況より確認できた。

【形態・規模】確認面での幅は1m70cm～2m10cm、底面での幅は1m30cm～1m64cm、確認面からの深さは82～94cmを測る。南西地区方向から北東方向へはほぼ直線的に検出されているが、AB-187・188グリッドで蛇行していることが平面図から観察できる。同グリッドより北側では第7号円形周溝の溝をトレースしてわずかながら弧を描くように壕が掘られている様子が確認できることから、壕構築時には、周溝が埋まりきっていなかったか、周溝内側と外側とではある程度の比高差があった可能性が考えられる。

【壁・底面】壁は底面から、ほぼ垂直に立ち上がっている。断面形状は箱、或いは、逆台形状を呈している。底面は第1号壕跡同様ほぼ平坦である。

【堆積土】17～19層に分層された。暗褐色・黒褐色土を主体に自然堆積層と人為堆積層が混在する。下部層では砂の自然堆積が、中～上部層では第1号壕跡同様人為堆積が主体をなす。

【出土遺物】堆積土中から出土している。図示した遺物は8点。土師器杯、須恵器杯、須恵器長頸壺が出土している。須恵器長頸壺は肩部に「大」の文字・記号が施されており、胎土分析の結果からは、秋田城周辺の窯跡産を示唆する値が出ている。この遺物は第3号壕跡ではなく、第7号円形周溝に由来する遺物の可能性が高い。AA・AB-188グリッドの堆積土中から人骨と考えられる骨片が出土している。骨片の鑑定結果は第4章第3節に掲載している。この骨片は出土状況から第7号円形周溝に由来する可能性が高く、堆積土の状況から、壕を埋め戻す際に埋納されていた部分の土と共に投げ込まれたものと考えられる。図示することはできなかったが、骨片が出土した周辺から被熱した大きな礫が多量に出土していることから、これらの骨片を人骨と仮定するなら、円形周溝内で火葬行為が行われていた可能性も否定できない。

【小結】遺構の重複関係や出土遺物から、10世紀後半に構築され、人為的に埋め戻された壕跡と考えられる。確認面での幅は第1号壕跡に比べ若干狭いことが確認できる。第1号壕跡も調査区西側のAC-183・184グリッド付近では上面幅が若干狭くなる傾向が見られる。西側調査区域外で第1号壕跡と結合し狭小な空間を形成していたか、結合することなく2重の壕を形成していたかについては明確には判断できない。また、壕に付随するように土壘が構築されていた様子も確認できなかった。堆積土中から出土した炭化材は放射性炭素年代測定を行っており、BP1,100±30の年代が得られている。詳細な分析結果は第4章第5節に掲載している。

第2号壕跡 (HR-02) (図84・85)

【位置】調査区北側のAA～AC-193グリッドにかけて位置する。第3号壕跡の北西方向にやや軸を異にして検出された。

【重複】第27号竪穴住居跡と重複している。堆積土の状況から本遺構が新しいことが確認できる。また、完掘状況からは分離帯を有し、規模の異なる大小2条の溝から構成される遺構であることが判

明している。便宜上規模の大きい方をA、小さい方をBと呼称している。

【形態・規模】確認面での幅は1 m50cm～1 m60cm、底面での幅はAが20～30cm、Bが14～18cm、確認面からの深さはAが60～88cm、Bが46～56cmを測る。南西方向から北東方向へはほぼ直線的に検出されているが、現道により削平を受けているため、また、AA-193グリッドより北東方向では沢跡に同化するように消滅しており、全容を窺うことはできない。

【壁・底面】壁はA・B共に底面からやや急に立ち上がっている。断面形状は箱葉研、或いは縦長の逆台形状を呈している。底面はかなり起伏を持っている。

【堆積土】5～6層に分層された。暗褐色・黒褐色土を主体にほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】堆積土中から出土している。図示した遺物は2点。土師器坏である。

【小結】第2号壕跡と呼称したが、遺構の重複関係や出土遺物から10世紀後半以降に構築された溝跡と考えられる。第1・3号壕跡に比べ規模・形態・堆積状況が異なることから、同時期、或いは同様の区画を形成していた遺構である可能性は低い。

(笹森)

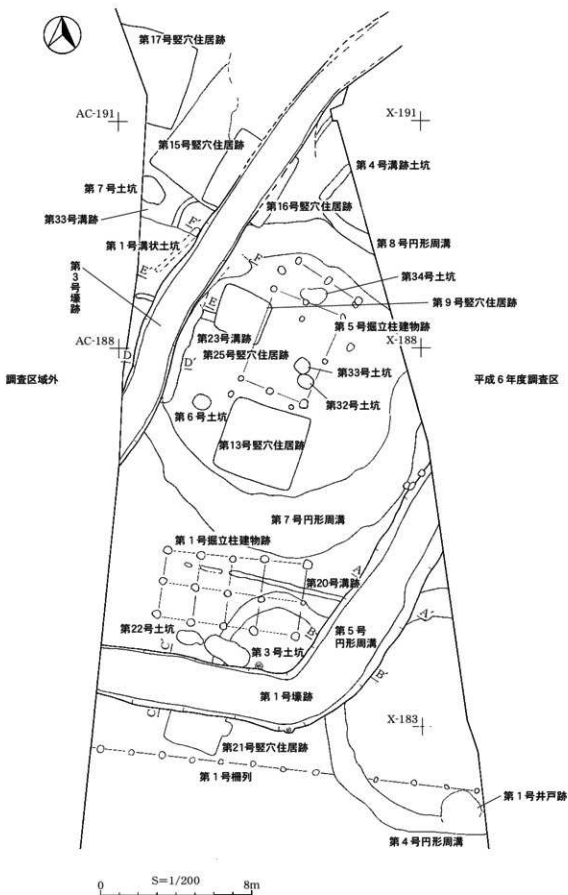


図82 第1・3号塚跡(1)

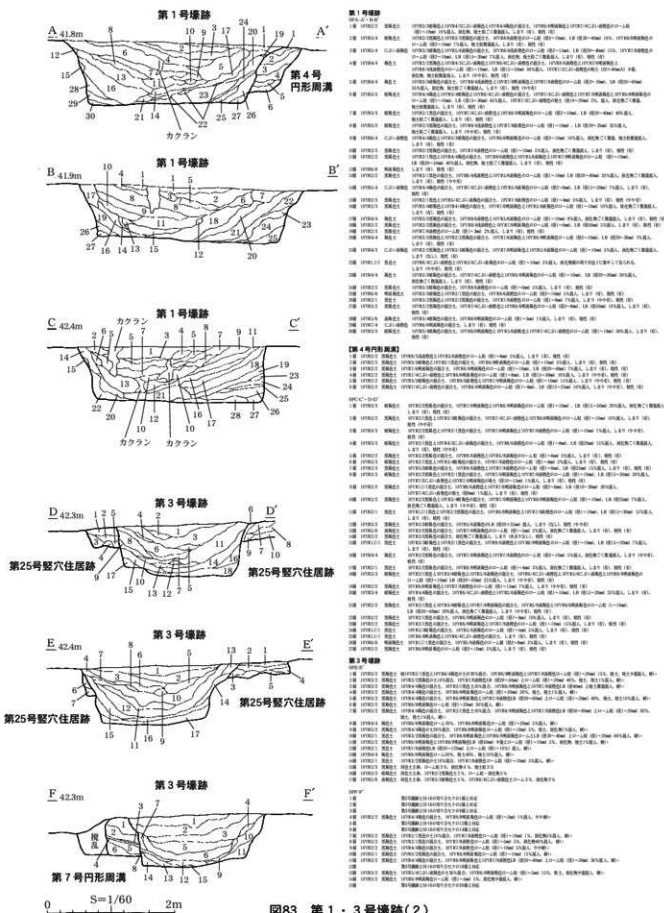
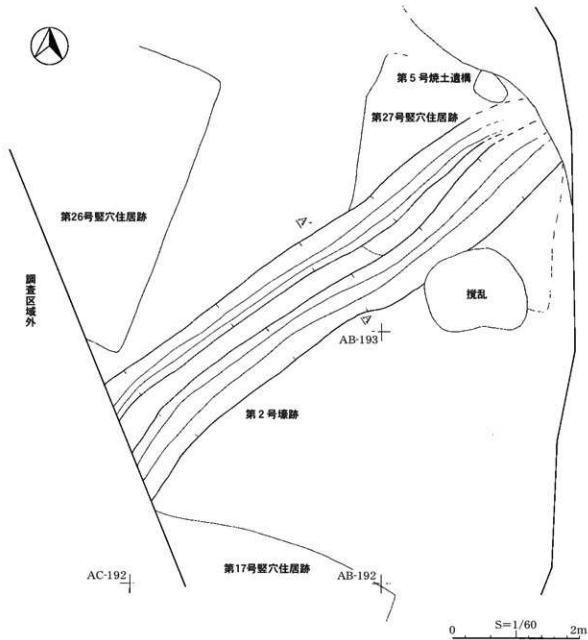


図83 第1・3号壕跡(2)



第2号壕跡

SFA-A'

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 硬い
- 2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒子数量混入。硬い
- 3層 10YR2/1 黒色土 10YR3/2黒褐色の土10%混入、10YR6/8明黄褐色ローム粒 (径1~3mm) 5%混入。やや硬い
- 4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒 (径1~20mm) 30%混入。硬い
- 5層 10YR2/2 黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒 (径1mm) 少量混入。硬い
- 6層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/4褐色の混合土、10YR6/8明黄褐色のローム粒 (径1~15mm) 20%混入。硬い
- 3'層 10YR2/2 黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒 (径1~5mm) 1%混入。硬い
- 4'層 10YR2/2 黒褐色土 10YR3/2黒褐色の混合土、10YR6/8明黄褐色ローム粒 (径1~5mm) 5%混入。硬い
- 5'層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/4褐色の混合土、10YR6/8明黄褐色のローム粒 (径1~10mm) 10%混入。硬い

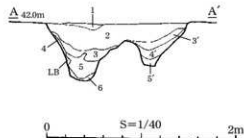
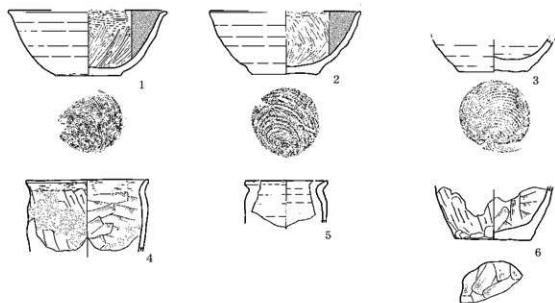
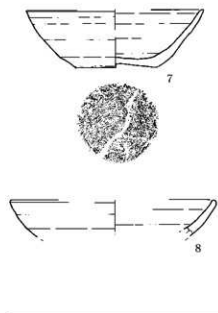


図84 第2号壕跡

第1号掘跡



第2号掘跡



第3号掘跡(3)

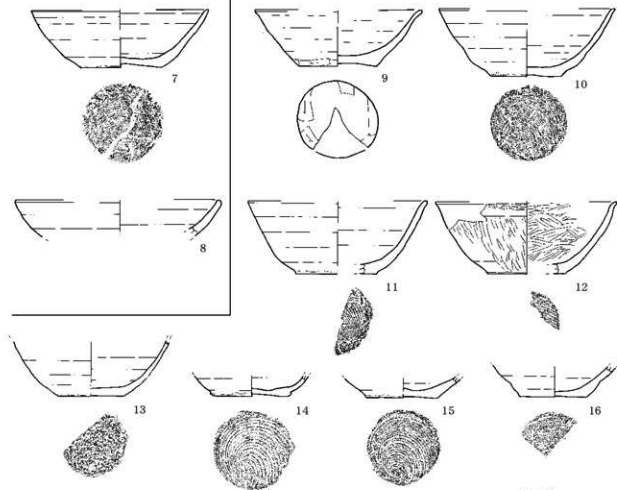


図85 壕跡出土遺物(1)

0 S=1/3 10cm

第3号塚跡(2)

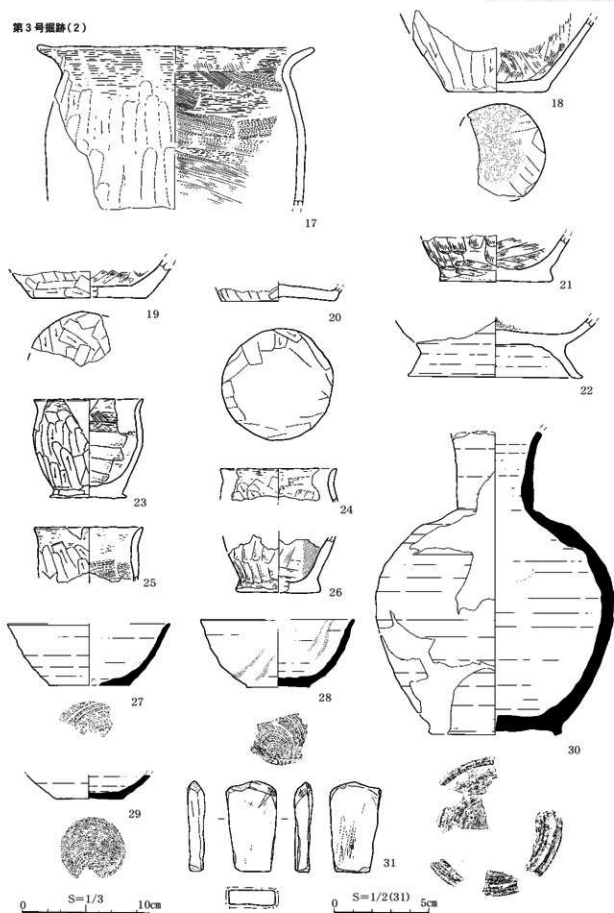


図86 塚跡出土遺物(2)

5 掘立柱建物跡 (SB)

第1号掘立柱建物跡 (SB-01) (図87)

【位置】 Y～AB-183～185グリッドにかけて位置している。第1号壕跡及び第3号壕跡に挟まれた空間に位置している。

【重複】 第5号円形周溝と一部重複している。新旧関係は堆積土の観察から、本遺構が新しいことが確認できる。

【構造・規模】 構造は南北に2間、東西に4間を数える総柱の建物跡である。総計15基の柱穴を検出した。主軸方位はN-99°-Eで、南側に位置する第1号壕跡を意識した軸方向を示している。建物跡の規模は東西7m20cm、南北5m60cmを測る。

【柱穴】 柱穴の規模は直径36～50cm、深さは52～76cmを測る。堆積土の状況からは明確な柱痕を確認することはできなかった。

【柱間寸法】 東西間で1m70cm～2m30cm、南北間で1m70cm～2m10cmを測る。

【出土遺物】 伴うような遺物は出土しなかった。

【小結】 明確には判断できないが、第1・3号壕跡と同時期に存在していた可能性が考えられる。

第5号掘立柱建物跡 (SB-05) (図88)

【位置】 X・Y-188・189グリッドに位置している。第1号壕跡及び第3号壕跡の間及び、第7号円形周溝の内側に位置している。

【重複】 第9号竪穴住居跡と一部重複している。新旧関係は明確には分らないが、本遺構が新しい可能性が高い。しかしながら、第9号竪穴住居跡の検出面では柱穴の痕跡を確認することはできなかった。また、第7号円形周溝の内側部分に位置しているが、同遺構との同時存在は考えられず、本遺構が新しい可能性が高い。

【構造・規模】 明確なピットを全て検出することはできなかったが、建物跡であった可能性が高い。東西2間、南北2間を数える建物跡と考えられ、規模は東西で5m00cm、南北で3m80cmを測る。北側にやや軸を異にした2間幅の柱穴列がみられる。庇を有していた可能性も考えられる。主軸方位はN-20°-Eで、第3号壕跡を意識した軸方向を示しているものと考えられる。

【柱穴】 柱穴の規模は直径20～50cm、深さは16～38cmを測る。堆積土の状況からは明確な柱痕を確認することはできなかった。

【柱間寸法】 東西間で1m70cm～2m10cm、南北間で1m80cm～2m40cmを測る。

【出土遺物】 伴うような遺物は出土しなかった。

【小結】 明確には判断できないが、第1・3号壕跡と同時期に存在していた可能性が考えられる。

第3号掘立柱建物跡 (SB-03) (図89)

【位置】 U・V-168～170グリッドにかけて位置している。

【重複】 認められない。

【構造・規模】 東側が平成6年度の調査区域のため伴うと思われるピットを全て検出することはできなかった。主軸方位はN-20°-Wで、南北3間、東西2間以上を数える建物跡と考えられる。東

西軸北側は隅の1本しか確認できなかった。建物の規模は南北で6 m50cmを測る。

【柱穴】柱穴の規模は直径20～50cm、深さは16～38cmを測る。

【柱間寸法】南北間で1 m80cm～2 m20cmを測る。

【出土遺物】伴うような遺物は出土しなかった。

【小結】周辺の状況から、10世紀後半の建物跡の可能性が高い。

第4号掘立柱建物跡（S B-04）（図47）

【位置】W・X-169～171グリッドにかけて位置している。

【重複】第19号竪穴住居跡と一部重複している。新旧関係は本遺構が新しい可能性が高い。

【構造・規模】明確なピットを全て検出することはできなかった。主軸方位はN-72°-Wで、東西3間、南北2間を数える建物跡である。東西軸北側は2本の柱穴しか確認できなかった。建物の規模は東西で4 m70cm、南北で3 m50cmを測る。

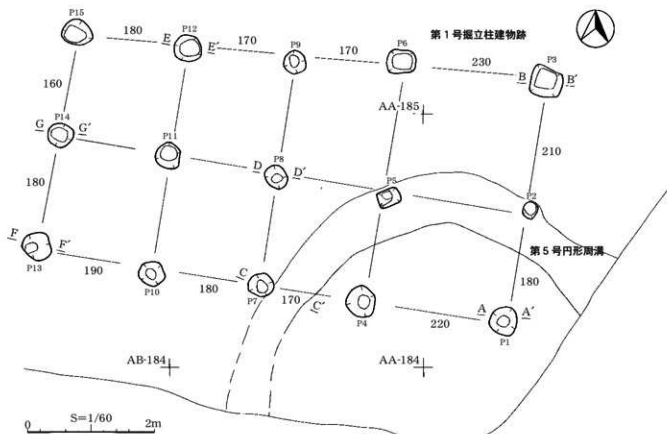
【柱穴】柱穴の規模は直径20～50cm、深さは16～38cmを測る。

【柱間寸法】東西間で1 m70cm～2 m10cm、南北間で1 m70cm～2 m10cmを測る。

【出土遺物】伴うような遺物は出土しなかった。

【小結】第19号竪穴住居跡より新しい。周辺の状況から、10世紀後半の建物跡の可能性が高い。

（笹森）

**第1号掘立柱建物跡**

断面A
 1 掘立柱 2 土間 3 土間 4 土間 5 土間 6 土間 7 土間 8 土間 9 土間 10 土間 11 土間 12 土間 13 土間 14 土間 15 土間 16 土間 17 土間 18 土間 19 土間 20 土間 21 土間 22 土間 23 土間 24 土間 25 土間 26 土間 27 土間 28 土間 29 土間 30 土間 31 土間 32 土間 33 土間 34 土間 35 土間 36 土間 37 土間 38 土間 39 土間 40 土間 41 土間 42 土間 43 土間 44 土間 45 土間 46 土間 47 土間 48 土間 49 土間 50 土間 51 土間 52 土間 53 土間 54 土間 55 土間 56 土間 57 土間 58 土間 59 土間 60 土間 61 土間 62 土間 63 土間 64 土間 65 土間 66 土間 67 土間 68 土間 69 土間 70 土間 71 土間 72 土間 73 土間 74 土間 75 土間 76 土間 77 土間 78 土間 79 土間 80 土間 81 土間 82 土間 83 土間 84 土間 85 土間 86 土間 87 土間 88 土間 89 土間 90 土間 91 土間 92 土間 93 土間 94 土間 95 土間 96 土間 97 土間 98 土間 99 土間 100 土間

断面B
 1 掘立柱 2 土間 3 土間 4 土間 5 土間 6 土間 7 土間 8 土間 9 土間 10 土間 11 土間 12 土間 13 土間 14 土間 15 土間 16 土間 17 土間 18 土間 19 土間 20 土間 21 土間 22 土間 23 土間 24 土間 25 土間 26 土間 27 土間 28 土間 29 土間 30 土間 31 土間 32 土間 33 土間 34 土間 35 土間 36 土間 37 土間 38 土間 39 土間 40 土間 41 土間 42 土間 43 土間 44 土間 45 土間 46 土間 47 土間 48 土間 49 土間 50 土間 51 土間 52 土間 53 土間 54 土間 55 土間 56 土間 57 土間 58 土間 59 土間 60 土間 61 土間 62 土間 63 土間 64 土間 65 土間 66 土間 67 土間 68 土間 69 土間 70 土間 71 土間 72 土間 73 土間 74 土間 75 土間 76 土間 77 土間 78 土間 79 土間 80 土間 81 土間 82 土間 83 土間 84 土間 85 土間 86 土間 87 土間 88 土間 89 土間 90 土間 91 土間 92 土間 93 土間 94 土間 95 土間 96 土間 97 土間 98 土間 99 土間 100 土間

断面C
 1 掘立柱 2 土間 3 土間 4 土間 5 土間 6 土間 7 土間 8 土間 9 土間 10 土間 11 土間 12 土間 13 土間 14 土間 15 土間 16 土間 17 土間 18 土間 19 土間 20 土間 21 土間 22 土間 23 土間 24 土間 25 土間 26 土間 27 土間 28 土間 29 土間 30 土間 31 土間 32 土間 33 土間 34 土間 35 土間 36 土間 37 土間 38 土間 39 土間 40 土間 41 土間 42 土間 43 土間 44 土間 45 土間 46 土間 47 土間 48 土間 49 土間 50 土間 51 土間 52 土間 53 土間 54 土間 55 土間 56 土間 57 土間 58 土間 59 土間 60 土間 61 土間 62 土間 63 土間 64 土間 65 土間 66 土間 67 土間 68 土間 69 土間 70 土間 71 土間 72 土間 73 土間 74 土間 75 土間 76 土間 77 土間 78 土間 79 土間 80 土間 81 土間 82 土間 83 土間 84 土間 85 土間 86 土間 87 土間 88 土間 89 土間 90 土間 91 土間 92 土間 93 土間 94 土間 95 土間 96 土間 97 土間 98 土間 99 土間 100 土間

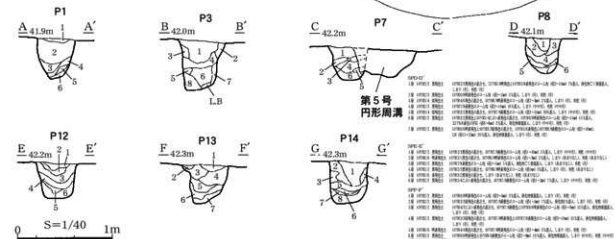
第1号壕跡

图87 第1号掘立柱建物跡

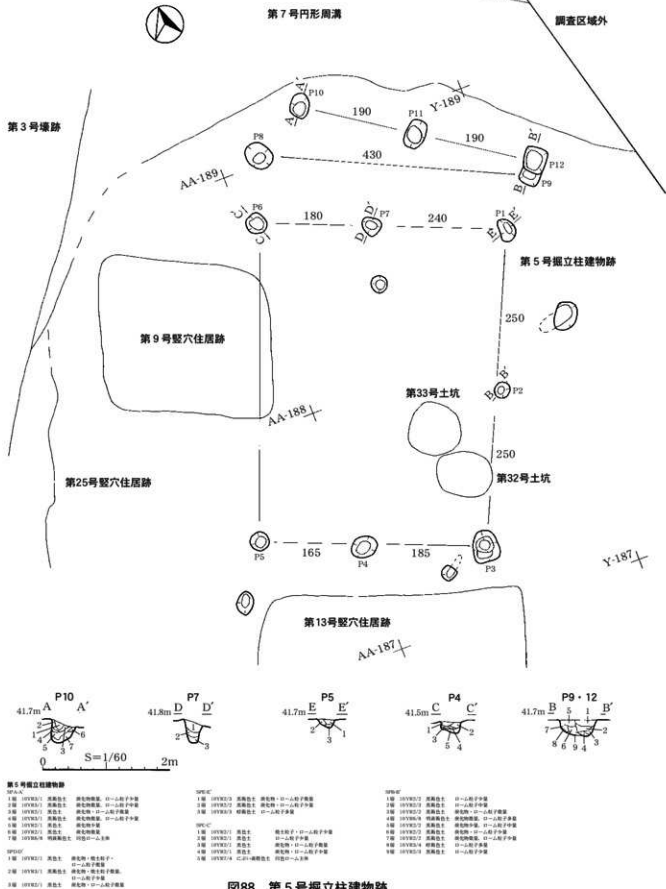


图88 第5号掘立柱建物跡

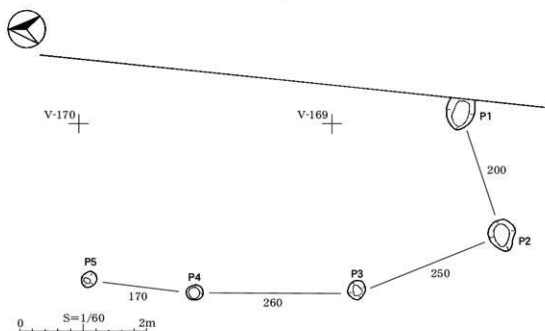


图89 第3号掘立柱建物跡

6 柵列 (SA)

柵列は1条検出されている。

第1号柵列 (SA-01) (図91)

【位置】W～AC-182グリッドに位置している。第1号壕跡の南側にはほぼ平行して東西方向に伸びている。第1号壕跡からの距離は確認面で2 m40cm～2 m60cmを測る。

【重複】第4号円形周溝と柱穴が1基重複しているものと思われる。第4号円形周溝の堆積土中から柱穴を明確に検出することはできなかったが、周辺の状況から、本遺構の方が新しいものと考えられる。

【構造・規模】総計12基の柱穴を検出した。ほぼ一直線に並び、軸方位はN-85°-Wで、第1号壕跡を意識した方向を示しているものと思われる。AC-182グリッドで西側調査区域外、W-182グリッドで平成6年度調査区に接している。確認面での平面形は、ほぼ円形を呈する。

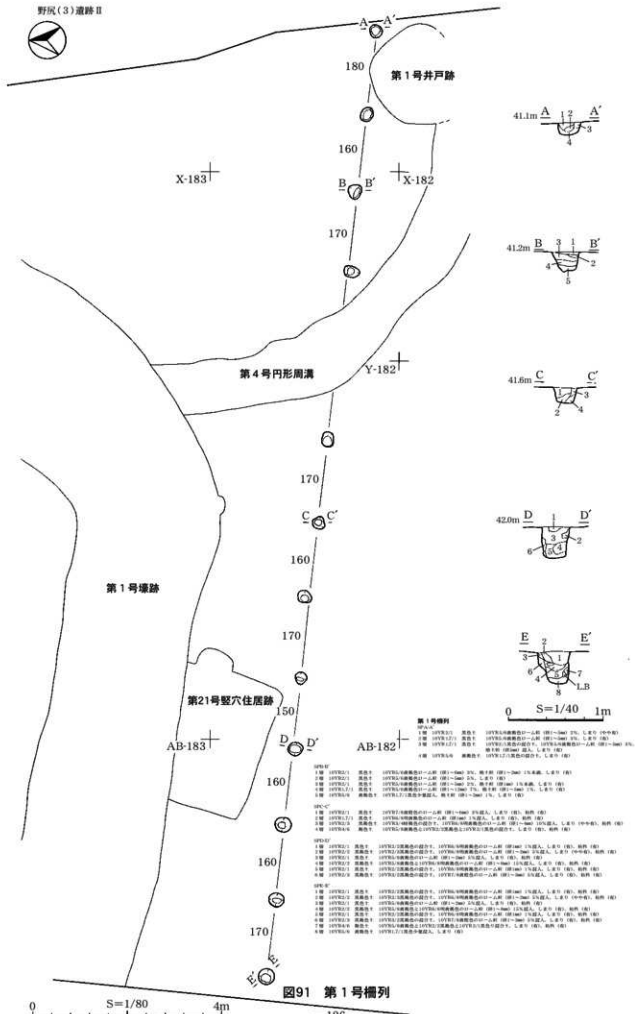
【柱穴】確認面での柱穴の規模は直径26～40cm、底面での直径は12～20cm、深さは24～45cmを測る。掘り方はほぼ円形を呈している。堆積土の状況からは明確な柱痕を確認することはできなかった。

【柱間寸法】柱穴間の距離は1 m50cm～1 m80cmを測る。

【出土遺物】伴うような遺物は出土しなかった。

【小結】明確には判断できないが、検出状況から第1号壕跡と同時期に存在していた可能性が考えられる。壕跡のさらに外側を区画していた塀の機能を有していたものと思われる。

(笹森)



第1号櫓列

- 1号 1579(2) 1号 1579(2) 1号 1579(2) 1号 1579(2) 1号 1579(2)
- 2号 1579(2) 2号 1579(2) 2号 1579(2) 2号 1579(2) 2号 1579(2)
- 3号 1579(2) 3号 1579(2) 3号 1579(2) 3号 1579(2)
- 4号 1579(2) 4号 1579(2) 4号 1579(2) 4号 1579(2)
- 5号 1579(2) 5号 1579(2) 5号 1579(2) 5号 1579(2)

图91 第1号櫓列

7 土坑 (SK)

第1号土坑 (SK-01) (図92)

【位置】AD-165グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】平面形は円形を呈する。長径1m04cm、短径1m02cm、深さは24cmを測る。

【堆積土】5層に分層できた。黒褐色土主体の覆土であり、ロームと黒色土が塊状に混入する。

【出土遺物】なし。

第2号土坑 (SK-02) (図93)

【位置】Y-169・170グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】平面形は不整の円形を呈する。長径1m16cm、短径96cm、深さは30cmを測る。

【堆積土】6層に分層できた。黒褐色土主体の覆土であり、ロームと黒色土が塊状に混入する。

【出土遺物】なし。

第3号土坑 (SK-03) (図92・98)

【位置】AA-184・185グリッドに位置する。

【重複】第5号円形周溝及び第1号塚跡と重複している。堆積土の状況から第5号円形周溝より新しいことが確認できたが、第1号塚跡との新旧関係は不明である。

【形態・規模】平面形は東西方向に長い小判型を呈する。長軸2m50cm、短軸1m40cm、深さはcmを測る。西側に三日月状のほぼ平らなテラスを有している。底面はやや起伏を持ち、壁は底面から緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】暗褐色土主体で、13層に分層された。ロームブロックが各層に混入しており、人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】堆積土中から土師器坏1点、土師器甕1点、鉄製品の破片が1点出土している。1は体部に墨書が施されている土師器坏。正位で一文字書かれているが、明確に判読することはできなかった。

「原」、或いは、「扇」と読むのであろうか。2は土師器甕の胴～底部片。鉄製品は図示することができなかったが、容器の口縁部の破片と思われる。推定口径は12cm前後と思われる。錆の付着が著しい。

第4号土坑 (SK-04) (図92)

【位置】AA-187グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】平面形は不整な円形を呈する。長径94cm、短径74cm、深さは26cmを計測する。

【堆積土】7層に分層できた。黒褐色土主体であり、ロームと黒色土が塊状に混入する。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第5号土坑(SK-05) (図93・98)

【位置】AE-165グリッドに位置する。

【重複】第6号土坑と重複している。新旧関係は、本遺構が最も古いことが堆積土の状況から確認できる。

【形態・規模】ほぼ円形を呈している。長径1m40cm、短径1m24cm、深さは47cmを測る。

【堆積土】6層に分層できた。ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】土師器坏1点、土師器甕1点を図示した。

第6号土坑(SK-06) (図93・98)

【位置】AE-165グリッドに位置する。

【重複】第5号土坑と重複している。最も新しいものと思われる。

【形態・規模】楕円形を呈するものと思われる。推定長径1m40cm、短径84cm、深さは約34cmを測る。

【堆積土】2層に分層できた。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】須恵器甕の口縁部1点を図示した。

第7号土坑(SK-07) (図93)

【位置】AB-189・190グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】西側が調査区域外に延びるため全容は不明である。短軸の開口部幅86cm、底部幅96cmで断面形状はフラスコ状を呈している。深さは約46cmを測る。

【堆積土】17層に分層できた。人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第8号土坑(SK-08) (図93・98)

【位置】Y-177グリッドに位置する。

【重複】認められない。

【形態・規模】楕円形を呈する。長径1m34cm、短径80cm、深さは40cmを測る。

【堆積土】7層に分層できた。黒褐色土を主体に、ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】流れ込みと考えられる縄文時代の石鏃が1点出土している。

第9号土坑(SK-09) (図94・98)

【位置】AC-170～グリッドに位置する。

【重複】第22号竪穴住居跡内に位置している。新旧関係は本遺構が新しい可能性が高い。

【形態・規模】楕円形を呈する。長径1m40cm、短径1m00cm、深さは42cmを測る。

【堆積土】10層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】須恵器坏1点を図示した。

第10号土坑（SK-10）（図94）

【位置】AC-170グリッドに位置する。

【重複】第22・28号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が新しい。

【形態・規模】隅丸の長方形を呈する。長軸76cm、短軸60cm、深さは48cmを測る。

【堆積土】15層に分層できた。人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第11号土坑（SK-11）（図95）

【位置】AD-173グリッドに位置する。

【重複】第2号溝跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【形態・規模】楕円形を呈する。長径1m20cm、短径88cm、深さは32cmを測る。

【堆積土】4層に分層できた。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第12号土坑（SK-12）（図95・98）

【位置】X・Y-172グリッドに位置する。

【重複】第26号溝跡と重複している。新旧関係は本遺構が新しい。

【形態・規模】長径2m00cm、短径1m66cm、深さ76cmを測る。不整な円形を呈している。

【堆積土】14層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】土師器杯1点、土師器甕3点、須恵器杯1点を図示した。

第13号土坑 第27号溝跡としたため欠番とした。

第14号土坑 第27号溝跡としたため欠番とした。

第15号土坑（SK-15）（図95）

【位置】AA・AB-174グリッドに位置する。

【重複】第20号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は堆積土の状況から本遺構が新しい。

【形態・規模】長径98cm、短径86cm、深さは34cmを測る。不整な円形を呈している。

【堆積土】6層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第16号土坑（SK-16）（図95）

【位置】AA-174グリッドに位置する。

【重複】第20号竪穴住居跡及び第3号円形周溝と重複している。新旧関係は、第3号円形周溝より古く、第20号竪穴住居跡より新しい。

【形態・規模】南側を第3号円形周溝に壊されているため全体形状は不明である。短軸84cm、深さ

は50cmである。底面はかなり起伏が見られる。

【堆積土】8層に分層できた。ほぼ自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】土師器坏や甕の破片が出土している。

第17号土坑（SK-17）（図96）

【位置】AB-191グリッドに位置する。

【重複】第17号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が新しい。

【形態・規模】長径2m14cm、短径1m52cmの楕円形を呈し、深さは52cmを測る。底面は起伏があり、かなり凸凹している。

【堆積土】7層に分層された。人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第18号土坑（SK-18）（図96）

【位置】W-174グリッドに位置する。

【重複】第32号溝跡と重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【形態・規模】長径1m20cm、短径88cmの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。底面は多少起伏がある。

【堆積土】5層に分層できた。人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第19号土坑（SK-19）（図94）

【位置】AC-169グリッドに位置する。

【重複】第22・28号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が新しい。

【形態・規模】隅丸の方形を呈する。長軸58cm、短軸48cm、深さは36cmを測る。

【堆積土】7層に分層できた。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第20号土坑（SK-20）（図94）

【位置】AD-169・170グリッドに位置する。

【重複】第22・28号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が新しい。

【形態・規模】隅丸の長方形を呈する。長軸80cm、短軸60cm、深さは64cmを測る。

【堆積土】11層に分層できた。自然堆積の様相を呈し、1・2・4層は柱痕の可能性を示す。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第21号土坑（SK-21）（図94）

【位置】AC-169・170グリッドに位置する。

【重複】第22号竪穴住居跡内に位置するが、住居内の施設の可能性も考えられる。

【形態・規模】長径1 m86cm、短径1 m80cmのほぼ円形で、深さは45cmを測る。壁は底面から南壁では急に、その他はやや急に立ち上がっている。底面はやや起伏を持っている。

【堆積土】10層に分層された。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第22号土坑（SK-22）（図92）

【位置】AA・AB-184グリッドに位置する。第3号土坑の西側に近接する。

【重複】なし。

【形態・規模】長径1 m30cm、短径76cmの楕円形で、深さは24cmを測る。壁は底面から南壁では急に、その他はやや急に立ち上がっている。底面はやや起伏を持っている。

【堆積土】6層に分層された。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第23号土坑（SK-23）（図96・99）

【位置】Y・AA-168・169グリッドに位置する。

【重複】第3号竪穴住居跡の北壁の一部と重複している。新旧関係は不明である。

【形態・規模】長軸1 m90cm、推定短軸1 m40cmのやや不整な長方形を呈し、深さは最大48cmを測る。底面は凹凸がある。

【堆積土】10層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】須恵器杯1点を図示した。

第24号土坑（SK-24）（図96）

【位置】X・Y-187グリッドに位置する。

【重複】認められない。

【形態・規模】長軸66cm、短軸54cmの長方形を呈し、深さは最大24cmを測る。底面は多少凹凸がある。

【堆積土】4層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第25号土坑（SK-25）（図96・99）

【位置】W・X-174・175グリッドに位置する。

【重複】第3号円形周溝の周溝端部及び第32号溝跡と重複している。第3号円形周溝より新しく、第32号溝跡より古い。

【形態・規模】直径1 m90cmのほぼ円形を呈し、深さは73cmである。底面は多少凹凸がある。

【堆積土】11層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】土師器小型甕1点、須恵器杯1点を図示した。

第26号土坑 (SK-26) (図97・99)

【位置】 V・W-173グリッドに位置している。

【重複】 第28号土坑と重複している。新旧関係は不明である。

【形態・規模】 北東部分が第28号土坑と重複しているため全体形状は不明である。長径1m76cm、推定短径1m50cmの不整な円形を呈するものと思われる。深さは最大1m8cmを測る。底面は起伏が激しく凹凸がある。

【堆積土】 16層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 土師器環2点、土師器甕1点、須恵器環1点を図示した。

第27号土坑 (SK-27) (図97・99)

【位置】 Y-189グリッドに位置している。

【重複】 第7号円形周溝と重複している。新旧関係は本遺構が古い可能性が高い。

【形態・規模】 ほとんどが第7号円形周溝に壊されているため全体形状は不明である。

【堆積土】 2層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 須恵器皿1点を図示した。

第28号土坑 (SK-28) (図97・99)

【位置】 V-173グリッドに位置している。

【重複】 第26号土坑と重複している。新旧関係は不明である。

【形態・規模】 東側の一部が調査区域外に延び、南西地区側が第26号土坑と重複しているため全体形状は不明である。推定長軸2m60cm、短軸1m60cmのやや不整な長方形を呈していたものと思われる。深さは最大78cmを測る。底面は起伏が著しく小ビットが3基検出された。

【堆積土】 分層できなかった。

【出土遺物】 土師器環1点、土師器甕1点を図示した。

第29号土坑 (SK-29) (図97)

【位置】 AD-165・166グリッドに位置している。

【重複】 なし。

【形態・規模】 隅丸の長方形を呈する。長軸1m30cm、短軸60cm、深さは66cmを測る。

【堆積土】 11層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

第30号土坑 (SK-30) (図97)

【位置】 AE-167グリッドに位置している。

【重複】 第2号竪穴住居跡の北西壁の一部と重複している。新旧関係は明確には分らない。また、第31号土坑と重複している。新旧関係は本遺構が古いことが堆積状況から確認できた。

【形態・規模】 長軸は第31号土坑に壊されているため不明である。短軸1m28cmで長方形を呈する

ものと思われる。深さは25cmを測る。

【堆積土】10層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第31号土坑（SK-31）（図97）

【位置】AE-167グリッドに位置している。

【重複】第2号竪穴住居跡及び第30号土坑と重複している。第2号竪穴住居跡との新旧関係は不明である。その他は本遺構が新しいことが堆積状況から確認できた。

【形態・規模】長軸1m30cm、短軸76cmで、長方形を呈している。深さは45cmを測り、底面はかなり起伏が激しい。

【堆積土】6層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第32号土坑（SK-32）（図92）

【位置】Y-187グリッドに位置する。第33号土坑に隣接する。

【重複】なし。

【形態・規模】長径84cm、短径70cmの長楕円形を呈し、深さは18cmを計測する。

【堆積土】10層に分層され、全般にローム塊を多く含む。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第33号土坑（SK-33）（図92）

【位置】Y-187グリッドに位置する。第32号土坑に隣接する。

【重複】なし。

【形態・規模】長径86cm、短径82cmの不整形円形を呈し、深さは12cmを計測する。

【堆積土】5層に分層され、自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第34号土坑（SK-34）（図97）

【位置】Y-188グリッドに位置する。

【重複】第2号掘立柱建物跡の第6ピットと重複している。新旧関係は本遺構が古い。

【形態・規模】長径1m40cm、短径80cmの長楕円形を呈し、深さは24cmを計測する。

【堆積土】10層に分層され、全般にローム塊を多く含む。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

第35号土坑（SK-35）（図97・99）

【位置】AB-187グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】 隅丸方形を呈し、長軸56cm、短径54cm、深さは20cmを計測する。

【堆積土】 6層に分層された。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 土師器坏1点を図示した。

(笹森)

8 井戸跡 (S E)

第1号井戸跡 (S E-01) (図100)

【位置】 調査区北側のW-181・182グリッドに位置する。

【重複】 第4号円形周溝(平成6年調査時の第5号円形周溝)と重複している。精査時に堆積土が崩落したため新旧関係は不明であるが、周辺の状況から本遺構が新しいものと考えられる。

【形態・規模】 開口部で長径2m20cm、推定短径2m00cm、底面で長径1m48cm、短径1m42cmを測る。確認面からの深さは3m30cmを測る。井戸枠の存在は確認できなかった。

【壁・底面】 壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がっている。底面は一部低い部分が見られる他はほぼ平坦である。

【堆積土】 半裁中に崩落したため全容は不明である。黒色・暗褐色・黒褐色土を主体に自然堆積の様相を呈していた。上部には厚い黒色土(基本層序第Ⅱ層)が堆積していた。確認できた堆積土中に白頭山火山灰は認められなかった。

【出土遺物】 図示できるような遺物は出土していない。

【小結】 詳細な時期については不明であるが、平安時代の可能性が高い。精査中は常に湧水していた。

(笹森)

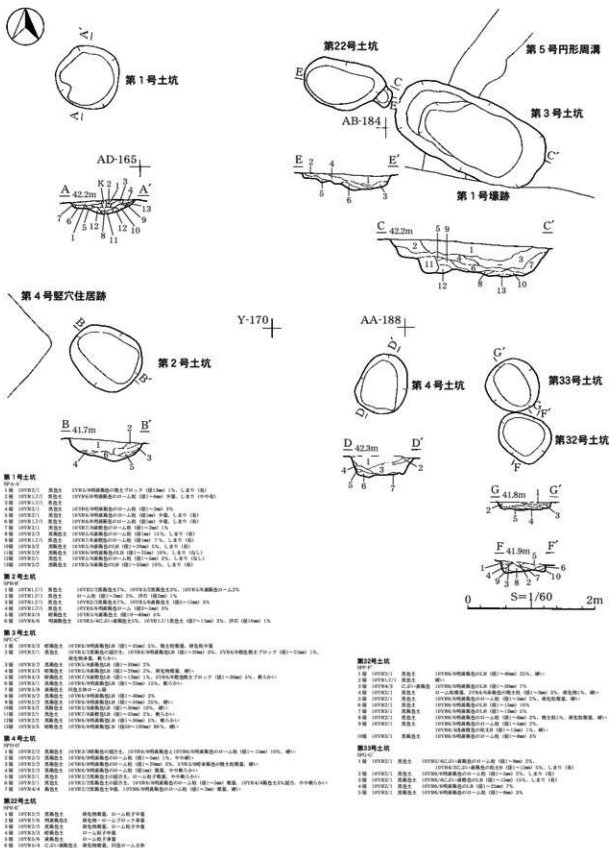
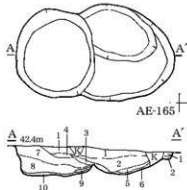


図92 土坑(1)



第5号土坑



AF-165

AE-165



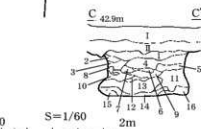
第6号土坑

AB-187



第7号土坑

AB-190



第5号土坑

- 1層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 2%、赤褐色 厚1~12cm 3%、黄白色 厚1~6cm 2%、L層 19cm 40
- 2層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 3%、黄白色 厚1~10cm 2%、L層 8cm 18
- 3層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 15%、赤褐色 厚1~3cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 7cm 18
- 4層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 5層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 6層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 7層 197X27 灰褐色土 L層 厚1~10cm 2%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 8層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 9層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 10層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 11層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 12層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 13層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 14層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 15層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18
- 16層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚1~10cm 3%、赤褐色 厚1~10cm 2%、黄白色 厚1~3cm 1%、L層 8cm 18

第9号土坑

- 1層 197X27 灰褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~10cm 2%、中層 厚10cm 4
- 2層 197X27 灰褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~10cm 2%、中層 厚10cm 4
- 3層 197X27 灰褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~10cm 2%、中層 厚10cm 4
- 4層 197X27 灰褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~10cm 2%、中層 厚10cm 4
- 5層 197X27 灰褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~10cm 2%、中層 厚10cm 4

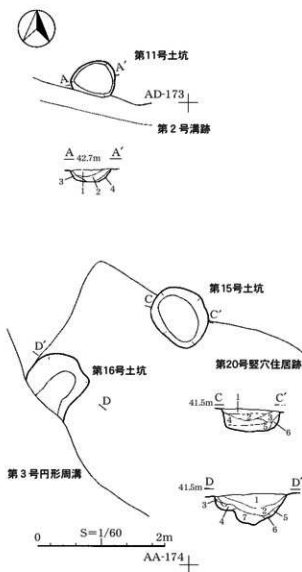
第7号土坑

- 1層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 2層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 3層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 4層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 5層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 6層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 7層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 8層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 9層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 10層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 11層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 12層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 13層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 14層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 15層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4
- 16層 197X27 灰褐色土 ①-上層 厚10cm 4

第8号土坑

- 1層 197X27 褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~2cm 2%、赤褐色 厚1~2cm 1%
- 2層 197X27 褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~2cm 15%
- 3層 197X27 褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~15cm 15cm 1%、赤褐色 厚1~10cm 2%
- 4層 197X27 褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~8cm 2%、赤褐色 厚1~2cm 1%
- 5層 197X27 褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~10cm 2%、赤褐色 厚1~10cm 2%
- 6層 197X27 褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~10cm 2%、赤褐色 厚1~10cm 2%
- 7層 197X27 褐色土 197X63中層黄褐色土①-上層 厚1~10cm 2%、赤褐色 厚1~10cm 2%

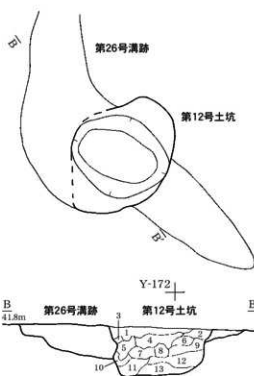
図93 土坑(2)



第12号土坑

SPB-B'

- | | | | |
|-----|-----------|-------|--|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR4/6褐色ローム (径2~10m) 3%,
炭化物粒 (径2~8m) 1%,
埴土粒 (径1m) 1% |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色ローム2%,
10YR6/6明黄褐色ローム1% |
| 3層 | 10YR5/6 | 明黄褐色土 | 10YR6/6明黄褐色ローム5%,
10YR3/4暗褐色土5% |
| 4層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR7/6明褐色ローム1%,
埴土粒 (径1m) 1%, 炭化物粒 (径1m) 1% |
| 5層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/3黒褐色土20%,
10YR6/8明黄褐色ローム10%全体のに混入,
10YR3/4暗褐色土5%, 埴土粒 (径1~8m) 2% |
| 6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR6/6明黄褐色ローム (径2~50m) 10%,
埴土粒 (径1~10m) 2%, 炭化物粒 (径8m) 1% |
| 7層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 10YR2/1黒色土25%, 10YR3/4暗褐色土20% |
| 8層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/2黒褐色土10%,
10YR4/6黄褐色ローム (径3~14m) 2% |
| 9層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR2/1黒色土10%, 10YR5/6黄褐色ローム2%,
炭化物 (径1m) 1% |
| 10層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/6黄褐色ローム (径8~20m) 5% |
| 11層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/2黒褐色土20%,
10YR5/6黄褐色ロームブロック状に15% |
| 12層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR2/1黒色土20%,
10YR5/6黄褐色ローム (径10~25m) 5% |
| 13層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR2/1黒色土50%,
10YR7/8黄褐色土B (径70m), 埴土粒 (径1m) 1% |



第11号土坑

SPA-A'

- | | | | |
|----|---------|------|---|
| 1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒 (径1~6m) 2% |
| 2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR6/6明黄褐色ローム (径3~10m) 5%,
炭化物粒 (径1m) 1% |
| 3層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR6/6明黄褐色ローム (全体的に) 3%,
炭化物粒 (径2~3m) 1%, 埴土 (径5m) 1% |
| 4層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR3/3暗褐色土10%, 10YR6/6明黄褐色ローム
(径1~6m) 3%, 炭化物粒 (径1~2m) 1% |

第15号土坑

SPC-C'

- | | | | |
|----|-----------|------|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/6黄褐色ローム
(径2~10m) 10%, 埴土 (径30m) 3% |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/6黄褐色ローム (径2~4m) 3% |
| 3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/6黄褐色ローム (径3~30m) 20% |
| 4層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/6黄褐色ローム (径10~50m) 40% |
| 5層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/6黄褐色ローム50%全体のに混入 |
| 6層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色ローム40% |

第16号土坑

SPD-D'

- | | | | |
|----|-----------|---------|--|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ローム粒 (径1~2m) 1% |
| 2層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ローム粒 (径2~10m) 3% |
| 3層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 10YR1.7/1黒色土10%,
10YR7/4にぶい黄褐色粘土
(径30m) 5% |
| 4層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ローム粒 (径1~2m) 3%,
7.5YR5/6明黄褐色土 (径5m) 1%,
10YR6/4にぶい黄褐色粘土2% |
| 5層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/6黄褐色ローム5%,
10YR7/4にぶい黄褐色粘土3% |
| 6層 | 10YR7/4 | にぶい黄褐色土 | 同色主体粘土 |

図95 土坑(4)

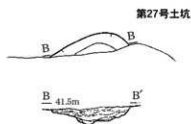
W-174



A-A' 第26号土坑



Y-190



W-173



第29号土坑

AD-166



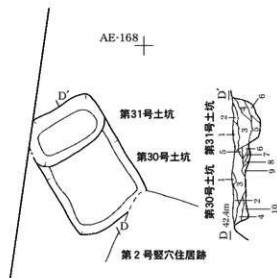
第35号土坑



第29号土坑



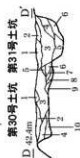
第35号土坑



AE-168

第31号土坑

第30号土坑



第2号竪穴住居跡

Y-189



第34号土坑

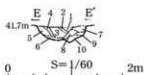


图97 土坑(6)

第26号土坑

30F-1

- 1層 HVYK2/1 黒色土 10YR5/6黒褐色と10YR5/2/4C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 5%、LB (20×50cm) 1個見入。焼土・炭化物質見入。しより (6)。磁片 (6)。
 2層 HVYK2/2 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色土。10YR6/4暗黄褐色と10YR5/4黄褐色のローム層 (厚2~10cm) 7%。LB (20×50cm) 1個見入。焼土・炭化物見入。しより (6)。磁片 (6)。
 3層 HVYK2/3 黒色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR6/4暗黄褐色と10YR5/4土質褐色のローム層 (厚2~15cm) 10%。焼土。炭化物質見入。しより (6)。磁片 (6)。
 4層 HVYK2/3/1 黒色土 10YR2/1灰色赤褐色土。10YR5/4黄褐色のローム層 (厚1~10cm) 10%見入。焼土。炭化物と骨殖類見入。しより (6)。磁片 (6)。
 5層 HVYK2/3/1 黒色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR6/4暗黄褐色と10YR5/4黄褐色のローム層 (厚1~15cm) 5%。LB (20×50cm) 1個見入。焼土と骨殖類見入。しより (6)。磁片 (6)。
 6層 HVYK2/3/1 黒色土 10YR6/4暗黄褐色のローム層 (厚1~10cm) 3%。土層見入。しより (6)。磁片 (6)。
 7層 HVYK2/3/1 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR6/4暗黄褐色のローム層 (厚1~10cm) 7%。焼土と骨殖類見入。しより (6)。磁片 (6)。
 8層 HVYK2/3/1 黒色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗褐色の混合土。10YR5/4/2C土質褐色のローム層 (厚1~5cm) 3%見入。しより (6)。磁片 (6)。
 9層 HVYK2/3/1 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色土。10YR3/4暗褐色のローム層 (厚2~5cm) 2%見入。しより (6)。磁片 (6)。
 10層 HVYK2/3/1 黒色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗褐色の混合土。10YR3/4暗褐色のローム層 (厚2~5cm) 2%見入。しより (6)。磁片 (6)。
 11層 HVYK2/3/1 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗褐色の混合土。10YR3/4暗褐色のローム層 (厚2~10cm) 10%見入。10YR2/1灰色赤褐色の混合土 (10cm) 少量見入。しより (6)。磁片 (6)。
 12層 HVYK2/3/1 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗褐色の混合土。10YR3/4暗褐色のローム層 (厚2~10cm) 5%。10YR6/4暗黄褐色の混合土。焼土と骨殖類見入。しより (6)。磁片 (6)。
 13層 HVYK2/3/1 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色のローム層 (厚1~10cm) 3%見入。10YR2/2灰色赤褐色と10YR5/4/2C土質褐色の混合土3%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 14層 HVYK2/3/1 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR2/2灰色赤褐色と10YR5/4/2C土質褐色の混合土10%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 15層 HVYK2/3/1 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR6/4暗黄褐色と10YR7/2/2C土質褐色の混合土。10YR3/4暗褐色の混合土10%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 16層 HVYK2/4 棕色土質褐色土 10YR2/2/2C土質褐色と10YR2/2/2C土質褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色の混合土3%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。

第27号土坑

30F-2

- 1層 HVYK2/2 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗褐色の混合土。10YR3/4暗褐色のローム層 (厚1~20cm) 3%見入。炭化物質見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 2層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色と10YR2/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 7%見入。炭化物と骨殖類見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 3層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~5cm) 5%見入。炭化物と骨殖類見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 4層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR6/4暗黄褐色と10YR6/4暗黄褐色のローム層 (厚1~10cm) 5%見入。炭化物と骨殖類見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 5層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR6/4暗黄褐色と10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 7%見入。炭化物と骨殖類見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 6層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 3%見入。10YR3/4暗褐色の混合土 (厚1~2cm) 3%見入。炭化物と骨殖類見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 7層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR3/4暗黄褐色と10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 3%見入。炭化物質見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 8層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗黄褐色と10YR5/4黄褐色のローム層 (厚1~20cm) 2%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 9層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗黄褐色の混合土。10YR2/1灰色赤褐色のローム層 (厚1~20cm) 2%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 10層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗黄褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色と10YR3/4暗黄褐色のローム層 (厚2~10cm) 5%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 11層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色と10YR6/4暗黄褐色のローム層 (厚2~5cm) 3%見入。炭化物と骨殖類見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 12層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色と10YR6/4暗黄褐色のローム層 (厚1~10cm) 20%見入。炭化物と骨殖類見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 13層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色と10YR3/4暗黄褐色の混合土。10YR3/4暗黄褐色と10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚2~6cm) 20%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 14層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR3/4暗黄褐色のローム層 (厚2~5cm) 5%。10YR6/4暗黄褐色の混合土 (厚20cm) 少量見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 15層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚20cm) 3%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 16層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR6/4暗黄褐色と10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 3%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 17層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR6/4暗黄褐色と10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 3%見入。しより (6)中(6)。磁片 (6)。
 18層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色の混合土。10YR6/4暗黄褐色と10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚2~5cm) 10%。10YR7/2/2C土質褐色と10YR7/2/2C土質褐色の混合土 (厚20cm) 中(6)中(6)中(6)。しより (6)中(6)。磁片 (6)中(6)。

第29号土坑

30C-2

- 1層 HVYK2/4 黒褐色土 中～軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 20%、ローム層10%。
 2層 HVYK2/2 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR2/4土質褐色 (厚1~20cm) 30%。LB10YR3/4黄褐色 (厚5~40cm) 30%。ローム層25%。
 3層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 20%。ローム層30%。
 4層 HVYK2/2 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚2~10cm) 10%。ローム層10%。
 5層 HVYK2/2 黒褐色土 中～軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 20%。ローム層20%。
 6層 HVYK2/2 黒褐色土 中～軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 5%。ローム層5%。
 7層 HVYK2/2 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚20cm) 5%。ローム層5%。
 8層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 5%。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 5%。ローム層10%。
 9層 HVYK2/2 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 2%。ローム層10%。
 10層 HVYK2/2 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 2%。ローム層10%。
 11層 HVYK2/2 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 2%。ローム層10%。

第30、31号土坑

30F-3

- 1層 HVYK2/2 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚2~10cm) 少量。ローム層3%。
 2層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚2~10cm) 7%。ローム層11%。
 3層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。ローム層20%。磁片 (厚30cm) 少量。LB10YR3/4黄褐色 (厚5~30cm) 5%。LB10YR3/4黄褐色 (厚2~5cm) 10%。
 4層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。ローム層11%。LB10YR3/4黄褐色 (厚5~20cm) 2%。LB10YR3/4黄褐色 (厚2~10cm) 10%。
 5層 HVYK2/3 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。ローム層7%。LB10YR3/4黄褐色 (厚10cm) 少量。
 6層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。ローム層10%。LB10YR3/4黄褐色 (厚10~20cm) 5%。LB10YR3/4黄褐色 (厚10~20cm) 5%。
 7層 HVYK2/4 黒褐色土 中～軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚5~10cm) 30%。ローム層5%。
 8層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚20cm) 少量。ローム層10%。
 9層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 5%。ローム層5%。
 10層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 5%。ローム層15%。

31F

- 1層 HVYK2/4 黒褐色土 中～軽しくりや中～軽し。磁片有。ローム層7%。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~10cm) 5%。LB10YR3/4黄褐色 (厚1~10cm) 2%。
 2層 HVYK2/4 黒褐色土 中～軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。ローム層11%。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 5%。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 5%。
 3層 HVYK2/4 黒褐色土 軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。ローム層10%。LB10YR3/4黄褐色 (厚10~20cm) 5%。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~10cm) 7%。
 4層 HVYK2/4 黒褐色土 中～軽しくりや中～軽し。磁片有。炭化物質見入。ローム層10%。LB10YR3/4黄褐色 (厚2~10cm) 3%。LB10YR3/4黄褐色 (厚2~10cm) 3%。
 5層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色 (厚3~10cm) 7%。
 6層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色 (厚3~10cm) 2%。
 7層 HVYK2/2 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色 (厚3~10cm) 2%。LB10YR3/4黄褐色 (厚10~20cm) 2%。LB10YR3/4黄褐色 (厚10~20cm) 2%。
 8層 HVYK2/4 黒褐色土 10YR2/1灰色赤褐色 (厚3~10cm) 7%。LB10YR3/4黄褐色 (厚10~20cm) 5%。ローム層10%。
 9層 HVYK2/4 黒褐色土 中～軽しくりや中～軽し。磁片有。ローム層30%。LB10YR3/4黄褐色 (厚3~20cm) 10%。LB10YR3/4黄褐色 (厚5~20cm) 7%。

第34号土坑

30F-4

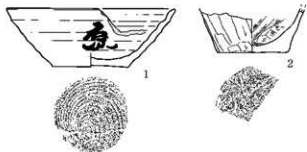
- 1層 HVYK2/1 黒色土 10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 2%。焼土。
 2層 HVYK2/1 黒色土 10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 3%。焼土。
 3層 HVYK2/1 黒色土 10YR6/4暗黄褐色のローム層 (厚1~10cm) 1%。焼土。
 4層 HVYK2/1 黒色土 10YR6/4暗黄褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色のローム層 (厚1~10cm) 2%。焼土。
 5層 HVYK2/1 黒色土 10YR6/4暗黄褐色の混合土 (厚1~10cm) 1%。焼土。
 6層 HVYK2/1 黒色土 10YR6/4暗黄褐色のローム層 (厚1~10cm) 3%。焼土。
 7層 HVYK2/1 黒褐色土 10YR6/4暗黄褐色の混合土 (厚2~20cm) 10%。焼土。
 8層 HVYK2/4 黒色土 10YR6/4暗黄褐色の混合土 (厚1~20cm) 30%。10YR2/1灰色土層見入。焼土。
 9層 HVYK2/2 黒褐色土 10YR6/4暗黄褐色のローム層と土層との混合土。焼土。
 10層 HVYK2/1 黒褐色土 10YR2/2土質褐色の混合土。10YR7/2/2C土質褐色の混合土 (厚10cm) 15%。焼土。

第35号土坑

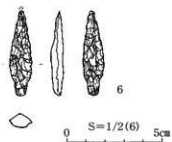
30F-5

- 1層 HVYK2/4 黒褐色土 炭化物質見入。ローム層中層。
 2層 HVYK2/4 黒褐色土 ローム層中層。
 3層 HVYK2/2 黒褐色土 炭化物質見入。土層中層。ローム層中層。
 4層 HVYK2/2 黒褐色土 炭化物質見入。ローム層中層。
 5層 HVYK2/2 黒褐色土 ローム層中層。
 6層 HVYK2/4 黒褐色土 炭化物質見入。ローム層中層。
 7層 HVYK2/4 黒褐色土 ローム層中層。

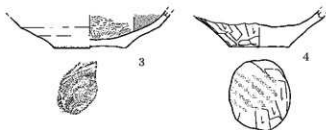
第3号土坑



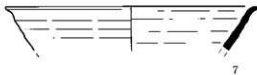
第8号土坑



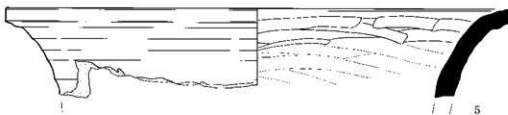
第5号土坑



第9号土坑



第6号土坑



第12号土坑

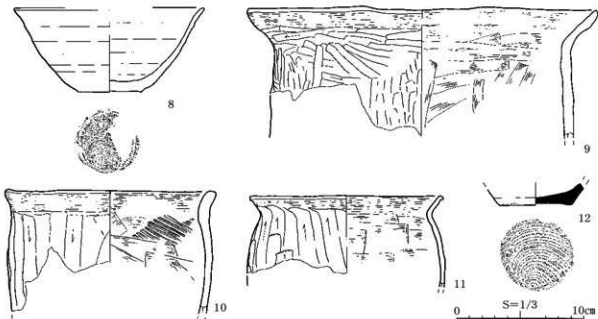
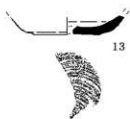
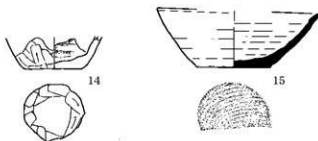


图98 土坑遺物(1)

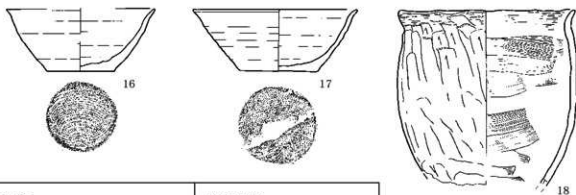
第23号土坑



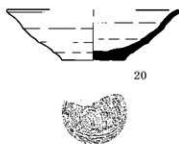
第25号土坑



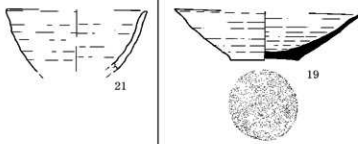
第26号土坑



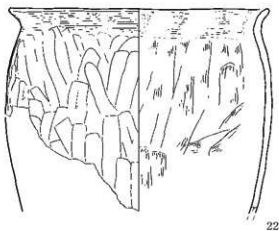
第27号土坑



第28号土坑



第35号土坑



0 S=1/3 10cm

図99 土坑遺物(2)

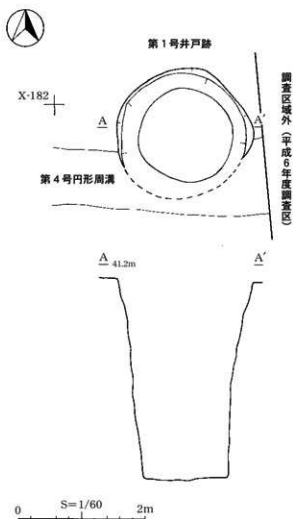


図100 第1号井戸跡

9 溝跡 (SD)

計26条の溝跡が検出された。堆積土の状況や遺物の出土状況においても様でない。溝跡の性格や機能についても、自然地形の傾斜に沿ったもの、直交するもの、屈曲するものがあり、範囲を画す区画溝や境界を示すもの、或いは、排水などの役割を担っていたものなど、様々な用途が考えられる。

第1号溝跡 (SD-01) (図101・112)

【位置】 Y-164・165グリッドに位置する。

【重複】 風倒木と重複しており、本遺構が古い。

【形態・規模】 確認面での幅は50～60cm、底面幅は30～40cm、深さは20～30cmで、断面形状は逆台形状を呈している。

【堆積土】 堆積土は7～10層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 図示できた遺物は5点。土師器坏3点、土師器甕1点、基石1点である。

【結】 火山灰降下以前の遺構の可能性が高い。風倒木に壊された円形周溝の可能性も考えられる。

第2号溝跡 (SD-02) (図102・112)

【位置】 V～AC-171～173グリッドに位置する。南に位置する第3号溝跡とほぼ平行している。2条平行して東西方向に伸びており、規模の大きい方をA、小さい方をBと呼称する。

【重複】 第2・6・10号円形周溝、第11号土坑、第26号溝跡と重複し、どの遺構よりも新しいことが堆積土の観察から確認できる。

【形態・規模】 平行する規模の異なる溝が2条、東西方向に約32mにわたって伸びる。西から東に向かって標高が低くなり、深さも増していく傾向が見受けられる。確認面での東西の比高差は約1m50cmを測る。溝の幅はAが50～60cm、Bが40～60cm、底面幅はAが16～22cm、Bが12～20cm、深さはAが40～50cm、Bが14～40cmである。断面形はAが縦長の逆台形状、Bがやや幅広い逆台形状を呈している。

【堆積土】 堆積土はAが4～5層、Bが3～4層に分層できた。双方とも黒色土が主体であり、自然堆積の状況を示す。この黒色土は、重複する遺構との切り合い関係によって相対的に新しい堆積土であることがわかる。溝が走る範囲は、古くから何らかの境界であったためか、木の根等の攪乱による堆積土の乱れが上面に認められる。

【出土遺物】 図示できた遺物は3点。土師器坏2点、須恵器坏1点である。

【結】 本遺構は、白頭山火山灰降下からかなりの時期差があるものと考えられる。

第3号溝跡 (SD-03) (図103・104・112)

【位置】 V～AC-161～163グリッドに位置し、北東方向から南西方向に向かって伸びている。西側はグリッドで調査区域外に伸びている。東側はグリッドで平成6年度の調査区に接している。平成6年調査時の第11・13号溝跡と同一の遺構である。規模の大きい方をA、小さい方をBと呼称する。

【重複】 第1・7号住居跡、第5・6・8号溝跡と重複している。竪穴住居跡より新しく、明確には分らないが他の重複する溝跡よりも新しいものと考えられる。

【形態・規模】平行する規模の異なる溝が2条、東西方向に約40mにわたって延びる。西から東に向かって標高が低くなり、深さも増していく傾向が見受けられる。確認面での東西の比高差は約1m50cmを測る。溝の幅はAが58～62cm、Bが45～50cm、底面幅はAが20～26cm、Bが18～20cm、深さはAが32～52cm、Bが20～45cmである。断面形はA・B共に逆台形状を呈している。

【堆積土】覆土はaが6層、bが5～6層に分層できた。双方とも黒色土が主体であり、自然堆積の状況を示す。この黒色土は、重複する遺構との切り合い関係によって相対的に新しい堆積土であることがわかる。溝が走る範囲は、古くから何らかの境界であったためか、木の根等の攪乱による堆積土の乱れが第2号溝跡同様上面に認められる。

【出土遺物】図示できた遺物は3点。土師器坏1点、須恵器坏2点である。

【小結】本遺構は、白頭山火山灰降下からかなりの時期差があるものと考えられる。

第4号溝跡 第4号円形周溝としたため欠番とした。

第5号溝跡 (SD-05) (図103・104・113・114)

【位置】AC-160～162グリッドにかけて位置している。

【重複】北側はAC-162グリッドで、第3号溝跡aと重複している。新旧関係は不明であるが同時期より古い可能性が高い。南北に検出され、南側はAC-160グリッドで高屋敷館遺跡A区の第120号溝跡に近接しているが、確認面での重複は認められなかった。

【形態・規模】北から南に向かって直線的に約7m程延びている。確認面での幅は40～50cm、深さは20～33cmを測る。断面形状は逆台形状を呈している。

【堆積土】5層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は16点。土師器坏5点、土師器甕3点、須恵器皿1点、須恵器坏4点、須恵器壺1点、須恵器耳皿1点、擦り痕を持つ石製品が1点である。須恵器耳皿は酸化焰焼成である。

【小結】出土遺物から、10世紀後半の溝跡と考えられる。

第6号溝跡 (SD-06) (図103・104)

【位置】AD-161・162グリッドに位置している。

【重複】認められない。第5号溝跡の西側にほぼ平行して検出されている。

【形態・規模】長さは3m30cm。確認面での幅は18～20cm、深さは6cm程で、断面形状は逆台形状を呈している。

【堆積土】1層である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。

第7号溝跡 第7号円形周溝としたため欠番とした。

第8号溝跡 (SD-08) (図103・104)

【位置】 AB・AC-161・162グリッドに位置している。

【重複】 第3号溝跡aと直交する様に重複している。新旧関係は不明である。

【形態・規模】 長さは4m12cm。確認面での幅は52～1m20cm、深さは10cm程で、断面形状は幅広い逆台形状を呈している。

【堆積土】 1層である。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 詳細な時期は不明である。

第9号溝跡（SD-09）（図103・104）

【位置】 AC-161・162グリッドに位置している。

【重複】 第3号溝跡aと直交する様に重複している。新旧関係は不明である。

【形態・規模】 長さは2m64cm。確認面での幅は10～12cm、深さは6cm程で、断面形状は幅広い逆台形状を呈している。

【堆積土】 2層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 詳細な時期は不明である。

第10号溝跡 第10号円形周溝としたため欠番とした。

第11号溝跡 第7号土坑としたため欠番とした。遺物1点は第11号溝跡出土で揭示した。

第12号溝跡 第2号溝状土坑としたため欠番とした。遺物1点は第12号溝跡出土で揭示した。

第13号溝跡 第3号溝状土坑としたため欠番とした。

第14号溝跡（SD-14）（図105）

【位置】 Y・AA-181・182グリッドに位置している。

【重複】 第21号竪穴住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

【形態・規模】 第21号竪穴住居跡の南壁東側から南方向に延び、AA-182グリッド南西部で鈍角（約120°）に曲がり南東方向に延びている。確認面での幅24～34cm、底面幅10～22cm、深さは20～28cmを測る。

【堆積土】 4層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 詳細な時期は不明である。

第15号溝跡（SD-15）（図105・114）

【位置】 X-178～W-181グリッドにかけて位置している。

【重複】第4号円形周溝及び第6号竪穴住居跡外周溝と重複しているが、全ての遺構より新しいものと思われる。

【形態・規模】第4号円形周溝南壁から南方向に延び、X-178グリッドで完結している。確認面での幅38～54cm、底面幅16～36cm、深さは18～26cmを測る。

【堆積土】3層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は1点。土師器環が出土している。

【小結】詳細な時期は不明である。

第16号溝跡（SD-16）（図77・114）

【位置】W-179・180グリッドに位置している。

【重複】第6号竪穴住居跡及び第9号円形周溝と重複している。第6号竪穴住居跡より古く、第9号円形周溝とは不明である。

【形態・規模】円形を呈していたものと思われる。推定外径5m40cm、推定内径4m00cmで、幅は70～86cm、深さは59～71cmである。底面は起伏が少ない。断面は逆台形状を呈する。

【堆積土】3層に分層できた。自然堆積の様相を呈する。白頭山火山灰の混入は認められない。

【出土遺物】図示できた遺物は1点。土師器環が出土している。

【小結】比較的小規模な円形周溝の可能性も考えられる。第9号円形周溝に付随したものであろうか。

第17号溝跡（SD-17）（図24・25・115・116）

【位置】W-179・180グリッドに位置している。

【重複】第6号竪穴住居跡外周溝と重複している。明確な新旧関係は不明である。外周溝が拡張された可能性も考えられる。

【形態・規模】平面形はやや幅広の溝状を呈している。確認面での規模は幅2m10cm～3m20cm、底面幅は70～86cm、深さは59～71cmである。底面は起伏が少ない。断面は逆台形状を呈する。

【堆積土】15～17層に分層できた。人為堆積の様相を呈する。白頭山火山灰の混入は認められない。

【出土遺物】土師器皿1点、土師器環14点、土師器甕1点、須恵器環2点、小型鉢1点、砥石1点を図示した。

【小結】かなり規模の大きい溝跡である。

第18号溝跡（SD-18）（図106・116）

【位置】AB・AC-178・179グリッドに位置する。

【重複】認められない。

【形態・規模】西側が調査区域外に延びているため全体形状は不明である。確認できる距離は6m24cmを測る。幅は40～50cm、深さは20～30cmである。底面は起伏が少なく、断面形は逆台形状である。西から東に向かって傾斜している。

【堆積土】2層に分層できた。黒褐色土が主体で自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は1点。須恵器長頸壺が出土している。

【小結】詳細な時期は不明である。

第19号溝跡 欠番とした。

第20号溝跡 (SD-20) (図106)

【位置】第1号壕跡・第5号円形周溝・第1号掘立柱建物跡に挟まれた空間、Y-184~A B-185グリッドにかけて位置する。

【重複】直接的な切り合いは第1号壕跡だけである。本遺構が新しいものと考えられる。

【形態・規模】途中で2箇所程途切れるが、長さは8m53cm、確認面での幅は18~30cm、深さは10cm程である。底面はやや起伏を持ち西北西から東南東へ緩やかに傾斜し、第1号壕跡と接している。断面形は逆台形状を呈する。

【堆積土】4層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。白頭山火山灰降下後、かなりの時期差をもっていた可能性が高い。

第21号溝跡 (SD-21) (図9)

【位置】第3号竪穴住居跡付近、Y-184~A B-185グリッドにかけて位置する。

【重複】第3号竪穴住居跡と一部重複している。明確な新旧関係は不明である。

【形態・規模】第3号竪穴住居跡の東壁北端から東側に延びている。長さは3m26cm、確認面での幅は30~52cm、深さは20~70cm程である。底面はやや起伏を持ち西から東へ緩やかに傾斜している。断面形は逆台形状を呈する。

【堆積土】5層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。第3号竪穴住居跡の外延溝の可能性も考えられる。

第22号溝跡 (SD-22) (図75)

【位置】第7号円形周溝。X-グリッドに位置する。

【重複】第7号円形周溝と重複している。新旧関係は本遺構が新しいものと考えられる。

【形態・規模】確認面での幅70cm、底面幅45cm、深さは32cmを測る。

【堆積土】2層に分層できた。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】図示できた遺物は1点。土師器坏で、底面に多量の煤が付着している。

【小結】詳細な時期は不明であるが、平安時代の可能性が高い。

第23号溝跡 (SD-23) (図107)

【位置】AA・A B-188グリッドに位置する。

【重複】第9・25号竪穴住居跡及び第3号壕跡と重複している。切り合い関係の遺構のほとんどが人為的な堆積状況を呈していることもあり、確認面や堆積状況で確認することは困難であったが、本

遺構が全ての遺構より新しい可能性が高い。

【形態・規模】部分的ではあるが、確認できた最長は4m50cm、幅28～50cm、深さは9cm程である。断面形は幅広の逆台形状を呈している。

【堆積土】5層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。

第24号溝跡（SD-24）（図107）

【位置】Y・AA-177・178グリッドに位置する。

【重複】第1号円形周溝と重複している。新旧関係は本遺構が新しい。

【形態・規模】Y-178グリッドで約90°屈曲している。検出された規模は東西4m80cm、南北6m36cm、幅20～32cm、深さは16～20cmである。底面は起伏が少なく、断面形は逆台形状を呈する。

【堆積土】1層である。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明であるが、周辺の竪穴住居跡に付随する境界溝の可能性が高い。

第25号溝跡（SD-25）（図108）

【位置】Y・AA-172・173グリッドに位置する。

【重複】第2号溝跡と重複している。新旧関係は本遺構が古いことが堆積土の状況から確認できる。

【形態・規模】弧状に検出された。全長は直線距離で4m20cmを測る。幅は38～60cm、深さは52cmである。底面は起伏が少ない。断面形は逆台形状を呈している。

【堆積土】黒色土主体である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】形状から、比較的規模の小さい円形周溝の可能性も考えられる。

第26号溝跡（SD-26）（図108・116）

【位置】X・Y・AA-172～174グリッドに位置する。

【重複】第3号円形周溝、第12号土坑、第25号溝跡と重複している。新旧関係は第3号円形周溝・第25号溝跡より新しく、第12号土坑より古いことが堆積土の状況から確認できる。

【形態・規模】弧状に検出された。全長は直線距離で7m80cmを測る。幅は30～72cm、深さは50～72cmを測る。底面は起伏が少ない。断面形は逆台形状を呈している。

【堆積土】黒色土主体である。

【出土遺物】図示できた遺物は1点。土師器坏で、底面は回転糸切りの後ヘラケズリが施される。

【小結】形状及び検出状況から、第11号竪穴住居跡に付随する外周溝の可能性も考えられる。

第27号溝跡（SD-27）（図109・116）

【位置】W・X・Y-173・174グリッドに位置する。

【重複】第3号円形周溝及び第11号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は全ての遺構より新しいことが堆積土の状況から確認できる。

【形態・規模】緩い弧状に検出された。全長は直線距離で約5m00cm、幅は1m10cm～1m40cm、深さは46～58cmを測る。底面はやや起伏が見られ、断面形は逆台形状を呈している。

【堆積土】黒色土主体で、8層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】図示できた遺物は3点。土師器坏1点、土師器塼1点、小型壺1点である。

【小結】詳細な時期は不明であるが、やや丸みを帯びる土師器塼が出土していることから、9世紀以降と思われる。

第28号溝跡（SD-28）（図109）

【位置】AC-168～AE-169グリッドにかけて位置する。

【重複】認められない。

【形態・規模】西側は調査区域外に伸び、東側はAC-168グリッドで消滅する。確認出来た長さは約8m、確認面での幅は24～30cm、深さは20～50cm程である。底面は数箇所に柱穴状の落ち込みを有し、やや起伏を持ちながら西北西から東南東へ緩やかに傾斜している。断面形は逆台形及び細長い逆台形状を呈している。

【堆積土】最大4層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。白頭山火山灰の堆積は見られないが、西側に隣接する第22・28号竪穴住居跡の東壁壁と同じ様な軸を持って存在することから、同遺構に伴う区画溝の可能性も考えられる。

第29号溝跡（SD-29）（図110）

【位置】AB-169・170グリッドにかけて位置する。

【重複】認められない。

【形態・規模】一部途切れるが南南西から北北東方向へ延びている。細長い溝状を呈し、数箇所に柱穴状の落ち込みを有している。

【堆積土】最大8層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。一部柱根を確認できる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。堆積土中に白頭山火山灰の堆積は見られないが、北側に隣接する第22・28号竪穴住居跡の南壁と同じ様な軸を持って存在することから、同遺構に伴う区画溝の可能性も考えられる。

第30号溝跡（SD-30）（図110）

【位置】AE-165グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】西側が調査区域外に延びているため全容は不明。確認できる長さは最長2m10cm、

幅は66～94cmを測る。深さは70cmで、底面はかなり起伏が多い。断面形は逆台形状を呈している。

【堆積土】10層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明であるが、堆積土の状況から、第11号溝跡と同じ様な性格を持つ遺構と考えられる。

第31号溝跡（SD-31）（図110）

【位置】AE-166グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】西側が調査区域外に延びているため全容は不明。弧状を呈するものと思われる。確認できる長さは直線距離で約2m28cm、幅は最大38cmを測る。深さは16cmで、底面はやや起伏を持っており、1箇所に柱穴状の落ち込みを有する。断面形は不整な「U」字状を呈している。

【堆積土】4層に分層できた。人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。

第32号溝跡（SD-32）（図111）

【位置】V・W-174グリッドに位置する。

【重複】第4・18・25号土坑と重複している。新旧関係は本遺構が全ての遺構より新しい。

【形態・規模】西側が第25号土坑と重複しているため全容は不明。直線状に延びていたものと思われる。確認できる長さは4m32cm、幅は20～30cmを測る。深さは最大24cmで、底面はほぼ平坦である。断面形は縦長の逆台形状を呈している。

【堆積土】6層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。

第33号溝跡（SD-33）（図111）

【位置】AA・AB-189グリッドに位置する。

【重複】第15・25号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は不明であるが、本遺構が新しい可能性が高い。

【形態・規模】第25号竪穴住居跡の北壁から北北東方向に延び、東方向に屈曲しながら第15号竪穴住居跡の南西壁に続いている。確認できる長さは直線距離で1m90cm、幅は最大28cmを測る。深さは22cmで、底面は起伏が多い。断面形は逆台形状を呈している。

【堆積土】2層に分層できた。自然堆積の様相を呈している。

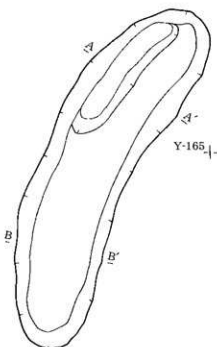
【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】詳細な時期は不明である。

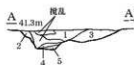
（笹森）



AA-165+



0 S=1/60 2m



第1号溝跡

2F6.5

- 1層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 50cm 以上、粘土、硬化物散在層、中半硬土
2層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 20cm 1FVXC1000層、中半硬土
3層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 50cm 1FVXC1000層、粘土、硬化物散在層、硬土
4層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 50cm 1FVXC1000層、中半硬土
5層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 20cm 1FVXC1000層、硬土

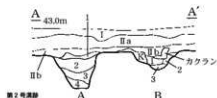


第1号溝跡

2F6.5

- 1層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 100cm、硬化物散在層、硬土
2層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 50cm、硬化物散在層、硬土
3層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 50cm、硬土散在層、硬土
4層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 100cm 1FVXC1000層、硬土
5層 1FVXC1 黒色土 1FVXC1000層構造体中心部 (厚) > 100cm 1FVXC1000層、硬土

図101 第1号溝跡



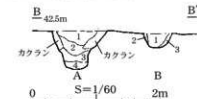
第2号溝跡

250.6

- 1層 10YR5/2 赤褐色土 硬?
- 2層 10YR5/2 赤褐色土 硬?
- 2a層 10YR2/2 赤褐色土 硬? 砂+土粒子層状に混入。硬?
- 2b層 10YR2/2 赤褐色土 10YR5/2赤褐色土0.5m厚 硬?→3m厚 2.5層入。中硬?
- 2c層 10YR2/2 赤褐色土 10YR5/2赤褐色土0.5m厚 硬?→2m厚 1.5層入。硬?
- 2d層 10YR2/2 赤褐色土 10YR5/2赤褐色土0.5m厚。10YR5/2赤褐色土0.5m厚 硬?→1.5m厚 20%混入。硬?
- 4層 10YR7/8 赤褐色土 同色土層0.5m厚。10YR2/2赤褐色土10%混入。硬?

261

- 1層 10YR5/2 赤褐色土 硬?
- 2層 10YR5/2 赤褐色土 硬?
- 2a層 10YR2/2 赤褐色土 砂+土粒子層状に混入。硬?
- 1層 10YR2/2 赤褐色土 10YR5/2赤褐色土0.5m厚 硬?→3m厚 1.5層入。硬?
- 2層 10YR2/2 赤褐色土 10YR5/2赤褐色土0.5m厚硬?
- 2層 10YR5/2 赤褐色土 同色土層0.5m厚。硬?



259.4

- 1層 10YR5/2 赤褐色土 砂+土粒子層状に混入。硬?
- 2層 10YR5/2 赤褐色土 10YR2/2赤褐色土0.5m厚 硬?→3m厚 赤褐色土。中硬?
- 2層 10YR5/2 赤褐色土 10YR2/2赤褐色土0.5m厚。10YR2/2赤褐色土0.5m厚
- 4層 10YR7/8 赤褐色土 同色土層0.5m厚。10YR2/2赤褐色土10%混入。硬?

263

- 1層 10YR5/2 赤褐色土 10YR2/2赤褐色土0.5m厚 硬?→赤褐色土。硬?
- 2層 10YR5/2 赤褐色土 10YR2/2赤褐色土0.5m厚 硬?→3m厚 1.5層入。硬?
- 3層 10YR5/2 赤褐色土 10YR2/2赤褐色土0.5m厚。10YR2/2赤褐色土 砂+土厚 硬?→3m厚 1.5層入。硬?

W-173†

W-171†

第2号溝跡

Y-173†

第25号溝跡

Y-171†

第6号円形周溝

第2号円形周溝

第10号円形周溝

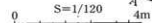
第11号土坑

第2号溝跡

第10号円形周溝

AD-171†

図102 第2号溝跡



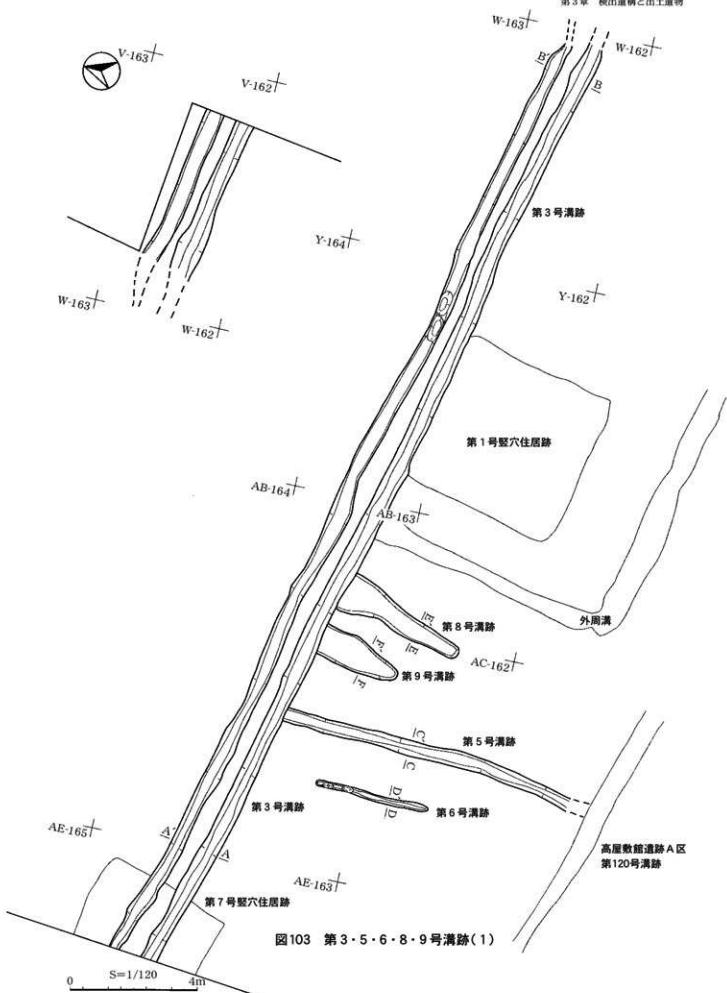
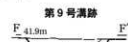


図103 第3・5・6・8・9号溝跡(1)



第3号溝跡

SP/A-A'

- LA1
 1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~3mm) 1%, 非常に少ない
 2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (径1~3mm) 2%, 10YR2/1の黒色土少量混入、非常に少ない
 3層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~5mm), LB (径10~20ミリ) 3%, 非常に少ない
 4層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~2mm) 1%未満、非常に少ない
 5層 10YR2/1 黒褐色土 ローム粒 (径1~3mm) 2%, 10YR2/1の黒色土少量混入
 6層 10YR3/1 黒褐色土 LB (径5~30mm) 5%

[B]

- 1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~3mm) 1%, 少ない
 2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~2mm) 3%, 少ない
 3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (径1~5mm) 2%, 少ない
 4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (径1~5mm) 3%, 少ない
 5層 10YR2/0 黄褐色土 ローム粒、10YR2/2の黒褐色土少量混入、少ない

SP/B-B'

LA1

- 1層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒 (径1~3mm) 5%, しまり (有)
 2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~10mm), LB (径12~30mm) 7%, 10YR1.7/1の黒色土少量混入、しまり (有)
 3層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒 (径1~3mm) 3%, 10YR2/1の黒色土少量混入、しまり (有)
 4層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~5mm) 3%, 10YR1.7/1の黒色土少量混入、しまり (有)
 5層 10YR3/2 黒褐色土 LB (径5~10mm) 10%
 6層 10YR6/0 明黄褐色土 褐色主体のローム層

[B]

- 1層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒 (径1~5mm) 3%, しまり (有)
 2層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒 (径1~5mm) 7%, しまり (有)
 3層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒 (径1~5mm) 5%, しまり (有)
 4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (径1~5mm) 3%, 10YR1.7/1の黒色土少量混入、しまり (有)
 5層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (径1~5mm) 5%, しまり (有)
 6層 10YR1.7/1 黒色土 LB (径3~25mm) 10%

第5号溝跡

SP/C-C'

- 1層 10YR2/1 黒色土 焼土粒 (径1~5mm) 1%
 2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~2mm) 1%, 焼土粒 (径1~3mm) 1%, しまり (やや有)
 3層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~3mm) 2%, 焼土粒 (径1~2mm) 1%未満、しまり (有)
 4層 10YR2/1 黒色土 LB (径1~3mm) 5%, 焼土粒 (径1~2mm) 1%, しまり (有)
 5層 10YR2/3 暗褐色土 褐色主体ローム層、10YR2/1の黒色土ごく少量混入

第6号溝跡

SP/D-D'

- 1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~2mm) 1%, 焼土粒 (径3mm) 1%, しまり (やや有)

第8号溝跡

SP/E-E'

- 1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~5mm) 3%, 10YR2/2の黒褐色土少量混入、しまり有

第9号溝跡

SP/F-F'

- 1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~8mm) 2%, しまり (有)
 2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (径1~8mm) 5%, しまり (有)

図104 第3・5・6・8・9号溝跡(2)

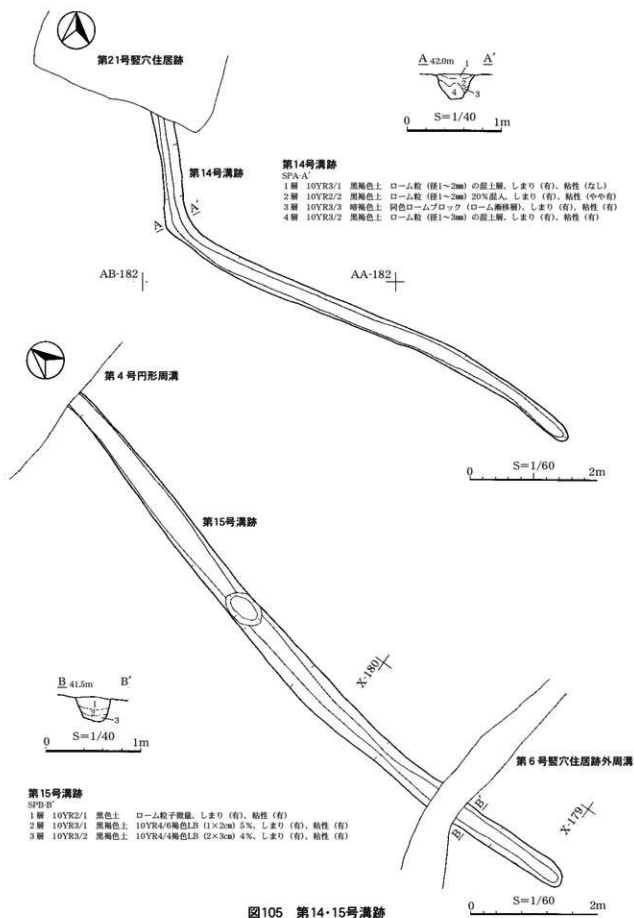


図105 第14-15号溝跡

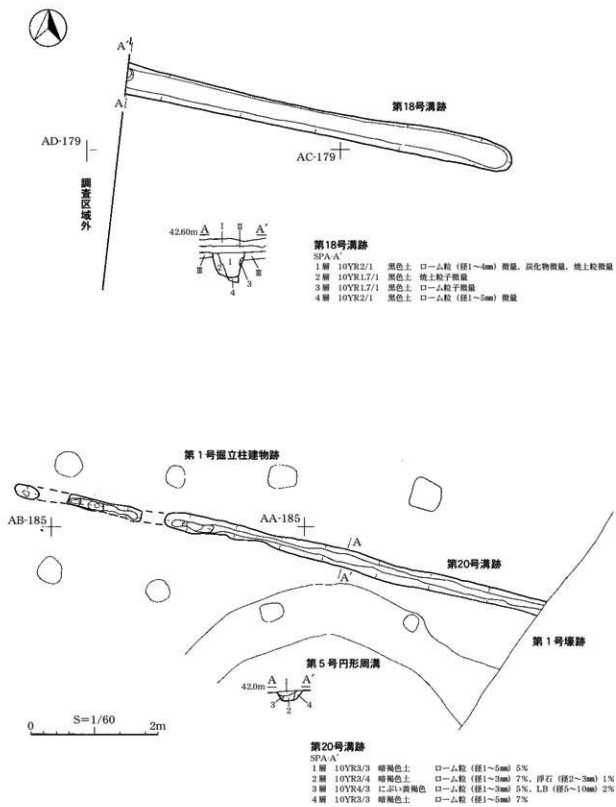


図106 第18・20号溝跡

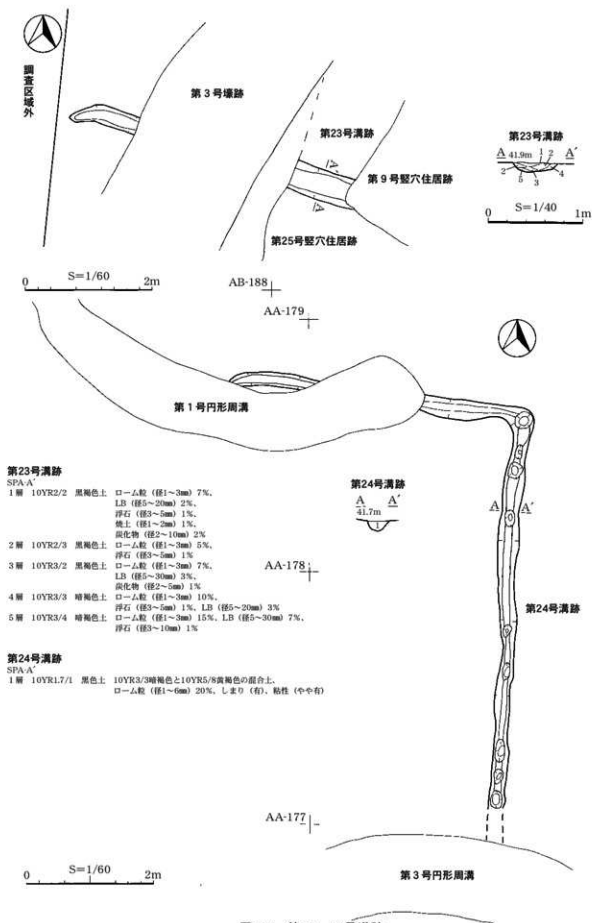


図107 第23・24号溝跡

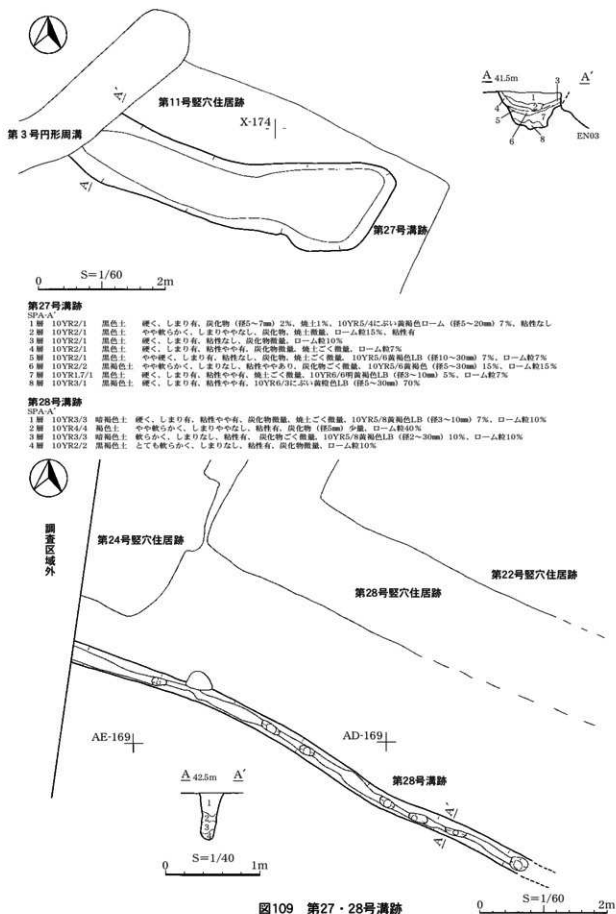
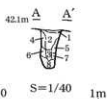


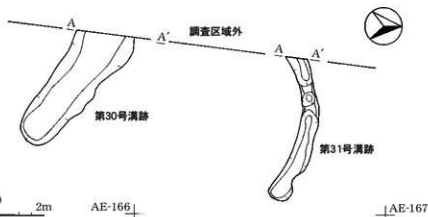
図109 第27・28号溝跡



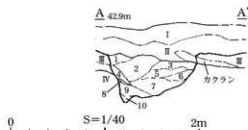
第29号溝跡

9P/A

- 1層 1979X13 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、粘土と砂の混在、砂は20%程度、砂は10%程度
- 2層 1979X13 硬質遺土 中硬土、土質中硬、粘質土、1979X13表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度、砂は10%程度
- 3層 1979X13 硬質遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X13表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度、砂は10%程度
- 4層 1979X13 硬質遺土 中硬土、土質中硬、粘質土、1979X13表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度、砂は10%程度
- 5層 1979X13 硬質遺土 中硬土、土質中硬、粘質土、1979X13表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度、砂は10%程度
- 6層 1979X13 硬質遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X13表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度、砂は10%程度
- 7層 1979X13 硬質遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X13表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度、砂は10%程度
- 8層 1979X13 硬質遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X13表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度、砂は10%程度



0 S=1/60 2m AE-166



第30号溝跡

9P/A

- 1層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 2層 1979X17 表層遺土 中硬土、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 3層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 4層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 5層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 6層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 7層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 8層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 9層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 10層 1979X17 表層遺土 中硬土、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度



第31号溝跡

9P/A

- 1層 1979X17 表層遺土 中硬土、土質中硬、粘質土、砂は10%程度
- 2層 1979X17 表層遺土 中硬土、土質中硬、粘質土、砂は10%程度
- 3層 1979X17 表層遺土 硬く、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度
- 4層 1979X17 表層遺土 中硬土、土質中硬、粘質土、1979X17表層遺土より厚さ10cm程度、砂は10%程度

図110 第29・30・31号溝跡

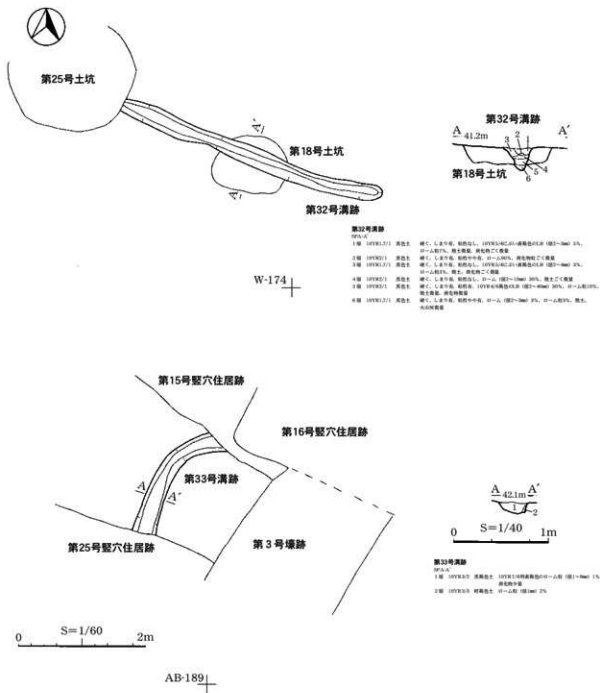
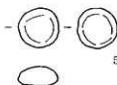
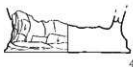
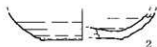
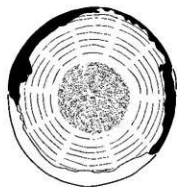


図111 第32・33号溝跡

第1号溝跡



0 S=1/2(5) 5cm

第2号溝跡



第4号溝跡



0 S=1/3 10cm

第3号溝坑



图112 溝跡出土遺物(1)

第5号溝跡(1)

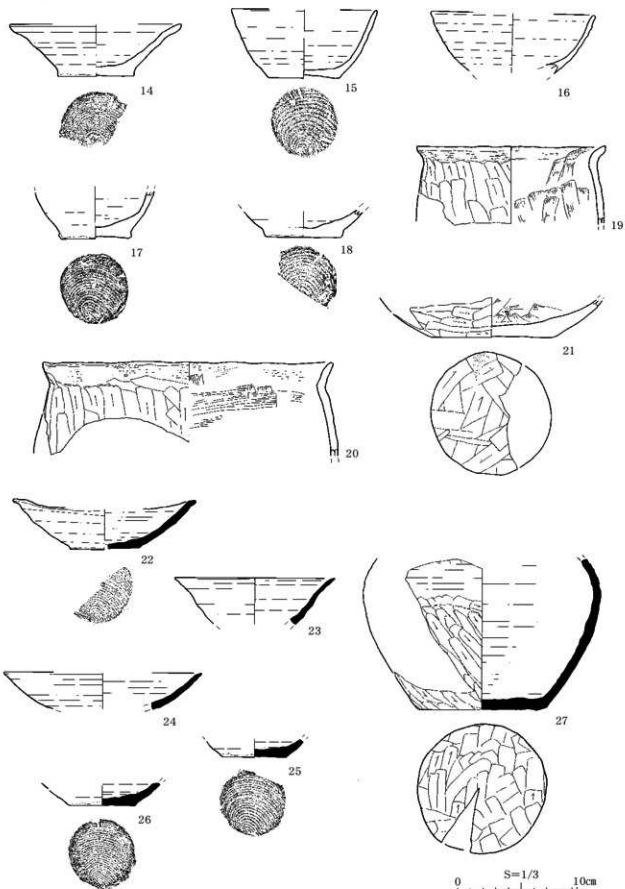
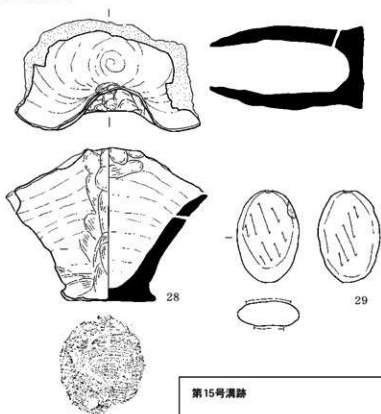


図113 溝跡出土遺物(2)

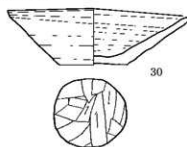
第5号溝跡(5)



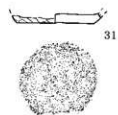
0 S=1/2 (28・29) 5cm

0 S=1/3 10cm

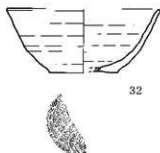
第11号溝跡



第12号溝跡



第15号溝跡



第16号溝跡



図114 溝跡出土遺物(3)

第17号溝跡(1)

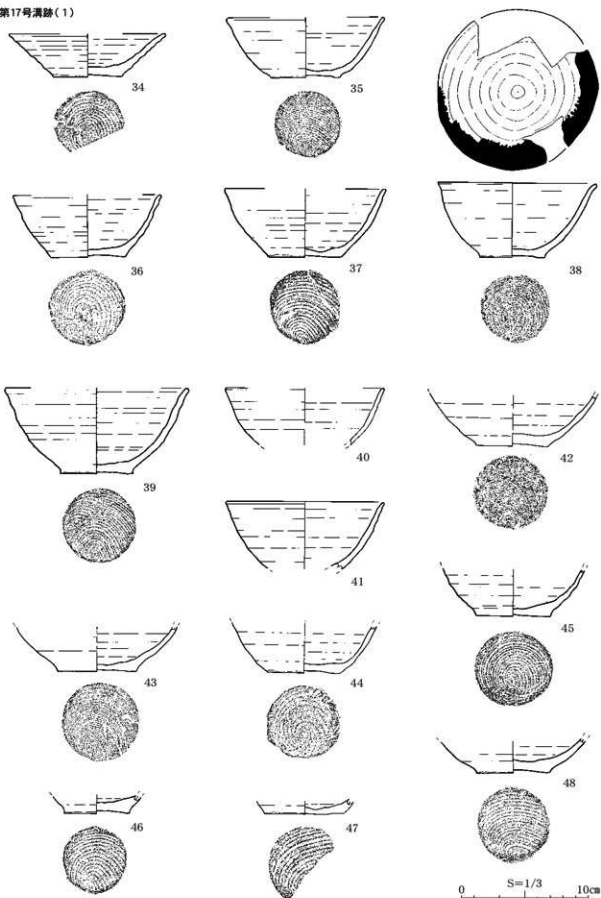
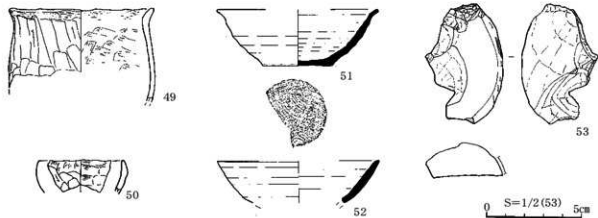
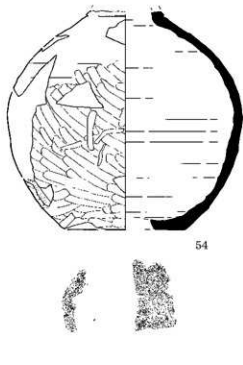


図115 溝跡出土遺物(4)

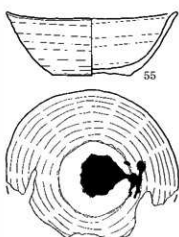
第17号溝跡(2)



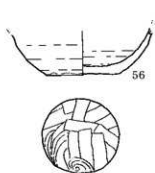
第18号溝跡



第21号溝跡



第26号溝跡



第27号溝跡

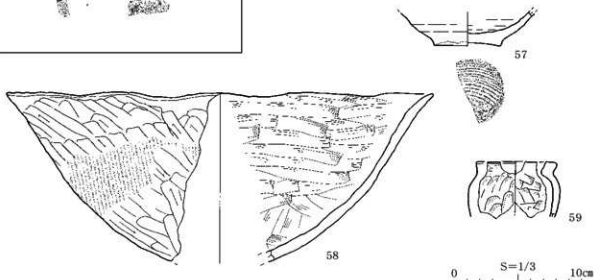


図116 溝跡出土遺物(5)

10 土器埋設遺構（SR）

第1号土器埋設遺構（SR-01）（図117・118）

【位置】 X-181グリッドに位置する。

【重複】 第1号風倒木痕と重複し、本遺構が新しいものと思われる。

【検出状況】 土師器甕が2個体、口縁部を合わせながら横位で検出されている。各々の土器底部がほぼ東西方向を向いており、軸方向はN-72°-Wを示す。検出面では土器が土圧によってかなり破損している状況が確認されている。

【堆積土】 風倒木に由来する黒色土中で検出されたため、明確な掘り方は認められなかった。土器内堆積土は2層に分層され、焼土・炭化物を少量混入する。堆積土中にB-Tmの混入は認められない。

【出土遺物】 出土した遺物は土師器甕が2個体で、かなり破損していたが、ほぼ全体形状を復元できた。図118-2は土師器甕。ロクロ成形で、口径18.3cm、底径9.2cm、器高19.4cmを測る。最大径は口縁部に持つ。口縁は「く」の字状に外反している。底面はヘラケズリ調整が施される。胴部外面は中～下位にかけてヘラケズリ調整が施されている。図118-3も土師器甕。ロクロ成形で、口径24.6cm、底径8.0cm、器高29.5cmを測る。最大径は口縁部に持つ。口縁は「く」の字状に外反している。底面はヘラケズリ調整が施される。胴部外面は上～下位にかけてヘラケズリ調整が施されている。その他、内面黒色処理が施された土師器甕の破片が1点出土している。

【小結】 2個体の甕の口縁部を合わせ横位に埋設している。本遺跡の北側約1km程の所に位置する野尻(1)遺跡や、青森市の合子沢松森(2)遺跡でも検出例が見られるが、県内においても類例はそれほど多くはない。出土遺物から、9世紀前半の遺構である可能性が高く、墓、或いは道路（十字路）の地鎮に関連した遺構と考えられる。

（笹森）

11 風倒木痕 (S X)

第1号風倒木痕 (S X-01) (図117・119)

【位置】 X-181グリッド周辺に位置している。

【重複】 第1号土器埋設遺構と重複している。風倒木の方が古いことが堆積土の状況から確認できる。

【平面形・規模】 黒色土中のため明確な範囲は不明であるが、3m×5m程の範囲に収まるものと思われる。

【壁・底面】 黒色土中のため、明確な壁や底面は不明である。

【堆積土】 黒色土に白色粘土が混じり合っている。

【出土遺物】 図示できた遺物は6点。黒色土中からの遺物がほとんどである。

【小結】 第1号土器埋設遺構が造られる以前の風倒木痕であるが、詳細な時期は不明である。混入遺物から見れば、9世紀前半が想定される。

(笹森)

12 焼土遺構 (S N)

第1号焼土遺構 欠番とした。

第2号焼土遺構 (S N-02) (図120・121)

【位置】 Y-174グリッドに位置する。

【重複】 第20号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しいものと思われる。

【形態・規模】 45cm～72cmの楕円形を呈している。

【堆積土】 3層に分層され、焼土を多量に混入する。

【出土遺物】 土師器環が1点出土している。

【小結】 白頭山火山灰降下以前の遺構と思われる。

第3号焼土遺構 (S N-03) (図120・121)

【位置】 Y-174グリッドに位置する。

【重複】 第20号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しいものと思われる。

【形態・規模】 90cm～1m30cmの楕円形を呈している。

【堆積土】 3層に分層され、焼土・炭を多量に混入する。

【出土遺物】 土師器甕が2点、酸化焰焼成の須恵器環が2点出土している。

【小結】 白頭山火山灰降下以前の遺構と思われる。

第4号焼土遺構 (S N-04) (図120)

【位置】 調査区北端、AA-193グリッドに位置する。

【重複】 第27号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しいものと思われる。

【形態・規模】 36～46cmの不整な円形を呈している。

【堆積土】 3層に分層され、焼土・炭を多量に混入する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】白頭山火山灰降下後の遺構と思われる。

第5号焼土遺構（S N-05）（図120）

【位置】AA-193・194グリッドに位置する。

【重複】第27号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。

【形態・規模】32～40cmの楕円形を呈している。

【堆積土】4層に分層され、焼土を多量に混入する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】白頭山火山灰降下後の遺構と思われる。

第6号焼土遺構（S N-06）（図120）

【位置】AA-194グリッドに位置する。

【重複】なし。

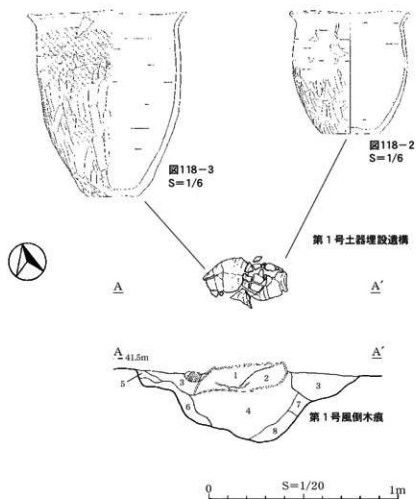
【形態・規模】80cm～1 m24cmの楕円形を呈している。深さは最大60cmを測る。

【堆積土】14層に分層され、焼土・炭を多量に混入する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】白頭山火山灰降下後の遺構と思われる。

(笹森)



Y-181+

第1号土器埋設遺構・第1号風倒木痕

SPA-A'

1層	10YR1.7/1	黒色土	しまりやや有、粘性やや有
2層	10YR1.7/1	黒色土	しまりなし(軟らかい)、粘性やや有
3層	10YR1.7/1	黒色土	10YR2/1黒色の混合土、しまり有、粘性有
4層	10YR1.7/1	黒色土	しまりやや有、粘性有
5層	10YR2/1	黒色土	しまりあまりなし、粘性有
6層	10YR1.7/1	黒色土	10YR2/2黒褐色の混合土、しまりあまりなし、粘性有
7層	10YR2/1	黒色土	10YR4/4褐色の混合土、しまり有、粘性有
8層	10YR2/1	黒色土	10YR2/2黒褐色と10YR3/3暗褐色の混合土、しまりやや有、粘性有

図117 第1号土器埋設遺構・第1号風倒木痕

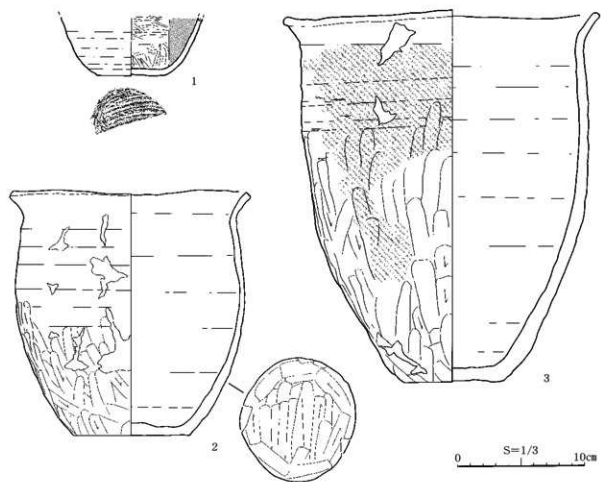


図118 第1号土器埋設遺構遺物

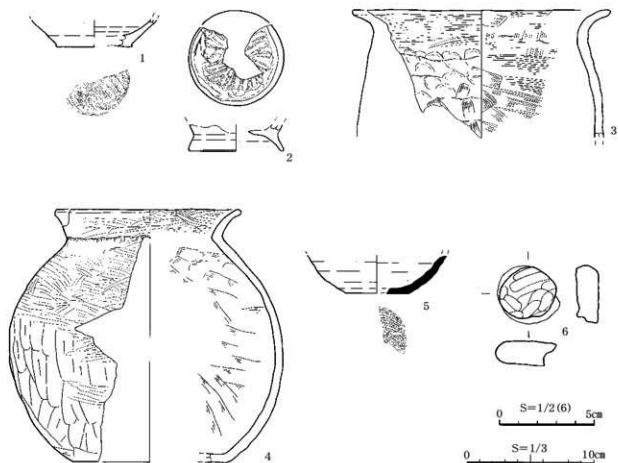


图119 第1号風倒木遺物

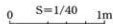
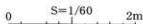
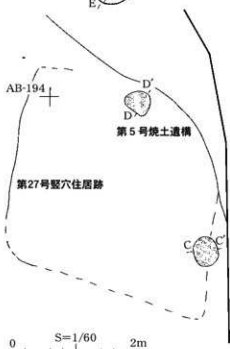
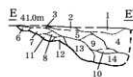
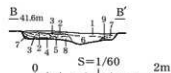
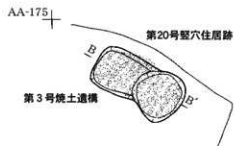
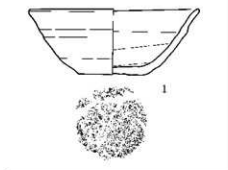
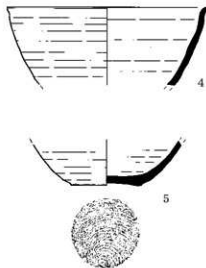
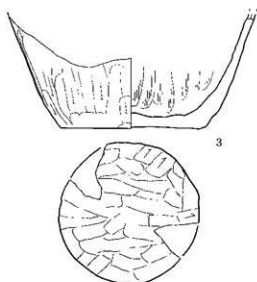
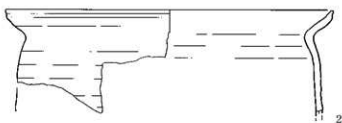


図120 焼土遺構遺物

第2号焼土遺構



第3号焼土遺構



0 S=1/3 10cm

第2号焼土遺構

SPA-A'

- 1層 10YR6/6 明黄褐色土 炭化物微量, 焼土粒中量
2層 10YR2/1 黒色土 □-ム粒子微量
3層 10YR2/1 黒色土 □-ム粒子多量

第3号焼土遺構

SPB-B'

- 1層 10YR2/1 黒色土 炭化物微量, 焼土粒多量
2層 7.5YR3/2 暗褐色土 焼土粒中量
3層 10YR1.7/1 黒色土 □-ム粒子, 焼土粒少量
4層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム粒子少量
5層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量
6層 10YR2/1 黒色土 □-ム粒子微量
7層 10YR2/2 黒褐色土 □-ム粒子中量
8層 10YR4/3 だいぶ黄褐色土 □-ム粒子多量
9層 10YR2/1 黒色土 □-ム粒子少量

第4号焼土遺構

SPC-C'

- 1層 7.5YR3/4 明褐色土 炭化物微量, 焼土粒多量
2層 5YR5/9 明赤褐色土 焼土粒中量
3層 7.5YR6/6 暗褐色土 □-ム粒子, 焼土粒中量

第5号焼土遺構

SPD-D'

- 1層 7.5YR2/3 暗褐色土 炭化物微量, 焼土粒多量
2層 7.5YR6/6 暗褐色土 炭化物微量, 焼土粒中量
3層 7.5YR3/4 暗褐色土 □-ム粒子, 焼土粒中量
4層 7.5YR4/4 暗褐色土 焼土粒少量

第6号焼土遺構

SPE-E'

- 1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物微量, 焼土粒多量
2層 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒少量
3層 10YR2/3 暗褐色土 炭化物, 焼土粒少量
4層 10YR1.7/1 黒色土 □-ム粒子少量
5層 10YR2/1 黒色土 炭化物微量
6層 10YR2/2 暗褐色土 炭化物, □-ム粒子微量
7層 10YR2/3 暗褐色土 □-ム粒子中量
8層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物微量, □-ム粒子多量
9層 10YR1.7/1 黒色土 炭化物微量, □-ム粒子少量
10層 10YR2/3 暗褐色土 □-ム粒子微量
11層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム粒子中量
12層 10YR5/6 黄褐色土 □-ム粒子多量
13層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物微量, □-ム粒子中量
14層 10YR1.7/1 黒色土 □-ム粒子少量

図121 焼土遺構遺物

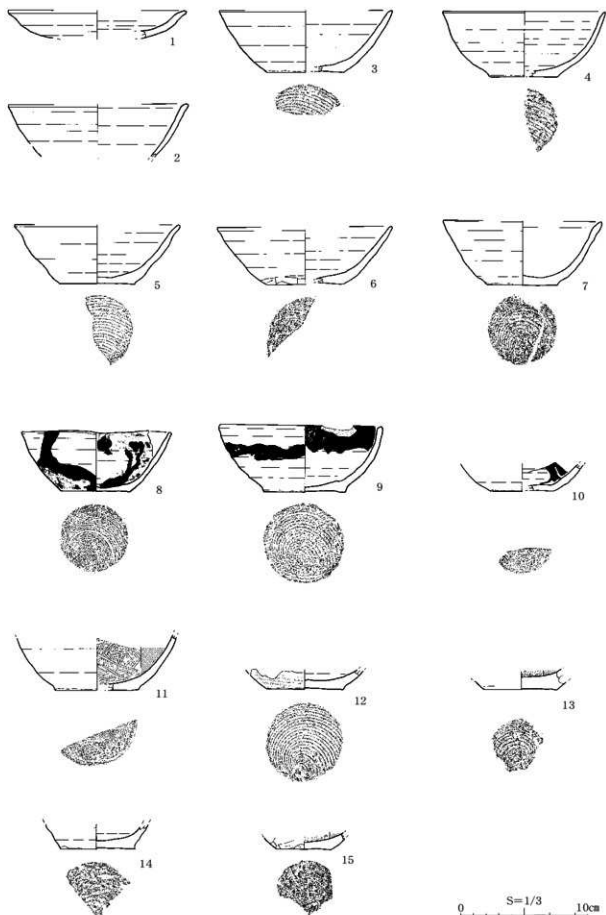


図122 遺構外出土遺物(1)

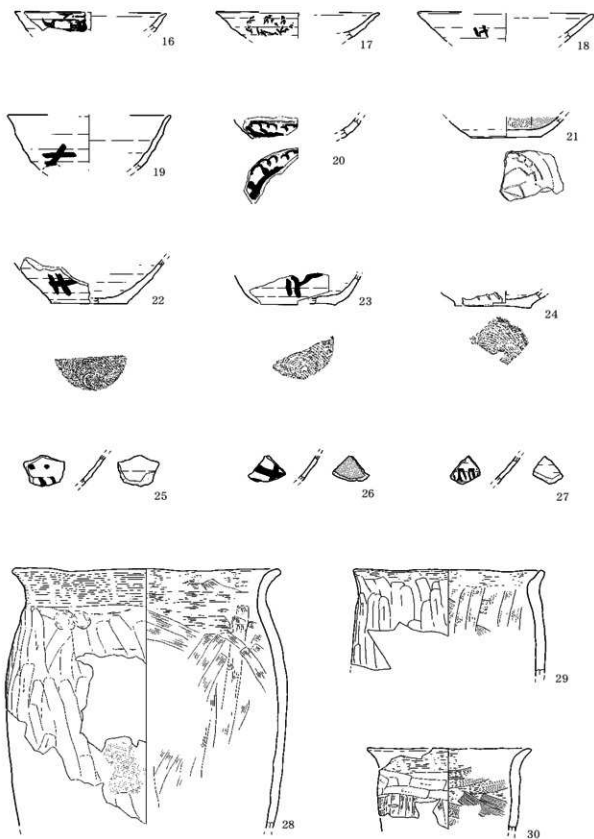


図123 遺構外出土遺物(2)

0 S=1/3 10cm

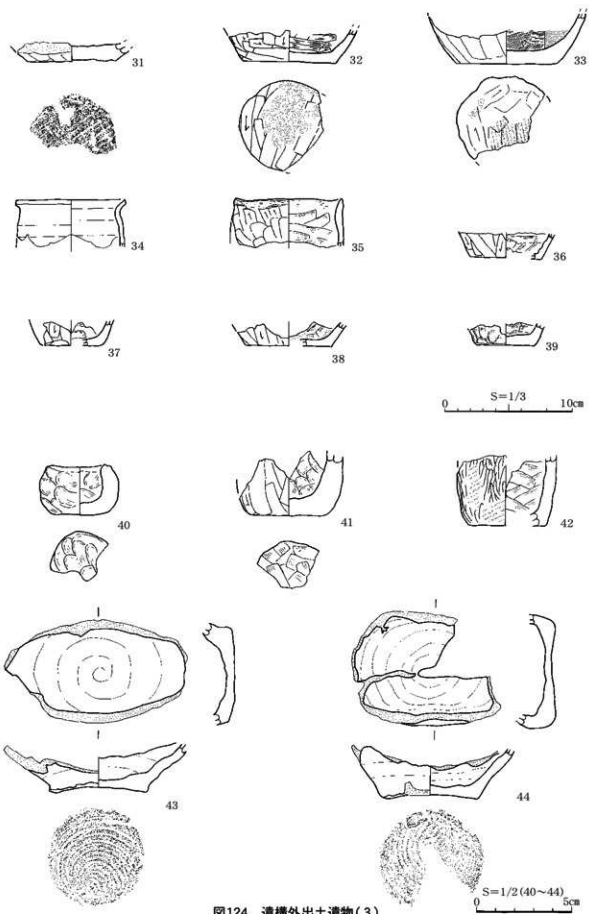


図124 遺構外出土遺物(3)

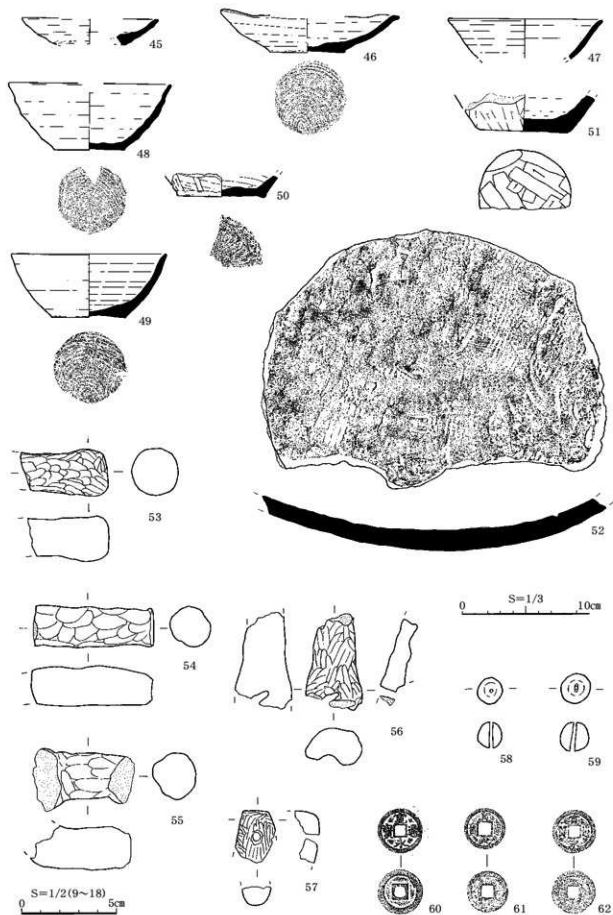


図125 遺構外出土遺物(4)

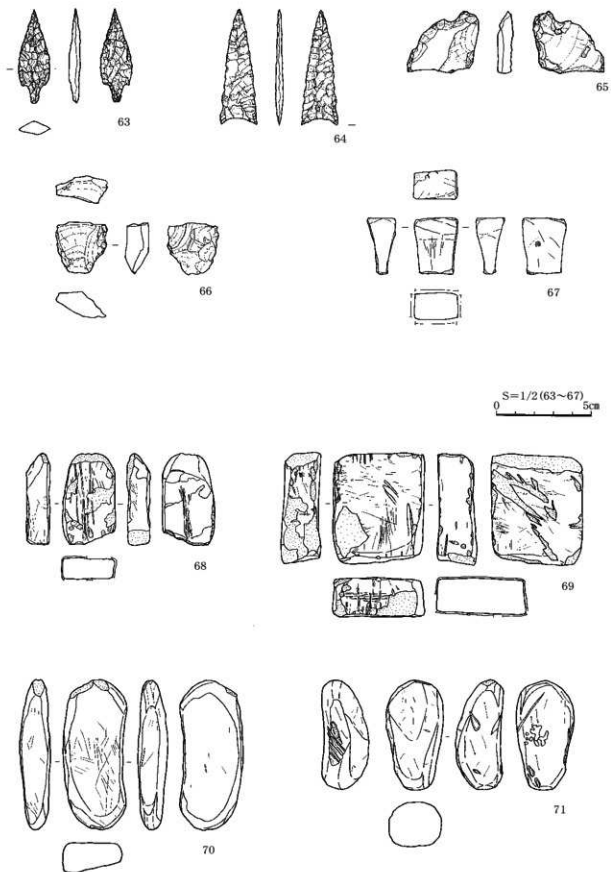


図126 遺構外出土遺物(5)

第1号型穴住層跡

探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号
6 1	SI-01	土師器	甕	口縁部残存1/4	灰土・黒焼土	(15.0)	—	(6.4)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	P-37・38他	96
6 2	SI-01	土師器	甕	口縁部残存1/4	灰土	(22.0)	—	(10.0)	ヘラケズリ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—	SI-03・P-64&2他	103
6 3	SI-01	土師器	小瓶(甕?)	胴・底面	灰焼土	—	5.8	(5.5)	ロク口	ロク口	回転灰切	—	N8
6 4	SI-01	土師器	丸形貯り	胴・底面	灰焼土	(4.0)	3.0	5.3	3口井	用ナデ・前面正値	用ナデ	—	N4
6 5	SI-01	新石器	縄子	柄の3/1	灰	(14.1)	—	(4.0)	ロク口	ロク口	—	—	164
6 6	SI-01	新石器	縄子	柄の3/1	灰	(12.0)	6.6	9.9	ロク口	ロク口	回転灰切	—	459
探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	備注(付)	石質	使用	備考	出土分析 器物番号
6 7	SI-01	石器	砥石	裏面	灰焼土	(5.7)	(5.7)	1.0	(43.0)	—	—	—	1
6 7	SI-01	石器	砥石	2	灰焼土	(5.7)	(5.7)	1.0	(43.0)	—	—	—	1
6 7	SI-01	石器	砥石	2	灰焼土	(5.7)	(5.7)	1.0	(43.0)	—	—	—	1

第2号型穴住層跡

探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号	
8 1	SI-02	土師器	甕	口縁部残存1/4	方マド	(14.0)	—	(6.9)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	P-43	524	
8 2	SI-02	土師器	甕	口縁部残存1/4	方マド	(19.8)	—	(6.9)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	—	P-40	525	
8 3	SI-02	土師器	甕	口縁部残存1/4	方マド	(16.0)	—	(16.0)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ	—	P-52他	521	
8 4	SI-02	土師器	甕	口縁部残存1/4	ピット1	(19.2)	—	(7.6)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—	—	522	
8 5	SI-02	土師器	甕	口縁部残存1/8	灰	(17.0)	—	(16.5)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	P-28	523	
8 6	SI-02	土師器	甕	底面	灰焼土	—	(9.6)	(3.9)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	外底面付着物 P-11	61
8 7	SI-02	土師器	甕	底面	方マド	—	8.6	(4.3)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	P-46	60
8 8	SI-02	土師器	甕	底面	灰	—	7.3	(1.6)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂敷	—	P-14	62
8 9	SI-02	土師器	小瓶(甕)	胴(残)	灰	(7.3)	(4.2)	6.0	不明	不明	ヘラケズリ?	—	P-12他	M6
8 10	SI-02	新石器	環?	胴(残)	方マド他	14.2	3.9	5.6	ロク口	ロク口	回転灰切	—	P-17他	552
8 11	SI-02	新石器	環?	底面	住跡付託	—	(5.0)	(1.7)	ロク口?	ロク口	回転灰切	—	—	299
探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	備注(付)	—	—	—	出土分析 器物番号	
8 12	SI-02	新石器	環	方座	灰	16.9	2.6	0.3	34.8	—	—	—	—	—

第3号型穴住層跡

探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号
12 1	SI-03	土師器	甕	完形	方マド目	12.3	8.7	2.9	ロク口	ロク口	回転灰切	—	654
12 2	SI-03	土師器	甕	完形	床下	(13.8)	(6.2)	3.9	ロク口	ロク口	回転灰切	—	539
12 3	SI-03	土師器	甕	完形	床下	14.0	5.6	3.8	ロク口	ロク口	回転灰切	—	553
12 4	SI-03	土師器	環	完形	灰焼土	(12.5)	5.1	4.7	ロク口	ロク口	回転灰切	—	P-617
12 5	SI-03	土師器	環	完形	灰焼土	(11.8)	(5.4)	4.9	ロク口	ロク口	回転灰切	—	P-83他
12 6	SI-03	土師器	環	完形	灰焼土	(13.0)	(6.0)	5.2	ロク口	ロク口・輪縁直	回転灰切	—	P-283
12 7	SI-03	土師器	環	完形	方マド	(15.0)	—	(5.2)	ロク口	ロク口	—	—	170
12 8	SI-03	土師器	環	完形	灰焼土	12.5	4.8	5.9	ロク口	ロク口	回転灰切	—	551
12 9	SI-03	土師器	環	完形	灰焼土	(13.4)	—	(5.0)	ロク口	ロク口	回転灰切	—	P-263
12 10	SI-03	土師器	環	完形	方マド	(16.4)	—	(4.7)	ロク口	ロク口	—	—	174
12 11	SI-03	土師器	環?	底面	灰焼土	—	(5.8)	(1.4)	—	—	回転灰切	—	327
12 12	SI-03	土師器	環	底面	灰焼土	—	(4.4)	(2.3)	ロク口	ロク口	回転灰切	—	181
12 13	SI-03	土師器	環	底面	灰焼土	—	(5.6)	(3.6)	ロク口	ロク口	回転灰切	—	P-4、遺構間接合
12 14	SI-03	土師器	環?	底面	灰焼土	—	4.7	(0.8)	—	—	回転灰切	—	P-208
12 15	SI-03	土師器	環?	底面	灰焼土	—	6.0	(1.2)	—	—	回転灰切	—	P-13
12 16	SI-03	土師器	環?	底面	灰・黒焼土	(13.2)	(7.4)	13.7	ヘラケズリ	ロク口	回転灰切	—	P-145
13 17	SI-03	土師器	甕	口縁部残存1/4	灰・黒焼土	(14.0)	—	(11.0)	ヘラケズリ・輪縁直3口ナデ	ヘラケズリ	上底	—	P-1他、遺構間接合
13 18	SI-03	土師器	甕	口縁部残存1/4	灰・黒焼土	(14.1)	—	(10.7)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ	—	—	P-424他
13 19	SI-03	土師器	甕	口縁部残存1/4	灰・黒焼土	(13.0)	—	(6.3)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	—	P-666他
13 20	SI-03	土師器	甕	口縁部残存1/4	灰・黒焼土	(19.3)	—	(9.5)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ	—	—	P-143他
13 21	SI-03	土師器	甕	口縁部残存1/4	灰・黒焼土	(21.8)	—	(7.6)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ	—	—	P-11他
13 21	SI-03	土師器	甕	口縁部残存1/4	灰・黒焼土	(21.8)	—	(7.6)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ	—	—	P-252他、外底面付着物

探勝号	山土地点	種類	器種	部位	出土位置・形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	外周	内周	底面	備考	出土分析 器種番号
13 22	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	左マウ・東下	21.25	—	(10.0)	—	ハタケノ・直壁底3分打	ヘラナ字	—	P-1他、100分1組体?	50
13 23	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	21.25	—	(6.5)	—	ハタケノ・直壁底3分打	ヘラナ字	—	P-30他、50と同1組体?	100
13 24	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	25.00	—	(8.7)	—	ハタケノ・直壁底3分打	ヘラナ字・楕圓底	—	P-29他	101
13 25	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	22.00	—	(7.9)	—	ハタケノ・直壁底3分打	ヘラナ字	—	P-43他	51
13 26	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	23.11	—	(4.7)	—	ハタケノ・直壁底3分打	ヘラナ字	—	P-262他、遺物同組合	99
14 27	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	(5.0)	(1.8)	—	ヘラナ字	ヘラナ字	—	P-497他	20
14 28	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	7.8	(5.7)	—	ヘラナ字	砂椀～ハタケノズリ	—	P-47他	23
14 29	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	(6.4)	(7.8)	—	ヘラナ字	ヘラケズリ	—	P-24他、遺物同組合	31
14 30	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	(8.4)	(4.1)	—	ヘラケズリ	砂椀	—	P-453	29
14 31	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	(7.0)	(5.4)	—	ヘラケズリ	砂椀～ハタケノズリ	—	P-286他	24
14 32	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	(10.2)	(5.7)	—	ヘラケズリ	ヘラナ字・楕圓底	—	P-14他	25
14 33	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	7.0	(7.7)	—	ヘラケズリ	砂椀	—	P-618他	22
14 34	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	(8.6)	(4.0)	—	ヘラケズリ	砂椀	—	P-243他	63
14 35	SI-03	土器器	甕	底底	塚様土	—	(8.4)	(2.2)	—	ヘラケズリ	砂椀	—	P-443	27
15 36	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚・溝掘上	—	(7.0)	(6.9)	—	ヘラケズリ	砂椀	—	P-140他	30
15 37	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	(6.4)	(4.6)	—	ヘラケズリ	やや上底	—	P-403他	64
15 38	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	(5.8)	(4.0)	—	ヘラケズリ	ヘラナ字	—	P-403他	26
15 39	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	(16.0)	—	(6.9)	—	ロケ口	ロケ口	—	P-9他、化粧土付層	104
15 40	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	(11.0)	—	(3.2)	—	ロケ口	ロケ口	—	内面付着焼、P-192	M17
15 41	SI-03	土器器	甕	底底	塚様土	6.9	4.6	9.0	—	ハタケノ・直壁底3分打	ヘラナ字	—	P-112他	M12
15 42	SI-03	土器器	甕	胴～底面	塚様土	—	5.5	(5.1)	—	ロケ口	ロケ口	—	P-6	M2
15 43	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	(8.4)	—	(2.0)	—	ロケ口	ロケ口	—	P-150他	M28
15 44	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	(9.0)	—	(7.4)	—	ハタケノ・直壁底3分打	ヘラナ字・ナ字	—	P-5	M31
15 45	SI-03	土器器	甕	胴底	塚様土	(2.8)	2.1	3.2	—	指形瓦	指形瓦	—	P-29他、外面付着物	M15
15 46	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	(2.8)	—	(12.7)	—	ハタケノ・直壁底3分打	ヘラナ字	—	P-137、内外面付着物	519
15 47	SI-03	土器器	甕	口縁～胴底	塚様土	(34.6)	—	(10.5)	—	ヘラケズリ	ヘラナ字	—	P-488	168
16 48	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚様土	(14.1)	5.6	3.5	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-255他	534
16 49	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚	(14.8)	5.9	3.9	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-218他	536
16 50	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚様土	(14.2)	(5.0)	3.7	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-590他	171
16 51	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚様土	(13.6)	5.5	3.3	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-83他	537
16 52	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚様土	(12.4)	—	(1.5)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成、外面付着物、P-297	600
16 53	SI-03	須弥器	甕	口縁～胴底	塚様土	(7.8)	—	(3.8)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-385他	175
16 54	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚様土	(2.8)	4.9	5.4	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-329他	540
16 55	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚様土	(2.8)	5.0	5.3	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-265他	165
16 56	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚様土	(11.6)	(5.0)	5.6	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-108	169
16 57	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚	(12.0)	(6.0)	4.8	—	ロケ口	同底瓦切	—	外面付着焼、P-180	461
16 58	SI-03	須弥器	甕	胴底	塚様土	(14.0)	5.3	5.4	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-221、遺物同組合	535
16 60	SI-03	須弥器	甕	口縁～胴底	塚様土	(14.2)	—	(3.7)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-16他	176
16 61	SI-03	須弥器	甕	底底	塚様土	—	4.8	(2.4)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-412	538
16 62	SI-03	須弥器	甕	体～底面	塚様土	—	(6.0)	(3.1)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-284他	167
16 63	SI-03	須弥器	甕	底底	塚様土	—	6.3	(1.8)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-152	312
16 64	SI-03	須弥器	甕	体～底面	塚様土	—	(7.2)	(4.4)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-255他	180
17 65	SI-03	須弥器	甕?	底底	塚様土	—	(6.0)	(1.7)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成	330
17 66	SI-03	須弥器	甕?	底底	塚様土	—	(6.0)	(1.3)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-2	329
17 67	SI-03	須弥器	甕	底底	塚様土	—	5.6	(1.3)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-165	310
17 68	SI-03	須弥器	甕	底底	塚様土	—	(5.4)	(1.9)	—	ロケ口	同底瓦切	—	酸化塩成 P-386	301

探検号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外周	内周	底面	備考	出土分析 器物番号
17 60	SI-03	須恵器	埴	底面	灰積土	-	0.27	1.40	ロク口	ロク口	回転高切	腐化焼成土 P-81他	300
17 70	SI-03	須恵器	埴	底面	灰積土	-	0.4	0.41	ロク口	ロク口	回転高切	腐化焼成土 P-252他	178
17 71	SI-03	須恵器	埴	底面	灰積土	-	0.6	0.21	ロク口	ロク口	回転高切	腐化焼成土 P-265他	177
17 72	SI-03	須恵器	埴	胴尻形	灰積土	1.20	0.6	0.8	ロク口	ロク口	回転高切	遺構間接合、P-99他	4
17 73	SI-03	須恵器	埴	胴~底面	灰積土	-	0.0	0.25	ヘラナズリ	ヘラナズリ	ヘラナズリ+掛ナズ	P-629	460
17 74	SI-03	須恵器	土師	遺存形	出土位置・単位(長さ3㎝)	壺(2)	壺(2.60)	壺(2)	壺(3)	外周	胎土	備考	器物番号
17 75	SI-03	須恵器	土師	遺存形	灰積土	0.9	26	25	調製痕	調製痕	胎土	P-528	112
17 76	SI-03	須恵器	土師	胴部	灰積土	0.90	10	12	調製痕(ミヨリ弁)	調製痕	胎土	S-13	±21
17 77	SI-03	須恵器	土師	口縁~胴部	灰積土	0.20	14	12	胎土	少量の胎土	胎土	S-3、部分的に黒色	±20
17 78	SI-03	須恵器	土師	口縁	出土位置・単位(長さ3㎝)	壺(3)	壺(3.60)	壺(3)	壺(3)	胎土	胎土	備考	器物番号
17 79	SI-03	須恵器	刀子	胴尻形	灰積土	20.6	3.4	8.6	胎土	胎土	胎土	石科利用?	軌1
17 79	SI-03	須恵器	刀子	底面	灰積土	16.1	2.0	0.4	21.4	21.4	胎土	備考	軌3

第4号竪穴住居跡

探検号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外周	内周	底面	備考	出土分析 器物番号
20 1	SI-04	土師器	埴	胴尻形	土坑A	13.8	5.8	4.9	ロク口	ロク口→ミヨリ弁	回転高切	備考	544
20 2	SI-04	土師器	埴	胴尻形	カマド	15.2	5.7	6.3	ロク口	ロク口	回転高切	灯明?、P-4他	548
20 3	SI-04	土師器	埴	体~底面	灰積土	-	0.6	0.3	ロク口	ロク口	回転高切	P-4他	182
20 4	SI-04	土師器	埴	底面	ピット	-	5.6	1.5	ロク口	ロク口→ミヨリ弁	回転高切	内周黒色焼成	313
20 5	SI-04	土師器	埴	体~底面	灰積土	-	0.6	1.6	ロク口	ロク口	回転高切	胎土	302
20 6	SI-04	土師器	埴	口縁~胴部	土坑A・ピット	21.0	-	11.3	ロク口	ロク口	-	P-4他	106
20 7	SI-04	土師器	埴	口縁~胴部	床下・カマド	21.2	-	11.1	ヘラナズリ・胎土	ヘラナズリ	ヘラナズリ・胎土	P-9他、遺構間接合	53
20 8	SI-04	土師器	埴	口縁~胴部	灰積土	22.0	-	10.8	ヘラナズリ+ピツナズリ	ヘラナズリ	ヘラナズリ	P-1他、遺構間接合	157
20 9	SI-04	土師器	埴	口縁~胴部	灰積土	21.6	-	14.4	ヘラナズリ+ロコナズ	ヘラナズリ	ヘラナズリ	P-1他、遺構間接合	107
20 10	SI-04	土師器	埴	胴尻形	カマド・焼積土	14.2	7.6	12.9	ヘラナズリ+ロコナズ	ヘラナズリ	平周	P-1他、遺構間接合	17
20 11	SI-04	土師器	埴	胴~底面	灰積土	-	10.2	0.8	ヘラナズリ	ヘラナズリ	砂焼	P-52他	70
20 12	SI-04	土師器	埴	胴~底面	床下	-	0.2	0.0	ヘラナズリ	ヘラナズリ	砂焼	底面焼成「中?」	65
20 13	SI-04	土師器	小瓶(唐?)	胴尻形	ピット内	10.3	5.6	7.6	ヘラナズリ	ヘラナズリ	ヘラナズリ	底面焼成「中?」	220
20 14	SI-04	土師器	小瓶(唐?)	胴尻形	床	-	0.0	4.0	ロク口	ロク口	回転高切	M52	543
21 15	SI-04	須恵器	埴	体~底面	ロク口ピット	-	0.2	0.2	ロク口	ロク口	回転高切	腐化焼成	6
21 16	SI-04	須恵器	長頸瓶	胴部	土坑1	-	7.3	7.4	ロク口	ロク口	-	備考	466
21 17	SI-04	須恵器	土師	遺存形	出土位置・単位(長さ3㎝)	壺(2)	壺(2.00)	壺(2)	壺(3)	外周	胎土	備考	出土分析 器物番号
21 18	SI-04	須恵器	土師	遺存形	カマド	0.90	12	8	調製痕	調製痕	胎土	穿孔あり	±11
21 19	SI-04	須恵器	土師	1	カマド	15	14	14	2.8	平周	胎土	穿孔あり、大部分黒色	±1
21 20	SI-04	須恵器	土師	1	カマド	16	16	14	3.1	ほぼ平周	胎土	穿孔あり	±2
21 21	SI-04	須恵器	土師	1	カマド	14	15	14	2.9	調製痕	胎土	穿孔あり、部分的に黒色	±4
21 22	SI-04	須恵器	土師	遺存形	カマド	17	16	14	0.11	調製痕(ナズリ)	胎土	穿孔あり、部分的に黒色	±3
21 22	SI-04	須恵器	土師	遺存形	出土位置・単位(長さ3㎝)	壺(3)	壺(3.6)	壺(3)	壺(3)	胎土	胎土	備考	出土分析 器物番号
21 23	SI-04	須恵器	土師	1	灰積土	1.6	2.1	0.9	4.4	胎土	胎土	備考	617

第4・5号竪穴住居跡

探検号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外周	内周	底面	備考	出土分析 器物番号
21 1	SI-04・05	土師器	埴	底面	灰積土	14.7	6.1	3.4	ロク口	ロク口	回転高切	備考	560
21 2	SI-04・05	土師器	埴	胴尻形	灰積土	14.0	5.9	5.4	ロク口	ロク口	回転高切	P-52他	541
21 3	SI-04・05	土師器	埴	胴尻形	灰積土	14.2	5.2	5.2	ロク口	ロク口	回転高切	P-17他	183
21 4	SI-04・05	土師器	埴	体~底面	灰積土	-	0.3	0.2	ロク口	ロク口→ミヨリ弁	回転高切	P-66他、内周黒色焼成	184
21 5	SI-04・05	土師器	埴	体~底面	灰積土	-	0.6	0.4	ロク口	ロク口	回転高切+土盛	P-52他、遺構間接合	185
21 6	SI-04・05	土師器	埴	底面	灰積土	-	7.0	0.8	ロク口	ロク口	回転高切	P-25	303

探検号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
21 7	SI-04-05	土師器	埴	体~底部	埴積土	-	0.01	0.10	-	割縁	凹縁高切	外面割縁 1/2寸, P-13	出土分析 整理番号 222
21 8	SI-04-05	土師器	埴	口縁~胴部	埴積土	026.00	-	(1.4)	ウツリテ3コナ子楕圓	ハタテ・ヨコナ子	-	P-13	108
21 9	SI-04-05	土師器	埴	口縁~胴部	埴積土	015.00	-	(5.4)	ハツタテヨコナ子	ヘラナ子	-	P-13	109
22 10	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	(1.0)	(4.0)	ヘラナズリ	ヘラナ子	砂敷~ヘラナズリ	P-6	66
22 11	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	10.0	(17.1)	ヘラナズリ	ヘラナ子	砂敷	P-2地, 外面付遺物	16
22 12	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	(7.8)	(4.3)	ヘラナズリ	ヘラナ子	砂敷	P-87, 外面付遺物	68
22 13	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	(5.0)	(3.2)	ヘラナズリ	ヘラナ子・楕圓	平縁	P-14	69
22 14	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	砂焼六1	-	8.2	(5.4)	ヘラナズリ・ハタテ	ヘラナ子	砂敷?	P-2	47
22 15	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	(10.0)	(2.4)	ヘラナズリ	ヘラナ子	砂敷?	P-72	71
22 16	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	底下・埴積土	-	(11.4)	(12.2)	ヘラナズリ	ヘラナ子	ヘラナズリ~砂敷	P-2地, 外面付遺物	14
22 17	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	5.0	(4.0)	ヘラナズリ	ヘラナ子	砂敷	-	M10
22 18	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	(12.0)	(5.4)	4.4	ワタリ	ワタリ	凹縁高切	酸化塩硫酸	7
22 19	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	(16.0)	6.6	6.7	ワタリ	ワタリ	凹縁高切	酸化塩硫酸	463
22 20	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	5.4	(4.3)	ワタリ	ワタリ	凹縁高切	酸化塩硫酸, 外面ヘラナ子	545
22 21	SI-04-05	土師器	埴?	体~底部	埴積土	-	(5.4)	(1.9)	ワタリ	ワタリ	凹縁高切	P-80	465
22 22	SI-04-05	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	10.8	(11.2)	ヘラナズリ	ヘラナ子	ヘラナズリ	遺構同層位, P-42地	5・9

探検号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
23 1	SI-05	土師器	埴	交換	方マド	24.4	4.5	32.0	ウツリテ3コナ子楕圓	ハタテ・ヨコナ子	砂敷	化肥土付着, P-4	3
23 2	SI-05	土師器	埴	胴~底部	方マド	20.2	(7.6)	32.7	ウツリテ3コナ子楕圓	ウツリテ3コナ子楕圓	砂敷	化肥土付着, P-4地	1
23 3	SI-05	土師器	埴	胴~底部	方マド・埴積土	(24.0)	-	(15.8)	ウツリテ3コナ子楕圓	ウツリテ3コナ子楕圓	-	外面付遺物, P-1地	11.0
23 4	SI-05	土師器	埴	口縁~胴部	方マド・埴積土	(22.4)	-	(29.0)	ウツリテ3コナ子楕圓	ウツリテ3コナ子楕圓	-	P-6地, 遺構同層位	5
23 5	SI-05	土師器	埴	胴~底部	方マド	-	-	9.1	ヘラナズリ	ヘラナ子	ヘラナズリ	化肥土付着, P-3	32

探検号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
26 1	SI-06	土師器	埴	底部	埴積土	-	5.4	(0.6)	-	ワタリ	ワタリ	P-11, 遺構同層位	31.4
26 2	SI-06	土師器	埴	体~底部	ビット1	-	(5.6)	(2.6)	ワタリ	ワタリ	凹縁高切	-	30.4
26 3	SI-06	土師器	埴	胴~底部	床	-	(7.0)	(1.9)	ヘラナズリ	ヘラナ子	砂敷~ヘラナズリ	-	72
26 4	SI-06	土師器	小瓦(唐?)	胴~底部	埴積土	-	(5.0)	(3.2)	ワタリ	ワタリ	砂止糸切?	P-26	M5
26 5	SI-06	土師器	ミニチュア	甕形弁	ビット2層位	(4.0)	(1.8)	(5.1)	指ナ子・指面圧痕	指ナ子・指面圧痕	敷用面	備考	M5A
26 6	SI-06	石器	砥石	砥石?	ビット1	3.0	(1.8)	1.3	細縦溝状	石質	2	石8	石8
26 7	SI-06	石器	砥石	砥石	ビット2	5.0	(2.7)	2.2	(17.8)	細縦溝状	3	石10	石10
26 8	SI-06	石器	砥石	砥石	ビット2	4.3	3.8	2.5	19.3	底岩	4	石9	石9
26 9	SI-06	土師器	埴	遺存層	出土位置・層位	(長3.0mm)	(幅3.0mm)	-	重さ3(g)	埴土	埴土	備考	出土分析 整理番号 土13
26 9	SI-06	土師器	埴	遺存層	ビット2	(62)	25	21	(24.1)	調査順 (ナ子?)	調査順	備考	土13

探検号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
26 10	SUD-06	土師器	埴	胴~底部	出土位置・層位	(口径3cm)	(底径1.2cm)	(深さ0.8)	5.2	ワタリ	ワタリ	外面付遺物, P-5	187
26 11	SUD-06	土師器	埴	胴~底部	埴積土	(12.4)	-	3.1	4.7	ワタリ	ワタリ	付着, 外面付遺物, P-5	186
26 12	SUD-06	土師器	埴	胴~底部	埴積土	-	(6.0)	(1.2)	(2.0)	ワタリ	凹縁高切	P-1	308
26 13	SUD-06	土師器	埴	体~底部	埴積土	-	6.0	(1.5)	ワタリ	ワタリ	凹縁高切	P-3	309
26 14	SUD-06	土師器	埴	底部	埴積土	-	(3.0)	(0.9)	ワタリ	ワタリ	砂敷	P-7	83

探検号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
27 1	SI-07	土師器	埴	交換	埴積土	13.4	6.2	3.7	ワタリ	ワタリ	凹縁高切	付着, 外面付遺物, P-5	549
27 2	SI-07	土師器	埴	胴~底部	埴積土	(12.0)	(5.9)	5.2	ワタリ	ワタリ	凹縁高切	付着, 外面付遺物, P-5	188

探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	胎土分析 器種番号
27 3	SI-07	土師器	埴	体~底部	埴積土	-	6.4	(4.4)	ロク口	ロク口	回転高切	内面付着物	547
27 4	SI-07	土師器	埴	体~底部	埴積土	-	5.0	(2.9)	ロク口	ロク口<ハケズリ>	回転高切	内面黒色処理、裏面銅附合	548
第9号窯穴住居跡													
探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	胎土分析 器種番号
28 1	SI-09	土師器	小甕(甕)	口縁~胴底	埴積土	(4.2)	-	(4.5)	ロク口	内面	底面	P-14	M16
28 2	SI-09	土師器	小甕(甕)	口縁~胴底	埴積土	(6.6)	-	(2.5)	ハケケズリ<ハケコナテ>	ハケケズリ<ハケコナテ>	底面	P-3	M37
第10号窯穴住居跡													
探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	胎土分析 器種番号
30 1	SI-10	土師器	埴	口縁~胴底	埴積土	(22.0)	-	(13.7)	ハケケズリ<ハケコナテ>	ハケケズリ<ハケコナテ>	底面	P-2地、外部付着物	111
30 2	SI-10	土師器	埴	口縁~胴底	カマド	(20.0)	-	(14.1)	ハケケズリ<ハケコナテ>	ハケケズリ<ハケコナテ>	底面	P-2地	112
30 3	SI-10	土師器	甕	口縁~胴底	ビツト3・埴積土	(15.4)	-	(6.4)	ハケケズリ<ハケコナテ>	ハケケズリ<ハケコナテ>	底面	P-4地	113
30 4	SI-10	土師器	甕	胴~底部	カマド	-	(6.6)	(3.2)	ハケケズリ	ハケケズリ	底面	ケズリ	73
30 5	SI-10	土師器	甕	胴~底部	カマド	-	(6.4)	(2.0)	ハケケズリ	ハケケズリ	底面	P-12、外面・底部付着物	34
30 6	SI-10	土師器	甕	底面	ビツト3	-	(10.4)	(1.1)	-	-	底面	埴物圧痕	74
30 7	SI-10	土師器	甕	胴~底部	カマド<ビツト1>	-	8.2	(6.2)	ハケケズリ	ハケケズリ	底面	P-3地、外部付着物	33
30 8	SI-10	土師器	甕	口縁部内面/1/4	埴積土	(13.0)	-	(2.5)	ロク口	ロク口	底面	黒化処理痕、P-9	189
30 9	SI-10	土師器	埴	胴尻部	埴積土	(11.8)	5.7	(2.5)	ロク口	ロク口	底面	黒化処理痕、P-1	530
第10号窯穴住居跡外周溝													
探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	長さ(m)	幅(m)	厚さ(cm)	備き(等)	内面	底面	備考	胎土分析 器種番号
30 10	SUD-10	土師器	土玉	胴尻部	埴積土	1.3	1.5	1.5	(2.7)	溝断面(北方向)	底面	穿孔あり、埴型	土7
30 11	SUD-10	土師器	土玉	2	埴積土	1.2	1.2	(1.2)	(1.9)	溝断面(北方向)	底面	穿孔あり、埴型、全体の黒色	土8
第11号窯穴住居跡													
探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	胎土分析 器種番号
32 1	SI-11	土師器	埴	胴尻部	埴積土	(12.8)	(5.6)	(5.0)	ロク口	ロク口	回転高切	底面	190
32 2	SI-11	土師器	埴	完形	埴積土	12.7	5.4	4.5	ロク口	ロク口	回転高切	回転高切	510
32 3	SI-11	土師器	埴	完形	埴積土	14.0	5.1	4.3	ロク口	ロク口	回転高切	回転高切	526
32 4	SI-11	土師器	小甕(甕)	口縁~胴底	埴積土	(6.4)	-	(5.6)	ハケケズリ<ハケコナテ>	ハケケズリ<ハケコナテ>	底面	明、内外面付着物(背下)、P-25地	M21
32 5	SI-11	土師器	甕	胴~底部	床	-	(2.6)	(2.0)	ロク口	ロク口	底面	明、内外面付着物(背下)	P-2
32 6	SI-11	土師器	ミニチュア	胴~底部	埴積土	-	4.8	(3.0)	ロク口	ロク口	底面	内面黒色処理、P-20	M53
32 7	SI-11	土師器	甕	胴尻部	埴積土	(14.6)	(6.4)	3.5	ロク口	ロク口	回転高切	底面銅附合	528
32 8	SI-11	土師器	埴	体~底部	埴積土	-	(5.5)	(2.5)	ロク口	ロク口	回転高切	黒化処理痕	31.5
32 9	SI-11	土師器	埴	体~底部	埴積土	-	(2.1)	(5.8)	ロク口	ロク口	回転高切	黒化処理痕	P-35
第12号窯穴住居跡													
探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	胎土分析 器種番号
34 1	SI-12	土師器	埴	完形	カマド	(13.0)	5.6	4.4	ロク口	ロク口	回転高切	明、内外面付着物(背下)、P-6	529
34 2	SI-12	土師器	埴	完形	埴積土	12.0	5.4	4.5	ロク口	ロク口	回転高切	内面黒色処理、P-9	162
34 3	SI-12	土師器	埴	口縁~胴底	カマド<埴積土>	(23.0)	-	(11.5)	ハケケズリ<ハケコナテ>	ハケケズリ<ハケコナテ>	底面	内面付着物、P-1地	114
34 4	SI-12	土師器	甕	胴~底部	床	-	8.2	12.0	ハケケズリ	ハケケズリ	底面	外面付着物、P-8	35
34 5	SI-12	土師器	甕	胴~底部	床	-	(12.6)	(11.6)	不明	不明	底面	外面付着物(背下) P-15	468
第13号窯穴住居跡													
探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	胎土分析 器種番号
38 1	SI-13	土師器	埴	胴尻部	カマド<埴積土>	14.8	4.6	4.0	ロク口	ロク口	回転高切	明、P-17地	159
38 2	SI-13	土師器	埴	完形	カマド	17.0	7.0	6.3	ロク口<ハケケズリ>	ロク口<ハケケズリ>	回転高切	明、P-25地	161
38 3	SI-13	土師器	埴	完形	ビツト6<埴積土>	(12.2)	(5.2)	4.7	ロク口<ハケケズリ>	ロク口	回転高切	P-4地	192
38 4	SI-13	土師器	埴	完形	床	14.6	5.6	5.0	ロク口<ハケケズリ>	ロク口	回転高切<ハケケズリ>	明、P-22	160
38 5	SI-13	土師器	埴	体~底部	埴積土	-	(6.6)	(3.1)	ロク口<ハケケズリ>	ロク口	回転高切	外面黒色処理、P-10地	195
38 6	SI-13	土師器	埴	体~底部	埴積土	-	(5.0)	(3.7)	ロク口<ハケケズリ>	ロク口	回転高切<ハケケズリ>	P-181	194

探検番号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径(㎝)	底径(㎝)	深さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
387	7	SI-13	土師器	底面	貯蔵穴1	—	(5.8)	(1.2)	ヘラケズリ	—	回転染め・ヘラケズリ	備考	P-1
388	9	SI-13	土師器	口縁・胴部	北・マド・埴輪土	21.8	—	(19.2)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—	P-11	9
389	8	SI-13	土師器	裏	カマド・埴輪土	(24.0)	—	(8.0)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—	P-17	115
390	11	SI-13	土師器	裏	カマド	—	9.3	(7.3)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	P-21	36
391	10	SI-13	土師器	裏	胴部	(23.8)	—	(5.6)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—	内面磨	516
392	12	SI-13	土師器	胴・底面	埴輪土	—	(8.4)	(2.2)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	砂吹	28
393	13	SI-13	土師器	底面	カマド	(14.5)	(5.6)	3.5	ワグ	ワグ	回転染め	—	193
394	14	SI-13	土師器	口縁・胴部	埴輪土	10.3	—	(9.4)	ワグ	ワグ	—	P-183	14
395	15	SI-13	土師器	底面	黒・埴輪土	(19.0)	—	(23.4)	ワグ・ヘラケズリ	ワグ	—	外面白染め、P-4他	12
396	16	SI-13	土師器	口縁・胴部	黒・ビツト	(18.6)	—	(5.8)	ワグ	ワグ	—	471と同一群、P-34他	16
397	17	SI-13	土師器	胴・胴部	黒・ビツト	—	—	(27.1)	ワグ	ワグ	—	P-1他	13
400	18	SI-13	土師器	口縁・胴部	黒・埴輪土	(22.6)	—	(35.5)	ワグロ・タナキ	ワグロ・タナキ	—	黒染め同群、胎土粗面入(内面)、P-6他	15

第14号層 貯蔵穴

探検番号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径(㎝)	底径(㎝)	深さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
451	1	SI-14	土師器	底面	貯蔵穴	(15.2)	(6.0)	5.2	ワグ	ワグ	回転染め?	P-4他	196
452	2	SI-14	土師器	体・底面	埴輪土	—	(5.0)	(1.4)	ワグ	ワグ	回転染め	P-11他	331
453	3	SI-14	土師器	体・底面	埴輪土・埴輪土	—	5.4	(4.4)	ワグ	ワグ	回転染め	P-7他	318
454	4	SI-14	土師器	胴・底面	埴輪土・埴輪土	—	(6.0)	(7.1)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂吹→ワグ	P-3他	37

第16号層 貯蔵穴

探検番号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径(㎝)	底径(㎝)	深さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
455	5	SI-16	土師器	胴・底面	埴輪土	(15.6)	(6.6)	4.7	ワグ	ワグ	回転染め	P-2	531
456	6	SI-16	土師器	体・底面	埴輪土	—	(5.2)	(2.8)	ワグ	ワグ	回転染め	備考	532

第17号層 貯蔵穴

探検番号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径(㎝)	底径(㎝)	深さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
457	7	SI-17	土師器	体・底面	埴輪土	—	(5.8)	(2.0)	ワグロ・ヘラケズリ	ワグロ・ミヨキ	回転染め	内面黒染め、P-16	198
458	8	SI-17	土師器	裏	カマド	(22.6)	—	(6.9)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—	P-10他	116
459	9	SI-17	土師器	裏	カマド・埴輪土	—	4.5	(3.8)	ヘラケズリ・輪研	ヘラケズリ	砂吹	外面付着物	38
460	10	SI-17	土師器	裏	埴輪土	—	(7.6)	(8.3)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂吹	外面付着物	39
461	11	SI-17	土師器	底面	埴輪土	—	(9.2)	(2.6)	ヘラケズリ	—	ヘラケズリ	P-23	75
462	12	SI-17	土師器	裏	埴輪土	—	(7.0)	(2.5)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂吹	P-113	76
463	13	SI-17	土師器	胴・底面	黒・埴輪土	—	(10.5)	(30.6)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	平磨	外面付着物、P-22他	6
464	14	SI-17	土師器	胴部	黒・埴輪土	—	—	(29.3)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	外面付着物、P-18他	8
465	15	SI-17	土師器	小蓋(内)	埴輪土	—	(5.8)	(2.5)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	木重	内面黒染め、P-86	M61
466	16	SI-17	土師器	底面	埴輪土	(4.4)	(2.2)	5.1	指ナデ	指ナデ	—	P-95	M9
466	17	SI-17	土師器	体・底面	埴輪土	—	(7.6)	(1.9)	ワグ	ワグ	回転染め	南化染め、外面付着物、P-46	197

第18号層 貯蔵穴

探検番号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径(㎝)	底径(㎝)	深さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
466	18	SI-18	土師器	底面	カマド	13.8	5.8	5.3	ワグ	ワグ	回転染め	何物?	583
467	19	SI-18	土師器	底面	カマド	14.0	—	(3.1)	ワグ	ワグ	—	200	
466	20	SI-18	土師器	体・底面	埴輪土	—	(6.0)	(3.0)	ワグ	ワグ	回転染め	遺物同群	199

第19号層 貯蔵穴

探検番号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・層位	口径(㎝)	底径(㎝)	深さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 整理番号
469	1	SI-19	土師器	底面	カマド	13.6	5.4	3.7	ワグ	ワグ	回転染め	備考	P-1
469	2	SI-19	土師器	底面	カマド	(15.0)	6.2	4.0	ワグ	ワグ	回転染め	支那、外面付着物、P-1	527
469	3	SI-19	土師器	底面	埴輪土	(13.8)	(6.0)	4.5	ワグ	ワグ	回転染め	外面付着物、P-2	223
469	4	SI-19	土師器	裏	カマド	(17.4)	—	(16.9)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	—	P-5	117
469	5	SI-19	土師器	裏	カマド	—	6.6	(6.4)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	支那	40

探(発)番号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	取柄	備考	出土分析 器物番号
49 6	SI-19	須恵器	甕	甕完形	ピット4	13.2	5.4	3.1	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理、P-1他	201
49 7	SI-19	須恵器	甕?	口縁部残存1/3	埴輪土	15.0	—	2.7	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理	202
49 8	SI-19	須恵器	甕	甕完形	埴輪土	12.8	6.0	4.0	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理、202と同一個体?	203
49 9	SI-19	須恵器	甕?	体~底部	埴輪土	—	5.6	1.7	ワタ	ワタ	同転高切	—	319
第20号窖穴残存跡													
50 1	出土地点	須恵器	甕	甕完形	埴輪土	14.2	6.2	4.0	外周	内周	取柄	備考	出土分析 器物番号
52 1	SI-20	土師器	甕	甕完形	埴輪土	14.2	6.2	4.0	ワタ	ワタ	同転高切	底面調査「ナ」、遺構跡報告	569
52 2	SI-20	土師器	甕	交脚	埴輪土	15.3	5.9	5.1	ワタ	ワタ	同転高切	—	565
52 3	SI-20	土師器	甕	交脚	埴輪土	13.8	6.1	5.2	ワタ	ワタ	同転高切	遺構跡報告	155
52 4	SI-20	土師器	甕	交脚	埴輪土	13.7	6.3	4.9	ワタ	ワタ	同転高切	灯明? P-12	585
52 5	SI-20	土師器	甕	交脚	埴輪土	13.3	6.8	4.7	ワタ	ワタ	同転高切	P-11、外周付着物(すず?)	586
52 6	SI-20	土師器	甕	底部	埴輪土	—	7.2	1.5	ワタ	—	同転高切	—	297
52 7	SI-20	土師器	甕	底部	埴輪土	—	5.6	0.9	ワタ	—	同転高切	—	321
52 8	SI-20	土師器	甕	底部	埴輪土	—	5.0	0.6	ワタ	—	同転高切	—	298
52 9	SI-20	土師器	甕	口縁~胴部	埴輪土	20.2	—	6.0	ハナナ3分ナ・細線	ハナナ・ヨコナナ	—	—	118
52 10	SI-20	須恵器	甕	交脚	埴輪土	14.5	5.4	3.8	ワタ	ワタ	同転高切	灯明、酸化塩酸処理、遺構跡報告	562
52 11	SI-20	須恵器	甕	交脚	埴輪土	13.7	6.6	5.0	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理	582
52 12	SI-20	須恵器	甕	体~底部	埴輪土	—	6.0	2.1	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理、外周面付着物	219
52 13	SI-20	須恵器	甕	体~底部	埴輪土	—	5.2	2.1	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理	332
52 14	SI-20	須恵器	甕	底部	埴輪土	—	5.4	1.4	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理	320
第21号窖穴残存跡													
52 15	出土地点	須恵器	甕	甕完形	埴輪土	—	6.0	1.4	外周	内周	取柄	備考	出土分析 器物番号
52 16	SI-21	須恵器	甕	体~底部	埴輪土	—	5.2	2.0	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理、遺構跡報告、P-4他	316
52 17	SI-21	須恵器	甕	体~底部	埴輪土	—	5.2	2.0	ワタ	ワタ	同転高切	酸化塩酸処理、P-3	333
第22号窖穴残存跡													
55 1	SI-22	土師器	甕	甕完形	埴輪土・ビット	14.0	5.6	3.3	外周	内周	取柄	備考	出土分析 器物番号
55 2	SI-22	土師器	甕	交脚	東~北東・ビット	12.7	5.5	4.0	ワタ	ワタ	同転高切	—	563
55 3	SI-22	土師器	甕	甕完形	埴輪土・土師器	14.0	5.2	5.0	ワタ	ワタ	同転高切	P-15他	557
55 4	SI-22	土師器	甕	甕完形	埴輪土	13.6	5.2	5.3	ワタ	ワタ	同転高切	P-33他	564
55 5	SI-22	土師器	甕	甕完形	埴輪土・埴輪土	13.6	5.4	6.4	ワタ	ワタ	同転高切	—	558
55 6	SI-22	土師器	甕	甕完形	埴輪土	13.2	5.0	5.8	ワタ	ワタ	同転高切	灯明、内周面付着物(すず?)	561
55 7	SI-22	土師器	甕	甕完形	埴輪土	14.0	5.2	6.7	ワタ	ワタ	同転高切	—	204
55 8	SI-22	土師器	甕	交脚	ピット19	14.7	5.2	5.3	ワタ	ワタ	同転高切	灯明(口縁打ち欠き)、外周縁、P-1	560
55 9	SI-22	土師器	甕	口縁部残存1/6	埴輪土	16.4	—	5.0	ワタ	ワタ	—	—	587
55 10	SI-22	土師器	甕?	口縁部残存1/3	埴輪土・埴輪土	12.2	—	4.3	ワタ	ワタ	—	—	205
55 11	SI-22	土師器	甕	口縁部残存1/4	埴輪土	15.0	—	4.0	ワタ	ワタ	—	—	206
55 12	SI-22	土師器	甕	体~底部	埴輪土	—	5.6	2.5	ワタ	ワタ	同転高切	灯明、P-18	209
55 13	SI-22	土師器	甕	体~底部	埴輪土	—	6.2	2.7	ワタ	ワタ	同転高切	P-35	210
55 14	SI-22	土師器	甕	体~底部	埴輪土	—	7.0	2.5	ワタ	ワタ	同転高切	—	211
55 15	SI-22	土師器	甕	体~底部	埴輪土	—	5.6	2.9	ワタ	ワタ	同転高切	内周面付着物	317
56 16	SI-22	土師器	甕?	体~底部	埴輪土	—	5.0	2.5	ワタ	ワタ	同転高切	同転高切・ハナナズリ	213
56 17	SI-22	土師器	甕	体~底部	粘土	—	6.0	1.8	ワタ	ワタ	同転高切	—	322
56 18	SI-22	土師器	甕	体~底部	ピット6	—	5.7	1.4	ワタ	ワタ	同転高切	—	334
56 19	SI-22	土師器	甕	体~底部	埴輪土	—	5.2	1.4	ワタ	ワタ	同転高切	—	323
56 20	SI-22	土師器	甕	甕完形	東~北東・埴輪土	14.0	6.0	11.6	ハナナズリ	ハナナズリ	同転高切	内周面付着物、P-3他	156
56 21	SI-22	土師器	甕	口縁~胴部	埴輪土	—	—	0.7	ハナナズリ・ヨコナナ	ハナナズリ・ヨコナナ	—	—	119

発掘号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号		
56	22	SI-22	土師器	裏	口縁～胴部	ピット6	φ21.2	—	(10.5)	A3755-2374(無蓋)	ヘラナナ	土が本	—	121	
56	23	SI-22	土師器	裏	口縁～胴部	土壇2	φ19.0	—	(17.8)	ヘラナナ(ヘラナナ)	ヘラナナ	—	—	120	
56	24	SI-22	土師器	裏	口縁～胴部	埴輪土	φ4.7	—	(5.8)	ヘラナナ(ヘラナナ)	ヘラナナ	—	—	122	
56	25	SI-22	土師器	裏	口縁～胴部	ピット9	φ13.0	—	(7.0)	ヘラナナ(ヘラナナ)	ヘラナナ	—	P-2他	54	
56	26	SI-22	土師器	裏	口縁～胴部	埴輪土	φ12.0	—	(5.0)	ヘラナナ(ヘラナナ)	ヘラナナ	—	内外面同様、P-1他	55	
56	27	SI-22	土師器	裏	胴部～フット6	埴輪土	φ16.0	—	(18.3)	ヘラナナ	ヘラナナ	砂蔵	—	10	
57	28	SI-22	土師器	裏	胴部～底面	カマド	—	(5.0)	(9.7)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	41	
57	29	SI-22	土師器	裏	胴部～底面	埴輪土	—	8.1	(11.3)	ヘラナナ	ヘラナナ	砂蔵	—	19	
57	30	SI-22	土師器	裏	胴部～底面	ピット6	—	(5.0)	(7.0)	ヘラナナ	ヘラナナ	砂蔵	内外面同様	43	
57	31	SI-22	土師器	裏	胴部～底面	カマド	—	(5.0)	(4.9)	ヘラナナ	ヘラナナ	砂蔵	—	42	
57	32	SI-22	土師器	裏	胴部～底面	カマド	—	(10.0)	(2.4)	ヘラナナ	ヘラナナ	砂蔵	—	78	
57	33	SI-22	土師器	裏	底面	埴輪土	—	(11.0)	(2.6)	ヘラナナ	ヘラナナ	砂蔵	P-28	77	
57	34	SI-22	土師器	裏	底面	埴輪土	—	(6.0)	(1.9)	ヘラナナ	ヘラナナ	砂蔵	—	79	
57	35	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	6.0	(5.7)	ヘラナナ	ヘラナナ	砂蔵	P-1	45	
57	36	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	(10.0)	—	(6.0)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	内外面同様・付着物	M25	
57	37	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	(7.2)	—	(4.2)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	内外面同様	M24	
57	38	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(6.6)	(2.7)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	内外面同様	M62	
57	39	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(4.4)	(3.0)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	内外面同様	M58	
57	40	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	4.2	(1.4)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	P-2	M67	
57	41	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	13.7	5.6	5.1	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	476
57	42	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	13.1	5.0	5.5	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	18
57	43	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(12.6)	5.5	5.3	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	19
57	44	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(5.6)	(3.3)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	559	
57	45	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(12.4)	—	(2.7)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	212
58	46	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(4.0)	—	—	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	598
58	47	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(6.4)	(3.0)	—	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	207
58	48	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(13.4)	(18.0)	—	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	515
58	49	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(10.7)	(10.5)	27.5	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	20
58	50	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(8.5)	—	—	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	47.4
58	51	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	8	—	—	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	17
58	52	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	16	15	(14)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	17
58	53	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	2.0	2.6	0.9	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	17
58	54	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	2.0	2.3	1.0	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	17
58	55	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	2.0	2.2	1.0	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	17
58	55	SI-22	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(7.4)	(6.4)	(4.2)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	17

第22号型欠け足跡

発掘号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号		
60	1	SI-25	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(13.0)	7.1	5.2	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	556
60	1	SI-25	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(13.0)	7.1	5.2	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	556

第24号型欠け足跡

発掘号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号		
63	1	SI-24	土師器	底?	胴～底面	カマド	—	5.1	4.6	—	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	588
63	2	SI-24	土師器	底?	胴～底面	カマド	—	(13.1)	6.4	4.6	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	568
63	3	SI-24	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(12.8)	—	(2.6)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	589
63	4	SI-24	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	2.0	(1.3)	—	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	336
63	5	SI-24	土師器	底?	胴～底面	埴輪土	—	(6.0)	(2.1)	—	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	325
63	6	SI-24	土師器	底?	胴～底面	カマド	—	(23.0)	—	(40.0)	ヘラナナ	ヘラナナ	—	—	7

探(発)号	出土地点	種類	遺構	部位	出土位置・層位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	外周	内周	底面	備考	出土分析 器物番号
65 7	SI-24	土師器	甕	口縁~胴部	方斗	φ21.00	-	(12.6)	ロウロ	ロウロ・ヘウケズリ	-	P-12	223
65 8	SI-24	土師器	甕	口縁~胴部	方斗	φ22.00	-	(12.6)	ロウロ	ロウロ	-	P-12	56
65 9	SI-24	土師器	甕	口縁~胴部	方斗	φ22.00	-	(7.8)	ロウロ・ヘウケズリ	ヘウケズリ	-	遺構間埋合	124
64 10	SI-24	土師器	甕	胴部	埴輪土	-	-	(9.8)	ヘウケズリ・ヨコナズリ	ヘウケズリ・轆轤直	-	-	57
64 11	SI-24	土師器	甕	胴~底部	方斗	-	(10.4)	(12.7)	ヘウケズリ	ヘウケズリ	-	P-2地	15
64 12	SI-24	土師器	甕	胴~底部	方斗	φ6.5	-	(3.8)	ヘウケズリ	ヘウケズリ・轆轤直	-	支脚, P-11	40
64 13	SI-24	土師器	小甕(厚)	口縁~胴部	埴輪土	φ4.00	-	(12.2)	ヘウケズリ・ヨコナズリ	ヘウケズリ・ヨコナズリ	-	P-13地	M19
64 14	SI-24	土師器	埴	体~底部	埴輪土	φ4.00	-	(5.8)	ヘウケズリ・轆轤直	ヘウケズリ・轆轤直	-	-	521
64 15	SI-24	土師器	埴	体~底部	埴輪土	-	(5.8)	(2.3)	ロウロ	ロウロ	-	高低地境, P-12	324
64 16	SI-24	土師器	埴	体~底部	土質A・埴輪土	-	(6.4)	(1.2)	ロウロ	ロウロ	-	高低地境, P-12	324
64 16	SI-24	土師器	埴	体~底部	埴輪土	-	(6.4)	(1.2)	ロウロ	ロウロ	-	高低地境, P-12	335
第25号竪穴住居跡													
66 1	SI-25	土師器	皿	底面	土師器	φ13.00	(5.6)	3.0	ロウロ	ロウロ	底面	備考	出土分析 器物番号
66 2	SI-25	土師器	甕	口縁~胴部	埴輪土	12.6	5.4	4.8	ロウロ・ヘウケズリ	ロウロ	高低地境	P-3	214
66 3	SI-25	土師器	埴	支脚	埴輪土	13.4	5.4	5.4	ロウロ・ヘウケズリ	ロウロ	高低地境	灯明, P-1	164
66 4	SI-25	土師器	埴	支脚	埴輪土	13.4	5.4	5.4	ロウロ・ヘウケズリ	ロウロ	高低地境	P-4	158
66 5	SI-25	土師器	埴	口縁部	埴輪土	(12.6)	(6.6)	5.5	ロウロ	ロウロ	高低地境	P-1地	215
66 6	SI-25	土師器	埴	口縁部	埴輪土	(12.6)	(5.4)	4.9	ロウロ	ロウロ	高低地境	灯明, 内周部付着物	566
66 7	SI-25	土師器	埴	口縁部	埴輪土	(13.0)	-	(4.5)	ロウロ	ロウロ	高低地境	灯明, 内周部付着物	217
66 8	SI-25	土師器	埴	体~底部	埴輪土	-	6.0	(4.4)	ロウロ	ロウロ	高低地境	底面埋合?	216
66 9	SI-25	土師器	埴	口縁~胴部	埴輪土	(19.0)	-	(5.2)	ヘウケズリ・ヨコナズリ	ヘウケズリ・ヨコナズリ	高低地境	備考	307
66 10	SI-25	土師器	埴	口縁~胴部	埴輪土	-	6.0	(3.0)	ロウロ	ロウロ	高低地境	内周部人骨痕, P-2地	22
66 11	SI-25	土師器	埴	胴~底部	埴輪土	-	8.6	(14.4)	ロウロ・ヘウケズリ	ロウロ	高低地境	P-9	478
66 12	SI-25	土師器	埴	口縁~胴部	埴輪土	(11.6)	-	(10.9)	ロウロ	ロウロ	高低地境	480上同一層位?	23
66 13	SI-25	土師器	埴	胴~底部	埴輪土	-	(7.0)	(6.4)	ロウロ	ロウロ	高低地境	480上同一層位?	24
66 14	SI-25	土師器	埴	胴~底部	埴輪土	-	(7.0)	(6.4)	ロウロ	ロウロ	高低地境	480上同一層位?	24
第26号竪穴住居跡													
68 1	SI-26	土師器	埴	口縁~胴部	土師器	φ7.20	-	(7.2)	ヘウケズリ・ヨコナズリ	ヘウケズリ・ヨコナズリ	底面	備考	出土分析 器物番号
68 1	SI-26	土師器	甕	口縁~胴部	埴輪土	-	(7.2)	(7.2)	ヘウケズリ・ヨコナズリ	ヘウケズリ・ヨコナズリ	底面	備考	58
第27号竪穴住居跡													
68 2	SI-27	土師器	埴	口縁部	埴輪土	φ13.80	-	(3.3)	外周	内周	底面	備考	出土分析 器物番号
68 3	SI-27	土師器	埴	口縁部	埴輪土	φ13.80	-	(3.3)	外周	内周	底面	備考	出土分析 器物番号
68 4	SI-27	土師器	埴	体~底部	埴輪土	φ13.80	-	(5.8)	ロウロ	ロウロ	高低地境	ヘウケズリ	326
68 5	SI-27	土師器	埴	口縁~胴部	埴輪土	φ23.00	-	(7.3)	ヘウケズリ・ヨコナズリ	ヘウケズリ	高低地境	ヘウケズリ	120
68 6	SI-27	土師器	甕	口縁~胴部	埴輪土	(17.0)	-	(16.4)	ヘウケズリ・ヨコナズリ	ヘウケズリ・ヨコナズリ	高低地境	P-9地	11
68 7	SI-27	土師器	埴	胴~底部	埴輪土	-	8.6	(6.5)	ヘウケズリ	ヘウケズリ	砂敷	P-1, 底面土質上付着物	584
68 8	SI-27	土師器	埴	胴~底部	埴輪土	φ6.20	(3.8)	5.1	ロウロ	ロウロ	静止高切	内周部高切埋合	M14
68 9	SI-27	土師器	小甕(厚)	口縁部	埴輪土	φ6.20	(3.8)	5.1	ロウロ	ロウロ	静止高切	内周部高切埋合	M14
第1号円形住居													
79 1	第1号円形住居	土師器	埴	口縁部	土師器	φ12.40	(6.4)	6.0	ロウロ	内周	底面	備考	出土分析 器物番号
79 2	第1号円形住居	土師器	埴	口縁部	埴輪土	(12.4)	(6.4)	6.0	ロウロ	内周	底面	備考	出土分析 器物番号
79 3	第1号円形住居	土師器	埴	体~底部	埴輪土	-	(6.0)	(2.2)	ロウロ	ロウロ	底面	高低地境, P-5	272
79 4	第1号円形住居	土師器	埴	胴~底部	埴輪土	-	(7.0)	(2.0)	ヘウケズリ	ヘウケズリ	砂敷	備考	91
79 5	第2号円形住居	土師器	埴	体~底部	埴輪土	-	(5.8)	(2.5)	ロウロ	ロウロ	高低地境	P-25	278
79 6	第2号円形住居	土師器	埴	体~底部	埴輪土	-	(5.0)	(5.0)	ロウロ	ロウロ	高低地境	遺構間埋合, P-10地	279
79 7	第2号円形住居	土師器	埴	体~底部	埴輪土	-	(6.0)	(2.0)	ロウロ	ロウロ	高低地境	遺構間埋合, P-10地	293
79 8	第2号円形住居	土師器	埴	体~底部	埴輪土	-	(6.0)	(2.0)	ロウロ	ロウロ	高低地境	P-10地	290
79 9	第2号円形住居	土師器	埴	胴~底部	埴輪土	-	3.7	(9.5)	ヘウケズリ	ヘウケズリ	砂敷	P-6地	48
79 9	第2号円形住居	土師器	甕	胴~底部	埴輪土	-	(7.6)	(2.4)	ヘウケズリ	ヘウケズリ	大甕埋合	P-42	93

第2号円形渠溝

区画番号	出土地	種類	用途	部位	出土位置・単位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外周	内周	底面	備考	施工分析 整理番号
79 10	第2号円形渠溝	須砂	環	体～底面	渠様土	—	(5.8)	(2.0)	ロク口	ロク口	同底面切	備考	施工分析 整理番号
79 11	第2号円形渠溝	須砂	環	体～底面	渠様土	—	(5.6)	(1.9)	ロク口	ロク口	同底面切	圃化地造成?	30
79 12	第2号円形渠溝	須砂	環	体～底面	渠様土	—	(5.6)	(1.9)	ロク口	ロク口	同底面切	備考	282

第3号円形渠溝

区画番号	出土地	種類	用途	部位	出土位置・単位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外周	内周	底面	備考	施工分析 整理番号
79 12	第3号円形渠溝	須砂	環	底面	渠様土	(14.2)	(6.4)	3.0	ロク口・ヘウケズ口	内面	圃化地造成? (ヘウケズ口)	備考	221
79 13	第3号円形渠溝	須砂	環	側～底面	渠様土	—	(7.6)	(4.3)	ヘウケズ口	ロク口	砂	P-31	44
79 14	第3号円形渠溝	須砂	環	側～底面	渠様土	—	(9.0)	(3.9)	ヘウケズ口・側面圧	ヘウケズ口	砂	P-35	95
79 15	第3号円形渠溝	須砂	環	側～底面	渠様土	—	5.9	(2.7)	ヘウケズ口	3分ホ	ヘウケズ口	圃内底面造埋	94
79 16	第3号円形渠溝	須砂	環	側～側面	渠様土	(6.4)	—	(3.8)	ヘウケズ口・側面圧	ナデ・側面圧	—	M26	206
79 17	第3号円形渠溝	須砂	環	体～底面	渠様土	—	(5.6)	(1.8)	ロク口	ロク口	同底面切	P-18	504
80 18	第3号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	(6.0)	—	(2.3)	側3分ホ	ロク口	圃化地造成?	備考	282
80 19	第3号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	4.3	4.2	1.6	40.0	—	側一側一七者系合	備考	285

第4号円形渠溝

区画番号	出土地	種類	用途	部位	出土位置・単位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外周	内周	底面	備考	施工分析 整理番号
80 19	第4号円形渠溝	須砂	環	体～底面	渠様土	—	(5.4)	(3.6)	ロク口	ロク口	同底面切	備考	31
80 20	第4号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	(6.0)	—	(2.3)	側3分ホ	—	圃化地造成?	備考	403
80 21	第4号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	17.7	5.7	0.5	58.0	—	圃化地造成?	備考	403

第5号円形渠溝

区画番号	出土地	種類	用途	部位	出土位置・単位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外周	内周	底面	備考	施工分析 整理番号
80 21	第5号円形渠溝	須砂	環	体～底面	渠様土	—	(6.0)	(2.1)	ロク口	ロク口	同底面切	圃化地造成?	285
80 22	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	(12.2)	5.6	5.2	ロク口	内面	圃化地造成?	備考	275
80 23	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	13.1	4.8	5.0	ロク口	ロク口	圃化地造成?	備考	274
80 24	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	12.3	4.4	5.2	ロク口	ロク口	圃化地造成?	備考	273
80 25	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	(12.0)	4.8	5.5	ロク口	ロク口	圃化地造成?	備考	276
80 26	第5号円形渠溝	須砂	環	側～側面	圃内底面	—	(8.0)	1.0	ロク口	ロク口	圃化地造成?	M3	17
80 27	第5号円形渠溝	須砂	環	側～底面	渠様土	—	(5.8)	(2.7)	ヘウケズ口	ヘウケズ口	砂	圃外側付着	M66
80 28	第5号円形渠溝	須砂	環	側～底面	渠様土	(9.2)	(3.0)	(3.0)	ヘウケズ口	側面	圃化地造成?	P-17	49
81 29	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	(13.2)	(6.0)	3.2	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-26	281
81 30	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	(12.8)	(5.0)	5.2	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-18	287
81 31	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	13.1	4.8	5.7	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-18	32
81 32	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	13.1	4.8	5.7	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-18	32
81 33	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	—	(6.2)	(2.0)	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-5	33
81 34	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	—	(6.4)	(1.9)	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-6	291
81 35	第5号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	—	(5.8)	(2.7)	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-6	288

第7号円形渠溝

区画番号	出土地	種類	用途	部位	出土位置・単位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外周	内周	底面	備考	施工分析 整理番号
81 36	第7号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	—	4.6	(2.1)	ロク口	内面	圃化地造成?	備考	294
81 37	第7号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	—	(6.4)	(1.4)	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-1	296
81 38	第7号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	7.0	—	(5.1)	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	P-2	M11
81 39	第7号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	10.5	6.2	6.4	ヘウケズ口・ヨコナデ	ヘウケズ口	圃化地造成?	圃化地造成?	M13
81 40	第7号円形渠溝	須砂	環	側面	圃内底面	—	(6.6)	4.6	4.0	ヘウケズ口・ヨコナデ	ナデ	圃化地造成?	M1

第9号円形渠溝

区画番号	出土地	種類	用途	部位	出土位置・単位	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	外周	内周	底面	備考	施工分析 整理番号
80 1	第1号円形渠溝	須砂	環	側面	渠様土	(12.6)	(5.2)	5.2	ロク口	圃化地造成?	圃化地造成?	圃化地造成?	571

探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・方位	口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	外径	内径	底面	備考	出土分析 器種番号
85 2	第1号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	(12.2)	5.1	5.1	ロウロ	ロウロ→3分半	回転高切	備考	572
85 3	第1号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	—	5.4	2.7	ロウロ	ロウロ	回転高切	内面黒色処理、P-13	576
85 4	第1号埋葬	土師器	小皿(覆)	口縁~胴底	埴積土	(9.0)	—	(5.6)	ハタケズリ・ヨコナズ	ハタケズリ・ヨコナズ	—	内面黒色処理、P-31	M20
85 5	第1号埋葬	土師器	小皿(覆)	口縁~胴底	埴積土	(6.5)	—	(3.8)	ロウロ	ロウロ	—	内面黒色処理	M30
85 6	第1号埋葬	土師器	小皿(覆)	胴~底部	埴積土	—	(6.0)	(4.3)	ハタケズリ	ハタケズリ	ナズ	—	M49
第2号埋葬													
85 7	第2号埋葬	土師器	埴	甕冠形	底面	(13.2)	4.7	6.4	ロウロ	内面	底面	備考	567
85 8	第2号埋葬	土師器	埴	口縁部外縁/口	底面・埴積土	(16.4)	—	(2.8)	ロウロ	ロウロ	—	遺留箇所、P-13	579
第3号埋葬													
85 9	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	(13.0)	(6.2)	4.6	ロウロ→ハタケズリ	内面	底面	備考	565
85 10	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	(14.0)	5.5	5.5	ロウロ	ロウロ	回転高切	遺留箇所、P-28	570
85 11	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	(14.2)	(6.4)	5.9	ロウロ	ロウロ	回転高切	P-27	574
85 12	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	(14.4)	(6.0)	5.7	ロウロ→3分半	ロウロ→3分半	回転高切	P-1	573
85 13	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	—	(5.2)	(4.3)	ロウロ	ロウロ	回転高切	内面黒色処理	229
85 14	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	—	5.8	(1.6)	ロウロ	ロウロ	回転高切	P-25	578
85 15	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	—	5.6	(1.7)	ロウロ	ロウロ	回転高切	—	577
85 16	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	—	(5.2)	(2.5)	ロウロ	ロウロ	回転高切	—	575
85 17	第3号埋葬	土師器	甕	口縁~胴底	埴積土	(21.8)	—	(12.7)	ハタケズリ・ヨコナズ	ハタケズリ・ヨコナズ	—	P-11他	129
85 18	第3号埋葬	土師器	甕	胴~底部	埴積土	—	(7.7)	(6.0)	ハタケズリ	ハタケズリ	砂敷→ハタケズリ	—	90
85 19	第3号埋葬	土師器	甕	胴~底部	埴積土	—	(9.1)	(3.0)	ハタケズリ	ハタケズリ	ハタケズリ	—	89
85 20	第3号埋葬	土師器	甕	胴~底部	埴積土	—	9.0	(1.1)	ハタケズリ	ハタケズリ	ハタケズリ	—	88
85 21	第3号埋葬	土師器	甕	胴~底部	埴積土	—	(9.0)	(3.5)	ハタケズリ・輪縁	ハタケズリ	砂敷	—	87
85 22	第3号埋葬	土師器	杯?	底面	埴積土	—	台径13.6	(4.4)	(存)ロウロ	3分半(存)ロウロ	ロウロ	高付付き、内面黒色処理	86
85 23	第3号埋葬	土師器	小皿(覆)	胴形	火山灰中	(8.8)	5.5	7.8	ハタケズリ・ヨコナズ	ハタケズリ・ヨコナズ	砂敷	M7	
85 24	第3号埋葬	土師器	小皿(覆)	口縁~胴底	埴積土	(9.0)	—	(2.7)	ハタケズリ・ヨコナズ	ハタケズリ・ヨコナズ	—	M22	
85 25	第3号埋葬	土師器	小皿(覆)	口縁~胴底	埴積土	(8.6)	—	(4.4)	ハタケズリ・ヨコナズ	ハタケズリ・ヨコナズ	—	M11	
85 26	第3号埋葬	土師器	小皿(覆)	胴~底部	埴積土	—	(6.5)	(4.6)	ハタケズリ	ハタケズリ	砂敷	内面黒色処理	34
85 27	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	(12.8)	(6.4)	4.9	ロウロ	ロウロ	回転高切	—	35
85 28	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	(12.2)	(5.2)	5.4	ロウロ	ロウロ	回転高切	内面黒色処理	35
85 29	第3号埋葬	土師器	埴	甕冠形	埴積土	—	5.2	(1.9)	ロウロ	ロウロ	回転高切	内面黒色処理	29
85 30	第3号埋葬	土師器	長筒型	胴~底部	埴積土	—	(10.4)	(23.9)	ロウロ	高付	高付	外面厚部に自然輪	36
85 31	第3号埋葬	土師器	甕	遺存部	出土位置・方位不明	—	—	—	重さ(g)	石質	使用	備考	407
85 31	第3号埋葬	石器	砥石	2	埴積土	(5.0)	2.6	0.8	(14.6)	—	4	—	412
第3号土坑													
98 1	SSK-03	土師器	埴	甕冠形	埴積土	(13.4)	6.2	4.6	外周	内面	底面	備考	514
98 2	SSK-03	土師器	小皿(覆)	胴~底部	埴積土	—	(5.6)	(3.3)	ハタケズリ	ハタケズリ	回転高切	外周黒色処理、P-5他	84
第5号土坑													
98 3	SSK-05	土師器	埴	甕冠形	埴積土	—	(5.8)	(2.5)	ロウロ	内面	底面	備考	260
98 4	SSK-05	土師器	甕	底面	埴積土	—	(6.4)	(2.4)	ハタケズリ	—	砂敷→ハタケズリ	内面黒色処理、P-15	85
第6号土坑													
98 5	SSK-06	土師器	甕	口縁~胴底	埴積土	(19.0)	—	(6.8)	外周	内面	底面	備考	27
98 6	SSK-06	土師器	甕	口縁~胴底	埴積土	(19.0)	—	(6.8)	外周	内面	底面	備考	27

第 8 号土坑												
探(発)部?	出土地点	種類	器種	器体	出土位置・部位	長さ (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	内面	胎土分析 器体番号	
98 10	SK-08	石器	石錐	2	塚根土	(4.5)	1.2	0.7	(3.0)	埋没直下	備考	石25
第 9 号土坑												
98 17	SK-09	土器	土器	口縁~胴部	塚根土	(20.0)	-	(3.5)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
磨化地帯域?												
第 12 号土坑												
98 12	SK-12	土器	土器	口縁	塚根土	(15.0)	5.0	6.7	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
98 8	SK-12	土器	土器	胴完形	塚根土	(27.5)	-	(10.1)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
98 9	SK-12	土器	土器	口縁~胴部	塚根土	(16.0)	-	(9.7)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
98 10	SK-12	土器	土器	口縁~胴部	塚根土	(15.0)	-	(7.3)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
98 11	SK-12	土器	土器	口縁~胴部	塚根土	(15.0)	-	(5.8)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
98 12	SK-12	土器	土器	底面	塚根土	-	-	-	-	内面	備考	胎土分析 器体番号
第 23 号土坑												
99 13	SK-23	土器	土器	胴完形	塚根土	-	(1.4)	(5.2)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 14	SK-23	土器	土器	胴完形	塚根土	-	(4.0)	(2.5)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 15	SK-23	土器	土器	胴完形	塚根土	(12.7)	5.8	4.3	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
磨化地帯域?												
第 24 号土坑												
99 16	SK-26	土器	土器	胴完形	塚根土	(11.6)	5.4	5.0	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 17	SK-26	土器	土器	完形	塚根土	13.0	6.2	5.0	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 18	SK-26	土器	土器	口縁~胴部	塚根土	(14.0)	-	(14.0)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 19	SK-26	土器	土器	胴完形	塚根土	(14.5)	5.4	3.6	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
第 27 号土坑												
99 20	SK-27	土器	土器	胴完形	塚根土	(13.6)	(5.0)	4.0	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 21	SK-27	土器	土器	胴完形	塚根土	-	-	-	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 22	SK-29	土器	土器	口縁部	塚根土	(20.4)	-	(16.0)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 23	SK-30	土器	土器	胴完形	塚根土	-	(6.4)	(2.5)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
99 24	SK-30	土器	土器	胴完形	塚根土	-	(6.4)	(2.5)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
磨化地帯域?												
第 1 号溝跡												
112 1	SD-01	土器	土器	完形	塚根土	13.2	5.6	5.7	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
112 2	SD-01	土器	土器	体~胴部	塚根土	-	(6.2)	(2.1)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
112 3	SD-01	土器	土器	体~胴部	塚根土	-	(6.0)	(1.2)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
112 4	SD-01	土器	土器	底面	塚根土	-	(10.0)	(3.3)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
112 5	SD-01	土器	土器	裏台	塚根土	(5.5)	2.1	1.0	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
112 6	SD-01	土器	土器	裏台	塚根土	(5.5)	2.1	1.0	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
第 2 号溝跡												
112 6	SD-02	土器	土器	体~胴部	塚根土	-	(5.0)	(1.6)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
112 7	SD-02	土器	土器	体~胴部	塚根土	-	6.5	(3.5)	口方口	内面	備考	胎土分析 器体番号
内面着色処理												

探(発)号	出土地点	種類	器種	部位	出土位置・方位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	出土分析 器種番号
1121 8	SD-02	土師器	埴輪器?	体~底部	埴輪土	-	(5.2)	(1.4)	ロケ口	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
第3号溝溝跡													
1121 9	SD-03	土師器	土師器	底部	埴輪土	-	(7.0)	(0.9)	ヘラケズリ	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
1121 10	SD-03	土師器	埴輪器?	体~底部	埴輪土	-	5.4	(1.8)	ロケ口	内面	同転高切	備化場地区?	80
1121 11	SD-03	土師器	埴輪器?	体~底部	埴輪土	-	(5.8)	(1.9)	ロケ口	内面	同転高切	備化場地区?	338
1121 12	SD-03	土師器	埴輪器?	体~底部	埴輪土	-	(5.8)	(1.9)	ロケ口	内面	同転高切	備化場地区?	339
第4号溝溝跡													
1121 12	SD-04	土師器	土師器	体~底部	埴輪土	-	(5.2)	(0.9)	ロケ口	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
1121 13	SD-04	土師器	土師器	体~底部	埴輪土	-	(5.0)	(1.4)	ロケ口	内面	同転高切	備考	343
1121 14	SD-05	土師器	土師器	口縁部	埴輪土	(13.5)	(6.0)	4.1	ロケ口	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
113 15	SD-05	土師器	土師器	埴輪土	埴輪土	(11.4)	5.6	5.4	ロケ口	内面	同転高切	備考	235
113 16	SD-05	土師器	埴輪土	口縁部残存1/2	埴輪土	(12.8)	-	(4.7)	ロケ口	内面	同転高切	P-1	236
113 17	SD-05	土師器	埴輪土	体~底部	埴輪土	-	(5.6)	(3.7)	ロケ口	内面	同転高切	P-17他	234
113 18	SD-05	土師器	埴輪土	体~底部	埴輪土	-	(5.8)	(2.0)	ロケ口	内面	同転高切	P-33	237
113 19	SD-05	土師器	埴輪土	口縁~胴部	埴輪土	(15.0)	-	(6.1)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	P-32	346
113 20	SD-05	土師器	埴輪土	胴~底部	埴輪土	(22.8)	-	(7.3)	ヘラケズリ, 3コナテ	ヘラケズリ	-	P-31他	59
113 21	SD-05	土師器	埴輪土	胴~底部	埴輪土	(14.4)	(5.1)	4.0	ロケ口	内面	同転高切	P-21他	81
113 22	SD-05	土師器	埴輪土	胴~底部	埴輪土	(14.4)	(5.6)	4.0	ロケ口	内面	同転高切	備化場地区, P-25他	233
113 23	SD-05	土師器	埴輪土	口縁部残存1/2	埴輪土	(12.6)	-	(3.7)	ロケ口	内面	同転高切	備化場地区? P-24	238
113 24	SD-05	土師器	埴輪土	口縁部残存1/2	埴輪土	(15.6)	-	(2.9)	ロケ口	内面	同転高切	備化場地区? P-29他	239
113 25	SD-05	土師器	埴輪土	体~底部	埴輪土	-	5.0	(1.2)	ロケ口	内面	同転高切	備化場地区, P-77	341
113 26	SD-05	土師器	埴輪土	体~底部	埴輪土	-	(5.2)	(1.7)	ロケ口	内面	同転高切	備化場地区, P-75他	340
113 27	SD-05	土師器	長胴器?	胴~底部	埴輪土	-	(10.6)	(12.0)	ロケ口→ヘラケズリ	ロケ口	静止高切	備化場地区, P-1	26
114 28	SD-05	土師器	土師器	蓋付	埴輪土	8.1	4.4	ロケ口→指ナテ	ロケ口→指ナテ	石覆	備化場地区, P-1	812	
114 29	SD-05	土師器	土師器	蓋付	埴輪土	8.1	4.4	ロケ口→指ナテ	ロケ口→指ナテ	石覆	備化場地区, P-1	812	
114 30	SD-05	土師器	土師器	蓋付	埴輪土	4.9	3.3	1.3	(1.9)	石覆	備化場地区, P-1	812	
第11号溝溝跡													
114 30	SD-11	土師器	土師器	埴輪土	埴輪土	(14.3)	5.4	4.3	ロケ口	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
114 31	SD-12	土師器	土師器	埴輪土	埴輪土	-	(6.0)	(0.6)	ヘラケズリ	内面	同転高切→ヘラケズリ	P-3	581
第12号溝溝跡													
114 31	SD-12	土師器	土師器	埴輪土	埴輪土	-	(6.0)	(0.6)	ヘラケズリ	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
第15号溝溝跡													
114 32	SD-15	土師器	土師器	埴輪土	埴輪土	(12.1)	(5.4)	5.0	ロケ口	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
114 33	SD-15	土師器	土師器	埴輪土	埴輪土	(12.1)	(5.4)	5.0	ロケ口	内面	同転高切	備考	出土分析 器種番号
第16号溝溝跡													
114 33	SD-16	土師器	土師器	埴輪土	埴輪土	-	(5.4)	(1.7)	ロケ口	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
第17号溝溝跡													
115 34	SD-17	土師器	土師器	埴輪土	埴輪土	(12.4)	(5.5)	3.4	ロケ口	内面	底面	備考	出土分析 器種番号
115 35	SD-17	土師器	埴輪土	胴~底部	埴輪土	(13.2)	5.4	4.8	ロケ口	内面	同転高切	備考	244
115 36	SD-17	土師器	埴輪土	胴~底部	埴輪土	(11.6)	6.0	4.9	ロケ口	内面	同転高切	備考	248
115 37	SD-17	土師器	埴輪土	胴~底部	埴輪土	(13.0)	5.8	5.4	ロケ口	内面	同転高切	備考	246
115 37	SD-17	土師器	埴輪土	胴~底部	埴輪土	(13.0)	5.8	5.4	ロケ口	内面	同転高切	備考	242

探(発)号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号	
115 38	SD-17	土師器	埴	完形	塚様土	12.4	5.2	5.9	ロケ口	ロケ口	同底面切	打明、内面付遺物(「すずり」)	241	
115 39	SD-17	土師器	埴	断面形	塚様土	(14.0)	2.9	6.8	ロケ口	ロケ口	同底面切		245	
115 40	SD-17	土師器	埴	口縁部残存1/3	塚様土	(12.0)	—	(4.5)	ロケ口	ロケ口	—		254	
115 41	SD-17	土師器	埴	口縁部残存1/2	塚様土	(13.2)	—	(5.3)	ロケ口	ロケ口	—		243	
115 42	SD-17	土師器	埴	体→底部	塚様土	—	5.8	(4.0)	ロケ口	ロケ口	同底面切		248	
115 43	SD-17	土師器	埴	体→底部	粘土・塚様土	—	6.2	(3.0)	ロケ口	ロケ口	同底面切		252	
115 44	SD-17	土師器	埴	体→底部	塚様土	—	5.8	(3.8)	ロケ口	ロケ口	同底面切		251	
115 45	SD-17	土師器	埴	体→底部	塚様土	—	6.1	(3.8)	ロケ口	ロケ口	同底面切		247	
115 46	SD-17	土師器	埴	体→底部	塚様土	—	5.2	(1.3)	ロケ口	ロケ口	同底面切		342	
115 47	SD-17	土師器	埴	体→底部	粘土	—	(6.4)	(1.0)	ロケ口	ロケ口	同底面切		348	
115 48	SD-17	土師器	埴	体→底部	塚様土	—	5.8	(2.5)	ロケ口	ロケ口	同底面切		250	
115 49	SD-17	土師器	埴	口縁→胴部	粘土	(11.4)	—	(7.3)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	128		
116 50	SD-17	土師器	小皿(鉢)	口縁→胴部	塚様土	(6.6)	—	(2.5)	ロケ口	ロケ口	同底面切		249	
116 51	SD-17	土師器	埴	断面形	塚様土	(12.6)	(5.4)	4.5	ロケ口	ロケ口	—	255		
116 52	SD-17	土師器	埴	口縁部残存1/3	塚様土	(12.8)	—	(3.3)	ロケ口	ロケ口	—	255		
116 53	SD-17	土師器	埴	断面形	出土位置・単位長2(壺)	幅(cm)	厚さ(cm)	—	厚さ(壺)	石質	縁面	備考	出土分析 器物番号	
116 53	SD-17	石器	砥石	断面形	塚様土	(6.3)	(4.1)	(1.9)	24.7	縁面(灰岩)	1		411	
第18号調査														
探(発)号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号	
116 54	SD-18	土師器	埴	断面形	塚様土	—	(9.4)	(17.3)	ロケ口→ヘラケズリ	ロケ口	ヘラケズリ	内外面ロケ口痕跡	25	479
第21号調査														
探(発)号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号	
116 55	SD-21	土師器	埴	断面形	塚様土	(13.5)	5.1	5.0	ロケ口	ロケ口	同底面切		256	
第22号調査														
探(発)号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号	
116 56	SD-26	土師器	埴	体→底部	塚様土	—	5.8	(3.2)	ロケ口	ロケ口	同底面切→ヘラケズリ		257	
第27号調査														
探(発)号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号	
116 57	SD-27	土師器	埴	体→底部	塚様土	—	(5.2)	(2.6)	ロケ口	ロケ口	同底面切		228	
116 58	SD-27	土師器	埴	口縁→胴部	塚様土	(33.8)	—	(13.4)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	外部付遺物		
116 59	SD-27	土師器	小皿(鉢)	口縁→胴部	塚様土	(6.4)	—	(4.8)	ヘラケズリ・ヨコナテ	ヘラケズリ	—		M13	
第1号土器調査施設遺構														
探(発)号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号	
118 1	階段	土師器	埴	体→底部	塚様土	18.3	9.2	19.4	ロケ口→ヘラケズリ	ロケ口	同底面切→ヘラケズリ	内面黒色処理	230	
118 2	階段	土師器	埴	断面形	塚様土	(24.0)	8.0	29.3	ロケ口→ヘラケズリ	ロケ口	平盤	P-A	4	
118 3	階段	土師器	埴	断面形	塚様土	(24.0)	8.0	29.3	ロケ口→ヘラケズリ	ロケ口	平盤	外部付遺物、P-8	2	
瓦葺水														
探(発)号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	底面	備考	出土分析 器物番号	
119 1	溝跡水	土師器	埴	体→底部	黒色土	—	(6.0)	(2.5)	ロケ口	ロケ口	同底面切		231	
119 2	溝跡水	土師器	埴	体→底部	黒色土	—	(7.5)	(2.1)	ロケ口	ロケ口	高台付き、断面状の母内面		517	
119 3	溝跡水	土師器	埴	口縁→胴部	黒色土	(20.4)	—	(10.5)	ヘラケズリヨコナテ痕跡	ヘラケズリ	高台		130	
119 4	溝跡水	土師器	埴	断面形	黒色土	(14.5)	(12.6)	20.2	ヘラケズリ・ミガサ	ヘラケズリ	遺構跡合		12	
119 5	溝跡水	土師器	埴	体→底部	黒色土	—	(5.0)	(3.0)	ロケ口	ロケ口	同底面切		37	
119 6	溝跡水	土師器	埴	断面形	出土位置・単位長2(壺)	幅(cm)	厚さ(cm)	—	厚さ(壺)	灰質	粘土	備考	出土分析 器物番号	
119 6	溝跡水	土師器	埴	断面形	黒色土	30	32	16	(12.4)	調査後(「すずり」)	多量の埋入		土19	

第2号跡・遺構

探検番号	出土地点	種類	遺構	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	出土時期	器物番号	
121	1	SN-02	土師器	埴	甕・灰皿土	1(13.3)	5.6	5.5	口ケリ	口ケリ	不明			225	
第3号跡・遺構															
121	1	出土地点	種類	遺構	部位	出土位置・単位 <td>口径(cm) <td>底径(cm) <td>高さ(cm) <td>外径 <td>内径</td> <td>底面</td> <td>備考</td> <td>出土時期 <td>器物番号</td> </td></td></td></td></td>	口径(cm) <td>底径(cm) <td>高さ(cm) <td>外径 <td>内径</td> <td>底面</td> <td>備考</td> <td>出土時期 <td>器物番号</td> </td></td></td></td>	底径(cm) <td>高さ(cm) <td>外径 <td>内径</td> <td>底面</td> <td>備考</td> <td>出土時期 <td>器物番号</td> </td></td></td>	高さ(cm) <td>外径 <td>内径</td> <td>底面</td> <td>備考</td> <td>出土時期 <td>器物番号</td> </td></td>	外径 <td>内径</td> <td>底面</td> <td>備考</td> <td>出土時期 <td>器物番号</td> </td>	内径	底面	備考	出土時期 <td>器物番号</td>	器物番号
121	2	SN-03	土師器	甕	口縁~胴部	甕土	29(6.0)	—	(8.1)	口ケリ	口ケリ	底面			509
121	3	SN-03	土師器	甕	胴~底部	甕土	—	(11.0)	(9.1)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ケズリ・ナデ	酸化塩化域?	18	227
121	4	SN-03	土師器	埴	口縁部厚み/4	甕土	(15.0)	—	(6.5)	口ケリ	口ケリ	同底面切	酸化塩化域?	227	226
121	5	SN-03	土師器	埴	体~底部	甕土	—	5.4	(3.2)	口ケリ	口ケリ	同底面切			

遺構B

探検番号	出土地点	種類	遺構	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	出土時期	器物番号
122	1	遺構外	土師器	埴?	口縁部厚み/3	日置	(14.0)	—	(2.2)	口ケリ	口ケリ	同底面切		455
122	2	遺構外	土師器	埴	口縁部厚み/3	1・日置	(14.2)	—	(4.2)	口ケリ	口ケリ	同底面切?		433
122	3	遺構外	土師器	埴	胴完形	1・日置	(13.6)	(6.0)	4.9	口ケリ	口ケリ	同底面切?		434
122	4	遺構外	土師器	埴	胴完形	1・日置	(12.8)	(5.4)	5.2	口ケリ	口ケリ	静止系切?		422
122	5	遺構外	土師器	埴	胴完形	日置	(13.2)	(6.0)	4.7	口ケリ	口ケリ	静止系切?		439
122	6	遺構外	土師器	埴	胴完形	1・日置	(13.8)	(6.0)	4.6	口ケリ・ヘラケズリ	口ケリ	同底面切?		429
122	7	遺構外	土師器	埴	胴完形	日置	(5.7)	(5.0)	—	口ケリ	口ケリ	同底面切	425-7-6層	427
122	8	遺構外	土師器	埴	胴完形	日置	(11.8)	5.6	4.7	口ケリ	口ケリ	同底面切	灯明、内外底面付着物(すず?)	400
122	9	遺構外	土師器	埴	胴完形	日置	(12.8)	6.4	5.3	口ケリ	口ケリ	同底面切	灯明、内外底面付着物(すず?)	401
122	10	遺構外	土師器	埴	体~底部	日置	—	(4.8)	(2.1)	口ケリ	口ケリ	同底面切	灯明、内外底面付着物(すず?)	370
122	11	遺構外	土師器	埴	体~底部	日置	—	(6.6)	(4.2)	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物(すず?)	376
122	12	遺構外	土師器	埴	体~底部	不明	—	6.0	(1.5)	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物(すず?)	355
122	13	遺構外	土師器	埴	体~底部	1・日置	—	(5.8)	(0.7)	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物	440
122	14	遺構外	土師器	埴	体~底部	日置	(6.0)	(1.9)	—	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物	393
122	15	遺構外	土師器	埴?	体~底部	日置	(12.0)	—	(4.2)	(0.9)	ヘラケズリ	ヘラケズリ?		421
123	16	遺構外	土師器	甕	口縁部	日置	(13.0)	—	(1.5)	口ケリ	口ケリ	—		599
123	17	遺構外	土師器	甕	口縁部	日置	(14.0)	—	(2.3)	口ケリ	口ケリ	—		593
123	18	遺構外	土師器	甕	口縁部	日置	(13.0)	—	(4.3)	口ケリ	口ケリ	—		594
123	19	遺構外	土師器	埴	口縁部	日置	(13.0)	—	(1.4)	口ケリ	口ケリ	—		591
123	20	遺構外	土師器	埴	体部	日置	—	(5.0)	(1.4)	口ケリ	口ケリ	—		590
123	21	遺構外	土師器	埴	体~底部	1・日置	—	(5.6)	(0.4)	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物(通草文?)	592
123	22	遺構外	土師器	埴	体~底部	日置	(8.1)	(3.2)	—	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物	224
123	23	遺構外	土師器	埴	体~底部	1・日置	—	(6.0)	(2.2)	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物	404
123	24	遺構外	土師器	埴	体~底部	日置	—	(5.0)	(1.0)	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物	373
123	25	遺構外	土師器	埴	体部	1・日置	—	(2.5)	—	口ケリ	口ケリ	同底面切	内外底面付着物	597
123	26	遺構外	土師器	埴	体部	日置	—	(2.0)	—	口ケリ	口ケリ	—		595
123	27	遺構外	土師器	埴	体部	日置	—	(2.2)	—	口ケリ	口ケリ	—		596
123	28	遺構外	土師器	甕	口縁部	日置	(20.0)	—	(29.4)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	内外底面付着物		138
123	29	遺構外	土師器	甕	口縁部	日置	(15.0)	—	(8.1)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	内外底面付着物		140
123	30	遺構外	土師器	甕	口縁部	日置	(13.0)	—	(8.7)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	内外底面付着物		145
124	31	遺構外	土師器	甕	底面	1・日置	—	(7.0)	(0.8)	ヘラケズリ	—	腹底付着物		136
124	32	遺構外	土師器	甕	胴~底部	1層	—	(7.4)	(2.4)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	内外底面付着物		142
124	33	遺構外	土師器	甕	胴~底部	1・日置	—	(8.1)	(4.0)	ヘラケズリ?	ヘラケズリ	内外底面付着物		141
124	34	遺構外	土師器	小皿(腹)	口縁部	小皿(腹)	(6.0)	—	(3.6)	口ケリ	口ケリ	—		M18
124	35	遺構外	土師器	小皿(縁)	口縁部	小皿(縁)	(6.0)	—	(3.8)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ	内外底面付着物		M23
124	36	遺構外	土師器	小皿(腹)	胴~底部	小皿(腹)	—	(5.6)	(2.0)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ		M64
124	37	遺構外	土師器	小皿(腹)	胴~底部	小皿(腹)	—	(4.6)	(2.1)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—		M65

探(発)号	出土地点	種類	認識	部位	出土位置・単位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外径	内径	底面	備考	出土分析 整理番号
124 38	遺跡外	土師器	水甕(甕)	胴~底部	1・1層	—	(0.8)	(2.0)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂敷	内面行書物	出土分析 整理番号 M63
124 39	遺跡外	土師器	水甕(甕)	胴~底部	1・1層	—	(4.0)	(1.8)	指ナデ・指面圧痕	ヘラケズリ	砂敷	内面行書物	M60
124 40	遺跡外	土師器	3ニケヤ	胴~底部	1・1層	(0.4)	(2.3)	2.4	指ナデ・指面圧痕	指ナデ・指面圧痕	ナデ		M55
124 41	遺跡外	土師器	3ニケヤ	胴~底部	1・1層	—	(4.0)	(3.5)	ヘラケズリ	指ナデ	ナデ		M57
124 42	遺跡外	土師器	3ニケヤ	胴~底部	1・1層	—	(4.0)	(3.8)	3ガキ	ヘラケズリ	同転染切	外面行書物	M56
124 43	遺跡外	土師器	耳皿	胴~底部	1・1層	—	5.8	(2.7)	ロケリ	ロケリ	同転染切		M1
124 44	遺跡外	土師器	耳皿	胴~底部	1・1層	—	5.5	(2.9)	ロケリ	ロケリ	同転染切		M3
125 45	遺跡外	須恵器	皿	口縁~杯底	1・1層	(10.0)	—	(2.0)	ロケリ→ヘラケズリ	ロケリ	—		513
125 46	遺跡外	須恵器	皿	胴~底部	1・1層	(14.0)	5.9	(3.4)	ロケリ	ロケリ	同転染切		402
125 47	遺跡外	須恵器?	杯	口縁部残存1/3	1層	(11.8)	—	(3.1)	ロケリ	ロケリ	—		441
125 48	遺跡外	須恵器?	杯	胴~底部	1層	(13.3)	5.4	5.3	ロケリ	ロケリ	同転染切		40
125 49	遺跡外	須恵器?	杯	胴~底部	1層	(12.2)	5.8	5.1	ロケリ	ロケリ	同転染切		420
125 50	遺跡外	須恵器	壺	胴~底部	1・1層	—	(6.5)	(1.6)	ヘラケズリ	指ナデ	青丹	陶化帯染成?	502
125 51	遺跡外	須恵器	壺?	胴~底部	1・1層	—	(7.2)	(2.7)	ヘラケズリ	ロケリ	青丹	底面青花文・砂敷	496
125 52	遺跡外	須恵器	壺	胴底	1層	—	—	(27.2)	タタキ	タタキ→ナデ	—	田に転用	512
125 53	遺跡外	土師器	肥子付土器	肥子	遺存庫	—	—	—	—	—	—	—	38
125 54	遺跡外	土師器	肥子付土器	肥子	1層	(47)	26	26	調痕(ヒガキ?)	外周	胎土	備考	出土分析 整理番号
125 55	遺跡外	土師器	肥子付土器	肥子	1層	(65)	22	22	調痕	調痕	胎少量の砂混入		土14
125 56	遺跡外	土師器	土鈴	胎	1・1層	(64)	33	25	(96.5)	調痕	胎少量の砂混入		土16
125 57	遺跡外	土師器	土鈴	胎	1層	(61)	(90)	(90)	(16.5)	調痕(ヒガキ?)	少量の砂混入		土15
125 58	遺跡外	土師器	土玉	1	1層	(28)	(21)	(13)	(4.9)	調痕(ヒガキ?)	少量の砂混入		土18
125 59	遺跡外	土師器	土玉	1	1層	1.4	1.3	1.4	2.2	平磨	調痕		土10
125 59	遺跡外	土師器	土玉	1	1層	1.6	1.5	1.5	(3.2)	平磨	調痕		土9
125 60	遺跡外	須恵器	刺	先端	1層	2.4	0.1	2.0	—	—	—	胎土調玉	出土分析 整理番号 刺2
125 61	遺跡外	須恵器	刺	先端	1層	2.2	0.1	1.9	—	—	—	胎土調玉	刺3
125 62	遺跡外	須恵器	刺	先端	1層	2.3	0.1	1.8	—	—	—	胎土調玉	刺1
126 63	遺跡外	石器	器	遺存庫	出土位置・単位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	—	—	—	—	出土分析 整理番号 石1
126 63	遺跡外	石器	器	2	1層	(4.8)	1.7	0.7	—	—	—	—	石2
126 64	遺跡外	石器	石鏝	1	1層	6.1	1.9	0.4	3.5	—	—	—	石24
126 65	遺跡外	石器	石鏝	2	1層	(3.3)	(3.8)	0.6	(9.7)	—	—	—	石25
126 66	遺跡外	石器	刺片	2	1層	(2.7)	2.7	1.1	—	—	—	—	石23
126 67	遺跡外	石器	刺片	遺存庫	出土位置・単位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	—	—	—	—	出土分析 整理番号 石5
126 67	遺跡外	石器	刺片	2	1層	(3.0)	2.3	1.4	(11.5)	—	—	—	石5
126 68	遺跡外	石器	刺片	2	1層	(7.3)	4.2	1.8	(97.2)	—	—	—	石3
126 69	遺跡外	石器	刺片	2	1層	(8.9)	7.3	2.8	(308.7)	—	—	—	石4
126 70	遺跡外	石器	刺片	2	1層	(11.0)	5.1	2.4	(144.1)	—	—	—	石28
126 71	遺跡外	石器	刺片	2	1層	8.7	4.6	3.6	109.6	—	—	—	石29

第4章 自然科学的分析

第1節 野尻(3)遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

大谷女子大学 三辻 利一

1) はじめに

五所川原窯跡群の近辺には隠川遺跡群、野尻遺跡群、山元遺跡群など、多くの集落遺跡が発見されており、発掘調査も進行している。これらの遺跡から出土した須恵器の蛍光X線分析も進められている。当然、地元、五所川原窯群の製品が多数検出されている。しかし、半数近い試料が外部地域からの搬入品であることも蛍光X線分析によって確認されている。搬入品と推定された須恵器の胎土は幾種類もあり、単純ではない。あちこちの須恵器生産センターから供給された須恵器であると考えられている。では、その生産地はどこなのか？ 現在、この地域の遺跡から出土する須恵器の産地問題の最も注目を集める問題点でもある。今回は産地不明となった須恵器の胎土を分類することを試みた。

2) 分析法と分析結果

分析データは表1にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、JG-1による標準化値で表示されている。

須恵器の産地問題の研究では窯跡出土須恵器の地域差を把握することは不可欠である。地域差を求めるためには、大量の須恵器片試料の分析が必要である。この研究に見合った装置と分析法、データ表示法等を開発するのが自然科学者の役割であると考え筆者はまず、完全自動式の分析装置を手に入れた。筆者が手に入れた装置には同時に50試料が搭載できる自動試料交換器が連結されている。完全自動式の装置でない限り、土器の産地問題の研究を推進することは困難であろう。

また、本研究は岩石学の研究ではないという認識も必要である。岩石学の考え方で主成分元素をすべて分析し、酸化物形で百分率表示をしても、地域差は見つけ難いであろう。

蛍光X線分析による産地問題の研究は考え方と方法は自然科学のものであるが、テーマそのものは考古学研究のものであることを理解することは重要である。分析値もこの研究に見合った表示法をとればよいのである。そのために、筆者はJG-1の対応する元素の蛍光X線強度を使って標準化することを考案したのである。

通常地域差はK-Ca、Rb-Srの両分布図上で目に見える形で比較される。この作業は定性的である。したがって、定量的に二つの母集団の相互識別をする上には、判別分析という統計学の方法を適用した。この方法を適用する場合には、考古学的に有意な二つの母集団を選択することが必要である。五所川原窯群の製品を抽出するためには、当然、五所川原窯群の須恵器を母集団の一つに選択しなければならない。もう一つの母集団は研究目的の対象によって、選択は異なる場合もあるが、通常、東北地方北部地域の平安時代の須恵器の伝播を追跡する研究には胆沢城周辺の大規模窯跡群である瀬谷子窯跡群の試料が選択される。

今回分析した試料を五所川原群と瀬谷子群間の2群間判別分析した結果は図1に示されている。8点の試料は五所川原領域に分布するが、他の試料は不明領域に分布した。瀬谷子領域の端に4点ほどの試料が分布しているが、これらは果たして、瀬谷子窯群の製品であるかどうかは分からない。4点の試料の周辺に分布している試料集団と同じ産地の製品である可能性もある。一応、不明品扱いをしておく。表1にはK、Ca、Rb、Srの4元素を使って計算したマハラノビスの汎距離の二乗値 $D^2(X)$ を示してある。

さらに、五所川原窯群の製品にはFe量が多いという特徴がある。そこで、微量元素Rb、Srの代わりに、Fe、Naの主成分元素を入れ、K、Ca、Fe、Naの4元素を使って計算したマハラノビスの汎距離の二乗値を $F^2(X)$ で示してある。(X)は母集団名である。

D^2 (五所川原) <10 、 F^2 (五所川原) <10 の両方の条件を満足した試料を五所川原産と判定した。結果は表1に示されている。五所川原産と判定された試料はNo.1、2、4、11、25、26、33、35の8点である。図1で五所川原領域に分布した8点の試料である。五所川原産と判定された試料の両分布図を図2に示す。いずれの試料も五所川原領域によく対応していることが分かる。

さて、問題は産地不明となった試料である。まず、その両分布図を図3に示す。K-Ca分布図では五所川原領域に分布するものもあるが、Rb-Sr分布図ではまったくない。外部地域からの搬入品であることを示している。図3で番号を付していない試料は集団となって分布している試料である。これらにA群としてまとめた。表1からA群として分類されたのはNo.3、5、9、12、14、18、19、20、21、23、24、29、30、31、34、37、40の17点である。目下の所、これらをFe、Na因子で区別することもできない。一応、同じ産地の製品としておく。これらの試料はK-Ca分布図では五所川原領域に分布するが、Rb-Sr分布図では五所川原領域の右下側にずれて分布する。また、Fe因子ではJG-1による標準化値で3以下のものが殆どで、五所川原産の製品でないことは間違いない。まだ、この領域に対応する窯跡は発見されていない。

一方、No.15、38の2点は別産地の製品である。この2点の試料は全因子で類似しており、同じ産地の製品と推定される。これらをC群として分類した。K、Rb量が少ないところから、東北地方の太平洋側の産地を模索中である。この2点を除外してもなおかつ、大部分の試料はK-Ca分布図では大きくばらついており、まだ、単色ではなさそうである。しかし、いまのところ、これ以上、分類のしようがないので、一応、これらをまとめてB群と分類しておいた。B群に分類されたのはNo.6、7、8、10、13、16、17、22、27、28、32、36、39の13点である。ただ、Rb-Sr分布図で五所川原領域に分布する試料は日本海側の製品であり、秋田県内の古代秋田城周辺窯群の製品である可能性をもつ。

この結果、不明品は少なくとも、A、B、Cの3群に分類されることになった。この結果を土器型式と対応させて情報を引き出すのも、問題解決の一法であろう。

これまでにも野尻(1)・(2)・(3)・(4)遺跡の須恵器が分析されているが、A群に対応する試料はこれまでにもしばしば検出されている。また、B群に対応する試料も時折検出されてきたが、これだけ多く検出されたのは今回がはじめてである。

青森県青森市 野尻(3)遺跡出土須恵器分析値

試料No.	分析No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D ² (五所)	F ² (五所)	推定産地	園	番号	器形
1	17-1124	0.337	0.283	3.93	0.502	0.361	0.231	2.7	4.0	五所川原	6	6	鉢
2	17-1125	0.334	0.311	3.45	0.444	0.379	0.192	0.78	2.4	五所川原	17	72	鉢
3	17-1126	0.397	0.331	2.81	0.402	0.548	0.266	57.5	6.6	A領域	16	58	坏
4	17-1127	0.382	0.267	3.72	0.524	0.430	0.211	5.0	2.5	五所川原	17	73	壺
5	17-1128	0.356	0.374	2.85	0.384	0.588	0.313	64.6	11.2	A領域	22	22	壺
6	17-1129	0.625	0.416	2.54	0.741	0.659	0.373	65.4	46.7	B領域	21	16	長頸壺
7	17-1130	0.406	0.520	2.75	0.591	0.671	0.315	73.3	29.8	B領域	22	18	坏
8	17-1131	0.437	0.467	2.16	0.693	0.637	0.336	90.7	30.8	B領域	22	21	坏
9	17-1132	0.299	0.366	3.52	0.347	0.498	0.219	25.5	3.7	A領域	22	22	壺
10	17-1133	0.478	0.266	2.48	0.741	0.559	0.261	51.9	15.1	B領域	32	9	坏
11	17-1134	0.317	0.280	4.27	0.384	0.325	0.182	3.9	6.5	五所川原	34	12	壺
12	17-1135	0.310	0.382	2.26	0.379	0.548	0.281	39.7	20.8	A領域	39	15	壺
13	17-1136	0.429	0.592	2.23	0.641	0.752	0.460	118	56.2	B領域	39	17	甕
14	17-1137	0.259	0.366	2.55	0.293	0.501	0.258	35.9	17.1	A領域	39	14	長頸壺
15	17-1138	0.289	0.500	1.98	0.336	0.690	0.364	114	46.9	C領域	40	18	甕
16	17-1139	0.422	0.547	2.62	0.596	0.665	0.381	66.4	34.6	B領域	39	16	甕
17	17-1140	0.428	0.255	2.93	0.646	0.487	0.296	23.6	11.4	B領域	58	49	長頸壺
18	17-1141	0.271	0.318	2.41	0.295	0.485	0.256	39.4	19.8	A領域	57	41	坏
19	17-1142	0.247	0.347	2.16	0.265	0.518	0.300	55.4	38.6	A領域	57	42	坏
20	17-1143	0.362	0.369	2.77	0.371	0.597	0.313	77.2	11.8	A領域	58	48	壺
21	17-1144	0.232	0.351	2.54	0.249	0.479	0.227	38.1	18.0	A領域	66	11	長頸壺
22	17-1145	0.439	0.476	2.17	0.705	0.657	0.324	86.9	32.9	B領域	66	10	坏
23	17-1146	0.231	0.364	2.57	0.233	0.522	0.204	61.3	17.3	A領域	66	12	鉢
24	17-1147	0.222	0.331	2.56	0.210	0.482	0.175	55.1	17.8	A領域	66	13	鉢
25	17-1148	0.312	0.326	3.26	0.384	0.394	0.205	2.3	2.2	五所川原	116	54	長頸壺
26	17-1149	0.292	0.277	3.75	0.355	0.365	0.192	3.2	0.79	五所川原	113	27	長頸壺
27	17-1150	0.446	0.615	2.07	0.627	0.777	0.434	121	60.0	B領域	98	5	大甕
28	17-1151	0.462	0.355	2.49	0.702	0.602	0.343	55.6	19.0	B領域	99	13	坏
29	17-1152	0.273	0.313	3.06	0.295	0.468	0.224	33.2	5.0	A領域	86	29	坏
30	17-1153	0.382	0.333	2.44	0.368	0.555	0.214	69.9	15.3	A領域	79	10	坏
31	17-1154	0.263	0.318	2.53	0.309	0.501	0.196	43.8	13.8	A領域	80	19	坏
32	17-1155	0.372	0.629	2.39	0.515	0.710	0.402	91.4	52.8	B領域	81	31	坏
33	17-1156	0.377	0.297	3.34	0.469	0.404	0.178	2.5	7.0	五所川原	81	32	坏
34	17-1157	0.362	0.317	2.92	0.368	0.462	0.275	27.7	5.9	A領域	86	27	坏
35	17-1158	0.326	0.320	3.41	0.358	0.409	0.204	9.6	1.6	五所川原	86	28	坏
36	17-1159	0.502	0.363	1.99	0.693	0.697	0.391	95.3	37.8	B領域	86	30	長頸壺
37	17-1160	0.243	0.338	2.45	0.315	0.529	0.207	54.9	17.8	A領域	119	5	坏
38	17-1161	0.230	0.510	2.06	0.259	0.626	0.310	85.5	45.7	C領域	125	52	大甕
39	17-1162	0.555	0.344	2.52	0.726	0.702	0.429	96.8	41.9	B領域	125	45	坏
40	17-1163	0.298	0.315	2.86	0.322	0.500	0.234	42.8	6.1	A領域	125	48	坏

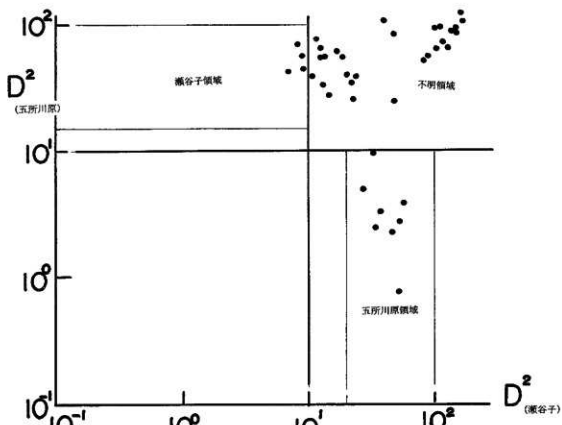


図1 野尻(3)遺跡出土須恵器の産地推定 (K, Cr, Rb, Sr)

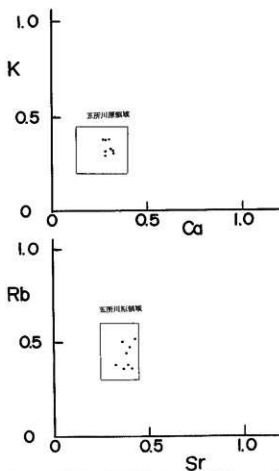


図2 五所川原産と推定された須恵器の両分布図

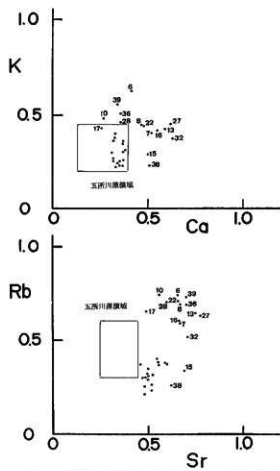
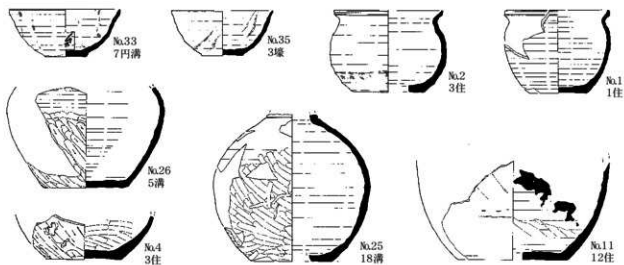


図3 産地不明となった須恵器の両分布図



五所川原産と判定された試料

A領域と判定された試料

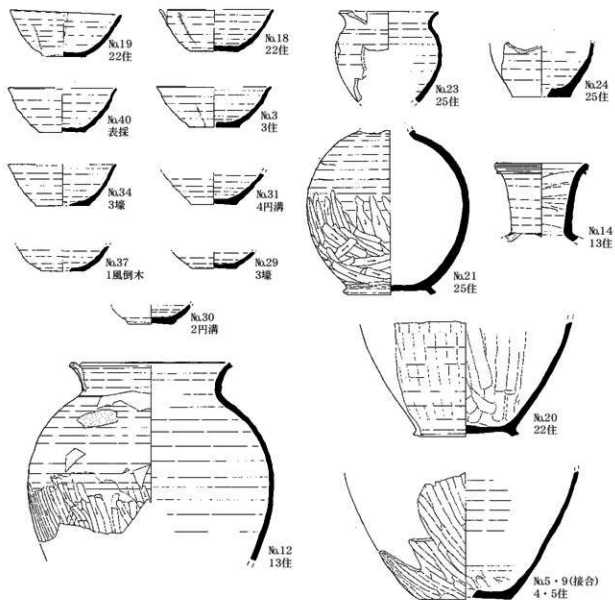
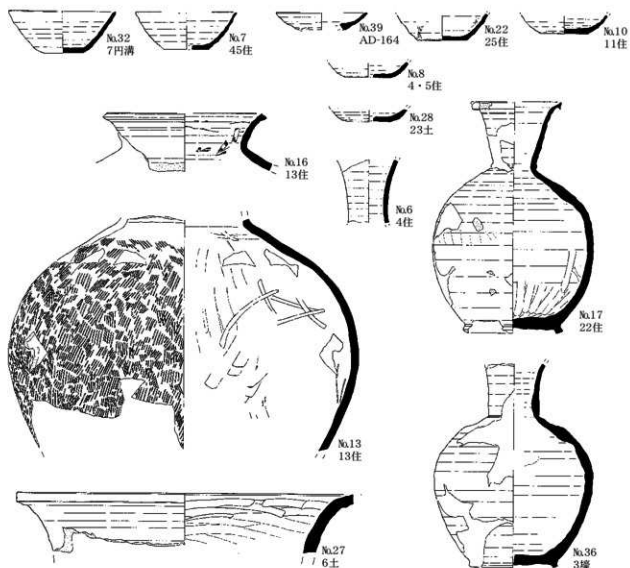


図127 須恵器胎土分析試料(1)



B領域と判定された試料

C領域と判定された試料

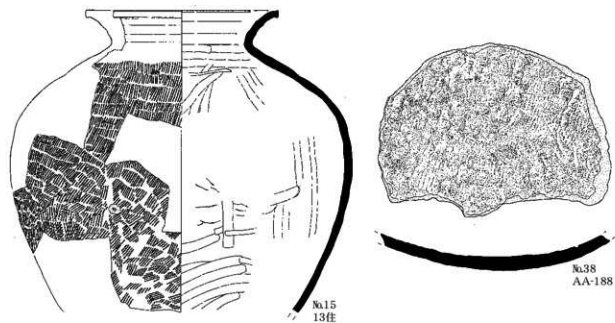


図128 須恵器胎土分析試料(2)

第2節 野尻(3)遺跡出土の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴 正敏

野尻(3)遺跡より採集された、火山灰サンプル(10試料)について、以下の観察・分析を行った。これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井, 2003)。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー(以下EPMA)が用いられるようになってきた。本報告では、1試料の火山ガラスについてEPMA分析を行った。使用したEPMAは弘前大学・理工学部所有の日本電子製JXA-8800RL、使用条件は加速電圧15kV、試料電流 3×10^{-9} アンペアである。

ガラスの形態及び共存鉱物(表1)、EPMAによる分析値(表2)により、全10試料は、主に白頭山苦小牧テフラ起源のガラスよりなる。試料No.1、3~10ではエジリンオーザイト、試料No.2~4ではヘデン輝石が認められた。試料No.1、No.4、No.7~10では、十和田aテフラ起源のガラスが混入していると考えられる(表1、2参照)。また、試料No.1、No.9及びNo.10では、針状~長柱状ホルンブレンドが認められることより(表1)、十和田八戸テフラが混入している可能性がある。

表2から明らかのように、9成分の含有量について、既存の白頭山苦小牧テフラ起源のガラス組成(Machida, 1999; 柴ほか, 2000)と良く一致する。本遺跡に産する白頭山苦小牧テフラ起源のガラス組成は既存のデータと同様、二つの組成クラスターを持っている。すなわち、比較的肉厚で気泡径が中程度のガラスは、より SiO_2 に乏しく CaO や K_2O に富み(B-Tm(a))、一方、気泡径が大きく良く発泡したガラスあるいは気泡径が小さく発泡度の低いガラスは、より SiO_2 に富み CaO や K_2O に乏しい組成を持っている(B-Tm(b))。

全10試料のうち、No.1、No.4、No.7~10の6試料から、軽石粒子、褐色ガラス、粗粒な斜長石、石英、斜長石、単斜輝石および斜方輝石が認められた。また、EPMAによる分析結果から、試料No.1のガラス組成は、既存の十和田aのガラス組成と極めて良く一致する(青木・新井, 2000; 柴ほか, 2001)(表2)。試料No.1、No.9及びNo.10からは、ホルンブレンドが観察された(表1)。これら試料については、十和田八戸テフラが混入している可能性が高い。

(引用文献)

青木おかり・新井房夫(2000)、三陸沖海底コアKH94-3、LM-8の後期更新世テフラ層序、

第四紀研究、第39巻、107-120。

Machida, H.(1999), Widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress.

第四紀研究、第38巻、194-201。

町田 洋・新井房夫(2003)、新編火山灰アトラス -日本列島とその周辺-。東京大学出版会、pp.336。

柴 正敏・重松直樹・佐々木 実(2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)、弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19.

柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実(2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化 — 宇樽部の一露頭を例として —、弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17.

表1. 野尻(3)遺跡

試料No.	採取地点	層位	ガラス及び鉱物	ガラスの種類	特記事項
1*	第15号型穴住居跡	第8層	ガラス(qm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオーゾサイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ホルンブレンド、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	軽石粒子、岩片(~1.0mm)
2	第24号型穴住居跡	第2層	ガラス(qm, bw)、アルカリ長石、ヘデン輝石、斜長石、斜方輝石(粗粒)、単斜輝石(粗粒)、鉄鉱	B-Tm	
3	第1号棚跡	第13層	ガラス(qm, bw)、アルカリ長石、エジリンオーゾサイト、ヘデン輝石、斜長石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
4	第1号円形周溝	第2層	ガラス(qm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、ヘデン輝石、斜長石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a	To-aは少量
5	第2号円形周溝	第6層	ガラス(qm, bw)、アルカリ長石、エジリンオーゾサイト、斜長石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
6	第3号円形周溝	第3層	ガラス(qm, bw)、アルカリ長石、エジリンオーゾサイト、斜長石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
7	第4号円形周溝	第5層	ガラス(qm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオーゾサイト、石英(粗粒)、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a	To-aは少量
8	第5号円形周溝	第1層	ガラス(qm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオーゾサイト、石英(粗粒)、斜長石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm, To-a	To-aは少量
9	第6号円形周溝	第6層	ガラス(qm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオーゾサイト、石英、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ホルンブレンド、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	To-a, To-Hは少量
10	第7号円形周溝	第4層	ガラス(qm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオーゾサイト、石英、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ホルンブレンド、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	To-a, To-Hは少量

qm: 軽石型, bw: パブルウォール型, B-Tm: 白頭山苫小牧テフラ, To-a: 十和田aテフラ, To-H: 十和田Hテフラ

*: E P M A分析を行った試料

表2. 野尻(3)遺跡、火山ガラスのE P M Aデータ

白頭山苫小牧テフラ		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total EPMA
試料No. 1 第15号型穴住居跡 第8層 B-Tm(a)	最小	67.95	0.30	14.58	4.26	0.00	0.01	0.90	4.15	5.35	8	100.31 WDS
	最大	69.51	0.41	15.72	4.91	0.20	0.15	1.19	4.92	6.03		
	平均	68.58	0.33	14.90	4.59	0.10	0.07	1.04	4.58	5.81		
	標準偏差	0.51	0.05	0.47	0.22	0.06	0.05	0.08	0.27	0.24		
Machida(1999)		68.4	0.4	14.8	4.5	0.1	0.1	1.0	5.4	5.3	15	WDS
試料No. 1 第15号型穴住居跡 第8層 B-Tm(b)	最小	71.14	0.14	10.61	3.86	0.00	0.01	0.21	4.42	4.65	5	101.95 WDS
	最大	75.69	0.38	13.46	4.24	0.22	0.09	0.69	4.94	5.16		
	平均	73.99	0.25	11.70	4.02	0.12	0.05	0.39	4.63	4.87		
	標準偏差	2.23	0.10	1.43	0.14	0.09	0.04	0.20	0.24	0.21		
Machida(1999)		75.3	0.2	10.7	4.1	0	0.1	0.3	4.7	4.5	19	WDS
十和田aテフラ		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total EPMA
試料No. 1 第15号型穴住居跡 第8層 To-aテフラ	最小	78.90	0.20	12.33	1.43	0.01	0.26	1.78	3.56	1.16	4	98.60 WDS
	最大	78.59	0.31	12.74	1.66	0.18	0.40	1.95	3.89	1.43		
	平均	78.26	0.27	12.58	1.60	0.08	0.31	1.86	3.68	1.35		
	標準偏差	0.29	0.05	0.18	0.16	0.07	0.06	0.08	0.15	0.13		
青木・新井(2000)		77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	19	WDS

測定値は無水で100%になるように再計算した。FeO*: 全鉄をFeOとして計算した。'n'は分析点の数を表す。WDSは、波長分散型EPMAを表す。

第3節 野尻(3)遺跡出土の骨片について

澤田純明 (聖マリアンナ医科大学解剖学教室)

2003年に行なわれた青森市野尻(3)遺跡発掘調査において、第1号壕跡と第3号壕跡から焼骨が出土した。以下にその鑑定結果を報告する。

材料と方法

第1号壕跡出土骨の総重量は4.0g、第3号壕跡出土骨の総重量は10.3gとごく少量であり、色調と質感から全て焼けた骨と判断された。人為的な損傷や病変などの形態異常は認められない。断片化が著しく肉眼観察のみでは種の同定が困難であったので、皮質骨が良好に保存されていると思われる四肢長骨片を抽出し、その組織形態を観察して動物種類の推定を試みた。

骨組織形態観察の試料としたのは、第1号壕跡から出土した骨片2点(№1、№8)と、第3号壕跡から出土した骨片1点(№13)である(番号は調査担当者による)。試料は、エタノール脱水とスチレン・モノマーによる透徹処理を経た上で、樹脂(Rigolac-2004とRigolac-70Fを7対3で混合)に包埋した。樹脂が硬化した後、髓腔長軸に対する横断面を得るように硬組織切斷機(SP1600, Leica)で70 μ m厚に薄切し、プレパラートに封入した。検鏡は光学顕微鏡(Biophot, Nikon)で行ない、完形の二次オステオンとハバース管の周囲長を計測した。

結果と考察

1. 肉眼観察所見

第1号・第3号壕跡出土骨は焼成のため灰白色から白色の色調を呈していた(写真1)。焼成による骨の色調変化は焼成温度と焼成時間に関係しており、白色の色調は高い温度で長時間焼成されたことを示している(Shipman et al. 1984; Nicholson, 1993)。四肢長骨には輪状に走る亀裂が認められたが、こうした形状は骨が軟組織に包まれた状態で焼成されたときに生じるとされる(池田, 1981)。したがって、出土した焼骨群はまだ軟組織が付着しているときに、つまり死後それほど時間が経過していないうちに、高温で長時間焼かれたことが想定されよう。

2. 骨組織形態観察所見

試料№1と№8には、明瞭ではないものの、不規則に分布する多数の二次オステオンが認められた(写真1)。骨のリモデリングが進行しており、ある程度成長の進んだ個体であることがうかがわれる。№1と№8の二次オステオン周囲長の平均値はそれぞれ541.9 μ m ($n=40$, $1SD=110.7\mu$ m)と612.7 μ m ($n=46$, $1SD=137.6\mu$ m)、その二次オステオンの中にあるハバース管の周囲長の平均値は144.1 μ m ($1SD=59.9\mu$ m)と186.6 μ m ($1SD=72.2\mu$ m)であった。

四肢長骨皮質骨構造の動物種類による相違点としては、二次オステオンの配列や分布の様相、偶蹄目に顕著に発達する葉状骨の有無、二次オステオンとハバース管の大きさなどが知られており(Enlow and Brown, 1956-1958; Jowsey, 1966; Ricqlé, 1975-1978)、特に人獣鑑別に関しては上記の諸点を識別の指標とする方法が支持されている(猪井ほか, 1994; Cattaneo et al. 1999)。

試料No.1とNo.8は、皮質骨の厚さと多数の二次オステオンの存在から中・大型の陸生哺乳類の骨であることは疑いないが、ヒト以外の動物によくみられる規則的な二次オステオンの配列や葉状骨は認められない。ハバース管周囲長の二次オステオン周囲長に対する比を求めると、No.1で0.27、No.8では0.30であった。この値は、シカ(0.18)、イノシシ(0.17)、ウシ(0.16)、ウマ(0.20)、クマ(0.20)などの中・大型哺乳類より大きく、ヒト(0.24-0.28)に最も近い(比較データは澤田・百々(2004)とSawada(n.d.)による)。二次オステオンに対して相対的にハバース管が大きいことは、ヒトに顕著な特徴として知られる(Jowsey, 1966; Harsanyi, 1993)(写真2)。試料の二次オステオン周囲長は、ヒトの値(600-800 μ m)と比べてやや小さいものの、焼成により骨体が10-15%収縮する可能性(Shipman et al., 1984)を考慮すると、ヒトの値の範囲に含まれるとみなして大過ない。以上の知見を鑑みるに、断定は難しいものの、試料No.1とNo.8はヒトの可能性が高いと考えられる。

試料No.13にも二次オステオンが認められた(写真1)。ハバース管の径が大きいことからヒトに近い印象を受けるが、土中での埋存過程において生じたと思われる鉱物の浸透が強く、骨組織像が不明瞭であるため判断は控えたい。

まとめ

野尻(3)遺跡から出土した焼骨について肉眼形態観察と骨組織形態観察を行なった結果、第1号壕跡出土骨片にヒトの可能性が高い四肢長骨片が含まれていることが明らかになった。これらは、骨体の色調や形状から、死後それほど経たないうちに高温で長時間焼成されたものと推察された。

文献

- Cattaneo, C., DiMartino, S., Scali, S., Craig, O. E., Grandl, M. and Sokol, R. J. (1999) Determining the human origin of fragments of burnt bone: a comparative study of histological, immunological and DNA techniques. *Forensic Sci. Int.*, 102:181-191.
- Enlow, D. H. and Brown, S. O. (1956-1958) A comparative histological study of fossil and recent bone tissues. Part I, II, III. *Texas J. Sci.*, 8:405-443, 9:186-214, 10:187-230.
- Harsanyi, L. (1993) Differential diagnosis of human and animal bone. *Histology of Ancient Human Bone: Methods and Diagnosis*, Grupe, G. and Garland, A. N. eds., Springer-Verlag, pp. 79-94.
- Jowsey, J. (1966) Studies of haversian systems in man and some animals. *J. Anat.*, 100:857-864.
- 猪井剛・吉野峰生・瀬田季茂(1994) ヒトと各種動物の長骨組織像の顕微鏡学的研究とその法科学的応用. *科警研報告法科学編*, 47:92-101.
- Nicholson, R. A. (1993) A morphological investigation of burnt animal bone and an evaluation of its utility in archaeology. *J. Archaeol. Sci.*, 20: 411-428.
- Ricqlès, de A. (1975-1978) Recherches paleohistologiques sur les os longs des Tetrapodes. *Annales de Paleontologie*, 61:51-129, 62:711-126, 64:85-111.
- 澤田純明・百々幸雄(2004) 朝日山(2)遺跡出土骨片の鑑定. *朝日山(2)遺跡Ⅵ*. 青森県教育委員会, pp. 172-178.
- Shipman, P., Foster, G. and Schoeninger, M. (1984) Burnt bones and teeth: an experimental study of colour, morphology, crystal structure and shrinkage. *J. Archaeol. Sci.*, 11:307-325.

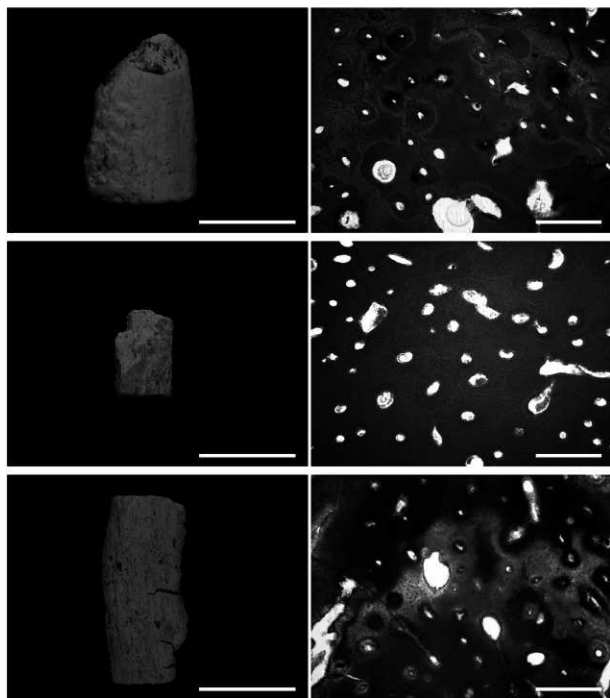


写真1 出土骨片(左)と骨組織形態(右)

上段：第1号塚跡骨片No.1 中段：第1号塚跡骨片No.8 下段：第3号塚跡骨片No.13

Scale bar : 1cm (左)、300 μ m (右)

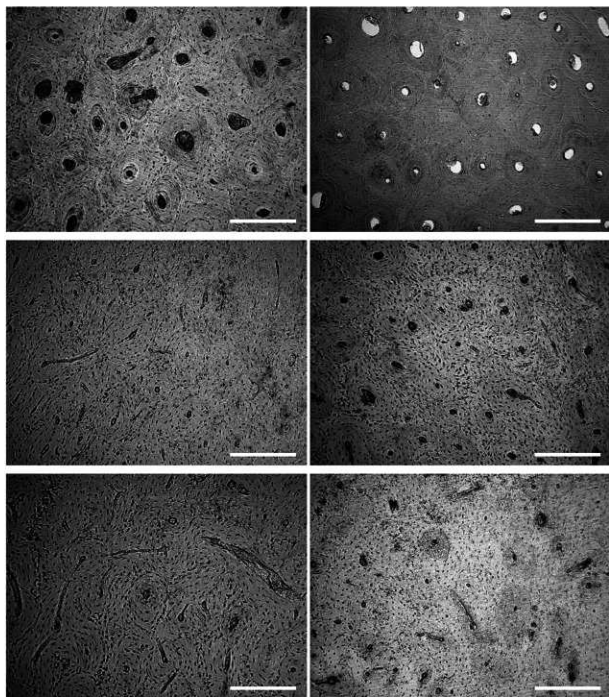


写真2 比較標本の大腿骨組織形態

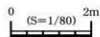
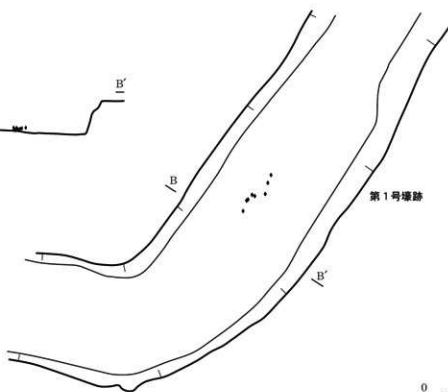
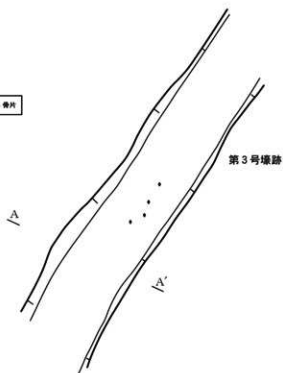
上段左：現代人晒骨 上段右：宮城県里浜貝塚中世焼人骨 中段左：シカ 中段右：イノシシ

下段左：ウシ 下段右：イヌ

Scale bar : 300 μ m



◆…骨片



第129図 第1・3号壕跡骨片出土位置

第4節 野尻(3)遺跡出土の刀装具(柄頭)の材質と製作技術

奈良文化財研究所 村上 隆

1. はじめに

青森県の野尻(3)遺跡から出土した刀装具は、第3号円形周溝の覆土上面から単独で出土した。形態的特徴から、刀の柄の先端に取り付けられる兜金とみられる。このたび、この刀装具について、非破壊的な手法ながら材質の調査をおこなった。また、製作技術やオリジナルの色についても若干の考察を加えたのでここに報告する。

2. 分析方法

非破壊的手法による蛍光X線法を用いて、刀装具を構成する主要元素の検討を試みた。

用いた装置は、軸テクノス製TREX-640S。測定条件は、電圧45kV、電流0.3mA、X線照射面積1mmφ、照射時間100秒。ターゲットは、モリブデン(Mo)。遺物表面の色や状態の違う部分数箇所において分析をおこなった。

3. 結果と考察

青森県の野尻(3)遺跡から出土した刀装具は一点のみであるが、ほぼ完形での出土であった。出土時の詳しい状況はわからないが、金具として木部に取り付いていた様子なども認められず、おそらくこの金具だけが単独に存在したものと考えられる。

遺物表面からの非破壊的手法による蛍光X線分析の結果、銅とともに、鉛、ヒ素の検出をみた(図1)。その他、微量に銀が含まれている。遺物表面は、緑灰色、あるいは暗緑灰色を呈するが、どの部分でもほぼ同様の結果を得た。この結果をもとに、半定量分析を行った結果、鉛57.9%、銅34.1%、ヒ素7.2%、鉄0.5%、銀0.4%となった。表面が白っぽい部分では、さらに鉛の数値が上がる傾向がみられた。一般に、銅合金は土中埋藏中に表面から銅が溶出する傾向がみられ、非破壊的手法により表面から分析するとこのように銅が少なく、スズや鉛が大きく誇張された分析結果が出ることはよくあることである。このような点を鑑み、この遺物のオリジナルな素材の具体的な配合比はわからないが、基本的に(銅-鉛-ヒ素)系合金と考えてよい。なお、銀はもともと古代の銅や鉛に含まれているものであり、鉄は土中の汚れに起因する。この系の合金と同様のタイプは、例えば古代からの銅鋳類の材料の時代的変遷の中では、だいたい8~9世紀以降に登場する¹⁾。もともと青銅、すなわち(銅-スズ)系の合金であったものが、スズが減る代わりにヒ素、鉛が高くなる傾向を示すのである。これは、皇朝十二銭でも同様に鉛が多くなっていく材質の変遷が指摘されている²⁾。なお、出土状況などから、この遺物の年代を10世紀前半頃と推定していることとよい整合性を示すと考える。

この刀装具は、鋳造製とみられる。材質からみても鋳造に適しており、また、顕微鏡による詳細な観察から、遺物内面に鋳放しの状態が見てとれることから推定できる。表面は腐食により劣化し、オリジナルな表面を確認することは困難であるが、部分的ではあるが鋳造後に研磨などの表面を仕上げ調整をおこなった痕跡ではないかとみられる部分を遺存している。ここで、知りたいのが、製作された時のオリジナルの色である。この刀装具の最終の仕上げが、素材の味をそのまま生かした状態で

研磨されただけのものであったのか、何か表面を他の効果的な色に仕上げる工程を経たものなのかは、残念ながら現状ではわからない。銅鍍類と同じ取り扱いならば、このままで仕上げられて、その色は少し銀色がかった光沢を持っていたのではないとも考えられるが推測の域をでない。

材質やオリジナルの色の問題は、類似の製品との比較を含めて検討していく必要があるだろう。

4. まとめ

青森県の野尻(3)遺跡から出土した刀装具を非破壊的手法で分析し、(銅-鉛-ヒ素)系合金であることがわかった。また、鋳造製であることもわかった。ただし、オリジナルの色を想定するまでには至らなかった。今後、同様の刀装具との比較検討が進むことを期待する。

【参考文献】

- 1) 村上 隆：「群馬県出土の銅製容器について」『下東西・清水上遺跡』
(群馬県埋蔵文化財調査事業団) (1998)
- 2) 村上 隆：「金工技術」(日本の美術443) (至文堂) (2003)

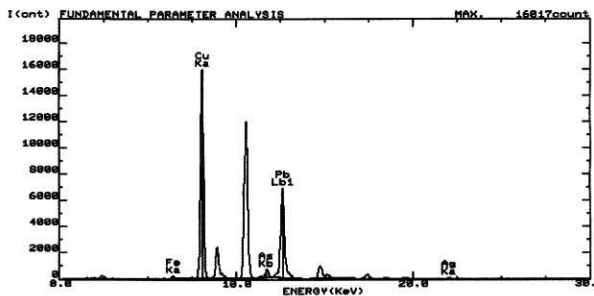


図1：青森県の野尻(3)遺跡から出土した刀装具に対する蛍光X線分析の結果

第5節 放射性炭素年代測定

IAA: 加速器分析研究所

年代測定結果報告書

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用しています。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出しています。
複数回（通常は4回）の測定値について χ^2 検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもあります。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_\text{S} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_\text{S} - {}^{13}\text{A}_\text{PDB}) / {}^{13}\text{A}_\text{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_\text{S}$ ：試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_\text{S}$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_\text{S}$

${}^{14}\text{A}_\text{R}$ ：標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_\text{R}$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_\text{R}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度（ ${}^{13}\text{A}_\text{S} = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。但し、IAAでは加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度（ ${}^{14}\text{A}_\text{N}$ ）に換算した上で計算した値です。（1）式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算します。

$$\begin{aligned} {}^{14}\text{A}_\text{N} &= {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき}) \\ &\text{または} \\ &= {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{ を使用するとき}) \end{aligned}$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_\text{N} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになります。

$$\begin{aligned} \Delta^{14}\text{C} &= (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰}) \\ \text{pMC} &= \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\text{‰}) \end{aligned}$$

国際的な取り決めに、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age; yrBP)が次のように計算されます。

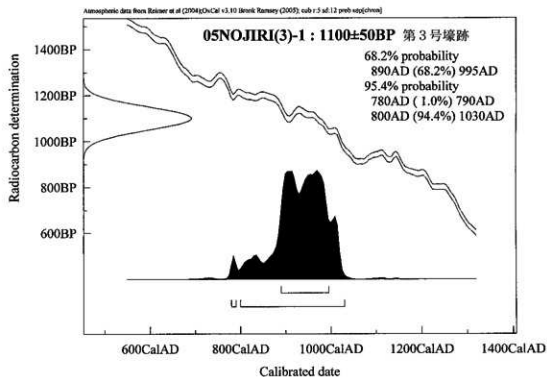
$$\begin{aligned} T &= -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1] \\ &= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100) \end{aligned}$$

Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-50496 #960-1	試料採取場所：青森市浪岡高屋数字野尻地内 試料形態：炭化物 試料名(番号)：05 NOJIRI(3)-1 第3号壕跡	Libby Age (yrBP) : 1,100 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -28.51 ± 0.76 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -128.1 ± 5.8 pMC(%) = 87.19 ± 0.58
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -134.3 ± 5.6 pMC(%) = 86.57 ± 0.56 Age (yrBP) : 1,160 ± 50
IAAA-50497 #960-2	試料採取場所：青森市浪岡高屋数字野尻地内 試料形態：炭化物 試料名(番号)：05 NOJIRI(3)-2 第25号竪穴住居跡	Libby Age (yrBP) : 1,160 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -26.43 ± 0.77 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -134.2 ± 3.6 pMC(%) = 86.58 ± 0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -136.7 ± 3.4 pMC(%) = 86.33 ± 0.34 Age (yrBP) : 1,180 ± 30
IAAA-50498 #960-3	試料採取場所：青森市浪岡高屋数字野尻 試料形態：炭化物 試料名(番号)：05 NOJIRI(3)-3 第13号竪穴住居跡	Libby Age (yrBP) : 1,220 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -28.15 ± 0.85 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -140.7 ± 3.6 pMC(%) = 85.93 ± 0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -146.2 ± 3.3 pMC(%) = 85.38 ± 0.33 Age (yrBP) : 1,270 ± 30
IAAA-50499 #960-4	試料採取場所：青森市浪岡高屋数字野尻地内 試料形態：炭化物 試料名(番号)：05 NOJIRI(3)-4 第21号竪穴住居跡	Libby Age (yrBP) : 1,060 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -24.44 ± 0.79 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -123.3 ± 3.6 pMC(%) = 87.67 ± 0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -122.3 ± 3.3 pMC(%) = 87.77 ± 0.33 Age (yrBP) : 1,050 ± 30
IAAA-50500 #960-5	試料採取場所：青森市浪岡高屋数字野尻地内 試料形態：炭化物 試料名(番号)：05 NOJIRI(3)-5 第22号竪穴住居跡	Libby Age (yrBP) : 1,240 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -26.69 ± 0.76 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -142.9 ± 3.7 pMC(%) = 85.71 ± 0.37
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -145.8 ± 3.4 pMC(%) = 85.42 ± 0.34 Age (yrBP) : 1,270 ± 30

参考

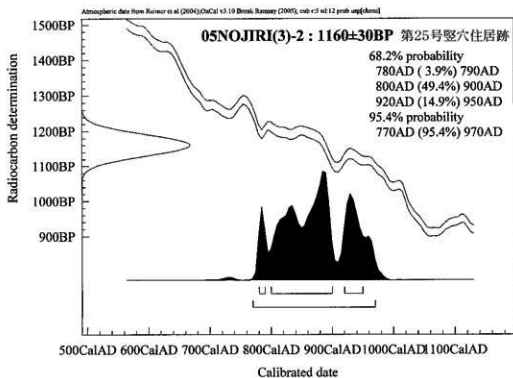
IAAA-50496～50500 に関しましては、木炭を処理し測定した結果になります。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



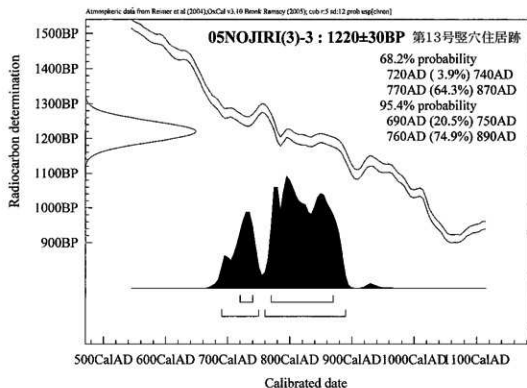
使用プログラム：OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



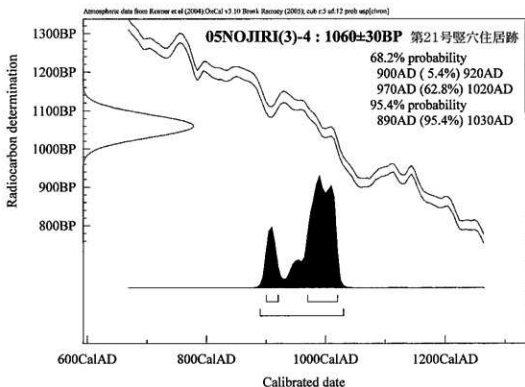
使用プログラム：OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



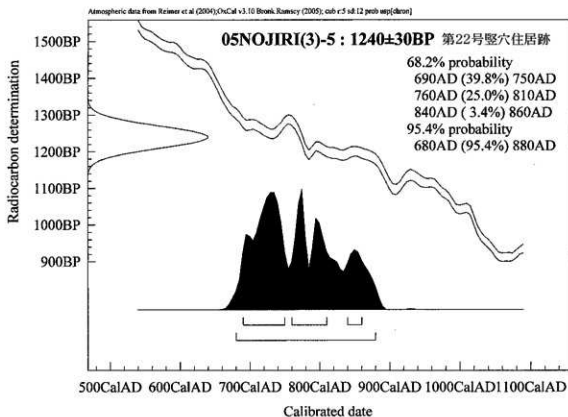
使用プログラム：OxCal | v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム：OxCal | v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム：OxCal v3.10

第5章 調査の成果

第1節 検出された遺構の変遷について

1. 検出された遺構

野尻(3)遺跡では堅穴を囲むように外周溝が巡り、カマド煙道部の方向に掘立柱建物が付随する建物跡による比較的規模の大きい集落が形成されていた。その前後には堅穴のみの建物による比較的規模の小さい集落が形成されていた様子も確認されている。また、一部は墓域として利用された時期があったことも確認されている。野尻(3)遺跡の墓域は、円形の溝によって構成され、大部分は10世紀前半に起源が想定されている白頭山火山灰(B-Tm)が降下する以前に形成されていたものと、周溝の堆積土の状況から推定される。野尻(3)遺跡では検出されていないが、遺跡北側に隣接する野尻(2)遺跡では円形の溝の他、方形の溝によって構成される周溝も1基検出されている。

野尻(3)遺跡で多数検出された、堅穴を囲む溝と掘立柱建物が付随する建物の大半は、目安となる白頭山火山灰(B-Tm)がレンズ状に堆積する溝跡を壊して造られていることが、平成6年度の調査で確認されている。このことから、野尻(3)遺跡で比較的規模の大きい集落が営まれていた時期は10世紀後半の白頭山火山灰(B-Tm)降下以降と推定できる。堅穴のみの建物で構成された住居跡の中には円形周溝が造られる以前のものも比較的多く認められる。野尻(2)遺跡でも、円形周溝群に先行する住居跡が検出されており、それらとほぼ同時期に集落を構成していた住居跡の可能性が高い。

今回の調査で検出された古代及びそれ以降と考えられる遺構は、堅穴住居跡27軒、円形周溝11基、土坑33基、溝跡26条、焼土遺構5基、壕跡3条、掘立柱建物跡4棟、柵列1条、井戸跡1基、土器埋設遺構1基で、遺物は、土師器・須恵器・土製品・石製品・金属製品・鉄製品等の遺物が出土している。

2. 住居跡の構造

住居跡の構造については、基本的に平成6年度調査時の分類を踏襲した。

A1 堅穴住居跡+掘立柱建物跡+外周溝

第6号堅穴住居跡

B 堅穴住居跡+掘立柱建物跡

第3号堅穴住居跡

C 堅穴住居跡+外周溝

第1号・10号・第11号堅穴住居跡

D 単独の堅穴住居跡

第2号・4号・5号・7号・12号・13号・14号・15号・16号・17号・19号・20号・21号・22号・24号・25号・26号・27号・28号堅穴住居跡

* 今回の調査区からはA2の掘立柱建物跡+掘立柱建物跡+外周溝の形態を有する住居跡は検出されていない。また、カマドのみ検出された第18号堅穴住居跡と床面のみ検出された第23号堅穴住居跡は分類から除いている。

前回の調査区からはA1が7軒、A2が2軒、Bが1軒、Cが3軒、Dが1軒検出されている。今回の調査区と比較してみると、A1とDに際立った違いが目立つ。A1は前回の調査区を含めると東側に集中して検出され、Dは比較的西側から集中して検出されている。住居跡の存続時期も数時期に分かれるものと思われ、占地の状況も変化していったものと考えられる。

3. 遺構の変遷

野尻(3)遺跡における遺構の編年は、平成6年度の調査で試みられ、大まかに4期に区分している。

第1期 (B-Tm降下以前 (9世紀前半～中葉))

円形周溝が造られる以前に集落が営まれていた時期

第2期 (B-Tm降下直前 (9世紀後半～10世紀前葉))

円形周溝が造営された時期

(B-Tmの降下)

第3期 (B-Tm降下以後 (10世紀中葉～後半))

外周溝や掘立柱建物を伴う建物によって集落が営まれた時期

第4期 (10世紀後葉)

外周溝等を伴わない建物によって集落が営まれていた時期

第1期の住居跡は前回の調査区からは3軒検出されている。今回の調査区からは重複関係や出土遺物等から、第4・5・9・13・14・15・17・20・22(28)・24・25・27号竪穴住居跡が想定され、これらは相対的にみても、さらに細分が可能と思われる。

第1期a 9世紀第1～2四半期 第5・13・17・20・22(28)・24号竪穴住居跡が想定される。

第1期b 9世紀第2～3四半期 第4・9・25・27号竪穴住居跡が想定される。

第1期c 9世紀第3四半期～円形周溝が構築される前まで 第14・15・19号竪穴住居跡が想定される。

第2期は、検出されたすべての円形周溝が想定されるが、当然のことながら造営には時間差があったものと考えられる。

第3期は、第1・6・10・11号竪穴住居跡が想定される。

第4期は、第2・3・7・12・21・26号竪穴住居跡が想定される。

今回の調査区からは、白頭山火山灰(B-Tm)降下以前の住居跡が比較的多く検出されている。これらの多くは、同じく白頭山火山灰(B-Tm)降下以前の住居跡が多数検出された、野尻(1)遺跡や野尻(4)遺跡の住居形態とは様相を異にしている。野尻(1)・(4)遺跡では竪穴部に掘立柱建物と外周溝を有する建物跡が大半を占めるのに対し、竪穴のみ、或いは竪穴に掘立柱建物が付随する住居形態が今回の調査区から検出された建物跡の特徴である。

占地の状況は、白頭山火山灰(B-Tm)降下以前の住居跡は標高の高い西側から、白頭山火山灰(B-Tm)降下以後の掘立柱建物と外周溝が付随する住居跡は比較的標高の低い、大釈迦川に近い東側から検出されていることが確認できる。その後、竪穴のみ、或いは竪穴に掘立柱建物が付随する住居跡が見られるのだが、それらはまた、比較的標高の高い調査区の西側に偏って検出される特徴を持つ。これらの住居跡は、遺物が多量に出土した溝跡(高屋敷館遺跡平成6・7年度調査時の第4号溝跡、

平成14・15年度調査時の第120号溝跡)を挟んで隣接する高屋敷館遺跡A区で検出された同時期の住居跡と同時存在していた可能性が高いものと思われ、高屋敷館遺跡で環壕が成立する過程を考えるうえでも重要な遺構であると考えられる。

(笹森)

第2節 壕・柵列によって区画された空間

1. 区画に同時存在したと思われる遺構

調査区北側から検出された壕跡は計3条で、その内、第1号壕跡と第3号壕跡の2条は同時期に存在し区画を構成していた可能性が高い。第1号壕跡と呼称した遺構は、平成6年度調査時の第6号円形周溝と同一の遺構で、調査区からは壕跡の端部が確認されている。第3号壕跡と呼称した遺構は第1号壕跡の北西側に位置し、一部現道に削平されているが、野尻(3)遺跡と野尻(2)遺跡の間に存在する沢に続いていく可能性が考えられる。第1号壕跡の端部と未検出の第3号壕跡の端部の間が区画の出入り口として機能していたものと考えられる。

壕跡は2条共に西側調査区域外に伸びているため全容をうかがい知ることはできない。遺構の新旧関係等から現時点で確認できる同時存在と考えられる遺構は、2条の壕跡と2棟の掘立柱建物跡(第1・5号掘立柱建物跡)及び1条の柵列(第1号柵列)で、これらの遺構によって区画が構成されていたものと考えられる。2棟の掘立柱建物跡は2条の壕跡に囲まれた空間に位置し、柵列は第1号壕跡の南側に沿って東西方向に軸を持ってほぼ一直線に検出されている。

壕跡

第1号壕跡はY-182・183グリッド付近でやや鈍角に曲がってコーナーを形成し、一方は第3号壕跡にほぼ平行して北北東方向に、もう一方は西北西方向に伸びている。壕跡北北東の軸方向はN-32°-E、壕跡西北西の軸方向はN-80°-Wを示し、交わるコーナーの角度は112°を測る。規模は、確認面で幅2m60cm～3m52cm、底面で幅1m80cm～2m60cm、深さは90cm～1m20cmを測る。断面形状は箱、或いは、逆台形状を呈している。

第3号壕跡は複数の遺構の重複や道路による削平を受けていることもあり、また、そのほとんどが西側調査区域外に存在するため全容を窺うことは困難である。AB-187・188グリッド付近でやや「S」字状に蛇行し北北東から南南西方向に伸びていたものと思われ、推定軸方向はN-28°-Eを示す。壕跡が「S」字状に蛇行する要因としては、第7号円形周溝の周溝部分を利用した結果と考えられる。偶然、或いは、必然的に周溝部分が利用されたかどうかについては不明である。規模は、確認面で幅1m70cm～2m10cm、底面で幅1m30cm～1m64cm、深さは82～94cmを測り、第1号壕跡に比べ若干小さい傾向が見られる。断面形状は箱、或いは、逆台形状を呈している。

第1号壕跡と第3号壕跡に囲まれた空間の短軸の距離は約14m、長軸の距離は推定26m(第1号壕跡の端部までを想定した場合)を測り、推定面積は $364\text{m}^2 + \alpha$ である。その他、特徴として、第1・3号壕跡はいずれも人為的に埋め戻されている状況が確認できる。堆積土の状況から、おそらくは短期間に埋め戻されたものと考えられる。また、いずれの壕跡も土塁を伴っていた痕跡は認められない。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は第1号掘立柱建物跡と第5号掘立柱建物跡の2棟が検出されている。第1号掘立柱建物跡は総数15基の柱穴が検出され、まずは①東西4間、南北2間の総柱の建物跡が想定される。建物跡の規模は東西7m20cm、南北5m60cmを測り、軸方向はN-82°-Wを示している。柱穴の配置からは、南北面に庇が付く可能性はほとんど無く、東西面に付く可能性は残している。庇が片面に付く場合は②東西3間、南北2間、両面に付く場合は③東西2間、南北2間の建物跡が想定される。南面を接する第1号壕跡との空閑地はかなり狭い。

第5号掘立柱建物跡は第1号掘立柱建物跡の北側、やや第3号壕跡寄りで検出されている。時期が異なる遺構が多い部分で、重複する箇所も多く明確に遺構確認ができなかったこともあり、建物跡を構成していたと思われる柱穴を全て検出することはできなかった。確認できた柱穴から想定される建物跡は南北2間、東西2間と思われ、軸方向はN-30°-Eを示し、第1号掘立柱建物跡とは軸の向きを約70°異にする。軸方向からは、北西側の第3号壕跡及び南東側の第1号壕跡、また第1号掘立柱建物跡を意識して建てたものと思われる。建物の規模は、南北5m00cm、東西3m80cmと推定される。北側にやや軸を異にする柱穴列が見られる。底を有していた可能性、或いは、もう1棟別の建物跡が存在した可能性も考えられる。西面を接する第3号壕跡との空閑地は第1号掘立柱建物跡程ではないが狭い。

柵列

第1号柵列はY~AC-182グリッドに位置し、西北西~東南東方向に延びている。軸方向はN-83°-Wで、第1号壕跡の南側の1辺とほぼ同じ方向を示している。柱穴間の距離は1m60cm~1m80cmで、柱穴の規模は直径26~40cm、深さは25~45cmを測る。東側に接する平成6年度の調査区からは連続するような柱穴は検出されていない状況が確認できると同時に、壕跡に沿って北北東方向へ屈曲するように柱穴が検出されることも見られない。本調査区で完結するものと思われる。

2. 遺構の存続期間

壕跡が造られた年代は、堆積土中に白頭山火山灰を含む前代の遺構である第4・5・7号円形周溝を壊して造られていることなどから、10世紀前半以降が想定される。また、壕跡の埋没年代は、埋め戻し後の壕跡部分を壊して造られている第21号住居跡の住居形態や出土物から、11世紀まで下ることは考えられず、10世紀後半が想定される。以上のことから壕跡の存続期間については、10世紀後半の一時期が想定される。

掘立柱建物跡の存続期間については、柱穴からの出土物がないため明確には特定することができない。しかしながら、壕跡の軸方向を意識したように柱穴が配置され、建物を構成している状況を見ると、両遺構は同時期に計画され造営されたものと考えられる。掘立柱建物跡が造られた年代は、第1号掘立柱建物跡が、堆積土中に白頭山火山灰を含む第5号円形周溝を壊して造られていることから、壕跡同様10世紀前半以降が想定される。また、明確な柱の造り替えが見られないことや、壕跡の人為的な埋め戻しの状況からは、こちらも10世紀後半のある一時期に利用された建物跡であった可能性が高い。

柵列の存続期間も、柱穴からの出土物がないため明確には特定することはできない。しかしながら、第1号壕跡の軸方向を意識して造られていることや、明確な柱の造り替えが見られないことなど、掘立柱建物跡の状況に類似する点が多い。これらのことから柵列に関しても、前述した壕跡や掘立柱建物跡と同時期に造られ機能していた可能性が高いものと推察される。

3. 区面に同時存在した遺構の性格

壕跡からは土器類を始めとした遺物が比較的多く出土しているが、堆積土の状況や相対的な土器の年代観から、それらは埋め戻しの際の土の中に混入していたものがほとんどであることが推定できる。

壕跡に意図的に遺物を廃棄した様子を、現状ではうかがい知ることはできない。このことから、壕跡が機能していた期間はその状態がきれいに保たれ、土器等の廃棄を伴うような行為がこの場所では行われていなかったことが推定できる。また、第1・3号壕跡が西側調査区域外のAC・AD-184グリッド付近で結合し、比較的狭い空間（推定面積 $364\text{m}^2 + \alpha$ ）を形成していたか、結合することなく2重の壕を形成し、別の空間も構成していたかについては不明な点が多くはつきりしない。しかしながら、西側調査区際での各々の壕跡からの直線距離は10m未満と、短軸の空間を構成している14mより短いことが分かる。壕跡の延長線上で交差する推定角度が 82° 前後であることも考慮すれば、前者の可能性が高いものと考えられる。いずれにしても壕跡は、区画を構成し意味を持った空間を造り出すために掘られたものであることは明白である。

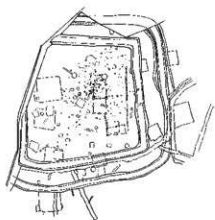
掘立柱建物跡の用途としては、一般的に倉庫・住居・堂・社が考えられる。伴うような遺物の出土もほとんどなく、特に第1号掘立柱建物跡に関しては、総柱による建物跡としての印象が強い倉庫の機能を有していた可能性が考えられるが、壕跡による意図的な区画によって造られた空間に整然と配置された柱穴からは、それ以外の機能を持っていた施設の可能性も否定はできない。住生活や生産活動に関連する遺物の出土が見られないことから、同様なことが考えられる。第1・5号掘立柱建物跡については、前記のいずれの用途も想定が可能であると考えられる。また、壕跡周辺を含めても、廃棄行為等が行われていた痕跡が見つからないことを考慮すれば、神聖な場所に建てられた建造物であった可能性も考えられる。加えて、遺構周辺から律令的な祭祀遺物がほとんど出土していないことからみれば、異系譜の祭祀行為が行われていた場所であった可能性も考えられる。

棚列は壕跡とそれによって区画された空間をさらに外側から二重に分離するための、目隠し壁としての機能を持った施設と考えられる。

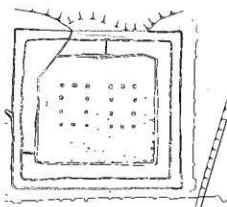
4. まとめ

これらの施設が10世紀後半の一時期、外土塁と内環壕に囲まれた国史跡高屋敷館遺跡の成立前後に機能していた可能性は高く、本遺跡の南方約1kmに位置する山元(1)遺跡では2重壕によって方形に区画された空間・施設が検出されていることから、バイパス路線以外の周辺部にも区画によって分離された空間に類似した施設が時間差を持ち、或いは、同時期に存在していた可能性は高い。

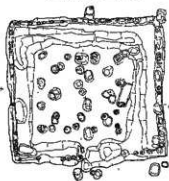
小規模な区画施設と1～数棟の建物跡の組み合わせによる遺構は、近年、発掘調査事例が増えつつある(図130)。これらの施設の集成と類型化の試みは、井上尚明氏によって行われている(井上2000)。井上氏は、①方形を基調とする小さな区画によって空間を分離し、②内部には区画との空閑地が少ない建物が数棟並び、③生活や生産的な機能が感じられない出土遺物。というような①～③までの特徴を持つものを、神社遺構ではないかと考えている。本遺跡及び山元(1)遺跡から検出された遺構も、それらの特徴をほぼ満たすものと考えられる。本県においても、今後はこれらの施設の性格や機能・用途の解明が重要な問題となってくる。



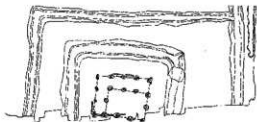
青森県山元(1)遺跡



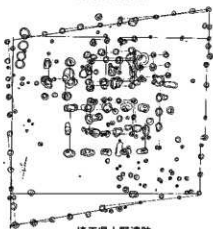
新潟県下国府遺跡



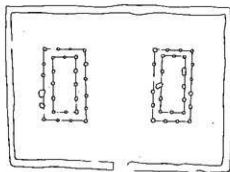
群馬県鳥羽遺跡



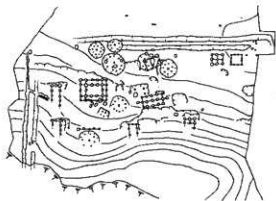
東京都武蔵国府間遺跡



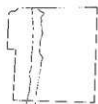
埼玉県上野遺跡



千葉県碓生遺跡



広島県西本6号遺跡



茨城県十里遺跡

※遺構の縮尺は不統一

図130 区画と掘立柱建物跡

第3節 出土遺物について

1. 土師器

本報告書で、今回図示できた土師器の総数は413点を数えた。ここでは土師器における器種毎の特徴をまとめるとともに、竪穴住居内から出土した一括遺物をもとにして、土師器の年代観についても若干の考察を加えながらまとめていくこととする。

器種について

器種は、坏（台付含む）、皿、甕、小型土器（甕・壺・鉢）、ミニチュア土器、壺、埴、耳皿、把手付土器に分けられる。それぞれの数量は右（表1）の通りである。全体から見た割合では坏がおおよそ45%と最も多く、甕が35%でそれに続く。また、小型土器が10%と割と多く出土している点が、本遺跡の特徴の一つと言える。

それぞれの器種について、器形や方量、器面調整などをもとに特徴をまとめていくこととする。なお、色調が橙色っぽい、硬質な焼き加減の土師器については、酸化焙焼成の須恵器として今回は取り扱うこととした。また、刻書や墨書土器の類は別の項で取り上げることとし、ここではふれないこととする。

表1：器種毎の数量・全体の割合

器種	数量(個)	割合(%)
坏	189	45
皿	17	4
甕	145	35
小型	42	10
ミニ	8	2
壺	3	1
埴	4	1
耳皿	2	1
把手付	3	1
合計	413	100

坏

坏は189点図示した。すべてロクロ成形である。器形の特徴や器面調整などから①内面黒色処理を施す類、②ロクロ成形の後調整を施す類、③ロクロ成形のみの類、④台付きの類、の大きく4つに分類することができる。①は20点図示したが、完形・略完形で表すことができたのは3点のみである（図20-1、図85-1・2）。いずれも碗形で内面はミガキ調整が施されている。②は18点図示したが、ほとんどが外面底部にヘラケズリ調整を施す類である。中には、口唇部と底部の2カ所にヘラケズリを施すものもある（図38-2）。また、内外面をミガキ調整するもの（図85-12）、外面に指頭圧痕がつくもの（図55-2）がそれぞれ1点ある。③は一番数が多く、坏のほとんどがこれにあたる。器形は大きく分けると碗形と皿形の2種類になるが、皿形のものでも器高が4cmより高いものをここでは坏として扱うこととした。④は4点図示した。いずれも台部のみ出土であるため、全体像は明らかではない。中には台径が13cmを超える大型のもの（図86-22）や、台上の底部からややまっすぐに立ち上がる鉢形のようなもの（図119-2）もある。

皿

皿は17点図示した。ここでは、器高が4cm以下の坏に類似した浅い器形のものをも皿として扱うこととした。すべてロクロ成形で、器形の特徴から①口唇が直線的に立ち上がる類、②口唇が外側につまみ出される類、③底径が小さいため外傾がきつくなる類、④胴部でやや内湾して立ち上がる類、の大きく4つに分類することができる。①は4点図示した（図52-1、図55-1、図79-12、図123-18）。底部がやや高台になるもの（図55-1）や底面回転糸切りの後にヘラケズリを施すもの（図79-12）もある。②は一番多く、6点図示した（図21-1、図27-1、図38-1、図49-1、図123-16・17）。支脚に使われたもの（図49-1）や灯明皿として使われたと考えられるもの（図27

－1、図38－1）もある。③は2点図示した。やや器厚が厚ぼったいもの（図66－1）と口縁部から体部にかけて器厚が薄いもの（図115－34）がある。④は2点図示したが、いずれも同じ第3号竪穴住居跡からの出土である。体部下半で内湾するもの（図12－1）と体部上半で内湾し、②の要素も合わせ持つもの（図12－3）がある。

要

甕は145点図示した。口径がわかるもの（推定口径含む）で大きさを比較してみると、20cm以上の大型のものが72点中37点、10cm～20cm以下の中型のものが35点と、ほぼ半々になることがわかる。器高は、大型のもので完形品（略完形含む）の3点（図23－1・2、図118－3）から判断するとおよそ30cm前後、中型のもので完形品（略完形）の3点（図13－16、図56－20、図118－2）から判断するとおよそ15～20cmになることがわかる。また、器形の特徴から①頭部がほとんど直線的に立ち上がり、口縁部が大きく外反する類、②頭部がやや内湾して立ち上がり、口縁部が大きく外反する類、③頭部はほとんど直線的に立ち上がり、口縁部が小さく外側につまみ出される類、④頭部がやや内湾して立ち上がり、口縁部が小さくつまみ出される類、の大きく4つに分類することができる。①には、内外面ロクロ調整（外面下半ヘラケズリ）のもの（図20－6、図118－2・3、図121－2）や、外面ヘラケズリ調整で内面ヘラナデ調整中心のもの（図20－9、図21－8、図23－4、図38－11、図45－8、図52－9、図56－23、図66－9、図68－4、図98－9）がある。②も①同様、内外面ロクロ調整（外面下半ヘラケズリ）のもの（図63－6・7・8・9）や、外面ヘラケズリ調整で内面ヘラナデ・ハケメ調整中心のもの（図23－2、図38－8、図68－5、図86－17、図99－22）がある。また、外面に輪積痕が残る軽いナデ調整や指頭圧痕がつくもの（図23－1、図119－3）や、頭部から胴部の方まで大きく内湾するもの（図20－7）もある。③は、主に外面ヘラケズリ調整で内面ヘラナデ調整のものになる（図6－1、図8－3・5、図13－18・19・20・22・24、図30－2、図34－3、図56－24）。中には、外面はヘラケズリ調整だが、内面にハケメ調整を施すもの（図34－3）や内面もヘラケズリ調整のもの（図56－25）もある。④も③同様、外面ヘラケズリ調整で内面ヘラナデ調整のものが多くなる（図6－2、図8－2・4、図13－16・17・21、図30－1・3、図49－4、図68－1、図98－11、図113－19・20）。中には、外面に指頭圧痕がつき、90度近い角度で口縁部を折り曲げているものもある（図13－22・23、図15－39）。

甕底部は、①底辺をつまみ出す類、②底辺をつまみ出さない類、の大きく2つに分類できる。①には、底径が小さい上に、底辺を大きくつまみ出すものもある（図45－10）②には、底径が大きく、やや湾曲しながら立ち上がっていくものもある（図14－28・30・33・34）。

小型土器

小型土器は42点図示した。本報告書では、口径・器高が5cm～10cm程度の間に入るもので、大型・中型にも存在するような器形のもの、小型土器として取り上げることにした。器形の特徴から①口縁部が外側につまみ出されているもの（小型甕）②胴部が丸くなるもの（小型壺）③口縁部がまっすぐに立ち上がるもの（小型鉢）の大きく3つに分類した。①は31点と圧倒的に多く、器形・器面調整も多様である。内外面ロクロ調整のみと思われるもの（図6－3、図15－43、図20－14、図26

ー4、図57-39、図85-5)や、内外面ロクロ調整の後、外面にミガキ・ヘラケズリ調整を施すもの(図57-36・37)もある。また、口径より器高が短い胴がつまったような器形のもの(図81-39)や、底部から斜めに外反する器形のもの(図64-13)もある。内面黒色処理を施すものもある(図46-15、図57-36・37、図81-39、図86-26)。②は6点図示した。内外面ロクロ調整のみと思われるもの(図28-1、図68-7、図81-38)や、ヘラケズリ・ヘラナデ調整を施すもの(図15-41、図116-59)がある。図28-1・図81-38は、内面黒色処理を施している。③は5点図示した。外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ中心のものがほとんどである。胴がつまったような器形のもの(図81-40)もある。

ミニチュア土器

ミニチュア土器は8点図示した。本報告書では、口径・器高が5cm程度以下のもので、いわゆる「お猪口」のような器形をしている、食事に使用したとは考えにくいものをミニチュア土器として取り上げることにした。ほとんどが手づくねで成形されているが、外面にミガキ調整を施すもの(図6-4、図124-42)や外面にヘラケズリ調整を施すもの(図64-13)もある。内面黒色処理を施すものもある(図32-5)。また、底面が丸底に近いもの(図26-5)もある。

壺

壺と思われるものは3点図示した。須恵器の広口壺を模倣したと思われるものが1点出土している(図119-4)。他は胴部から底部にかけての破片のため、全体の器形は推測の域を出ないが、胴部が丸くなり、胴径より口径が小さくなる器形と考えられる(図57-35、図79-15)。

埴

埴は4点図示した。口径は全て30cmを超える大きさである。胴部が内湾するタイプ(図15-46、図64-14、図116-58)と胴部が直線的なタイプ(図15-47)に分かれる。底部は欠損していて明らかではない。

耳皿

耳皿は2点図示した(図124-43・44)。いずれも口縁部が欠損していて全体が明らかではないが、底径がほぼ同じ方量であることから、似たような器形になると推測される。器面調整は、内外面ともロクロ調整のみが確認できた。底部は回転糸切り痕である。

把手付土器

把手付土器は、把手の部分のみ3点図示した。丁寧なミガキ調整を施すもの(図125-53)と簡単なミガキ調整を施すもの(図125-54・55)がある。

年代観について

ここでは、本遺跡の竪穴住居跡から出土した一括遺物をもとにして、土師器の年代観について考えてみたいと思う。なお、考察にあたっては、遺物の出土状況はもちろんのこと、過去に行われた県内の発掘調査報告書(表2・3)及び、平安時代の土師器について編年を行っている文献・資料等を参考にして行うものである。

9世紀代の土師器

9世紀前半(9世紀初頭～中葉含む)の土師器の特徴を坏・甕から判断すると、坏は、ロクロ成形が本格的に導入され、底辺部にケズリ調整や、口唇部にミガキ調整を施すものも見られるようになる(三浦:1993)。甕は、8世紀の土師器から見ると口縁部がやや狭まってくるものの、やや大きめの口縁部を有し、外反形が多くなる。外面は、胴部上半にかけてロクロ成形、下半はケズリ成形を施すものが多い(工藤:2005)。また、甕の底辺部までケズリが施されなかったため、タタキ目が残っているものも見られる(羽柴:2000)。

9世紀後半(9世紀後半～10世紀中葉含む)になると、坏は、ロクロ成形・無調整の糸切り痕が主体となる。甕は、口縁部から胴部上半のロクロ成形はいぜん残るものの、ケズリ成形が主体となる(工藤:2005)。また、内湾形・外反形の2種類が主となるが、円筒形に近いプロポーションのものも見られるようになる(羽柴:2000)。器種としては、北陸及び出羽で多用される罎が普及し、10世紀中葉まで連続して見られるようになる(三浦:1995)。

以上のことから本遺跡出土の竪穴住居跡の年代を判断すると、9世紀前半の指標となる底辺部にケズリ調整を施す坏が出土している第13号(図131)・第17号・第22号(図132)第24号・第25号・第27号竪穴住居跡(図133)は、この範疇に含まれるものと考えられる。特に第24号竪穴住居跡は、胴部上半がロクロ成形で下半がケズリ調整の甕も共伴してくるし、住居跡の堆積土上層に火山灰(B-Tm)が入り込んでくることから、まず間違いのないものとする。また、第4・5号竪穴住居跡(図131)は、ロクロの甕が1点とその他の甕も古手の様相を示しているため、9世紀代と判断する。ただし、後述する10世紀代の特徴を示す内面黒色処理の坏が数点入ってくることから年代には幅を持たせたい。第20号竪穴住居跡は、坏の特徴からは判断しかねるが、頸部に段らしき形状を有する甕が出土しているため、9世紀前半位まで年代がさかのぼる可能性があると考えられる。その他の遺構として、第3号壕跡・第3号円形周溝(図136・図137)、第1号埋設土器(図137)が、坏・甕の特徴から9世紀代と判断することができる。また、中野平遺跡や山元(3)遺跡などで出土している、いわゆる「出羽型」や「北陸型」の甕は確認できなかった。

表2: 9世紀の土師器出土遺跡一覧(※)

9世紀初頭～中葉	
(9世紀前半)	
・西瀬石	(14住・31住)
・松元	(11住・15住)
・山元(3)	(26住)
・中野平	(2・8・27・42・50住)
・和野跡山	(1住)
・寺平下安楽	(44住・143住)
・藤原平	(18・46住)
9世紀後半～10世紀中葉①	
(9世紀後半)	
・山本	(14住)
・山元(3)	(3住)
・藤川(3)	(2住)
・寺平下安楽	(3・9・129住)
・アイヌ野	(2住)
・三内	(2・44住)
・瀬目山	(17罎)
・西瀬石	(20住)
・茂野	(20・55・110住)
・田面木	(5住)
・藤原平	(31住)

10世紀代の土師器

10世紀前半（9世紀後半～10世紀中葉含む）の坏類は、碗形の他に皿形の器形が出現し、内面黒色処理を施したものが多く見られるようになる。甕類は、外反形がほとんどとなり、口縁部は小ぶり化され、外側につまみ出した程度のもも現れる。外面の成形技法はケズリ、内面はヘラナデを多用する（工藤：2005）。また、ロクロ成形の甕も依然残るが、松元・山本遺跡以外では、ロクロ不使用の甕の方が多くなってくる傾向にある（羽柴：2000）。

10世紀後半（10世紀後半～11世紀代含む）の坏類は、内黒碗形・碗形・皿形があるが、煤付着の灯明的な機能を持つものもある。甕類は、さらに極端に口縁が短くつまみ出されるものがあるが、「く」字状に外反するものから9世紀代に見られたロクロ成形するものもあり、種類は雑多になる（工藤：2005）。また、10世紀の末から土師器の坏はほとんど見られなくなり、木器（漆器）がはじめてくる。甕は大胆なナタケズリで、しかも頭のない雑な甕に変化してくる時期でもある。また、把手付土器や蒸籠型の甗はこの時期あたりから見られる（三浦：1993）。

以上のことから本遺跡出土の竪穴住居跡の年代を判断すると、第1号・第2号・第3号（図134）・第6号・第7号・第10号・第11号・第12号・第14号・第18号・第19号竪穴住居跡（図135）は、10世紀後半頃と言えるであろう。ただし、内面黒色処理を施す坏が出土している第7号竪穴住居跡や、内面ハケメ調整を施す甕が出土している第12号竪穴住居跡は、10世紀前半くらいの可能性もあり、年代に幅を持たせたい。また、11世紀前半と考えられる柱状高台坏（工藤：2000）らしき底部が出土している第14号竪穴住居跡は、その範疇くらいまで年代の幅を持たせたい。その他の遺構として、甕の特徴から判断すると、第5号溝跡・第15号溝跡・第12号土坑・第26号土坑（図137）が、10世紀代ではないかと思われる。その他の器種として、風倒木内からは壺（図137）が出土しているが、須恵器広口壺の模倣と考えて器種を壺とした訳だが、古手の様相もあり、8世紀代の球胴甗である可能性も考えられる。

（新山 隆男）

表3：10世紀の土師器出土遺跡一覧（※）

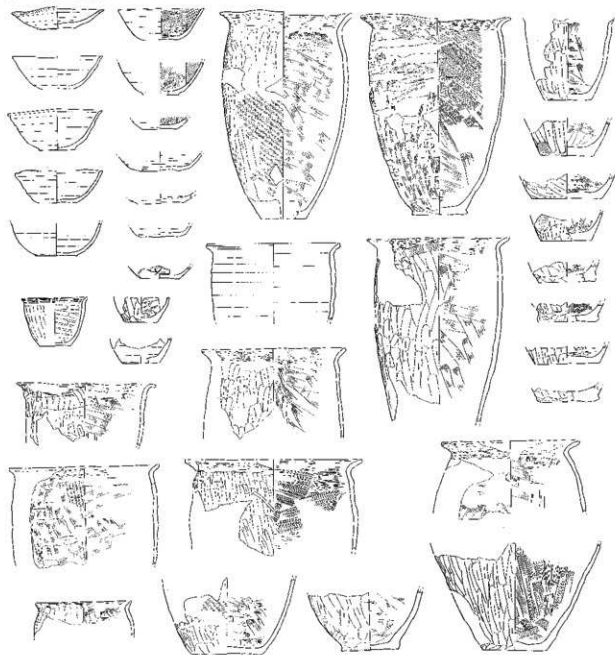
9世紀後半～10世紀中葉迄 (10世紀前半)	
・神明町	(4住)
・高岡山	(1・36住)
・赤沢	(33住)
・松元	(11住)
・山本	(2住)
・松平下安原	(3・9・64住)
・三内	(2・44住)
・黒白山	(3住)
・遊野	(111住)
・熊野堂	(22住)
10世紀後半～11世紀代 (10世紀後半)	
・大畑	(11溝)
・藤堂平	(21住)
・神明町	(2住)
・赤沢	(4・6住)
・赤沢平	(27・39住)
・黒田大畑	(2・14住)
・古部	(17住)
・早稲田	(30溝・18住、他)

※三浦圭介氏・工藤清泰氏・羽柴直人氏の文献（文献は次頁に記載）をもとに、年代の指標としている遺跡・遺構を一括にまとめたものである。よって、3者が共通するものはよいが、同じ遺跡の同じ遺構が違う年代のグループに入ってくる場合もあるが、そのまま記載した。また、年代の表記についても若干の違いがあるため、明確でないものについては、両方の年代グループに組み入れたものもある。

引用・参考文献

- 三浦 圭介 1993 「北日本における律令期の土器様相」 古代城柵官衙遺跡検討会
- 三浦 圭介 1995 「古代」『弘前市史 資料編1考古編』
- 工藤 清泰 2000 「浪岡町の古代遺跡」『浪岡町史 第1巻』
- 工藤 清泰 2005 「津軽平野の様相」 古代城柵官衙遺跡検討会
- 羽柴 直人 2000 「青森県内のロクロ使用土師器長胴甕について」『村越潔先生古稀記念論文集』
- 青森県教育委員会 1975 「近野遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
- 青森県教育委員会 1976 「牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第26集
- 青森県教育委員会 1977 「鳥海山遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
- 青森県教育委員会 1977 「近野遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 青森県教育委員会 1978 「三内遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
- 青森県教育委員会 1979 「砂沢平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第53集
- 青森県教育委員会 1979 「古館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第54集
- 青森県教育委員会 1980 「神明町遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第58集
- 青森県教育委員会 1984 「和野前山遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 青森県教育委員会 1987 「山本遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第105集
- 早稲田大学 1987 「蓬田大館遺跡」早稲田大学文学部考古学研究室報告
- 青森県教育委員会 1988 「李平下安原遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
- 八戸市教育委員会 1989 「熊野堂遺跡」八戸市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 青森県教育委員会 1990 「李沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第130集
- 青森県教育委員会 1991 「中野平遺跡—古代編—」青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
- 青森県教育委員会 1994 「朝日山遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第156集
- 青森県教育委員会 1994 「山元(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第159集
- 青森県教育委員会 1996 「野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡・野尻(4)遺跡」
青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1997 「隠川(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第210集
- 弘前市教育委員会 2001 「早稲田遺跡・福富遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 2004 「野尻(1)遺跡Ⅵ・野尻(2)遺跡Ⅲ」
青森県埋蔵文化財調査報告書第366集
- 青森県教育委員会 2005 「山元(1)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第395集

第4・5号竪穴住居跡



第13号竪穴住居跡

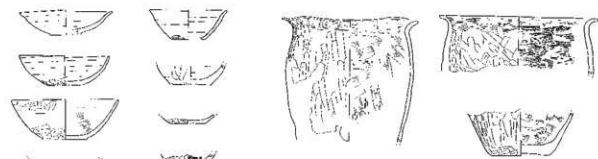
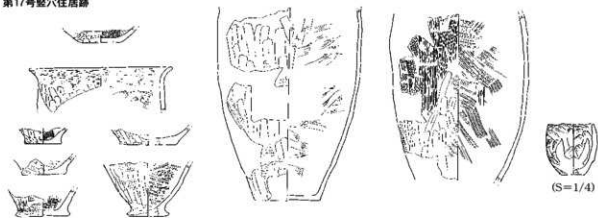


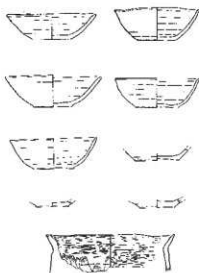
図131 土師器一括遺物(1)

S=1/6

第17号竪穴住居跡



第20号竪穴住居跡



第22号竪穴住居跡

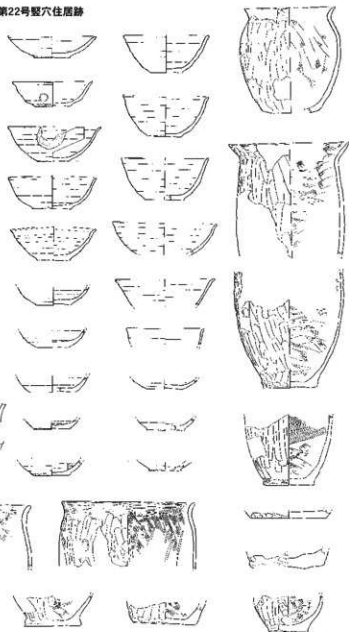
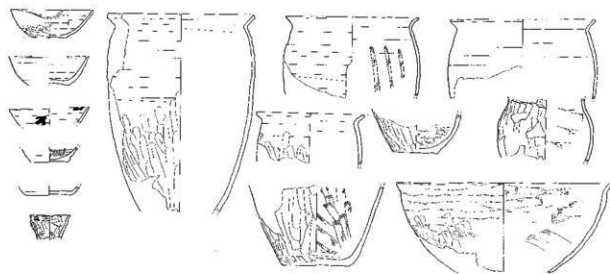


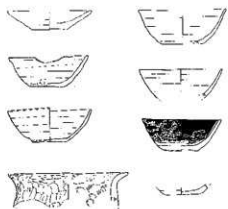
図132 土師器一括遺物(2)

S=1/6

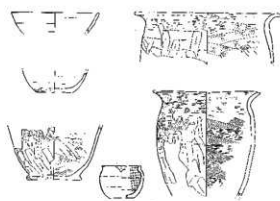
第24号竪穴住居跡



第25号竪穴住居跡



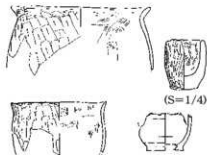
第27号竪穴住居跡



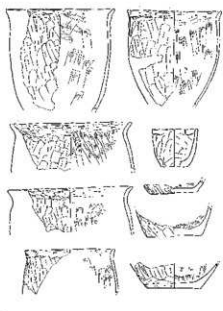
S=1/6

図133 土師器一括遺物(3)

第1号竪穴住居跡



第2号竪穴住居跡



第3号竪穴住居跡

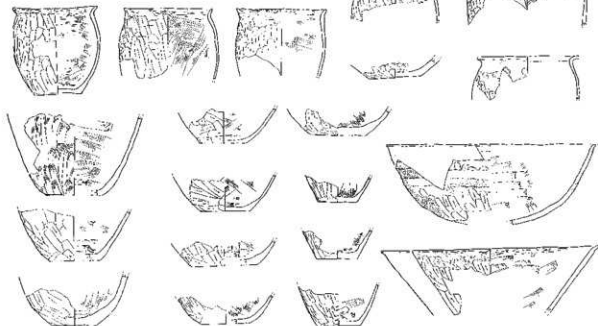
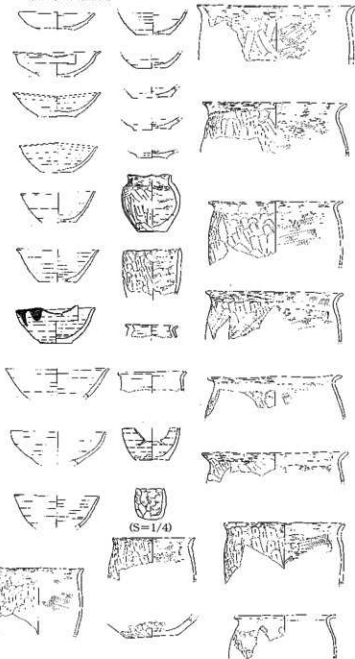
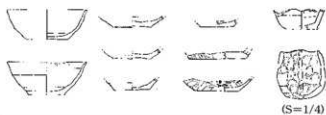


図134 土師器一括遺物(4)

S=1/6

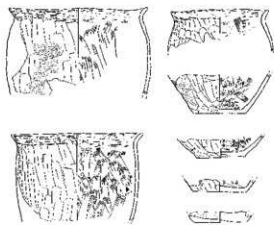
第6号竪穴住居跡



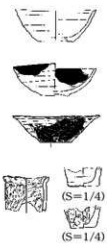
第7号竪穴住居跡



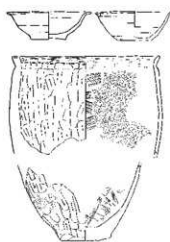
第10号竪穴住居跡



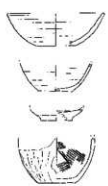
第11号竪穴住居跡



第12号竪穴住居跡



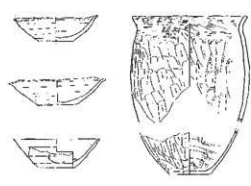
第14号竪穴住居跡



第18号竪穴住居跡



第19号竪穴住居跡



S=1/6

図135 土師器一括遺物(5)

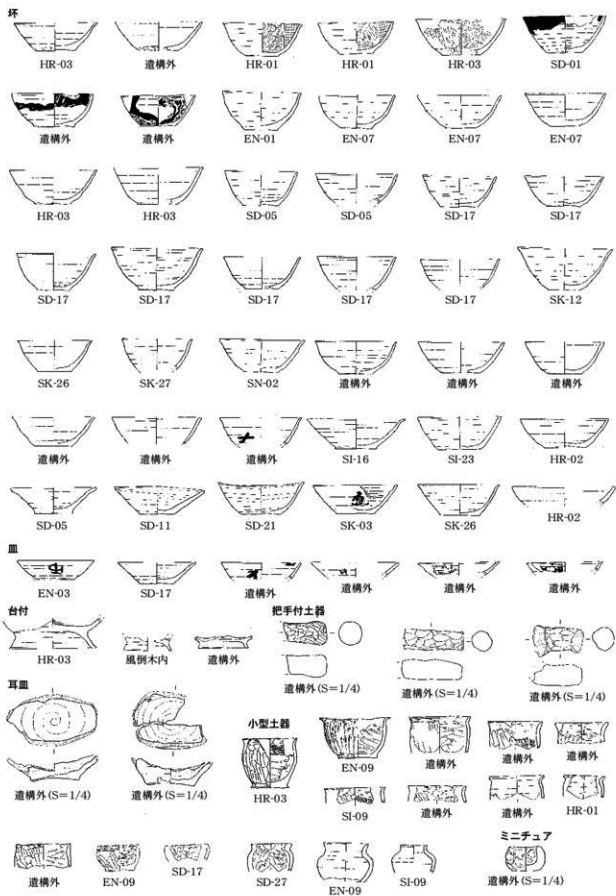


図136 土師器 その他(1)

S=1/6

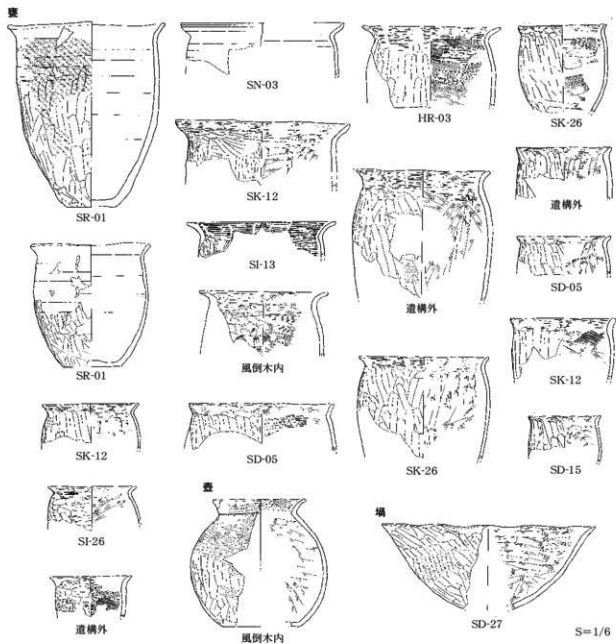


図137 土師器 その他(2)

2. 墨書・ヘラ書きが施される土器について (図140～143)

墨書が施される土器について

平成15年度の調査で出土した遺物の中で図示することのできた墨書土器は、計14点である (図1～14)。ほとんどが土師器の皿・坏である。この13点は墨書の内容から検討すると、以下に3分類される。

- A 文字が書かれたもの — 正位の状態で書かれたもの
 - 倒位の状態で書かれたもの
- B 記号が記されたもの
- C 絵画や文様が描かれたもの — 体部に描かれたもの
 - 体部及び底面に描かれたもの

A 文字が書かれたもの

文字が書かれたものは、計4点出土している (図140-1～4)。正位の状態で書かれたもの (1～3) と、倒位の状態で書かれたもの (4) の2種類が見られる。1は、第3号土坑から出土した土師器坏で、口径に対する底径の割合が高い略完形の坏である。土器体部のやや下に均整のとれた行書体で「原」、或いは、「扇」とも読める文字が書かれている。2・3は、破片資料の土師器坏である。2は第24号竪穴住居跡から出土しており、体部に正位で「不」、或いは、「万」の文字が書かれている。3はA C-170グリッド第Ⅱ層中から出土している。土器体部の下に「大」、或いは、「丈」の文字が書かれている。4は第3号円形周溝の周溝内の堆積土から出土した略完形の土師器皿である。体部に倒位の状態で墨書が書かれており「西」とも判読可能と思われるが、平川南氏の大別する中の通常の漢字には該当しない要素を有する文字の可能性も考えられる (平川 2000)。

B 記号が記されたもの

記号が記されたものは、計5点出土している (図140-5～9)。土師器坏の破片資料であり不明瞭なものも見られるが、おそらく格子を意識して記されたものと思われる。5点全て遺構からの出土である。5はX-174グリッド第Ⅱ層中から出土している。土器体部の下に記されている。6はAA-181グリッド第Ⅱ層中から出土している。7はY-174グリッド第Ⅱ層中から出土している。不明瞭ではあるが格子を意識して記されたものと思われる。8はY-166グリッド第Ⅱ層中から出土している。7同様不明瞭であるが、格子を意識して記されたものと思われる。9はAD-177グリッド第Ⅱ層中から出土している。前の4点に比べ比較的太めの線で格子が記されている。内面に黒色処理が施される坏の破片である。平成6年度の出土遺物に類似する。

C 絵画や文様が描かれたもの

絵画や文様が描かれたものは、計5点出土している (図140-10～14)。こちらも破片資料が多く不鮮明なものが多い。10はX・Y-170グリッド第Ⅱ層中から出土した接合資料である。土師器皿の破片資料で、体部外面に不鮮明ではあるが絵画、或いは、文様が描かれている。11も土師器皿の



破片資料で、Y-170グリッド第Ⅱ層中から出土している。同じく体部外面に細めの筆使いで、10よりは比較的鮮明に絵画や文様が描かれている。赤外線反射写真を用いても判然としないが、鳥や草花とも見える。12はAB-194グリッド第Ⅱ層中から出土している。土師器環の破片資料で、体部外面に連続した長方形文様が描かれている。高座の側面に描かれる長方形文様を意識して描いた可能性も考えられる。13はAB-188グリッド第Ⅰ層中から出土している。土師器環の破片資料で、体部外面に花卉様にも見える曲線が描かれている。残存部の文様は上下2段に分かれ、上段の文様は白抜き、下段は文様内部が塗りつぶされていることが確認できる。文様構成としては連弁・蓮華文にも類似している。14は第19号竪穴住居跡の堆積土中から出土している土師器環。底部の約1/2と体部及び口縁部の一部が残存する。底面及び体部外面に文様が描かれている。底面の文様は一部に唐草文が描かれている。その他は花押様にも見えるが不鮮明である。体部残存部にも曲線が描かれているが、こちらも不鮮明で、赤外線反射写真を用いても何が描かれているかは判然としなかった。

ヘラ書きが施される土器について

今回の調査で出土した土器の内、ヘラ書きが施されるものは計14点を数える(図142-1~14)。内訳は、酸化焰焼成を含む須恵器6点、土師器8点である。ヘラ書きは、基本的に須恵器に施されるものが多く、また、ヘラ書きされるものの多くが須恵器の生産に関わる記号と考えられている。しかしながら、本遺跡では土師器に施されたものも比較的多く見つかっており、また、文字と記号を明確に区別することができないものも多い。ここではヘラ書きの内容から検討して以下の2つに分類した。

- A 文字や記号が施されるもの
- B 絵画や文様が施されるもの

A 文字や記号が施されるもの

計13点に文字や記号が施されている(図142-1~13)。1は第22号竪穴住居跡から出土した酸化焰焼成の須恵器環で、体部下半に倒位で「木」、或いは、「水」とも読み取れる文字が施されている。残存部から、左側にもう1文字(記号)施されていた可能性が高い。2も第22号竪穴住居跡から出土した酸化焰焼成の須恵器環の体部片で、記号の様なヘラ書きが施されている。3は第4号竪穴住居跡から出土した酸化焰焼成の須恵器環。口縁部を欠失している体部に倒位で1同様「木」、或いは、「水」とも読み取れる文字が施されている。文字の左側には連続した「Z、或いはN」状の線に対しやや斜行するように直線が施された記号「」が見られる。配置からすれば、1も欠失部分に同様の記号が施されていた可能性が高い。4は第7号円形周溝の堆積土中(白頭山火山灰層の上層)から出土した須恵器環の略完形形で、体部下半に記号「」が施されている。還元焰焼成で色調は青灰色を呈している。外面には2本交差の、内面には1本と2本交差の火漉痕が認められるもので、口径に対する底径の割合が低い器形である。5は第4号竪穴住居跡から出土した土師器環で、体部下半に倒位で「大」の文字・記号が施される。比較的細めの3本の線を交差させる単純なものであり、結果として「大」字状に見えるものと思われる。6は第3号壕跡から出土した須恵器長頸壺の破片資料で、肩部に「大」の文字・記号が施されている。7は第3号竪穴住居跡から出土した土師器環で、体部下半に「十、或

いは×」の文字・記号が施されている。8は第3号竪穴住居跡から出土した土師器坏で、底面に「十、或いは×」の文字・記号が施されている。9は第21号土坑から出土した土師器鉢で、底面に「中」の様な文字・記号が施されている。10は第13号竪穴住居跡から出土した土師器甕の破片資料で、口縁部内面に「井」の文字・記号が施されている。11は遺構外のAC-174グリッド第Ⅱ層中から出土している。土師器坏の体部下半に判読は不明であるが、斜行した3本の線が認められる。12は第3号竪穴住居跡から出土した須恵器皿の破片資料で、体部にやや斜行した2本の線が認められる。13は第22号竪穴住居跡のピット9内から出土した土師器坏で、体部下半の底部付近に細めの工具による斜格子が密に施されている。

B 絵画や文様が施されるもの

1点のみ、遺構外のAC-174グリッド第Ⅱ層中から出土している。14は内面に黒色処理が施された土師器坏で、底面に比較的鋭利な工具によって絵画の様な文様が施されている。残存部が1/4しかないため判然としなが、文字や記号の可能性は低いものと考えられる。

3. 考察

(1) 墨書について

墨書が施される土器は計14点と遺物の出土総数からするとそれ程多くはない。ここでは平成6年度に行われた調査で出土した遺物も交えて考えてみたい。

平成6年度の調査では計4点の墨書土器が図示されている(図140-15~18)。内訳は、第4号建物跡からの1点(15)と第15号建物跡からの3点(16~18)である。これら4点はすべて「井」の様な格子状の記号が記されている。平成15年度の調査区からも格子状の記号が記された土器が5点出土していて、合計すると9点となり、比較的まとまって出土している傾向が見られる。格子は縦4本横5本で九字[臨、兵、闘、者、皆、陳、列、前、行(ドーマン)]を表し、道教の影響があるものとされ、五芒星[セーマン]と共に陰陽道の代表的な呪術図形の一つと考えられるものである。岩手県水沢市林前南館跡では、九字[ドーマン]に関わる一括資料の検討から、格子を構成する線の本数を省略して「井」に移行していく過程が判明している。また、「十、或いは×」も、九字[ドーマン]の省略形として捉えられるものと考えられている。

同一の文字や記号が施された墨書土器が1遺跡、或いは、1遺構から比較的まとまって出土している例としては、本遺跡の北側に位置する野尻(2)遺跡の第101号円形周溝が挙げられる。第101号円形周溝の周溝内からは「小」のような墨書が施された土師器坏が1点、土師器皿が4点出土している(図140-19~23)。青理文報第186集p. 306で神康夫氏も報告しているが、「小」の縦の長い部分は2回書かれており、現在の「小」の文字を書いているものではなく、お墓と考えられる円形周溝の周溝内から出土していることを考慮すれば、格子状の記号[ドーマン]同様、儀礼や呪術的な意味合いを持っていたものと考えられる。行う儀礼・呪術、或いは、場所によって文字・記号が使い分けられていた可能性も考えられる。言い換えれば現在と同じ様に、文字や記号が独自の意味合いを持っていた結果とも言えよう。墨書土器に限れば、県外では、秋田県仙北郡美郷町(旧千畑町)厨川谷地遺跡で「成」や「几」、山形県山形市今塚遺跡で「成」や「麗・一麗」、山形県米沢市古志田東遺跡

で「山田」や「東」、宮城県多賀城市山王遺跡で「川」や「折」等、同一の文字・記号が施された遺物がまとまって出土している例は多い。傾向としては当然のことながら官衙・郡衙、豪族居館、祭祀関連の遺跡・遺構から多く出土していると言える。

「原」・「扇」の様な文字の墨書は、これまでのところ県内での出土例は見られない。行書体で比較的丁寧に書かれているが判読は難しい。一文字ではあるが出土頻度の極めて低い文字と推測される。墨書土器が出土した第3号土坑は土坑墓の可能性が高く、副葬品として埋置されたものと考えれば、葬送儀礼に関連する文字、或いは、被葬者に関係のあった文字の可能性も考えられる。

「西」とも判読可能な文字は、第3号円形周溝の堆積土中（白頭山火山灰より下層）から出土した土師器皿の体部に倒位で書かれている。この土師器皿は、底部に再調整が施されている。厚みや重量感が有り、本遺跡周辺では比較的古手の様相を呈する遺物で、墨書土器としても当地においては初現的なものと考えられる。県内で方位と考えられる文字が墨書きされた古代の土器は、青森市新田(1)遺跡で「南」が施された土師器杯が1点出土しているのみである。土器以外でも、同じく新田(1)遺跡から「西」が書かれた木製品が1点出土しているにすぎない。いずれにしても、方位は出土頻度の極めて低い文字と言える。また、この文字は平川氏の大別する特殊文字で、「兀几型文字」の中の「丙」に類似する文字であった可能性も高い。群馬県前橋市芳賀東部団地遺跡から出土した土師器杯(図141-1)の底面に「丙」の文字が書かれており、一見すると、本遺跡から出土した墨書と同一文字であった可能性が極めて高い資料である。前述の新田(1)遺跡は青森市石江地区の沖積地やそれに続く微高地に所在する古代の遺跡で、検出された溝跡からは檜扇や多量の付札木簡、物忌札、形代、斎串等が出土している。律令的祭祀遺物が多量に出土する遺跡であることを付記しておく。


花卉状に墨書きが施される土器の文様構成は、前述した通り連弁・蓮華文が描かれたものに似ている。連弁・蓮華文が描かれている良好な資料として、県内では、つがる市(旧稲垣村)久米川遺跡からの出土遺物と、本遺跡の南側に隣接する高屋敷館遺跡A区の第120号溝跡(平成6・7年度に調査が行われた国史跡高屋敷館遺跡の第4号溝跡と同一の遺構)から出土した遺物が挙げられる。久米川遺跡では2点、連弁・蓮華文が描かれた土師器杯(図141-2)と土師器鉢(図141-3)が出土している。2点共、外面に比較的大ぶりの連弁・蓮華文が描かれている。高屋敷館遺跡A区の第120号溝跡は、本遺跡と高屋敷館遺跡の境界部分、小さな沢の最深部に沿って東西方向に延びる遺構で、多量の遺物が出土している。堆積土中から満遍なく遺物が出土していることから、連綿と廃棄行為が行われていた場所と考えられる遺構でもある。資料は略完形品の土師器皿(図141-4)。土器の内外面に連弁・蓮華文が施されている特異なもので、仏教との関連が強く示唆される遺物の一つである。県外では、石川県小松市浄水寺跡の第3号溝から裝飾連弁が施された土師器高杯(図141-5)が出土している。高杯の体部外面が連弁によって裝飾され、杯内面にも墨書が施されており、寺(仏教)との深い係わりを示す遺物として捉えることができる。また、時代はやや遡るが、奈良県奈良市平城宮跡のSK2113から連弁の施された土師器椀(図141-6)が出土していることから見れば、中央との関連も指摘される遺物の一つと考えられる。連弁・蓮華文に類似した文様に宝相華文が見られる。宝相華文が墨書きされた例としては、前述の厨川谷地遺跡から出土した土師器蓋(図141-7)が挙げられる。蓋の外面には比較的大ぶりの宝相華文が描かれている。墨書土器以外で連弁・蓮華文が施され、仏教に関連したと思われる遺物については、山田雄正氏が詳しく報告している(青埋文報第

394集p. 358～362)。報告された例以外では、埼玉県熊谷市北島遺跡の第46号住居跡から、連弁・蓮華文が刻まれた石製紡錘車(図141-8)の出土例が見られる。本来の機能とは別に二次的な機能が付与され、仏教関連の装飾が施されている遺物は比較的多い。仏教が多岐に渡って人々の生活に浸透していった結果とも考えられる。鳥や草花・唐草文の絵画が施された墨書土器は、県内の遺跡においては今のところ類例を見ることはできない。県外では、秋田県秋田市秋田城跡、同仙北郡美郷町(旧六郷町)石名館遺跡(図141-9)、岩手県平泉町柳の御所遺跡、同志羅山遺跡、宮城県多賀城市山王遺跡、同仙台市陸奥国分尼寺跡、石川県小松市浄水寺跡(図141-10)、同荒木田遺跡、静岡県袋井市坂尻遺跡(図141-11)、奈良県奈良市平城宮跡(図141-12・13)、徳島県鳴門市中内遺跡(図141-14)等で絵画・戯画が施された土器等が出土しているが、全てが合致するような類例は見あたらない。絵画・戯画には画一された題材がなく、多様なモチーフが存在していた結果、或いは、同じ題材であったとしても、描き手によってかなりの差が生じた結果とも考えられる。鳥をモチーフにした墨書には水鳥・鳳凰等が見られる。本遺跡から出土した墨書資料は、鳥の後頭部のカールする羽冠の表現からすると、鶯鶯の可能性が高いものと考えられる。鶯鶯は墨書以外でも鏡の背面文様・飾り金具・有職文様等に用いられる例が多く、吉祥文の一つとして捉えられるものと考えられる。連弁・蓮華文や唐草文は、基本的には仏像関連の装飾の他、寺院建築等に使われた軒丸瓦や軒平瓦に用いられていた文様でもある。これらの文様が施されているということからも、底面に唐草文が墨書きされた坯は、寺(仏教)に少なからず関連した遺物として捉えることができるものと考えられる。草花文等は時代はやや下がるが、鳥獣人物戯画や折敷等に墨書きされた例が見られる様に、主題とはいかないまでも副題、或いは背景として比較的に広く用いられていた題材と考えられる。以上のことから、絵画等が描かれた墨書土器は、律令期に於ける中央や仏教との関連が強く示唆される遺物であると考えられる。また、連続した長方形文様が墨書きされたものも、連弁・蓮華文墨書土器の系譜をたどる遺物と考えられ、やはり仏教的な装飾との関連が指摘されるものと考えられる。しかしながら、当時盛行していたいずれの仏教のどのような内容を意識して墨書を描き、どのような目的を持ってそれらを使用していたかについては、当然のことながら現段階では言及することはできない。

(2) ヘラ書きについて

ヘラ書きは、須恵器生産に関係した文字・記号と考えられ、坯の体部や長頸壺の肩部に施されている例が多い。ヘラ書きにおいても、本遺跡では特徴的なものがいくつか見られることから、墨書土器同様、平成6年度の調査で出土した遺物も交えて考えてみたい。ただし、ヘラ書きが施されている須恵器は平成6年度と15年度を合わせても、図示できたものは9点とそれ程多くはない。

平成6年度の調査では、「×」記号が3点と、「ト、或いは人」と施されたものが1点出土している(図142-15～18)。いずれも、青森市浪岡周辺の古代の遺跡では比較的出土例が多く、特異性は認められない。平成15年度調査の第7号円形周溝の周溝堆積土中(白頭山火山灰の上層)からは、特異な記号「 $\frac{1}{2}$ 」が施された須恵器坯(図81-32)が出土している。この記号は、これまでに調査が行われた浪岡バイパスに関連した遺跡には類例が見あたらない独特なものである。バイパス関連以外では、野尻(4)遺跡(浪岡町大釈迦工業団地造成に係る町教育委員会による発掘調査)のS I 170 B-2の遺物に類例が求められる。その他、五所川原市隠川(4)遺跡第6号住居跡クロピットから

出土している土師器坏(図143-1)に比較的似た例が求められる。焼成前に付けられた体部に残る指の圧痕から、おそらくは右手で倒位に施された、現段階では初現的な記号と思われる。胎土分析の数値からは、五所川原領域の結果が得られている。磁気探査調査等により確認はされているが、未調査の須恵器窯での生産品の可能性も考えられる遺物であり、今後、窯跡の調査が行われるとすれば類例が増える可能性が高いものと推察される。第4・22号竪穴住居跡から出土した酸化焰焼成の須恵器坏の体部に施された文字・記号は、他に類例が見あたらない。「木、或いは水」・「」といったヘラ書きも、県内においては出土頻度の極めて低いものと考えられ、加えて、文字・記号が組み合わせによって二つ、或いは、それ以上施される例もそれ程多くは見られない。第4号竪穴住居跡からの出土遺物は残存部の状況から、体部にもう一文字・記号が施されていた可能性が高い極めて特異な例でもある。その他、第3号塚跡からは須恵器長頸壺の肩部に「大」の文字・記号が施されたものが1点出土している。こちらは県内では比較的類例が多く見られ、胎土分析が行われている場合も多い。本資料も胎土分析を行っている。得られた結果からすれば、日本海側の古代秋田城周辺の窯産の可能性を示唆する数値が出ており、窯業地に関係した文字・記号の一つと考えられる。

土師器にヘラ書きが施され、図示できたものは9点で、総数は須恵器と同数である。平成6年度の調査時に1点、平成15年度の調査では8点出土している。器種別では坏が6点、甕と小型鉢、お猪口形の小型土器が各1点ずつである。お猪口形の小型土器には、斜めに交差する「×」のヘラ書きが施されている。平成6年度の調査時に出土している。甕は口縁部の内面に「卍」の様な記号が施されている特異なものである。甕の口縁内面に「卍」の様なヘラ書きが施されている類例としては、黒石市豊岡(2)遺跡第16号土坑からの出土遺物(図143-2)に求められる。口縁部を含め土器の内面にヘラ書きが施されている例は、外面に施される例に比べるとそれ程多くはないが、稀に見られる。本遺跡の北側約0.6kmに位置する野尻(4)遺跡(浪岡町大釈迦工業団地造成に係る町教育委員会による発掘調査)では、3点とややまとまって出土している例が目される(図143-3~5)。3の土師器甕の口縁部内面にも「卍」の様なヘラ書きが施されている。4は土師器甕の口縁部内面に「十」、5は土師器甕の内面に「十、或いは×」の文字・記号が見られる。その他、土器の底面にヘラ書きが施されたものが3点、体部外面に施されたものが6点出土している。底面にヘラ書きが施されたものは小型鉢が1点と坏が2点の計3点。小型鉢の底面には「中」の様な文字・記号が、坏の底面にはそれぞれ文字・記号以外の「絵画?」と「十、或いは×」の文字・記号が施されている。「中」のヘラ書きが施される土器は、本遺跡の南側に位置する国史跡高屋敷館遺跡で2点、高屋敷館遺跡A区で2点出土しているが、いずれも坏の体部に倒位で施されている特徴が見られる。本遺跡から出土した遺物は、器形や施文部位からしてもそれらとは別の要素を持って使用されていた可能性が高い。底面に文字・記号以外のヘラ書きが施されたものは土師器坏が1点出土している。残存部が1/4しかいないため判然としないが、絵画(動物?)のようなものが描かれていた可能性が高い。土器の底面以外に絵画等が描かれている例は比較的多い。五所川原市隠川(4)遺跡では、体部に絵画的(動物と人物?)なヘラ書きが施された土師器坏(図143-6)が出土している。この坏は、対となる面と底部にも記号の様なヘラ書きが施されている特異なものでもある。前述した野尻(4)遺跡では、SK0423から胴部に馬や水飲み場が描かれた擦文土器(図143-7)が出土している。秋田県鹿角市中花輪遺跡では、動物(馬または牛)・植物・柵を想定させる文様が描かれた擦文土器の特徴を併せ持つ土師器

甕(図143-8・9)が出土している。以上の類例からは、動物を描く例が多い傾向が見受けられる。絵馬的な要素を持つ遺物、馬産に関連した行為に伴う遺物、或いは、擦文土器の特徴を持つ土器にも見られることからすれば、北海道的な要素を持つ遺物の可能性も考えられる。底面に「十、或いは×」の文字・記号が施された土器は、比較的高い頻度で県内各地の遺跡から出土している。その他は全て土師器坏の体部に、文字・記号が施されている。「十」・「///」・「//」等が見られ、こちらも比較的出土頻度の高い文字・記号であり、遺物が出土した遺構やグリッド周辺からもこれといった特異性は認められない。しかしながら、これらは須恵器同様焼成前にヘラ書きが施されており、後に転用される可能性もあるが、いずれにしても使用目的・方法が、あらかじめ決まっていた道具と考えられ、施された後に使用目的が決まる墨書土器とは、たとえ同じ様な図柄が描かれていたとしても、区別されるべきものと考えられる。

(笹森)

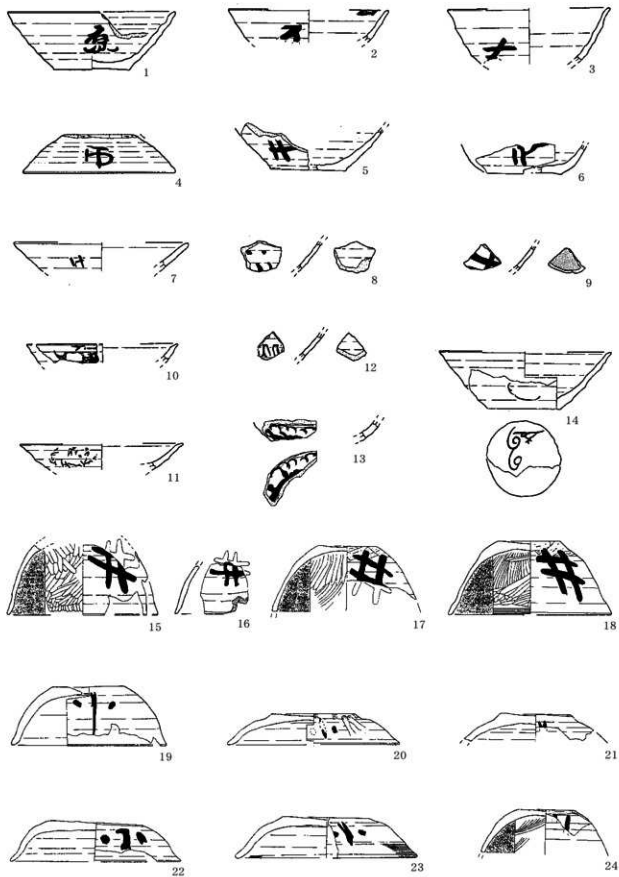


図140 墨書土器集成

S=1/3

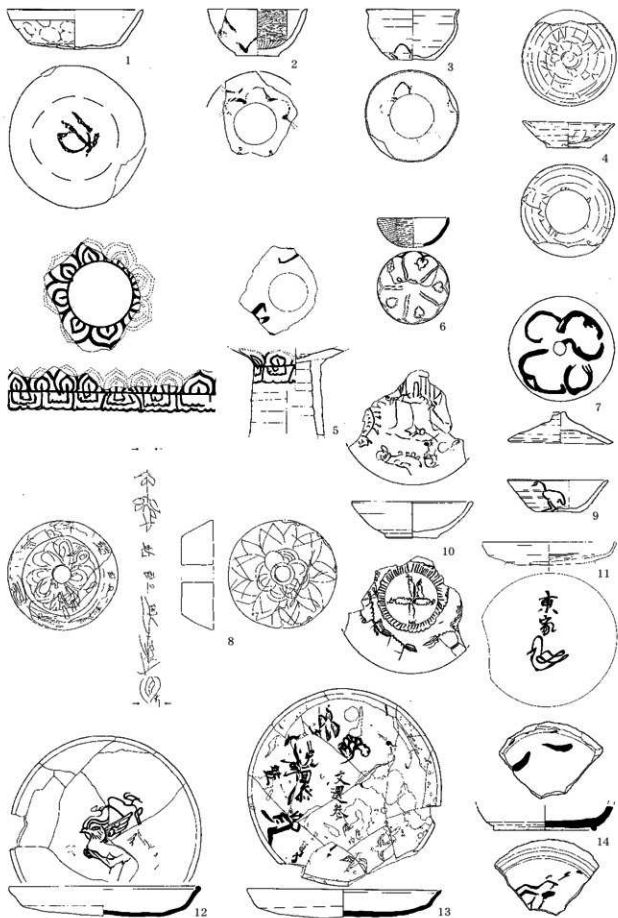


図141 墨書他集成

※縮尺は不統一

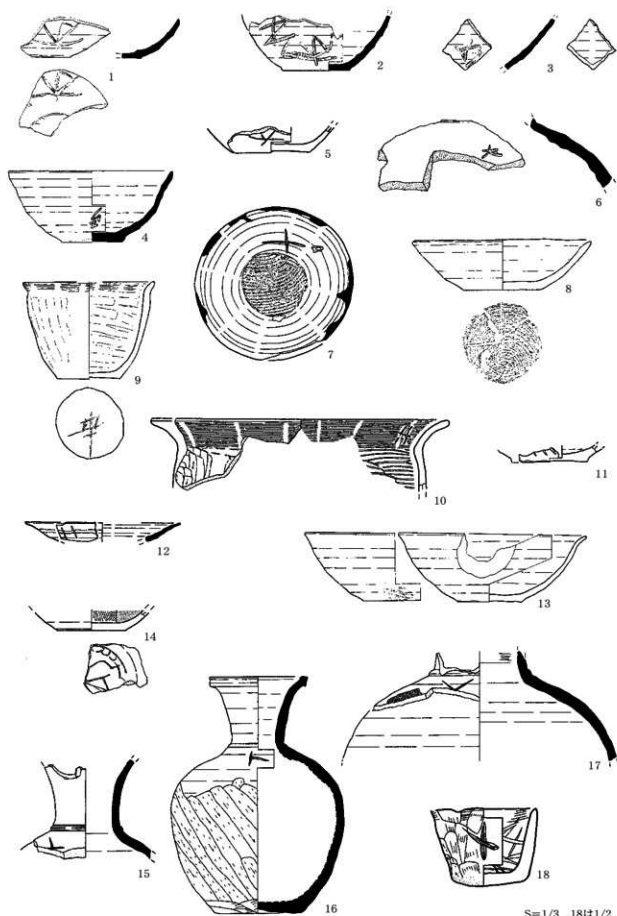


図142 ヘラ書土器集成(1)

S=1/3 18は1/2

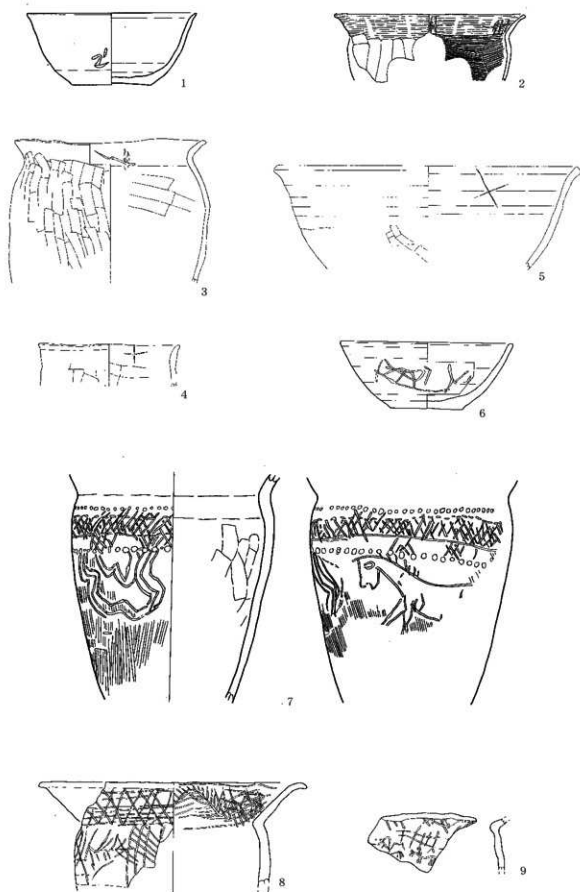


図143 ヘラ書土器集成(2)

※縮尺は不統一

3. 野尻(3)遺跡出土の鏡について

はじめに

今回の調査では、第3号住居跡から、鏡と思われる鉄製品1点が出土した。この鏡は、正純密教(空海請来以降の密教)以前の古密教—雑部密教—(以下、雑密)の修法で用いる法具とされ、県内における確実な出土例としては五輪野遺跡が挙げられる。このような仏具の出土は、古代北東北における仏教の浸透とその実体を示す資料と考えられる。ここでは、遺物の出土状況や詳細な観察を行った上で、県内や県外の類例を含め位置づけを行いたい。

出土鏡について

(1) 出土状況

調査区の南に位置する第3号住居跡から出土した。第3号住居跡は、東南東方向に軸をとり竪穴部と掘立部で構成され、鏡は、竪穴部の北西寄りから出土した。床面よりやや高い位置からの出土である。住居内の遺物は、堆積土の観察から、やや地形的に高い西方向から主に廃棄されたような状況が窺える。住居堆積土に鍵層となる火山灰が確認できないことや出土遺物の検討から白頭山苦小牧火山灰降下以後の10世紀中葉以降と考えられる。鏡の出土状況は、廃棄されたような状況であり、その使用方法を窺うことはできない。

(2) 観察(図1模式図、図144-1)

把部が欠損しており、その基部と鈴部のみが残存する。鈴部も下半部の2分の1が欠損し、そのため口の部分が不明確である。残存部から、口部は肥厚しない形態であることがわかる。丸は、残っていない。所々に鉄錆による大きな膨れが認められ、大きさは、長さ8.1cm(残存長)で、鈴部は径7.9cmの球形を呈する。球の中程には、段差があり半球状のものを接合した痕跡が窺われる。1ヶ所に鉄膨れとは思われない方形の塊が認められ、上下の接合のために留められた鉄板の可能性がある。他にこのような塊は認められない。厚さは、現状で2.5mmから最も厚いところで5mmほどである。内外面とも鉄錆が顕著で、内面は鉄錆色が強く、外面は黒色がかかった暗赤灰色を呈す。外面には、所々僅かに緑青と思われる付着物が認められる。

把部は、鈴部の頂部中央に取り付けられている。幅は、約1cmで断面形は方形を呈す。欠損部の観察から中空であることが確認できる。銅製三鈷鏡に比べて細身であることが特徴である。

(3) 製作技法について

遺物の観察から、製作方法について考察する。まず、把部と鈴部は鍛造による別作りであり、鈴部に穿った穴に把部を差し込み接合している。把部は、中空であることから鉄板を折り曲げ方形に形作っているものと思われる。鈴部は、上下別作りの半球を下を上を被せるような形で接合している。鈴部下半部は、半球状ではなく更に半分にしたものをそれぞれ取り付けて口部を創出した可能性も考えられるが、五輪野遺跡の例から半球同士を接合したものの可能性が高い。次にこのような把部と鈴部、鈴部の上半部と下半部の接合方法が問題となる。遺物の観察では、外面に緑青と思われる付着物や銅色の付着物が僅かに認められ、特に接合部付近に顕著である。X線写真でも付着物や接合部付近は、

質量の高いことが確かめられる。鉄製品に付着する銅の理解については、村上氏による「銅鑑」を用いた鉄接合技術の研究が挙げられる(註1)。主に関東地方出土の9世紀以降の鉄製品の分析から、「銅鑑」を発見し、鉄接合技術の一端を明らかにした。本遺跡出土の鏡に付着している銅が「銅鑑」技術によるものか分析を経ていないので判断はできないが、このような鉄製品における銅付着の要因として説明し易い。

鉄製三鈷鏡の類例と鉄鈴(図144)

(1) 鉄製三鈷鏡

古代における鉄鏡は、県内から5遺跡10例とされる(表1・註2)。しかしながら、一般的な鏡の大きさに比べてやや小さく、鏡とするには疑問が残るものも含まれることから、これらについては鉄鈴に止めた。鉄製鏡の確実な出土例としては、五輪野遺跡の2例である。

2は、第33号住居跡出土のもので完形であり、全形を窺える資料である。全長35cmであり、銅製三鈷鏡が大きいのでも20cm前後であるのに対して長い。三鈷の形は、初期の銅製三鈷鏡に比べて極めて形骸化・簡略化している。3は、把部を欠損し潰れてはいるが、把部の一部や鈴部の口が確認でき、大きさも1とほぼ同じであることから鏡と判断できる。おそらく、三鈷鏡であったと思われる。当遺跡出土のものを五輪野遺跡例と比較すると、鈴部の径が約8cmとほぼ同じであること、把部の断面が正方形に近い方形であること、半球同土を真ん中で下を上に乗せる形で接合している点から同種の遺物とみることから、鏡の可能性が高い。五輪野遺跡例は、ともに住居内で床面からやや高い位置から出土している。張り出しを持つ住居構造で、ともに張り出し部付近からの出土である。鏡を出土した2軒の住居は重複し、同じ場所に同じ構造の住居が作られている点は、注目される。報告のなかでは、共伴遺物の土師器環の検討から年代を推定しており、胴部のヘラ削りと口縁部の横ナデ調整の類例を野尻(3)遺跡や日光男体山出土環G類に求め、10世紀後半に位置づけている(註3)。

このような鉄製の鏡は、県外では日光男体山山頂遺跡H地区出土、岩手県宮古市山口館跡第14号住居跡出土の2例のみである。12の日光男体山例は、鈴部を大きく欠損するが三鈷の形態など五輪野例に類似する。三鈷や把部の長さは、五輪野例よりやや短い程度であり、その断面形も方形を呈する点で共通している。13の山口館例も五輪野例とほぼ同じ大きさである。これらの3遺跡の鏡は、鉄製というほかに製作技法において共通性がある。三鈷は薄めの鉄板で形作られており、日光男体山例を除いて中鈷と脇鈷は先端で接合されている点、把部は、断面方形であり、銅製と比較して細めである点、鈴部は半球状のものを下半分を上半分に被せる形で接合しており、口は肥厚しない簡素な作りである。鉄製を含め三鈷鏡については、すでに時枝氏によって集成と位置づけが行われている(註4)。そのなかで、鉄製においては、巨大化と三鈷の退化が指摘されており、最古のもので9世紀代、他は10世紀代と推定している。

(2) 鉄鈴との関係

当遺跡出土の鏡の類例を集成する過程で、鉄鈴と報告されているなかに鏡の可能性のあるものがあり、また両者の製作技法に共通性があることがわかった。よって鏡と鉄鈴との関係について検討したい。県内における鉄鈴の出土は、5遺跡10例であり(表1)、すでに下山氏による集成が行われて

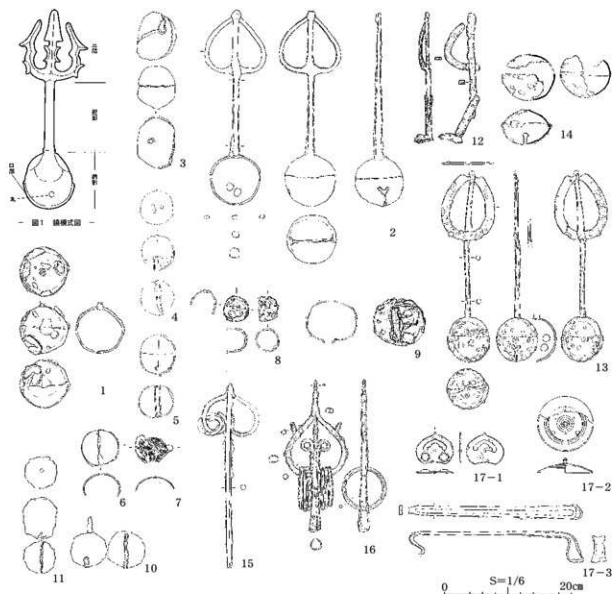


図144 県内出土の鉄製三結鏡・鈴・錫杖・柄香炉とその類例

表1 県内出土鉄製三結鏡と鉄鈴一覽

番号	遺跡名	遺跡名	鈴部の大きさ(径・厚さcm)	備考	文献
三結鏡					
1	本遺跡	第3号住居跡敷土	7.9・0.25～0.5	縁付付着	
2	五輪野遺跡	第53号住居跡敷土	7.8～8.0・0.15・0.2	完形・丸2割	1
3		第32号住居跡敷土	鑑定8.0・—	壊れている。柄香炉出土	
鉄鈴					
4	蓮田大船遺跡	東調査区遺構外	5.1・0.2	2つの小穴・内外面縁付・丸に小石を用いる。跡造	2
5		第14号住居跡A炉跡床面	5.2～5.4・0.2	上半部欠損・内外面縁付跡造	
6	古船遺跡	第104号建物跡床面	5.5～5.8・0.15		
7		遺構外6D-1層	鑑定5～6・—	破片・木質付着	3
8	高船遺跡	第4号住居跡敷土	4.0・0.25		
9		第60号住居跡ピット内	7.5～8.0・0.2	跡の可能性	4
10		第13号住居跡	5.3～5.7・0.2	丸有り	
11	砂沢平遺跡	遺構外O-22	5.3～5.7・0.2	上部に方形貫通孔	5

いる(註5)。近年では、林ノ前遺跡の調査で更に2点出土している。

県内出土例では、9を除いて径が約5cm前後でまとまりをみせる。鏡が径8cm前後であるのに比べると小さい。4は、2つの穴があり紐穴を有す紐部の痕跡と考えられる。

10は、頂部に幅5mm前後の断面方形の突起部を有していることから鏡の可能性も考えられるが小さい。9は、径8cm前後で大きさという点では、鏡の可能性はある。いずれにしても全形が残っていない以上鏡か鈴であるかの判断は難しい。次に製作方法について検討したい。鉄製鏡鈴部の製作方法は、日光男体山例は不明であるが、半球同士を真ん中で下を上に乗せる形で接合している。このような製作方法は鉄鈴においても確認できる。10の砂沢平出土のものは、中程で段差があり下を上に乗せる形で接合していることが肉眼観察やX線写真で判断できる。県外における鉄鈴についての集成や実見はできていないが、日光男体山出土の多数の鉄鈴・銅鈴が参考となる。銅鈴が50口、鉄鈴が88口出土している。銅鈴は、全体を铸造するものがほとんどであるが、上下半分を板金で形作り、繋ぎ合わせるものも10口あまりある。鉄鈴は、鍛造ですべて上下を別作りとし繋ぎ合わせている。実測図から判断して、14に示したように下半部を上半部に被せるように繋ぐものが多い。このことは、鉄製鏡に限らず鉄鈴をはじめとする鈴の製作方法として一般的であったと言える。

雑部密教と鏡

(1) 鏡の分布(表2)

鉄鏡は、本遺跡出土のものを含めると先に述べたように青森県津軽地域で3例、岩手県宮古市山口館遺跡で1例、日光男体山1例の計5例である。宮古市は、秋田—盛岡を結ぶ延長線上にあり、このことから鉄製鏡は、日光男体山例を除けばおおそ北緯40°以北に分布している。北緯40°以北は、いわゆる防衛性集落の分布とも重なり興味深い。

一方、鉄鏡に時期的に先行すると考えられる銅鏡は、鑄型を含めて全国で19例あまり知られている。中世以降の鏡もいくつか残されているがここでは古代のみとした。東大寺二月堂の「堂司鈴」は、鎌倉時代の施入銘があるが、形が古式であり、この銘が製作時期と一致するものなのか懐疑的な意見もあるため(註6)、ここに含めた。また、鏡の時期的な問題以上に悔過会(十一面悔過)における具体的な使用方法が窺える点で重要な資料である。

さて、鏡の分布を概観するといくつか地域的なまとまりが窺える。第一に東大寺をはじめとする畿内における古代文化圏の寺院(第一分布圏)、第二に北関東を中心とする関東地方(第二分布圏)、第三に石川県を中心とする北陸地方(第三分布圏)である。東北地方は、秋田県松峯寺伝来の1点のみである。この三銘鏡は、「駅路の鈴」(大山)とされ、江戸時代(1801年)に発見されている。大館市北西方向に位置する標高380mあまりの「大山」は、古くから霊場・信仰の場であり、鏡はかつて存在した密教系寺院の関連遺物と考えられる。「大山」は、伝承では、弘仁八(818)年に弘法大師空海が開山したとされ、事の真偽は別としても三銘鏡の存在などから平安初期に遡る歴史が窺える。

第一分布圏は、雑密が伝来し、盛行した中心地域であり、奈良時代以来の雑密系の法会が今なお行われている地域である。これらの法会に用いられ、あるいは用いられた法具が伝存している。第二分布圏は、山岳信仰の霊場である日光男体山が所在し、山頂から奈良時代から平安時代にかけての多くの雑密系密教法具(以下、雑密法具)が出土している。また、8世紀中頃以降、「村落内寺院」と呼

ばれる集落内における仏教関連の建物遺構が多く見ついている地域である。また、群馬県御殿前遺跡や茨城県新治村では、三鈴鏡の鋳型が出土しており、当地域においては鏡の製作も行われていたと推定される。第三分布圏では、能登や加賀国から雑密法具が比較的多く出土している。8世紀以降、この地域では寺院の建立が本格化し、9世紀以降になると浄水寺跡やヤシキダ遺跡などで雑密法具が出土する。このことから9世紀前後には、雑密の修法が行われていたことが窺える。能登と越中の国境に所在する石動山は、修験道の拠点寺院として知られ、鹿島町小金森神田出土の鏡などは当地域における雑密の伝来と修験との関連がうかがわれる。

銅製鏡の分布では、大きく3つの分布圏が捉えられたが、鉄製鏡については、松峯寺伝来の銅製鏡を含めておよそ北緯40°以北に分布することから、鏡における第四の分布圏として位置づけられる。

(2) 鏡を用いた仏教儀礼

鏡は、元々は陣中で合図として使用され、その形態からも把部を持って鈴部を打ち鳴らすことは雑密の儀礼においても容易に想像できるところであるが、使用法も含めてどのような儀礼が行われたのか検討してみたい。検討材料としては、出土状況、現在も継承されている仏教儀礼、これに記録類や絵巻物などの絵画資料の3つが挙げられる。

出土状況では、すでに時枝氏により、出土状況が窺える福水ヤシキダ遺跡や日光男体山山頂遺跡例から検討されている(註7)。福水ヤシキダ遺跡例は、井戸状遺構(間井と推定)の傍らから鏡等の仏具が出土しており、「銅鏡や土器に供物を盛り、錫杖や三鈴鏡を振り鳴らして神仏の降臨を仰いだ」様子を推定している。日光男体山例については、文献資料から雨乞い儀礼に関する儀礼が行われていたとし、これらの事例と東大寺二月堂修二会(お水取り)を含め、水にまつわる儀礼—農耕儀礼—に使用された可能性を指摘している。また、鏡等の仏具について意図的に廃棄された様子が窺え、廃棄行為も儀礼の中に組み込まれていたと推定する。この廃棄行為については、大峰山(奈良県)の発掘調査において検出された9世紀前半(延喜年間)と推定される石壇からも、法具や仏像が焚きこまれた形で出土しているという(註8)。また、内藤氏は、日光男体山出土鏡の中には鋳造時のバリや鋳損

表2 銅製鏡一覧表

番号	出土地・所蔵	長さ (cm)	年代	備考
1	法興寺	18.5	奈良時代 (8世紀)	柄部円柱形・紐穴・現東京国立博物館所蔵
2	東大寺	(28.7)	鎌倉時代 (弘安八年插入)	二月堂修二会堂司録・中基欠
3	東大寺	20.1	鎌倉時代 (弘安八年插入)	柄部円柱形・紐穴
4	御殿前遺跡 (群馬県)	—	—	三鈴鏡型
5	円福寺 (千葉県)	28.0	奈良時代 (8世紀)	鈴部複製
6	鹿島神宮 (茨城県)	29.8	平安時代前半	詳細不明・柄複製
7	鉢形遺跡 (茨城県)	—	平安時代 (9世紀代)	—
8	小野沢遺跡 (茨城県)	—	平安時代 (9世紀代)	鈴部破片資料
9	新治村例 (茨城県)	—	平安末～鎌倉時代	三鈴鏡型
10	日光男体山山頂遺跡 (栃木県)	26.7	奈良時代 (8世紀)	大正13年出土
11		26.6	—	H地区出土
12		25.0	奈良～平安前期	H地区出土
13		22.0	(8～9世紀)	Kトレンチ出土
14		(15.0)	—	Dトレンチ出土・三鈴・柄部欠
15	本郷前保遺跡 (福井県)	24.5	平安時代前期 (9～10世紀)	民家敷地より出土・鋳跡欠・鈴部複製・個人蔵
16	福水ヤシキダ遺跡 (石川県)	26.7	平安時代初期	—
17	浄水寺跡 (石川県)	—	—	三鈴破片資料
18	小金森神田 (石川県)	—	—	三鈴欠
19	松峯寺 (秋田県)	24.6	平安時代 (9世紀)	旧住竹家蔵品・現東京国立博物館所蔵

じと思われるものが含まれることから奉納を前提としていた可能性を考えている(註9)。

本遺跡や五輪野遺跡では、出土状況からその儀礼を推定することは難しいが、なんらかの儀礼が行われた後、廃棄されたものと考えられる。水にまつわると言えば、鏡が出土した3号住居跡は、高屋敷館Ⅲ遺跡第120号溝跡に近くであり、この溝跡からは、蓮華文墨書画や耳皿が出土している。このような遺構・遺物と鏡などの仏具がなんらか有機的な関連一例えば儀礼—を持っている可能性も考えられるところである。

現存する仏教儀礼については、東大寺二月堂修二会(お水取り)や法隆寺金堂修正会が知られている。お水取りでは、「堂司鈴」として知られるが、四職(大導師・和上・呪師・司)が用いる。作法の区切りの合図や呪師による四王の勧請、四職の四方加持に用いられる。法隆寺では、加持杖を持って鏡や法螺貝を鳴らしながら金堂内を小走りに回る動作が見られるという。内藤氏によれば、鏡の使用について「鈴の音色に招霊や魔除けの意味を託した古い信仰形態を伝えている」とする。また、お水取りでは、振り鳴らす以外に床を打ち鳴らす所作も加わるようである。このような激しい動作は、柄香炉においても見られる。鏡には、破損や補修の痕跡がみられるものが多いことから、氏は激しい動作による可能性を指摘している(註10)。記録類や絵巻物については、二月堂縁起絵巻などが挙げられるが資料を精査していないためここでは、取り上げない。出土状況や現存の仏教儀礼の検討から、鏡は、その音に招霊や魔除けの意味があり、水にまつわる儀礼に関連していることが指摘されている。

東北地方における雑密教の拡がり

雑密の拡がりを検討するには、雑密法具の出土、仏教関連遺構、そして十一面や千手などの観音、吉祥天像などの雑密像が資料として挙げられる。

(1) 雑密系密教法具

雑密系密教法具は、9世紀以降に伝来した純密で用いる法具と異なり、修法においても体系化されず種類も限られている。結界具としての三鈷杵、錫杖などの杖類、鏡(三鈷)、柄香炉である。鏡は、雑密特有の法具で逆刺を作る忿怒形の古式三鈷杵は奈良時代の特徴である。雑密では、法具を配置する壇を用いない修法が行われたと考えられており、これらの法具の存在は重要である。

三鈷杵(古式) 奈良国立博物館蔵の銅三鈷杵、正倉院宝物の白銅三鈷杵・鉄三鈷杵、弥山山頂出土の金銅三鈷杵(奈良県)、日光男体山山頂出土の銅三鈷杵、慧日寺伝世品の銅三鈷杵(福島県)が古式三鈷杵として知られている。分布は限られており、西日本には残されていない。東北地方では、福島県磐梯町・慧日寺に伝徳一所有の三鈷杵が近年まで伝えられていた。徳一は、法相宗元興系に属する東大寺僧であったが、修行のため会津(磐梯山麓)に移住し、大同年間には慧日寺を開創したと伝えられる。空海が徳一に書写弘通を依頼した新しい密教書に対して書かれた『真言宗未決文』は、雑密の立場から著されたことされる。三鈷杵の存在や徳一の子孫からも、9世紀初めには、東北南部まで雑密が伝わっていたことが窺える。

錫杖 僧具として近世まで一般的にみられる法具であるが、古代においては鏡や三鈷杵と比べて数は多いものの出土は限られている。鉄製のものは、輪王寺1柄(伝勝道上人所持)、日光男体山山頂遺跡(栃木県)20柄、山口館跡(岩手県)(図2-16)・李平下安原遺跡(9世紀・青森県)(図2-15)で各1柄、鹿の子C遺跡では手錫杖1柄(9世紀前・茨城県)などである。

銅製は、妙楽寺経塚1柄（平安後期・兵庫県）、正倉院宝物1柄、法隆寺1柄、大峰山山頂遺跡1柄、那智経塚1柄（8世紀・和歌山県）、日光男体山15柄、鉢形神宮寺経塚1柄（11世紀・茨城県）、福水ヤシキダ遺跡2柄（石川県）、大日岳山頂遺跡1柄・剣岳山頂遺跡各1柄（富山県）、塚山山岳信仰遺跡1柄（平安後期・埼玉県）、極楽寺（国見山鹿寺）伝世1柄（岩手県）、鋳型では日月遺跡（平安後期・埼玉県）、友成遺跡（10世紀後半・群馬県）（註11）などである。

柄香炉 柄先端の形態によって鶴尾形・獅子鎖・瓶鎖・蓮華形の大きき4つに分けられており、その多くが銅製である。鶴尾形は、最も古い形態とされ、飛鳥・奈良時代の遺品が多い。法隆寺献納宝物（東京国立博物館蔵）に2柄見られる。獅子鎖形は、奈良時代の遺品が多く、正倉院宝物、法隆寺献納宝物が代表例である。瓶鎖形は平安時代以降とされ、日光男体山山頂出土の銅製柄香炉1柄（平安前期・9世紀）、那智経塚出土1柄（平安後期）が挙げられる。蓮華形は鎌倉時代以降とされることからここには含めない。今日の残されている柄香炉は伝世品が多く、出土品は少ない。出土品は、先の例も含めて、日光男体山から残欠を含め8点出土しており、奈良～平安前期の所産と考えられている。東北地方においては、三鉢鏡とともに五輪野遺跡から鉄製柄香炉（杏葉形飾り金具・蓋は銅製、10世紀後半）（図2—17）1柄が出土している。このほかの例としては管見では不明である。

仏具のなかでも仏教伝来とともにもたらされた古いもので、供養具または僧具の一つに数えられる。柄香炉は、僧の必須道具であり、仏の供養や経典や自らを浄めるために用いる。東大寺二月堂修二会では、鏡とともに法会において用いられている。「大導師柄香炉」と呼ばれ、法会のなかで床を滑らせたり、叩いたりと激しい動作が見られる（註12）。五輪野例については日光男体山例と比べて杏葉形飾り金具の透かし部分などに簡略化がみられ、やや新しいと考えられる。

（2）仏教関連遺構について

東国の奈良～平安期の集落遺跡において小規模の仏堂様建物跡の検出、仏具など仏教遺物の出土がみられる遺跡については、本格的な伽藍を配す寺院に対して一般的に「村落内寺院」と呼称されている。「村落内寺院」の存在については、千葉県下の事例を契機に須田氏により提唱され、その後は関東各地においてもその存在が知られるようになった。また、その性格について須田氏は、以下のような考えを示している。「村落内寺院」にみられる双堂建物跡は、雑密の影響を受けて成立した密教建築であり、そこでの仏教信仰の中心は雑密系の変化観音にあり、農民層の悔過法会が主に行われた施設とする（註13）。時期については、8世紀後半から9世紀後半に盛期があり、10世紀前半まで見られるようである。須田氏は、8世紀中頃には東国の村落においても悔過法会が開始されたとみている。このような「村落内寺院」の検討に従えば、関東を中心とする東国では、8世紀中頃以降には、雑密が一般の集落において浸透していた様子がうかがえる。

東北地方においては南部の福島や宮城に「村落内寺院」に相当する仏教関連遺構が検出されている。「村落内寺院」の拡がりについては、富永氏や沼山氏により、甲信地方や東北地方南部までの遺跡事例が挙げられている。福島県下悪戸遺跡、達中久保遺跡、正直C遺跡、東山田遺跡、宮城県壇の越遺跡などである。仏堂とされる掘立柱建物跡が検出されており、福島県では8世紀末から9世紀代、宮城県では9世紀末から10世紀初め頃とされ、宮城県以北では、関東に比べて時期的に後出するとされる（註14）。

東北部では、岩手県南部の北上盆地周辺で仏教関連遺構が比較的多く検出されている。北上市・南部工業団地内遺跡K区、鬼柳Ⅲ遺跡、岩崎台地遺跡群、北部の岩手町・黄金堂遺跡、どじの沢遺跡、遠野市・高瀬Ⅰ遺跡では、集落のなかに小さな仏堂跡と考えられる遺構が検出されている(註15)。北上市周辺には、胆沢城と関連する定額寺-極楽寺と目される国見山廃寺をはじめとする古代寺院跡が存在し、古代まで遡るものか不明であるが、千手堂や観音館などの地名もみられる。「村落内寺院」に相当する仏教関連遺構は、東北部でも南部まで及んでおり、一般集落まで仏教が普及していた様子が窺われる。鬼柳Ⅲ遺跡などで検出される双堂建物跡は、密教建築と考えられることから密教の修法が行われていた可能性がある。これらの遺跡で検出された遺構の時期については、9世紀後半以降に出現し、10世紀代にわたることされている(註15)。

北緯40°以北の北奥においては、「村落内寺院」に相当するような遺構は見つかっておらず、雑密法具がわずかに出土するのが現状である。

(3) 悔過と観音信仰

純密伝来以前の雑密においては変化観音へんげくわんのんが信仰の中心であった。変化観音への信仰を示すものが悔過会である。悔過会とは、雑密の儀礼であり、信仰する本尊の前で文字通り罪過を悔いることで、その功德によって罪が消え、願いが成就するという経説に基づく法会である。今日も一部の寺院で行われている修正会・修二会がそれに当たる。悔過会の初現は、『日本書紀』にみえる皇極元年(642)蘇我蝦夷発議による雨乞いの悔過とされる。8世紀初頭まで災難除去を祈願する臨時の催しであったように僧侶が共に行っていたことが窺われる。7世紀末から8世紀初頭には、すでに変化観音である十一面観音の造立(法隆寺金堂外陣壁画)や優婆塞や官寺の僧により山林修行の記述がみられる。これらは、雑密經典に基づくものである。8世紀前半には、道慈や玄昉らの帰国によって更なる密教經典が講来された。玄昉は、千手観音を信仰していたとされる。8世紀の中頃には、悔過会の増加・変化観音信仰が普及し、その契機としては、実忠による東大寺二月堂十一面悔過(修二会)の開始や天皇とその看病禪師による変化観音への信仰があったものと考えられる。雑密像の代表例では、東大寺法華堂空窠索観音立像(748年)が挙げられる。8世紀後半になると変化観音造像の本格化もとじようや吉祥天てんの盛行がみられる。吉祥天は、元々インドにおいて吉祥(幸福)を司る女神として信仰されており、『金光明最勝王經』が説く功德は、五穀豊穡である。『続日本紀』神護景雲元年(767年)によると畿内七道の国分寺で吉祥天悔過之法を恒例とする詔を契機として諸国に広まったことが窺える。この背景には、飢饉等の天災を防ぎ、国家の安定を図るといふ国家的な願いがあったものと思われる。9世紀前半には国庁においても吉祥天悔過が行われるようになったことが記録に見られる。8世紀後半は、東国で「村落内寺院」の増加が見られ、これらの仏堂跡が悔過の行われた施設であるとするならば吉祥天などの悔過の広がりとの関連が考えられる。9世紀の初めには、空海の帰国により純密が伝えられ、これ以降雑密から純密への移行していったようである。9世紀の中頃には、悔過の沈滞が見られるとされ、10世紀前半には「村落内寺院」が消滅する。

仏教の法会には、大きく読経会、悔過会、論議会の3つがあるが、そのなかで悔過会は、現世利益的側面が強い法会であり、それは人々にとってわかり易く現実的な願いに答えるものだったため、悔過の広がりやその本尊である薬師如来や吉祥天、変化観音への信仰の広がったことが考えられる。悔

過会については佐藤氏の研究があり、全国で50例あまりの現存例があり、中絶したものを含めると90例あまりになるといふ。薬師・十一面・千手・阿弥陀・吉祥天が多く、薬師・吉祥天・十一面梅過会は南都を中心とする古代文化圏に残されているとする。現存例は、修正会と修二会のみで、法会の形として「二時型」と「六時型」の二形態に分けられ、經典の経説に忠実な後者は南都中心、祈願の部分が強調されて梅過作法の簡略化がみられる前者は南都以外の地域に分布すると指摘している(註16)。東北地方においては、山形県・若松寺(千手観音)、慈恩寺(阿弥陀如来・中絶)、宮城県・陸奥国分寺(吉祥天)、岩手県・毛越寺(阿弥陀如来)、中尊寺(吉祥天)例が挙げられる。

これらの現存する梅過がいつどのような契機で始められたのか不明な部分が多いが、8世紀後半や9世紀前半の国分寺や国庁に対する吉祥梅過之法の詔や会津における徳一の事績などから、その頃には東北南部を中心とする地域まで雑密が伝わっていたことは確実である。時代は下るが、福島県・荒田目条里遺跡^{あつためじょうり}では「千手儀梅過」と書かれた木簡(9~11世紀前葉か)が出土している。沙弥などの修行に関わる記録類と推定されており、実際に梅過が行われていた様子が窺える資料である(註17)。

次に梅過の本尊たる変化観音(十一面・千手など)、薬師如来、吉祥天の造像の様相について検討したい。それらの仏像のすべてが南都を発信源にした雑密の影響において造られたとする根拠はないが、梅過の広がり的一端を窺うことが可能と考えられるからである。また、東北地方は比較的原始・古代からの基層信仰の名残が窺え、仏像においても素朴なものが多く、立木仏や柱清水などのように基層信仰(霊木霊泉信仰)に上手く仏教を取り入れたような古き形を残したものが見られる(註18)。また、比較的古い仏像も各地に残され、古代仏教とその信仰の面影が少なからずうかがわれる。

東北地方に残る梅過に関わりの深い仏像の分布を示したものが図3である。東北地方には、白鳳期前後の小金銅仏が十体前後残されているが、それを除いては平安時代以降の造像になる。奈良時代の8世紀においては、北関東の栃木県中央部では、大谷磨崖仏千手観音菩薩立像に見られるように変化観音の造像がみられる。続く平安初期には、大関観音堂観音菩薩立像、羽下薬師堂薬師如来立像(ともに宇都宮市)の造像がみられる(註19)。同県北西部に位置する日光山は8世紀末に勝道上人によって開山されたと伝えられ、中禅寺には立木観音と称される平安後期の十一面観音立像が残されている。東北南部では、弘仁元年(810)に徳一開基と伝えられる勝常寺^{しょうじょうじ}(福島県・湯川村)・薬師如来坐像、聖観音像、十一面観音立像が平安初期の造像と考えられる。磐梯町・慧日寺や会津坂下町・浄泉寺も徳一開基とされ(伝大同二年開基)、古式三鉈杵(8~9世紀頃)や平安前期の薬師如来座像が伝えられている。これらの仏像は、徳一の活動との関連が強く考えられるものであり、9世紀前半には東北南部の福島あたりまで変化観音等の造像がみられる。薬師如来については、その功徳によって最も人々に受け入れられ広まった仏のひとつに数えられるが、9世紀後半には黒石寺像^{こくせきじ}(貞観四年(862)胎内銘・岩手県水沢市)、10世紀前半には双林寺像(宮城県築館町)など、北東北南部まで造像がみられる。平安後期になると定徳寺(福島県)・中尊寺(岩手県)・立石寺(山形県)に薬師の造像がみられる。

吉祥天は、陸奥国分寺や中尊寺の梅過にみられるが仏像はあまり残されていない。岩手県東和町・成島毘沙門堂の伝吉祥天像は、平安前期(9世紀末~10初)の造像とみられる。このほか平安前期に遡るものはみられない。平安後期になると天台寺(岩手県・浄法寺町)・伝吉祥天像が知られる。8世紀後半から9世紀代にかけて国家的な政策のもと広まったと考えられる程には、その仏像は残さ

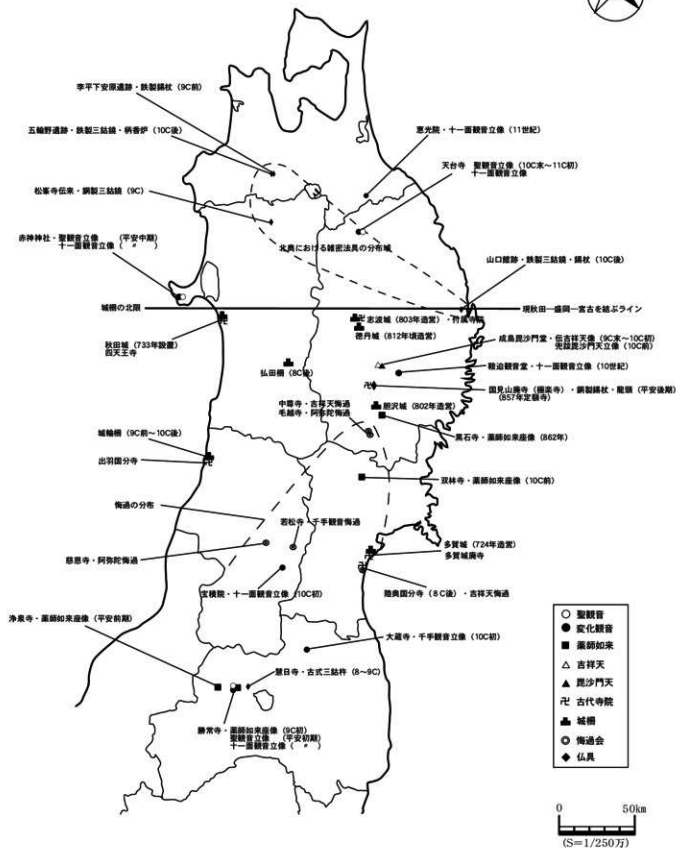


図145 東北地方における主な城柵・寺院の造営と仏像・仏具の分布—平安前・中期—

れていない。しかしながら、仏教で吉祥天が祀とされる毘沙門天（または兜跋毘沙門天）の造像は多い。毘沙門天は、四天王の内、北方を守護する多聞天が独尊となった場合の呼び名であり、兜跋毘沙門天は、毘沙門天から変化したもので夷狄征服の守護神とされる。岩手県東和町・成島毘沙門堂（10世紀前半）、同北上市・立花毘沙門堂（10～11世紀）、天台寺（10世紀末から11世紀初）、平安後期では江刺市・藤里毘沙門堂（愛宕神社）、秋田市・道川神社などの例が挙げられる。佐藤氏は、これらの像について多聞天の北方鎮護の意味合いと兜跋毘沙門天の夷狄征服の目的を兼ね備えたものと推定している。また、東北における兜跋毘沙門天の造像の背景を天台系勢力との関連を想定している（註20）。吉祥天と毘沙門天は、およそ10世紀前半には、北東北南部まで造像がみられる。

さて9世紀前半・東北南部まで見られる変化観音の造像は、10世紀初頭には、大蔵寺（千手・福島市）、宝積院（十一面・山形市）に見られやや北上する。宝積院像は、貞観八年（866）に定額寺に定められた瑜伽寺にあったと伝えられるもので中央で製作されたものと考えられている。ほかに10世紀代と考えられるものは、鞍迫観音堂（岩手県・宮守村）、吉祥院（千手か・山形市）などの十一面観音像で、岩手県南部まで確認できる。平安後期になると十一面観音の造像は多く、明光寺（会津若松市）、松尾院観音堂（山形市）、東楽寺（岩手県玉山村）、凌雲寺（同東和町）、長谷寺（同大船渡市）、秋田県中仙町・小沼神社や水神社（鏡像）等が挙げられる。

北緯40°以北の北奥においては、平安時代の造像は少ないが、そのなかにあつて天台寺の諸像は特異である。聖観音立像は、鉦形像でも初期と考えられ、年代の比定は難しいが、平安時代中期（10世紀末～11世紀初か）と推定されている。十一面観音立像は聖観音像よりもやや新しいと思われるが酷似するものである。北奥にあつてこれらの諸像は、異例の存在であるが、10世紀の終わりに、北奥まで変化観音等の造像が確認できる。

天台寺以北に位置する青森県については、9世紀や10世紀に遡るような変化観音その他の造像は確認できない。しかしながら、かなり古く遡る可能性のある観音信仰の痕跡がいくつか窺える（註21）。例えば、県南部太平洋側では、八戸市是川・清水寺観音堂、階上町赤保内・寺下観音堂が挙げられる。清水寺観音堂は、かつては十一面観音が本尊とされ、慈覚大師や坂上田村麻呂の創建伝承が残る。寺下観音堂は、聖観音を本尊とし、神亀年間あるいは大同年間の創建伝承が残る。津軽では、弘前市十腰内鎮座の巖鬼山神社の社伝では、旧社は、岩木山北麓・巖鬼山西方寺観音院であり8世紀末（796）に遡り、十一面観音が本尊であったという。坂上田村麻呂が再建とも伝えられる。これらは、あくまでも伝承であるが、巖鬼山神社の場合は、岩木山南麓の百沢寺、岩木山神社へと変遷する岩木山信仰にあつて、その始まりが変化観音信仰にあるとすれば興味深い。また、時期はやや下がるが、南部町・恵光院（元長谷寺）には、11世紀代と思われる十一面観音立像が残されている。位置的に天台寺に近いことから関連が考えられる。また、平安時代の修験道場の中心であつたと考えられる阿闍羅山（大鰐町・碓ヶ関村）は、銅製三鈷鏡が出土した松峰寺（秋田県大館市北西）と距離的に近い。松峰寺出土の鏡は、9世紀頃と考えられ、阿闍羅山での修験の開始と雑密とが関連するものであれば、先の岩木山北麓における観音信仰も雑密の伝播として捉えることも可能で、伝承として今日残されている可能性がある。この点については推測の域を出ないため、検討課題としたい。

(4) 北奥における雑密系密教法具出土の意義

鉄製鏡の出土は、現在までのところ北東北に限られている。特に国の直接支配の及ばなかった北奥地域では、これまで仏教関連遺物の出土が少ないこともあって古代における仏教の受容と実体についてあまり議論されてこなかった問題である。近年、古代の祭祀遺物が多数出土した青森市・新田(1)遺跡では、10～11世紀代の清跡から祭祀具とともに木製の仏像や光背などが出土し、古代の祭祀や信仰について注目されている。他の遺跡においても津軽を中心に蓮華文墨書土器(註22)など仏教系の遺物が散見されるところである。まとめとして、北奥における鏡出土の意味について考えてみたい。

鏡の出土は、そのまま解釈すれば、奈良時代に南都を中心に流行し、拡がりをみせた雑密が伝わっていたこととなり、その修法が執り行われていたことになる。そしてその時期は、雑密の盛期を奈良時代後半から平安時代前期とすれば、それからやや遅れ、平安時代中期前半(10世紀後半前後)頃とすることができる。鏡の三鈷形は、極めて形骸化・簡略化しており、銅製に後出する鉄製ということからも時間の経過が認められる。

この点については、時枝氏は、日光男体山例から「8・9世紀の関東地方で流行した後に、東北地方に伝播し、10世紀に北東北で最後の隆盛期を迎えた可能性が高い。」と推定している(註23)。

鏡の出土は、北陸地方と東北地方北部に顕著であり、先に挙げた毎過会の分布、雑密法具の出土、仏教関連遺構の検出、変化観音や薬師信仰による造像等を含めて検討すると南都を発信源とする雑密が東日本に拡がり、その余波としてこのような地域に伝えられた可能性が考えられる。雑密が拡がった背景として考えられるのは、律令国家によって進められた辺境支配・蝦夷支配政策が挙げられる。城柵の造営や郡の設置とそれに伴う移民の影響である。城柵には、付属寺院や律令的な祭祀を執り行う場所が伴うことが知られる。移民は、文献資料のほか、具体的にその事実を示す遺物(東国の人名が書かれた墨書土器など)の出土(註24)も見られる。また城柵造営とともに重要なのが国分寺の建立であり、定額寺の制定である。東国における「村落内寺院」については、国分寺や定額寺などを中心とした布教のネットワークが推定されており、大きな影響が考えられる(註25)。これらの国家的な政策のほか、徳一を始めとする僧侶の活動がある。会津における徳一の子孫には大きなものがある。徳一は、東大寺僧であり、そのような南都僧の布教が東北南部などで認められる。およそ北緯40°以北に当たる北奥は、国の直接支配が及ばない「化外の地」とされるが、雑密においては本州北端まで及んでいたことを鏡の出土は示していると言える。

まとめ

当遺跡出土の鉄製鏡の考察から古代北東北における仏教の浸透を主に雑密との関係で捉えた。しかしながら、県内においては鏡のほか仏教の実体を示す遺物の出土が少ないことから、どのような形で仏教が取り入れられ、どのような儀礼が行われていたのかを推定するには、まだまだ検討の材料が不足している。また、従来言われている北陸地方などからの須恵器・製塩・鉄器製作技術の伝播と仏教伝来についての関連、鉄鏡については、古代における鉄器製作という視点からの考察が必要である。発掘調査によって散見される仏教系遺物、県外の周辺地域を含め、仏像や古代寺院跡などの資料を集め、総合的に検討していくことが必要である。そして、文献にみられる北東北の歴史事象との関連を検討し、位置づけていくことが大きな課題と思われる。

(山田)

- 註1 村上隆ほか 2005 『銅鑄』を用いた古代の鉄接合技術『文化財保存修復学会第27回大会研究発表要旨集』文化財保存修復学会
- 註2 小保内裕之 1999 「2 青森県」『考古学論究』第5号（特集出土仏具の世界）立正大学考古学会
- 註3 青森県教育委員会 1997 『垂柳遺跡・五輪野遺跡』
- 註4 時枝蒔 2002 「平安時代前期における山岳宗教の動向—三結鏡を手がかりに—」『山岳修験』第29号 日本山岳修験学会
- 註5 下山信昭 1996 「東北地方における土鈴集成」『研究紀要』第1号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 註6・註7 註4文献
- 註8 菅谷文則 2000 「山林仏教の密教世界」『日本密教』所収 春秋社
- 註9 内藤榮 2005 「古密教展概説」『古密教』図録 奈良国立博物館
- 註10 註9文献
- 註11 群馬県立博物館 2004 『群馬発掘情報』新発見考古速報展図録
- 註12 奈良国立博物館 2000 『東大寺二月堂とお水取り』図録
- 註13 須田勉 2005 「村落寺院の構造とその信仰」『古代の信仰を考える』第71回日本考古学協会総会国土館大実学実行委員会
- 註14 富永樹之 1994・1995・1996 「村落内寺院」の展開（上）（中）（下）『神奈川考古』第30・31・32号 神奈川考古同人会
沼田源高治 1999・2002 「北上盆地の古代集落における仏神信仰（Ⅰ）（Ⅱ）」『紀要』第1・2号 北上市埋蔵文化財センター
- 註15 註14 沼田文献
- 註16 佐藤道子 1999 「儀礼にみる日本の仏教」『国宝と歴史の旅 仏堂の空間と儀式』朝日新聞社
2001 「法会のかたち」『儀礼にみる日本の仏教』法蔵館
- 註17 いわき市教育委員会 2001 『荒田目条里遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第75冊
- 註18 大矢氏は、天台寺の本尊「桂泉観音」を例にとって、東北各地にみられる雲木雲泉信仰「桂清水」などの基層信仰が型によって観音信仰など仏教に置き換えられたとする。（1999「仏像からみた東北仏教の受容と変容」『東北の交流史』）
- 註19 北口英雄 1998 「栃木県の仏像」『栃木県の仏像』栃木県立博物館
- 註20 佐藤昭夫 1984 『みちのくの仏像』日本の美術221
- 註21 青森県高等学校地方史研究会編 1996 『青森県の歴史散歩』山川出版社
- 註22 青森県教育委員会 2005 『高屋敷館Ⅲ遺跡』
- 註23 註4文献
- 註24 胆沢城出土の9世紀前半の土器には、「上毛野朝臣廣世」と記されている。東国や北陸からの移住が考えられている。
- 註25 笹生衛 2002 「東国古代集落内の仏教信仰と神祇信仰」『祭祀考古学』第3号 祭祀考古学会

掲載図文献

- 1 青森県教育委員会 1997 『垂柳遺跡・五輪野遺跡』
- 2 桜井清彦・菊池徹夫編 1987 『蓬田大館遺跡』早稲田大学文学部考古学研究室報告
- 3 青森県教育委員会 1980 『碓ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書』
- 4 青森県教育委員会 1978 『黒石市高館遺跡発掘調査報告書』
- 5 青森県教育委員会 1980 『大鰐町砂沢平遺跡』

発掘調査報告書

- 青森県教育委員会 1987 『李平下安原遺跡』
- 日光二荒山神社編 1963 『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 北上市教育委員会 1972 『北上市極楽寺跡』
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『山口館跡発掘調査報告書』
- いわき市教育委員会 2001 『荒田目条里遺跡』

主要参考文献

- 立川武蔵・頼富本宏編 2000 『日本密教』春秋社
- 奈良国立博物館 2005 『特別展 古密教 日本密教の胎動』図録
- 奈良女子大学古代学学術研究センター設立準備室編 2001 『儀礼にみる日本の仏教』法蔵館
- 坂詰秀一編 2003 『仏教考古学事典』雄山閣
- 石田茂作監修 1984 『新版仏教考古学講座』第5巻仏具 雄山閣
- 蔵田蔵編 1967 『仏具』日本の美術16 至文堂
- 鈴木規夫 1989 『供養具と僧具』283 至文堂
- 立正大学考古学会 1999 『考古学論究』第5号(特集出土仏具の世界)
- 第71回日本考古学協会総会国史館大学実行委員会 2005 『古代の信仰を考える』
- 石川考古学研究会 1997 『祭祀具』石川県考古資料調査・集成事業報告書
- 佐藤昭夫 1984 『みちのくの仏像』日本の美術221 至文堂
- 東北歴史博物館 1999 『祈りのかたち 東北地方の仏像』
- 大矢邦宣 1999 「仏像からみた東北仏教の受容と変容」『東北の交流史』無明舎出版
- 岩手日報社 2001 『いわて未来への遺産 古代・中世を歩く 奈良～安土桃山時代』
- 小嶋芳孝 2004 「錫杖状鉄製品と蝦夷の宗教」『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター
- 高杉博章 2004 「神仏を祀る古代津軽のムラ」『時空をこえた対話』
- 村上隆 2003 『金工技術』日本の美術443 至文堂

4. 野尻(3)遺跡出土の刀装具について

はじめに

今回の発掘調査では、住居跡をはじめとする平安時代の多くの遺構を検出し、多数の遺物が出土した。このなかでも、第3号円形周溝から出土した刀装具1点は、県内や東日本においても類例が少ない資料であることから、一項を設けて考察するものとする。

出土刀装具について

(1) 出土状況

調査区のほぼ中央に位置する第3号円形周溝の遺構確認面から出土した。遺構の南西、第20号住居跡との重複部分に当たる。遺構確認作業中にみづかり、周囲からは、これに関連すると思われる遺物の出土はなく、単独の出土である。出土地点から、遺物の所属について問題となるが、第3号円形周溝は、第20号住居跡を壊す形で構築されていること、出土地点の高さが周溝覆土上面であることを踏まえると、本遺構に伴う可能性が高い。遺構周囲における古代以外の遺構の重複、攪乱等がみられないことから、後世の遺物混入の可能性は低い状況である。

本遺構の周溝覆土中位に白頭山苦小牧火山灰と推定される火山灰の自然堆積がみられることから、遺構の年代は少なくとも火山灰降下以前である。周溝覆土上面からの出土は、周溝内側に存在したと推定される主体部あるいは盛土から落下した可能性がある。

(2) 観察(図146-1)

大きさは、縦4.3、横4.2、側面幅1.6cm、厚さは、最も厚い先端部中央で5mm、ほかは2mmほどである。重さは、約40gである。形態は、縦と横が、ほぼ同じであり、隅丸の正方形に近い形である。上部に向かうにしたがって僅かに幅が狭くなり、栗頭のように中央先端部がやや突出する。両面ともに蝶が羽を広げたような形をした透かしとその下に手貫緒(てぬきのお)用と思われる径約7mmの円形の穴が開いている(註1)。この透かしは、高松塚古墳出土遺物や正倉院御物などに辿ることが可能な唐様大刀の系譜にある柄頭に手貫緒金具が一体になった結果と言える。手貫緒金具は、六葉の花文(蓮花文か)を表している。また、柄頭を上から見ると側面の幅が異なっており、一方が幅広に作られている。幅広の方が棟側、狭い方が刃側に対応するものとするが、本来的には柄を握るための工夫により幅が異なるものと考えられる(註2)。上部の両隅には、細い刻みが両面にかけて施されている。出土資料は、比較的大型で手貫緒孔を有しており、一般的に柄頭金具は鞘尻金具よりも大きいことを考え合わせると柄頭金具と判断できる。

材質は、肉眼観察では、全体が緑青で覆われており、銅製とわかる。色調は、緑灰または暗緑灰色を呈する。村上氏の分析によって(銅-鉛-ヒ素)系合金との結果を得た。

(3) 製作技法について

肉眼による観察では、鍛造か鋳造か不明であったが、村上氏の顕微鏡による詳細な観察から鋳造製であることが判明した。

考察

(1) 類例(出土資料と伝世資料)

出土資料の形態的な特徴を踏まえた上で、類似する資料との比較検討を行う。今日、目にすることのできる刀の資料は、発掘調査で出土した考古資料と寺社などに伝わる伝世資料に大きく分けられるが、当遺跡出土の類似資料—手貫緒穴金具と柄頭金具本体が一体となった柄頭(以下一体型柄頭)は、大きく分けると北海道を除く東日本の出土遺物、北海道近世アイヌ墓出土遺物、主に近畿地方の神社に伝わる宝物(伝世品)となる。刀に関する出土資料は、古墳出土の刀剣類を除けば、拵えの一部など部分的な出土が多いと言える。一方、伝世品は慶長以前の古刀の内、平安以前についてはわずかな数しか知られておらず、鎌倉になってやや増える程度である。拵えを含め刀剣資料は、各地に残されているが、本遺跡出土品に類似する資料は少ない。

A 出土資料 一体型柄頭の類例は、図1・表1のとおりである。やや形態の異なるものも含まれるが管見では13例で、北海道近世アイヌ墓出土のものを除くと9例である。分布は、北海道4例、青森県1例、秋田2例などすべて東日本からの出土で、4点が鉄製のほか銅製である。

2は、本遺跡のものより小さく、横長の形態を呈す。3は、片方のみが本体と一体で左右非対称であり、柄反に合わせたような形態となっている。10世紀初頭を下限とする年代が与えられており、一体型の起源に位置づけられている(註3)。4は、大きさや形態ともに当遺跡出土のものに最も近い形態である。やや頭部に丸みを持ち、切り込みは見られない。出土した住居の年代観は、9世紀第四半期から10世紀第一四半期である。

5は、他の出土遺物から中世の所産と思われる、やや小さめで柄尻と考えられる。大きく歪んでおり柄反の進んだ形態である。6は、やや縦長であり、上部はやや突出する。透かし部分や手貫緒部分の形は明確でない。7は、鉄製でやや縦に長く細い作りになっている。8は、唐草文様を毛彫りで表現した珍しいものであるが、縦にやや長く左右非対称で柄反に合わせた形態である。9と10は、鉄製で手貫緒金具あるいは目貫の部分を一方向の覆輪に被せることによって創出している。ともに縦に長い形態である。

B 近世アイヌ墓等出土資料 12・13は、近世アイヌ墓に副葬されたものであり、蝦夷刀と言われる儀礼用の太刀と考えられている。形態的には、本遺跡資料に類似するが、出土遺構の年代に大きな隔りがあり、現時点では分けて考える必要がある。この種の太刀は、長期間の伝世も考えられることなどから、現状では編年研究の限界が言われている(註4)。しかしながら、近世アイヌ墓出土の太刀の拵えのなかには、中世に遡る資料も出土しており、この種の一体型柄頭においても時期的に遡る可能性も残される(註5)。現段階では、Ta-a層(1739年上限)などの複数の降下火山灰から、17世紀から18世紀までの各年代が与えられている。4点とも隅丸の方形を呈し、幅もほぼ均一なものである。14は、丸みもなく他に比べて縦に長い形態である。このほかにオサツ1遺跡にも類例がみられる。

C 伝世資料 一体型の柄頭金具は、主に神社に奉納された太刀にみられる。分布は、旧所在地を含めると近畿地方を中心に西日本に多い。ここでは15例を挙げた(表2)。このなかでも鎌倉時代に盛行した兵庫鎖太刀は8例で、この太刀様式と一体型の柄頭との関係が強いことがわかる。重要資料であるためその全てを実際に目にし、手に取ることが困難であるため、実現することができた伝世資料①

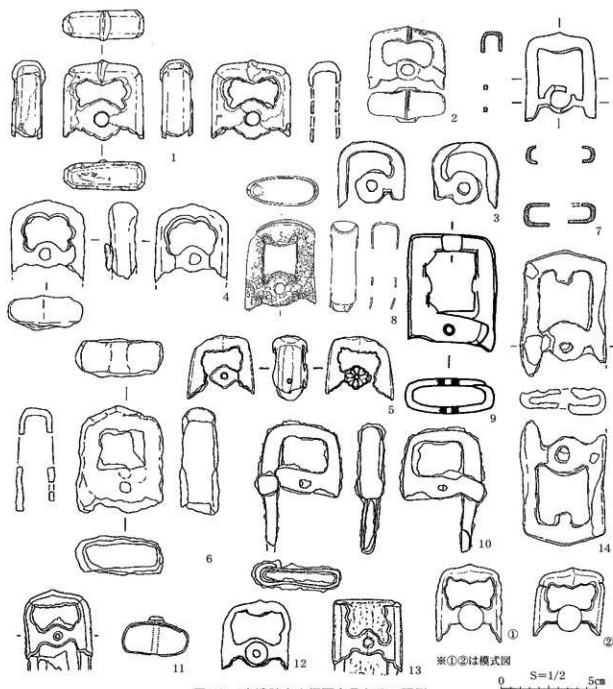


図146 本遺跡出土柄頭金具とその類例

表1 本体と手貫鍔孔金具が一体になった柄頭金具(青銅)出土資料一覧

図番号	出土遺跡	出土遺構・出土層位	大きさ(縦×横×厚)cm・重g	材質	年代	文献
1	本遺跡	第3号円形銅溝溝底面	4.3・4.2・1.6・40	銅	平安時代(9C後半~10C前半)	—
2	日光男山山頂遺跡(栃木県)	1トレンチ	3.4・4.1・1.8・—	銅	—	1
3	私田遺跡(秋田県)	SX909出土遺構長化物層中	3.5・3.4・1.3・—	銅	平安時代(10C初頃小)	2
4	奥谷遺跡(茨城県)	第41号住居跡礎土中層	4.1・3.9・1.9・17.2	青銅	平安時代(9C第4四半期~10C第1四半期)	3
5	高瀬野遺跡(秋田県)	SK01	3.4・3.5・1.8・—	銅	中世(鎌倉後期小)	4
6	岩ノ沢平遺跡(青森県)	B区第72号住居跡礎土	3.6・4.5・2.0・—	鉄	平安時代(9C後半~10C前半)	5
7	武蔵国府(東京都)	M-50-S98	4.8・3.8・1.2・—	鉄	平安時代(9世紀中頃)	6
8	前田遺跡(長野県)	遺構外(き-11グリッド)	4.8・3.7・1.5・—	銅	—	7
9	南宮遺跡(長野県)	KSR12(住居跡)	—	鉄	平安時代(10世紀中頃)	8
10	多平下安原遺跡(青森県)	第20号住居床面	7.1・4.8・1.2・21.7	鉄	平安時代(9世紀後半小)	9
11	湯久第2チャル跡遺跡(北海道)	遺構外(丸-18区遺跡)	3.6・3.5・1.0・—	銅	近世(1739年以降)	10
12	有珠オヤコツ遺跡(北海道)	1号配石基	2.6・2.7・1.8・—	銅小	近世(1663年以降)	11
13	入舟遺跡(北海道)	GP-13	3.6・3.6・2.0・—	—	近世(18世紀前後小)	12
14	オサツ2遺跡(北海道)	土坑IP35	6.6・4.5・1.4・—	—	—	13

と②(図146①・②)を奉納太刀の典型例として比較を行う。伝世資料は、形態的に類似するが、異なる点も多い。まず、大きさは当遺跡のものより小さく、幅としては、7～8mmの違いであるが、全体として見るとより小型の印象を受ける。一方、厚さは、大きさに対して厚く重厚感がある。材質は、銀地(鍍金)である。実戦用ではなく奉納太刀だけに多くの装飾が施されている。一方、共通する部分は、一体型の形態であり、柄の反りに合わせる形でやや歪み、側面幅も刀の棟側が厚くなっていることである。これら伝世資料の個々の特徴は、奉納太刀としての特殊性にあり、美術的価値の高い優品として、多くが国宝・重文などの文化財指定を受ける。その意味で出土資料との単純な比較はできないものと考えられるが、刀装の変遷過程において時代の特徴を表す資料として参考となるものである。これらの伝世資料の性格と年代については、皇族や将軍家、あるいは有力氏族が武運長久を祈願したり、またその信仰として寺社へ奉納・寄進された太刀であり、平安時代末の12世紀末から南北朝・室町時代の14～15世紀にかけてみられ、その盛期は鎌倉時代の13世紀と考えられる。大山祇神社は山や川、戦いの神として尊崇を集めたが、三島大社との関係も深いとされ、両社への信仰が窺われる。

(2) 位置づけ

A 一体型柄頭の年代

当遺跡出土資料は、周溝遺土に白頭山苦小牧火山灰が自然堆積することから、少なくとも降下年代である西暦936年頃よりも遡る。当遺跡の北隣に位置する野尻(2)遺跡は、円形周溝を主体とする遺跡であり、これらの円形周溝の分布から同一の遺跡として考えられる。野尻(2)遺跡の円形周溝の一部は9世紀前半の住居跡よりも新しいことが発掘調査で確かめられていることから、年代の上限は、この時期に求められる。ただ、円形周溝同士の重複による時期差や、南に向かって時期的に変遷する傾向を考慮すると本遺跡については、9世紀後半から10世紀前半の年代が推定できる。

他の類似する出土資料については、年代にばらつきがあり、遺構外からの出土など、年代決定を難しくしている。北海道出土の4点は、近世の遺構出土であり、現時点では分けて考える必要がある。日光男体山山頂遺跡出土の2は、竹節の意匠を施した優品であるが報告書のなかでは時期についての記述はない。形は、細工が細かく、凹凸があり、縦に対して横幅が広い点など比較的古手の様相を呈すが、ほかに類するものがみられない。また同遺跡Cトレンチからは、8世紀に遡るような銅製鍍金

表2 本体と手貫鍍金具が一体になった柄頭金具(青金) 伝世資料一覽

番号	資料名称	所蔵	表題・旧所蔵	大きさ(長さ×幅×厚さmm)	材質	年代	備考
①	反懸地野島文刀庫銀太刀	東京国立博物館	上杉氏により三島大社に奉納	105.4・22.3・83.7	銀地鍍金	鎌倉(13世紀)	国宝
②	三輪紋刀庫銀太刀	東京国立博物館	北条氏により三島大社に奉納	104.1・20.7・83.9	銀地	鎌倉(13世紀)	重文
③	桜花文刀庫銀太刀	東京国立博物館	徳川斉昭所蔵	112・25・86.8	銀地鍍金	江戸(19世紀)	
④	龍形文鍍金長巻輪太刀	東京国立博物館	高野山天野社(丹生郡北沢神社)伝来	96.1・20.4・76.2	銀地鍍金	南北朝・室町(14～15世紀)	
⑤	加藤沈金長巻輪太刀	個人蔵	高野山天野社(丹生郡北沢神社)伝来	93.0・---・---		室町(14～15世紀)	重文
⑥	筆字輪刀庫銀太刀	和歌山県・丹生郡北沢神社		101.0・---・---	鍍金	鎌倉(13世紀)	国宝
⑦	龍馬刀(龍馬毛抜形太刀、反側刃)	東京国立博物館	手向山八幡宮	84.6・16.8・67.2		室町～江戸(15～18世紀)	
⑧	龍馬刀(龍馬毛抜形太刀、両側刃)	東京国立博物館	春日岩宮八幡宮			室町～江戸(15～18世紀)	
⑨	牡丹文刀庫銀太刀	広島県・鞆島神社	将軍家奉納	82.3・17.4・65.0	鍍金	鎌倉(13～14世紀)	重文
⑩	牡丹文刀庫銀太刀	広島県・鞆島神社	将軍家奉納	93.5・---・---	鍍金	鎌倉(13～14世紀)	重文
⑪	花輪懸葉平文刀庫銀太刀(二口)	奈良県・春日大社		95.4・---・---	銀地鍍金	鎌倉(13世紀)	国宝
⑫	牡丹唐文刀庫銀太刀	愛媛県・大山祇神社	伝徳貞義奉納	105.0・---・---		14世紀	国宝
⑬	唐文	愛媛県・大山祇神社				13世紀	
⑭	加藤小太刀銘「有文」	和歌山県・高野山十智十智神社	伝藤原清衡寄進		金銅	平安時代末期(12世紀)	重文
⑮	鶴丸文刀庫銀太刀	愛知県・熱田神社		36.3・---・---	金銅	永仁七年(1299) 個人	重文

大きさは、基本的に報告書の記述を記すが、記述のないものについては実測値を計測した。伝世資料表中の「大きさ」は、太刀全体の大きさを示す。材質は、青金のみを記す。

の鞘尻金物が出土しており、かなり古い時期のものも含まれていると考えられる。時的的に古いものとすれば一体型柄頭の初現となる可能性がある。払田柵跡出土の3は、10世紀初頭を下限とする年代が与えられているが、形態的にはやや異なるものである。奥谷遺跡出土の4は、形態的に最も類似するもので、出土住居の年代観は、9世紀第4四半期から10世紀第1四半期である。岩ノ沢平遺跡出土の6は、覆土中位に堆積する白頭山火山灰、出土遺物から住居の年代観は9世紀後半から10世紀前半である。

一体型の柄頭は、他の出土例から、おおよそ10世紀前半頃にみられ、当遺跡出土の年代観と、形態的に類似する奥谷遺跡例とは矛盾ないものと思われる。ただ、本遺跡、岩ノ沢平遺跡、奥谷遺跡は、出土遺構や出土遺物の年代、また柄頭自体の製作と廃棄の時期差を考慮に入れるならば、9世紀後半に遡る可能性も考えられる。

一方、奉納太刀にみられる一体型柄頭の年代は、一番古いもので和歌山県・滝尻王子宮十郷神社に伝わる平安末期のものである。しかしながら、内8例が13～14世紀の鎌倉時代に位置づけられるもので、盛期は、この時期にある。一部、近世にもみられるがこれらは古式に倣ったものと考えられる。

このように出土資料と奉納太刀との間には、2～300年間の隔りがあり、両者の間に系統的な繋がりがあがるものか不明であるが、9世紀後半から10世紀前半頃、この種の柄頭が出現し、その後、12世紀末から13・14世紀の奉納太刀（兵庫鎮太刀）の柄頭として採用され、流行したとみられる。

B 一体型柄頭の系譜と変化

次に形態的な位置づけを行うために、その変化過程について考えてみたい。ここに示した一体型柄頭の多くが、形態的特徴から、唐様大刀（註6）にみられる心葉形柄頭の系譜にある資料と思われる。この心葉形柄頭は、7世紀後半から8世紀にかけての高松塚古墳出土品や正倉院などのものが初現として知られている。当遺跡出土資料で言えば、柄頭先端の栗頭状の鎧筋や肩部にみられる切り込み、また内側の透かし部分の突起は、初期の形態を踏襲するものとして理解できる。柄頭先端の鎧筋については、同時代の覆輪状柄頭においても見られる要素である。切り込みについては、覆輪状柄頭には見られず、心葉形の柄頭の特徴として挙げられる。初現期の心葉形柄頭の特徴は、鎧筋を立てたり、花文を表現したと思われる内外面の突起によって変化に富む形であること、全体に丸みを帯びること、先端に向かって進減する点などであるが、一体型柄頭においては、丸みは失われ、方形を呈すようになり、進減が顕著でなくなること、全体形が縦長になるものの出現などの変化が捉えられる。一体型の大きな特徴である手貫結金具と本体との一体化であるが、心葉形の初期のものにはみられず、9世紀後半から10世紀前半段階で一体化が図られたものと思われる。一体化に至る過程は不明であるが、その原因が単なる流行によるものか、あるいは刀の形態や機能面に関わる変化なのかを検討する必要がある。また、一体型にみられる丸みが失われる点や縦長になるものの出現は、覆輪状柄頭の影響とみることもでき、心葉形柄頭に覆輪状柄頭の要素が加わって変化した可能性も考えられる。一体型柄頭の出土資料については、東日本に分布の中心があり、時的的にも奉納太刀や近世アイヌ墓出土遺物に先行する。湾刀への過渡期に現れる毛抜形太刀は、一般的に東北から北海道にかけて分布する蔵手刀から変化したものと理解されており、東日本において創始された太刀様式と考えられる。一体型柄頭においても、畿内を発信地とする唐様大刀の心葉形柄頭の影響を受け、変化の過程で創始されたものと現時点では理解できなくもない。ただ、この種の柄頭が材料を含めて何処でどのように製作され

たかを考えていかななくてはならない。

C 性格

出土資料14例の出土状況は、住居跡5・遺構外2・土坑2であるが、そのほかは墓や信仰遺跡、焼土遺構炭化物中など特殊な遺構から出土している。しかしながら、類例が少ないことから傾向を示す状況にないと考えられる。当遺跡の出土状況については、先に述べた通りであるが、平安時代の墓と考えられる円形周溝からの出土であり、副葬品の可能性がある。近世アイヌ墓出土資料は、儀礼用の太刀と考えられるが、北海道では中世の奉納太刀に類似する刀装も少ないながら出土しており、奉納太刀の影響も窺われるところである。当遺跡出土資料は、東日本から出土する一群に時期的にも形態的にも含めてよいと考えられるが、この種の柄頭金具を具す太刀が、実戦に用いるための太刀であるのか、儀礼的な太刀であるのか今後検討が必要な点である。

まとめ

本遺跡出土の柄頭金具について類例を集め、その位置づけを試みた。これらの類似資料を集めた結果、東日本の出土資料、近畿から西日本を中心とする神社伝世資料、北海道近世アイヌ墓等の出土資料に一体型金具がみられ、それらの検討と出土遺構の年代観から、本遺跡例を、およそ9世紀後半から10世紀前半に位置づけた。しかしながら、すべての類例を合わせても30例たらずであり、出土資料においては、出土状況の詳細や個々の年代についても明確に位置づけられているものも少ないのが現状である。また、材質や製作技法についての分析は、これまであまりなされて来なかったと指摘できる。このような製作面の分析については、銅の産出地や製品の製作地に関わる問題であり、北日本における非鉄金属製品の位置づけを行うためのひとつの方法と考えられる。その意味からも遺物の年代的な位置づけに止まることなく、どのように製作され、あるいはもたらされたものかなど、出土の意味づけを行うことが大きな課題である。北海道においては、近世アイヌ墓出土のなかに類似資料がみられるが、兵庫鎖太刀の拵えと思われる足金物等も少量出土しており、奉納太刀が所在する近畿・西日本、出土資料がみられる東日本とどのような関係のもとにもたらされたものか今後も検討する必要がある。

末筆ながら、出土資料の位置づけや類例について、以下の多くの研究者のご教示を受けた。ここに記して感謝申し上げたい。

(山田)

池田宏(東京国立博物館)、岡安光彦、鈴木信(北海道埋蔵文化財センター)、瀧瀬芳之(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)、津野仁(栃木県埋蔵文化財センター)、橋本達也(鹿児島大学総合研究博物館)、村上隆(奈良文化財研究所)、森秀之(恵庭市教育委員会)(敬称略)

註1 津野氏の柄頭分類によるとこの種の穴を目貫としている。当遺跡出土資料においても目貫の可能性はあるが、断定できないため手貫緒金具を取り付けるための穴とした。(津野に2005「毛抜形太刀の系譜」国学院大学考古学資料館紀要第21輯)

註2 側面幅の違いは、直接的には柄の握り幅で説明すべきとの橋本達也氏ご教示による。

註3 註1文献

註4 蝦夷刀の編年研究の限界について森氏は、「蝦夷刀の様式が日本刀や刀装具の工芸史上の時代区分を直には適用できない特殊な様相を示していること、年代の決定できる共伴例、層位例が少ないこと、比較的長期間の伝世が想定しうることなどの資料の特性・制約に起因していると思われる。」とする。(森秀之1998「近世アイヌ墓出土太刀について」『カリンバ2 遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点』恵庭市教育委員会)

- 註5 余市町大浜中遺跡出土の足金物や兵庫額などは中世に遡る資料であり、奉納太刀との類似がみられる。また、近世アイヌ墓出土太刀は、比較的古い形態を残している傾向があるとの鈴木信氏からご教示をいただいた。
- 註6 「唐様大刀」の定義については、「唐大刀」の模倣とするものや唐様に和様を加わったとするものなどの見解があるが、「山形金や唐鐔の付く大刀」として広義に捉える津野氏に倣った。(津野仁2003「唐様大刀の展開」(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター研究紀要第11号)

資料掲載文献

- 1 日光二荒山神社 1963 『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 2 秋田県教育委員会 1991 『払田柵跡—第84～87次調査概要—』
秋田県文化財調査報告書第216集
- 3 財団法人茨城県教育財団 1989 『一般国道6号線改築工事地内埋蔵文化財調査報告書
奥谷遺跡 小鶴遺跡(上)(下)』茨城教育財団文化財調査報告書第50集
- 4 秋田県教育委員会 1987 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—
高瀬館跡—』秋田県文化財調査報告書第153集
- 5 青森県教育委員会 2000 『岩ノ沢平遺跡』
- 6 府中市教育委員会 2001 『武蔵国府の調査』18—昭和58年度府中市内調査概報
- 7 佐久市教育委員会 1989 『前田遺跡(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)』
- 8 長野市教育委員会 2002 『南宮遺跡Ⅱ』
- 9 青森県教育委員会 1987 『李平下安原遺跡』
- 10 北海道教育委員会 1975 『遠矢第2チャシ跡遺跡調査報告書』
- 11 伊達市教育委員会 1993 『有珠オヤコツ遺跡・ボンマ遺跡』
- 12 余市町教育委員会 1999 『入舟遺跡における考古学的調査』
- 13 千歳市教育委員会 2002 『ユカンボンシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』
千歳市文化財調査報告書X X V I

参考文献

- 梶原皇刀軒 1989 『図説日本刀用語辞典』
- 正倉院事務所編 1977 『正倉院の大刀外装』小学館
- 東京国立博物館 1997 『日本のかたな』特別展図録
- 東京国立博物館 1997 『東京国立博物館図版目録 刀装篇』
- 財団法人佐川美術館 2004 『国宝中尊寺展』図録
- 加島進編 1971 『刀装具』日本の美術64 至文堂
- 小笠原信夫 1994 『日本刀の掬』日本の美術332 至文堂
- 津野仁 2003 「唐様大刀の展開」『研究紀要』第11号
財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- ニューサイエンス社 2005 『特集律令期の刀剣から日本刀成立への道程』
考古学ジャーナル№532
- 八木光則 2005 「阿光坊古墳群と蝦夷の交流」『阿光坊古墳群シンポジウム資料集』

5. 土製品 (図17・21・26・30・119・125)

遺構内・遺構外から総計18点が出土している。内訳は土玉が11点、土鈴の紐部と思われる棒状の土製品が4点、用途不明の棒状土製品・円盤状土製品がそれぞれ1点、その他1点である。

1. 土玉：1点(図21-21土3)を除いて全てが穿孔されている。また、大部分が球状をしているが、土7・8(図30-10・11)の2点が孔の周辺を平らに整形した俵型(土5もその可能性がある)、土11(図21-17)の1点が勾玉型である。また黒色処理されているものも数点ある。大きさは大体直径15mm前後だが、土6だけは8mmと小さくなっている。作りはおおむね丁寧である。

11点中5点が第4号竪穴住居跡のカマドから出土している。4点が球状、1点が勾玉型である。野尻(4)遺跡(青埋文第186集)第19号竪穴住居跡カマドからは、紐を通された状態を想起させる状況で勾玉型・俵型・球状の土玉が出土し、カマド祭祀との関係が考えられているが、第4号竪穴住居跡カマド出土の土玉もそのような面を持っていたのかもしれない。

2. 土鈴：4点の内2点(土12・21)が第3号竪穴住居跡の覆土中からの出土であるほかは、遺構外からの出土である。いずれも土鈴の紐部破片と思われる。形状は棒状で、穿孔の有るものと無いものがある。穿孔は全て横方向である。また、上端が平らに整形されているものがある。土12(図17-74)・土15(図125-56)・土21(図17-75)には、2～3本の粘土をあわせて紐部を作ったらしい痕跡が割れ口に見られる。土15には背面に粘土のヒモとヒモとの接合面らしき箇所が見られる。これまで浪岡及び近隣の五所川原・青森から発見された土鈴を見ると、紐部の長いものには穿孔しない傾向が見られる。紐部の短いものについては、今回の報告分でそうと言えるものが土21しかない(しかも穿孔も貫通していない)が、近隣の遺跡出土のものを見ると紐部の短いものには穿孔される場合がやや多いようである。紐部の長いタイプはそれを柄として手で持って降り鳴らす、紐部の短いタイプは穿孔しヒモを通して持って降り鳴らすなど、使用方法の違いによるものかと思うが想像の域を出るものではないし、2種類の形状が必要である理由も不明である。

3. その他：用途不明の棒状土製品・円盤状土製品がそれぞれ1点ずつ出土した。この内、棒状土製品とした土13(図26-9)は第6号竪穴住居跡からの出土である。土鈴の紐部とも考えたが、表面・上端の仕上がりが土鈴紐部とした他の土製品に比べやや雑であるところから、一応土鈴からは除外した。円盤状土製品とした土19(図119-6)は扁平な円形の粘土塊で、一方の側面がくぼんでいる。表面には指による庄痕やナデの痕が残る。また、第3号竪穴住居跡出土の土20(図17-76)は器種不明とした。土器の把手と思われるが、土11と似た調整痕を残すため、土製勾玉の破損品の可能性もある。
(佐藤 純子)

6. 石器・石製品 (図98・116・126)

遺構内・遺構外から総計29点が出土している。内訳は縄文時代の剥片石器5点、砥石19点(平安時代と思われるものと時期不明のもの)、基石と思われる石が5点である。

1. 剥片石器：石鏃3点、石匙1点、二次加工剥片1点で、すべて遺構外からの出土である。石鏃3

点の内、石21（図126-63）・石25（図98-6）が有茎、石24（図126-64）が無茎である。石25はやや肉厚で断面も丸みを帯びている。石22（図126-65）の石匙は横長の剥片を素材とし、刃部部分が折損している。つまみの挟りの片側が加工されていない未製品である。石23（図126-66）の二次加工剥片は両側縁を刃部加工している。加工途中で上端が折損、加工を中止したと思われる。全て珪質頁岩を使用している。

2. 砥石：遺構内から8点、遺構外から11点出土している。石1～7、26・28・29は形状から平安時代と思われる。残りの時期は不明である。最も多く使用されるのは細粒凝灰岩（10点）、次いで流紋岩（4点）を使用している。形状は断面が扁平な板状になるものと、扁平な球状になるものがある。板状のものは正・背面と側面全てが使用されるものが多い。球状のものは全面が使用されたものと平たい面のみ・側面のみなどの部分的な使用のものがある。石4（図126-69）は正背面と両側面に加え下端の一面も使用されている。石11（図116-53）は側縁が刃状に加工されている。石29（図126-71）はジャガイモのような形の石のほぼ全面に擦痕が見られるが、特に側面は使用に伴い平坦面ができ、大きな使用痕が残る。

3. 碁石と思われる石：竪穴住居跡と溝跡からの出土である。5点中3点は第22号竪穴住居跡からの出土である。5点とも黒色の頁岩を使用し、形状は扁平な円形か楕円形を呈する。5点とも、形状による違いはあるが、大きさにそれほど差はない。

（佐藤）

7. 鉄製品（図8・17・80）

図示できた鉄製品は5点と比較的少なかった。遺物はいずれも遺構内からの出土で、残存状態は1点を除いて概ね良好である。

（図8-12）は第2号竪穴住居跡の床面から出土した鎌の略完形品で、基部の返しの形状から左利き用と思われる。先端部をわずかに欠失する。

（図17-77）も鎌の略完形品で、第3号竪穴住居跡の堆積土中から出土している。基部の返しの形状から右利き用と思われ、第2号竪穴住居跡から出土したものより一回り大きめに造られている。

（図17-78）は刀子の略完形品で、切っ先及び基部端が欠失している。細身の直線的な形状で、刃部から基部まで一様に峰及び刃部が形成されている。第3号竪穴住居跡内の1号土坑底面から出土している。

（図80-20）は鉄製の紡錘車で、軸棒の断面は四角を呈している。第4号円形周溝の周溝内堆積土中、白頭山火山灰層の直下からの出土である。

8. 古銭（図125）

遺構外から3点が出土した。全て寛永通宝で無背。古銭1（図125-61）・古銭3（図125-62）が新寛永、古銭2（図125-60）が古寛永である。

（佐藤）

第6章 まとめ

遺跡の位置と立地

野尻(3)遺跡は、青森市浪岡の北部を南流する大釈迦川の右岸、標高41m前後の比較的傾斜の緩やかな河岸段丘上に立地している。本遺跡の南北には東西に走る小さな沢があり、北側には野尻(2)遺跡、南側には高屋敷館遺跡が位置している。本遺跡は前述の通り平成6年度に国道7号浪岡バイパス建設に先立って、当初ルート上に係る発掘調査が終了している。今回は高屋敷館遺跡の保存に伴う迂回ルート部分の発掘調査である。

検出遺構と出土遺物

今回の迂回ルートに伴う調査区からは縄文時代の遺構や遺物の他、平安時代の遺構や遺物が多数発見されている。

検出された遺構は縄文時代の落とし穴と考えられる溝状土坑が5基、平安時代の竪穴住居跡が27軒、お墓と考えられる円形周溝が11基、土坑33基、溝跡26条、壕跡3条、掘立柱建物跡4棟、柵列1条、井戸跡1基、土器埋設遺構1基、焼土遺構5基、風倒木痕1基(平成6年度の調査で一部精査済みの遺構も含まれている)である。

出土した遺物は、縄文時代の土器片(早・前・中・後・晩期)・石器(石鎌・石匙・磨製石斧等)、平安時代の土師器・須恵器・土製品・石製品・金属製品、近世の陶磁器・銭貨等である。

まとめ

調査の結果、野尻(3)遺跡の今回の調査区は縄文時代の狩猟域、平安時代の集落及び墓域の一部であることが判明し、平成6年度の調査結果に資料を追加することとなった。平成6年度の調査に今回の調査で検出されたものを加えた遺構の総数は、溝状土坑7基、竪穴住居跡44軒(この内、竪穴のみのもの20軒、外周溝を伴うもの6軒、掘立柱建物跡を伴うもの2軒、外周溝と掘立柱建物跡を伴うもの8軒、掘立柱建物跡に掘立柱建物跡を伴うもの2軒、他)、竪穴遺構1基、円形周溝15基、土坑53基、壕跡3条、掘立柱建物跡6棟、柵列1条、溝跡38条、井戸跡2基、土器埋設遺構1基、焼土遺構6基、道路跡1条、風倒木痕1基である。

今回の調査で検出された特筆すべき遺構として、調査区北側から検出された壕跡・掘立柱建物跡・柵列と、土器埋設遺構が挙げられる。

道路幅の調査ということもあり、遺構の全容を窺うことはできなかったが、調査区北側から壕跡に囲まれた空間に存在していた建物跡を確認することができたことは、本遺跡の南側約1kmに位置する山元(1)遺跡から検出された、2重の壕に囲まれた方形区画の空間を解釈するうえでも貴重な資料と言える。また、これらの壕跡には土壘を伴わないことも確認されていることから、土壘を伴う区画とも区別されるべきものとも考えられる。遺構の存続期間は10世紀後半の一時期と考えられることから、外土壘と内環壕に囲まれた国史跡高屋敷館遺跡との関連や、その成立の過程を考えるうえでも重要な遺構と考えられる。

合わせ口の甕を使用した土器埋設遺構は、県内でも数例しか検出されていない遺構の一つである。

本遺跡周辺では、野尻(1)遺跡で1基確認されている。その他青森市内では、合子沢松森(2)遺跡でも1基確認されている。お墓の一形態とも考えられるが、地鎮のために道路(十字路)の傍らに埋められたものとの見解もある。硬化面を持った道路跡は大釈迦川寄りの平成6年度の調査区からは検出されているが、土器埋設遺構付近では未検出である。しかしながら、検出地点が黒色土中ということもあり、明確な硬化面が形成されなかった可能性も考えられることから、土器埋設遺構周辺での「道」の存在を否定することはできない。

遺物では、第3号竪穴住居跡から出土した鏡、第3号円形周溝から出土した刀装具の一つである柄頭、第3号土坑から出土した墨書が施された土師器環が挙げられる。鏡は金属製で、形状から密教法具の一つと考えられている。柄頭は銅・鉛・ヒ素の合金製で、重量感もあり、出自も含め円形周溝に葬られていた人物や当時の葬送儀礼を考えるうえで貴重な資料となる。墨書が施された環が出土している土坑は、土坑墓の可能性が高い。お墓の一形態と考えられている円形周溝よりは新しく、时期的に重なることはないが、古代の埋葬の一形態として捉えることができるものと思われる。墨書きされた文字も1文字ではあるが、県内初の事例と考えられることなどから、絵画風の墨書が施された土器も含め、使用された目的・行為を考えるうえでも重要な資料となる。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1978 『烏海山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
 青森県教育委員会 1983 『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
 青森県教育委員会 1983 『山本遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第105集
 青森県教育委員会 1994 『山元(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第159集
 青森県教育委員会 1994 『稲垣村久米川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第163集
 青森県教育委員会 1995 『山元(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
 青森県教育委員会 1995 『野尻(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第172集
 青森県教育委員会 1996 『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
 青森県教育委員会 1996 『野尻(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
 青森県教育委員会 1997 『高屋敷館遺跡発掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第206集
 青森県教育委員会 1997 『隠川(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第210集
 青森県教育委員会 1997 『垂柳遺跡・五輪野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第219集
 青森県教育委員会 1998 『野尻(1)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第234集
 青森県教育委員会 1998 『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
 青森県教育委員会 1998 『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
 青森県教育委員会 1999 『野尻(1)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第259集
 青森県教育委員会 1999 『隠川(11)遺跡Ⅰ・隠川(12)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第260集
 青森県教育委員会 2000 『野尻(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
 青森県教育委員会 2000 『青森県遺跡詳細分布調査報告書ⅡⅡ』青森県埋蔵文化財調査報告書第284集
 青森県教育委員会 2002 『野尻(1)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第320集
 青森県教育委員会 2003 『野尻(1)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第351集
 青森県教育委員会 2003 『宮元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第359集
 青森県教育委員会 2004 『野尻(1)遺跡Ⅵ・野尻(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第366集
 青森県教育委員会 2005 『高屋敷館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第393集
 青森県教育委員会 2005 『山元(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第394集
 八戸市教育委員会 2003 『八戸市内遺跡発掘調査報告書16』八戸市埋蔵文化財調査報告書第96集
 五所川原市教育委員会 2000 『隠川(2)外遺跡 発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第22集
 五所川原市教育委員会 2003 『五所川原須志器塚跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集

- 浪岡町教育委員会 2004 『野尻(4)遺跡』浪岡町埋蔵文化財緊急調査報告書第10集
- 浪岡町史編集委員会 2000 『浪岡町史』第1巻
- 岩手県教育委員会 1980 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 宮地遺跡』岩手県文化財調査報告書第48集
- 岩手県教育委員会 1980 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 上平沢新田遺跡』岩手県文化財調査報告書第52集
- 岩手県教育委員会 1995 『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集
- 岩手県教育委員会 1995 『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
- 岩手県教育委員会 2000 『志羅山遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集
- 岩手県教育委員会 2002 『台太郎遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第415集
- 水沢市教育委員会 2003 『林前南館跡』水沢市埋蔵文化財調査センター報告書第16集
- 六郷町史編集委員会 2000 『六郷町史』上巻・通史編
- 秋田県教育委員会 2005 『厨川谷地遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第383集
- 米沢市教育委員会 2001 『志田東遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集
- 東北文字資料研究会 2004 『第2回 東北文字資料研究会資料』
- 宮城県教育委員会 1996 『山王遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第170集
- 仙台市教育委員会 1999 『陸奥国分尼寺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第238集
- 新潟県 1986 『新潟県史通史編1』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1989 『浄水寺墨書資料集』『浄水寺跡発掘調査報告書第一分冊』
- 群馬県教育委員会 1986 『鳥羽遺跡G・H・I』関越自動車道(新潟)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998 『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2002 『武蔵国府の調査22』平成11年度府中市内調査概報
- 千葉県教育委員会 1986 『千葉県小食土上院寺跡確認調査報告書』
- (財)印旛都市文化財センター 1993 『高岡遺跡群Ⅱ』財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書第71集
- (財)印旛都市文化財センター 1994 『大畑Ⅰ-3遺跡』財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書第84集
- 千葉県教育委員会 2004 『千葉市昭和の森遺跡群Ⅰ-疾生道遺跡-』(財)千葉県教育振興財団埋蔵文化財調査センター
- 奈良国立文化財研究所 1987 『平城宮発掘調査報告Ⅵ』
- 徳島県教育委員会 1981 『中内遺跡』
- 藤井 安正 1983 『鹿角市中花輪遺跡出土の刻文絵画土器』『考古風土記』第8号
- 高橋 学 1986 『秋田県内出土の墨書土器集成』『研究紀要』第1号 秋田県埋蔵文化財センター
- 福田 誠 1988 『千葉寺地区鷲谷津遺跡B区において検出された台口裏棺墓について』『研究連絡誌』第22号 (財)千葉県埋蔵文化財センター
- 玉川 英喜 1990 『岩手県内の円形周溝と方形周溝』『紀要』X (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋 千晶 1995 『岩手県の奈良・平安時代の墓制について』『東日本における奈良・平安時代の墓制-墓制を巡る諸問題-』東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会
- 佐原 真・春成秀爾 1997 『原始絵画』歴史発掘⑤ 株式会社 講談社
- 島山 昇 1999 『高屋敷館遺跡について』『研究紀要』第4号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 井上 尚明 2000 『考古学から見た古代の神社-もう一つの律令祭祀-』『埼玉県立博物館研究紀要』第25号 埼玉県立博物館
- 笹生 衛 2002 『東国古代集落内の仏教信仰と神祇信仰』『祭祀考古学』第3号 祭祀考古学会
- 有富由紀子 2002 『日本古代の地方寺院と祭祀』『祭祀考古学』第3号 祭祀考古学会
- 長内 孝幸 2003 『青森県内出土の刻書・墨書土器』『研究紀要』第6号 青森大学考古学研究所
- 島山 昇 2004 『青森県高屋敷館遺跡の環境と外土層』『考古学ジャーナル』No.511
- 工藤 番樹 2004 『北日本古代史上の最近の研究成果について』平成16年度青森県公立発掘調査機関連絡協議会研修会講演資料
- 榎原 滋高 2004 『十三湊と榎林寺跡の発掘調査』『サハリンから北東日本海域における古代・中世交流史の考古学的研究』中央大学文学部日本史学研究室
- 工藤 司 2004 『浪岡町野尻(4)遺跡から検出された土坑SK0207および出土物について』『研究紀要』第7号 青森大学考古学研究所
- 説来 博巳編 2006 『原始絵画の研究 論考編』六一書房



図147 周辺の遺跡遺構配置図 (S=1/5000)

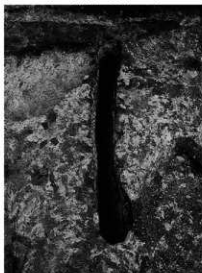
写 真 图 版



第1号溝状土坑 (SW→)



第1号溝状土坑セクション (SW→)



第3号溝状土坑 (S→)



第3号溝状土坑セクション (S→)

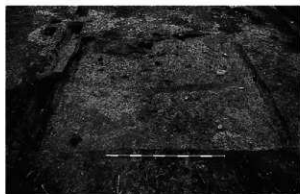


第4号溝状土坑 (NE→)



第4号溝状土坑セクション (NE→)

写真 1



第1号竪穴住居跡遺物 (W→)



第1号竪穴住居跡セクション (W→)



第1号竪穴住居跡カマド遺物 (W→)



第1号竪穴住居跡カマド (W→)



第2号竪穴住居跡 (SE→)



第2号竪穴住居跡セクション (E→)



第2号竪穴住居跡カマド遺物 (SE→)



第2号竪穴住居跡鉄製品 (N→)

写真2



第3号竪穴住居跡 (W→)



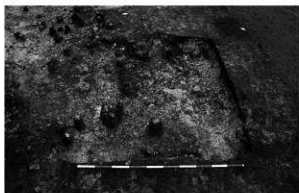
第3号竪穴住居跡遺物 (W→)



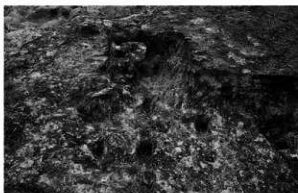
第3号竪穴住居跡遺物 (E→)



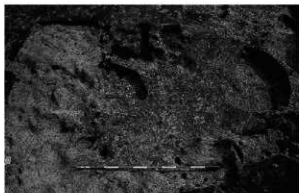
第3号竪穴住居跡カマドセクション (W→)



第4号竪穴住居跡遺物 (SW→)



第4号竪穴住居跡カマド (S→)



第5号竪穴住居跡 (NW→)



第5号竪穴住居跡カマド遺物 (W→)

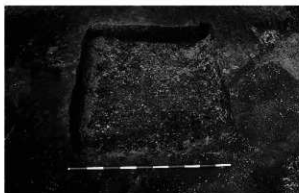
写真3



第6号竪穴住居跡 (E→)



第6号竪穴住居跡焼土 (E→)



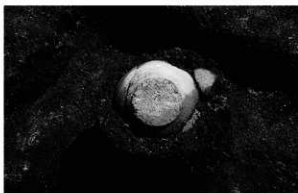
第9号竪穴住居跡 (SE→)



第9号竪穴住居跡セクション (SE→)



第10号竪穴住居跡 (W→)



第10号竪穴住居跡遺物 (SW→)



第11号竪穴住居跡遺物 (W→)



第11号竪穴住居跡遺物 (NW→)

写真4



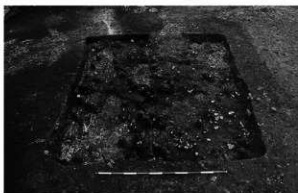
第12号竪穴住居跡 (E→)



第12号竪穴住居跡カマドセクション (S→)



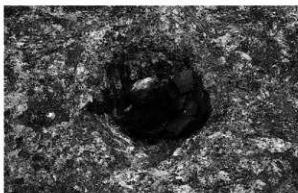
第13号竪穴住居跡 (W→)



第13号竪穴住居跡遺物 (W→)



第13号竪穴住居跡遺物 (E→)



第13号竪穴住居跡ピット3遺物 (S→)



第13号竪穴住居跡カマド遺物 (W→)



第13号竪穴住居跡カマド遺物 (E→)

写真5



第14号竪穴住居跡 (W→)



第14号竪穴住居跡セクション (E→)



第14号竪穴住居跡カマド遺物 (W→)



第14号竪穴住居跡カマドセクション (W→)



第15号竪穴住居跡 (SE→)



第15号竪穴住居跡セクション (SE→)



第15・16号竪穴住居跡 (SE→)



第16号竪穴住居跡セクション (NW→)

写真6



第17号竪穴住居跡 (W→)



第17号竪穴住居跡セクション (NE→)



第17号竪穴住居跡遺物 (W→)



第17号竪穴住居跡カマド (NW→)



第18号竪穴住居跡セクション (W→)



第18号竪穴住居跡カマドセクション (N→)



第19号竪穴住居跡 (W→)



第19号竪穴住居跡カマド (W→)

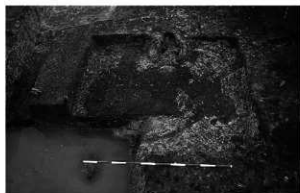
写真 7



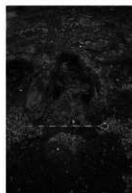
第20号竪穴住居跡 (W→)



第20号竪穴住居跡セクション (E→)



第21号竪穴住居跡 (W→)



第21号竪穴住居跡カマド (W→)



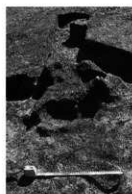
第22・28号竪穴住居跡 (W→)



第22号竪穴住居跡遺物 (W→)

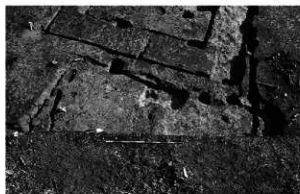


第22号竪穴住居跡ビット9遺物 (W→)



第22号竪穴住居跡カマド (W→)

写真8



第24号竪穴住居跡 (W→)



第24号竪穴住居跡セクション (E→)



第24号竪穴住居跡カマド (W→)



第24号竪穴住居跡カマド袖 (W→)



第25号竪穴住居跡 (N→)



第25号竪穴住居跡セクション (E→)



第25号竪穴住居跡遺物 (N→)



第25号竪穴住居跡内2号土坑 (N→)

写真 9



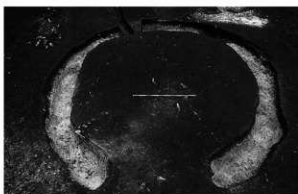
第1号円形周溝検出 (SE→)



第1号円形周溝セクション (S→)



第1号円形周溝セクション (N→)



第1号円形周溝 (SE→)



第2号円形周溝検出 (SE→)



第2号円形周溝セクション (SE→)



第2号円形周溝セクション (S→)



第2号円形周溝 (SE→)



第3号円形周溝検出 (E→)



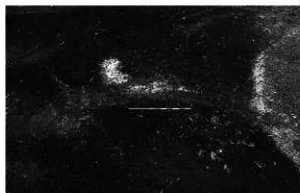
第3号円形周溝セクション (S→)



第3号円形周溝遺物・柄頭 (NE→)



第3号円形周溝 (SE→)



第4号円形周溝検出 (NE→)



第4号円形周溝セクション (SE→)



第4号円形周溝セクション (SE→)



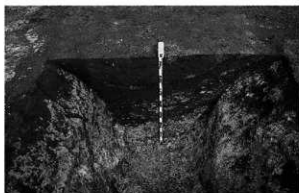
第4号円形周溝 (E→)



第7号円形周溝セクション (E→)



第7号円形周溝・第3号塚跡セクション (NE→)



第7号円形周溝セクション (SE→)



第7号円形周溝セクション (SE→)



第7・8号円形周溝セクション (NW→)



第7号円形周溝 (SE→)



第9号円形周溝 (E→)



第11号円形周溝 (SE→)



第1号塚跡検出 (SE→)



第1号塚跡 (NE→)



第1号塚跡セクション (SW→)



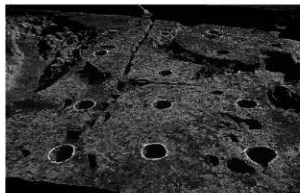
第1号塚跡セクション (SW→)



第1号塚跡骨片出土状況 (SE→)



第1号塚跡他 (上空→)



第1号掘立柱建物跡 (W→)



第1号掘立柱建物跡 (E→)



第3号壕跡・第7号円形周溝セクション (NE→)



第3号壕跡・第16号壁穴住居跡セクション (NW→)



第3号壕跡・骨片出土状況 (W→)



第3号壕跡遺物 (W→)



第2号壕跡 (NE→)



第2号壕跡セクション (NE→)



壕跡周辺調査風景 (S→)



第1号壕跡調査風景 (W→)



第1号土坑セクション (E→)



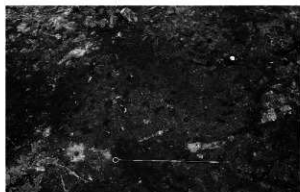
第1号土坑 (NE→)



第2号土坑セクション (SW→)



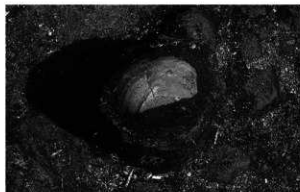
第2号土坑 (SW→)



第3号土坑検出 (SW→)



第3号土坑セクション (SW→)



第3号土坑遺物・磨壺土器 (W→)



第3号土坑 (SW→)